

HK⁺ 접경인문학연구단 / 한국목간학회
국제공동학술대회

접경과 변경, 그리고 문자생활

일시| 2021년 11월 05일 (금) 13:00 - 19:00
2021년 11월 06일 (토) 10:00 - 19:05

장소| 중앙대학교 서울캠퍼스 310관 901호
ZOOM 온라인

주최| 중앙대·한국외대 HK⁺ <접경인문학> 연구단(RCCZ)
한국목간학회(KSSWD)

후원| 교육부, 한국연구재단

DAY 1 (11월 05일)

개회식(13:00~13:10)

사 회 : 이병호(공주교육대학교)/윤선태(동국대학교)

개 회 사

이성시(한국목간학회 회장)

환 영 사

전우형(접경인문학연구단 HK교수)

발 표(13:10~19:00)

사 회 : 이병호(공주교육대학교)/윤선태(동국대학교)

발표1 (13:10 ~14:10)	접경지역의 문자전달 : 헝강왕 12년의 ‘木書 15字’를 중심으로 接境地域における文字伝達 : 憲康王12年の‘木書15字’を中心に I 발표자 : 이성시(와세다대학) 토론자 : 주보돈(경북대학교)
발표2 (14:10 ~15:10)	角筆 資料로 본 古代 東아시아의 文字文化 I 발표자 : 권인한(성균관대학교) 토론자 : 장경준(고려대학교)
휴식 (15:10 ~15:20)	중간휴식
발표3 (15:20 ~17:10)	신강출토 카로슈티 문서에 보이는 승려의 세속생활연구 新疆出土佉盧文書所見僧人世俗生活研究 I 발표자 : 李博(陝西中醫藥大學) 토론자 : 이지호(라이프치히대학교) 통 역 : 이근화(경북대학교)
발표4 (17:10 ~19:00)	베트남 한자 쓰놈의 연구와 학습자료 研究和學習越南漢字喃字的資料 I 발표자 : La Minh Hang(베트남 漢喃研究所) 토론자 : 이 용(서울시립대학교) 통 역 : 방국화(경북대학교)

DAY 2 (11월 06일)

등 록

10:00 - 10:10

발 표(10:10~17:00)

사 회 : 정승혜(수원여자대학교)/최연식(동국대학교)

발표1 (10:10 ~12:00)	多賀城碑에 새겨진 ‘격동의 북동아시아’ 多賀城碑が刻む「激動の北東アジア」 Ⅰ 발표자 : 平川南(일본 人間文化研究機構) 토론자 : 김종복(안동대학교) 통 역 : 정동준(성균관대학교)
중식 (12:00 ~13:00)	점심식사
발표2 (13:00 ~14:00)	접경으로서의 충주 지역과 신판독안에 기반한 충주고구려비 내용 검토 Ⅰ 발표자 : 이재환(중앙대학교) 토론자 : 강진원(서원대학교)
발표3 (14:00 ~15:00)	국립중앙박물관 소장 투루판 출토 唐文書가 부착된 시신갈개(尸席)의 복원 Ⅰ 발표자 : 권영우(국립중앙박물관) 토론자 : 박근칠(한성대학교)
휴식 (15:00 ~15:10)	중간휴식
발표4 (15:10 ~17:00)	동아시아 세계에 있어서 베트남 목간의 연구서설(1) : 월경하는 封緘木簡·木夾·夾板 東アジア世界におけるベトナム木簡の研究序説(1) : 越境する「封緘木簡」「木夾」「夾板」 Ⅰ 발표자 : Pham Le Huy(베트남국가대학) 토론자 : 김창석(강원대학교) 통 역 : 김현경(서울대학교)

종합토론(17:00~19:00)

좌 장
김병준(서울대학교)

폐회사

19:00 - 19:05

인사말

이번에 중앙대학교·한국외국어대학교 HK+접경인문학연구단과 한국목간학회는 “接境과 邊境, 그리고 文字生活”을 주제로 국제공동학술대회를 개최하게 되었습니다.

한국목간학회는 매년 11월에 국제학술대회를 개최해 왔습니다. 목간학회에서 관심을 가진 것은 세계사적인 주제를 내세워, 동아시아 규모로 폭넓게 목간과 문자문화에 주목하는 것이었습니다. 이번 국제학술대회에서 중앙대·한국외대 HK+접경인문학연구단의 전폭적인 협조를 얻어 훌륭한 주제를 설정하게 된 것을 기쁘게 생각합니다.

이번에 주제로 내세운 ‘접경’이라고 하는 말은 결코 쉬운 말은 아니지만 메리 플랫(Merry Pratt)이 이 개념을 제기한 이래 전 세계의 인문학 연구자가 주목해 왔습니다. 메리 플랫이 제기한 '콘택트 존'이라는 개념은 인류가 타인과 접촉해 사회를 형성해 왔다는 생각에 기초해 사회나 문화를 자명한 것으로 간주하는 것이 아니라 다양한 여러 타자와의 교섭 결과라고 하는 관점에서 문화나 사회를 논하는 틀로서 널리 인류사에 적용함으로써 인류가 영위하는 것을 풍요롭게 파악할 수 있다는 점에 주목됩니다.

한국목간학회는 목간이나 비석을 비롯한 다양한 書寫 재료와 문자에 주목해 왔지만, 인류사에서 문자에 대해 근원적으로 생각해 보면 화폐나 법과 마찬가지로 공동체 상호 간의 접경 영역에서 발생한다는 점이 주목됩니다. 문화적인 동질성이 높고 구성원 상호 간의 인적 결합이 강고한 총족된 공동체 내에서는 문자나 화폐, 법은 필요하지 않았다고 합니다. 따라서 문자는 언어, 문화, 습속이 다른 공동체 상호 간에 의사소통의 수단으로 필요했다고도 말해지고 있습니다.

이번 학술대회에서는, 중국 서북쪽, 일본 열도 동북쪽, 한반도 동북쪽, 고구려 동남쪽 등의 변방에 소재하는 접경 지역의 목간이나 석비, 그리고 角筆 문화, 또 한반도와 마찬가지로, 중국 문화권의 접경 지역이라고도 할 수 있는 베트남의 목간이나, 베트남의 독자적인 문자 문화인 쯔놈에 대한 연구 발표가 행해집니다. “접경과 변경, 그리고 문자 생활”이라고 하는 공통의 주제 아래에, 다양한 연구가 토의의 대상이 되는 것에 기대가 부풀어 오릅니다.

이번에 한강이 내려다보이는 멋진 환경에 입지한 중앙대에서 참가자들과 한자리에 모여 국제학술대회를 개최하고 싶었지만, 이번에도 코로나19로 인해 온라인으로 국내외를 연결하여 개최하게 되었습니다. 중국, 베트남, 일본, 한국 국내에서, 연구의 제일선에서 활약하는 여러분의 대회에의 참가에 재차, 진심으로 감사의 말씀을 드립니다.

마지막으로, 이러한 도전적인 주제 아래 학술대회를 기획해 주신 관계자 여러분, 특히 중앙대학교·한국외국어대학교 HK 접경인문학연구단 여러분께 다시 한번 감사드립니다. 이번 국제학술대회의 성공을 기원하며, 대회의 첫머리 인사말을 마치도록 하겠습니다.

한국목간학회 회장 이 성 시

목 차

DAY 1	1
接境地域における文字伝達	3
: 憲康王12年の‘木書15字’を中心に	
(번역문)접경지역의 문자전달	17
: 현강왕 12년의 ‘木書 15字’를 중심으로	
발표 : 이성시(와세다대학, 한국목간학회 회장)	
「接境地域における文字伝達」에 대한 토론문	29
토론 : 주보돈(경북대학교)	
角筆 資料로 본 古代 東아시아의 文字文化	31
中文·日文 요약문	51
발표 : 권인한(성균관대학교)	
「角筆 資料로 본 古代 東아시아의 文字文化」에 대한 토론문	55
토론 : 장경준(고려대학교)	
新疆出土佉盧文書所見僧人世俗生活研究	59
(번역문)신강출토 카로슈티 문서에 보이는 승려의 세속생활연구	73
발표 : 李博(陝西中醫藥大學)	
「新疆出土佉盧文書所見僧人世俗生活研究」에 대한 토론문	87
토론 : 이지호(라이프치히대학교)	
研究和學習越南漢字喃字的資料	91
(번역문)베트남 한자 쓰놈의 연구와 학습자료	105
발표 : La Minh Hang(베트남 漢喃研究所)	
「研究和學習越南漢字喃字的資料」에 대한 토론문	119
토론 : 이 용(서울시립대학교)	

DAY 2	121
多賀城碑が刻む「激動の北東アジア」	123
(번역문)多賀城碑에 새겨진 ‘격동의 북동아시아’	143
발표 : 平川南(일본 人間文化研究機構)	
「多賀城碑が刻む「激動の北東アジア」」에 대한 토론문	161
토론 : 김종복(안동대학교)	
접경으로서의 충주 지역과 신판독안에 기반한 충주고구려비 내용 검토	163
中文·日文 요약문	181
발표 : 이재환(중앙대학교)	
「접경으로서의 충주 지역과 신판독안에 기반한 충주고구려비 내용 검토」에 대한 토론문	185
토론 : 강진원(서원대학교)	
국립중앙박물관 소장 투루판 출토 唐文書가 부착된 시신깔개(尸席)의 복원 ...	187
中文·日文 요약문	205
발표 : 권영우(국립중앙박물관)	
「국립중앙박물관 소장 투루판 출토 唐文書가 부착된 시신깔개(尸席)의 복원」에 대한 토론문	209
토론 : 박근칠(한성대학교)	
東アジア世界におけるベトナム木簡の研究序説(1)	213
: 越境する「封緘木簡」「木夾」「夾板」	
(번역문)동아시아 세계에 있어서 베트남 목간의 연구서설(1)	231
: 월경하는 封緘木簡·木夾·夾板	
발표 : Pham Le Huy(베트남국가대학)	
「東アジア世界におけるベトナム木簡の研究序説(1)」에 대한 토론문	249
토론 : 김창석(강원대학교)	

DAY 1

발표 1

接境地域における文字伝達
: 憲康王12年の‘木書15字’を中心に
접경지역의 문자전달
: 현강왕 12년의 ‘木書 15字’를
중심으로

接境地域における文字伝達

：憲康王12年の‘木書15字’を中心に

이성시(와세다대학)

목 차

はじめに	三. 接境地域の文字伝達
一. 接境地域における北鎮	おわりに
二. 北鎮と黒水靺族	

はじめに

このたびの国際会議は、主題に「接境と辺境、そして文字生活」を掲げている。この主題に対して私は、接境地域や辺境地域における文字伝達の視点から9世紀の新羅と渤海領域明との関係を考察してみたい。接境地域という歴史的な視角については、かつて日本列島の地域論として、地理的にも歴史的にも分け隔てられた人びとが互いに接触し、関係を築く「コンタクトゾーン」(接触領域)の観点から、相互影響圏に注目し、そのような接境地域から立ち現れてくる様々な歴史像を捉えうる可能性について概括的に論じたことがある(1)。

元来、「コンタクトゾーン」という概念は、メアリー・プラットによって、植民地での出会いにおける相互作用の、即興的な次元を際立たせることで、伝播主義では無視されがちな関係性を、コンタクトという視点を導入することで、いかにして主体が相互の関係において構築されるのかという点を強調するところにある。したがって「コンタクトゾーン」は、必ずしも植民地支配の分析にのみに用いる分析枠組というよりは、人類が他者と接触し、社会を形成してきたという考え方に基づき、社会や文化を自生したものを見なすのではなく、様々な他者との交渉の結果であるという視点から文化や社会を論じる枠組みとして、広く人類史に適用できるとみなされている。

ところで新羅の接境領域については、東北地方に注目される。とりわけ、7世紀後半に百済・高句麗を滅ぼし、さらには唐との戦闘を経て旧高句麗地域との接境地域に進出し統合する過程で、北進しながら築城を繰り返す一方、690年には軍団・牛首辺守幢を配置するなど北辺の備えとしている。そのような新羅の東北辺境において、9世紀末の出来事として、次のような記録が伝えられている。『三国史記』巻11、憲康王12年(886)春条には、

北鎮奏す、「狄国人、鎮に入り、片木を以て樹に掛けて帰る。遂に取り以て献ず」と。其の木、十五字を書して云う、「宝露国と黒水国人、共に新羅国に向きて和通せんとす」と。

すなわち、「狄国人」(異域の民)が境界を越えて新羅に交渉を求めて北鎮に侵入し、木片に「寶露國與黒水國人共向新羅國和通」と15文字を記し、樹木に掛けて逃げ去った事件が、新羅の

王都に報告されている。ここで新羅側のいう「狄国人」とは、木片に記された「宝露国人、黒水国人」を指し、渤海国領域に居住した靺鞨系の種族であるとみなされてきた。

本稿では、この事件が生じた9世紀末における新羅と靺鞨系住民との接境地域の交渉のあり方について、木書15文字を手がかりに、このような文字伝達がおこなわれた地域の空間と、この時代に生きた人びとの精神世界に接近してみたい。

一. 接境地域における北鎮

憲康王12年に接境地域において「狄国人」がもたらした木書に関する報告は、北鎮から中央に伝達された。本稿で対象とする接境地域を具体的に特定するためにも、まず北鎮の位置を見定めることにする。

北鎮については、『三国史記』卷11・新羅本紀、憲康王12年(886)条以外では、『三国史記』武烈王5年(658)3月条に下記のようにある。

王、何瑟羅地の靺鞨に連なり、人の安んずる能わざるを以て、京を罷め州と為す。都督を置き以て之を鎮む。又た悉直を以て北鎮と為す。

すなわち、何瑟羅地方(現・江陵)は靺鞨族と連なっているので、人心が不安定であるため小京を止めて州とし、都督を置いて鎮護させた。さらに悉直(現・三陟)を北鎮としたという。したがって、9世紀末の北鎮についても、その所在地を、武烈王代の記事に求めて悉直とする見解が一部では踏襲されている(2)。

その一方で、池内宏は、6世紀以降、新羅末高麗初期までの韓半島東北境の変遷、とりわけ三陟以北、永興以南の地域における新羅の北進あるいは後退について、時系列に即した過程の史料考証を試みている(3)。それらに従えば、北鎮は決して悉直にそのまま留まっていたわけではなく、新羅の当該地域の動向に関わって移動していた可能性がある。実際に、こうした池内宏の考証を前提に、李丙燾や井上秀雄は、北鎮の所在を朔庭郡(比列忽 現在の安辺)に比定している。私も拙稿において李丙燾説を踏襲したことがある。その後、赤羽目匡由もまた、これに従っている。つまり北鎮は新羅の文武王以降の北進によって、北鎮は、その位置を安辺に移したという認識が共有されつつある(4)。

木書15字を中央に伝達した「北鎮」の位置に関わって重視されるのは、文武王15年(675)の比列忽州復置の後7年に、安北河に沿って「閔城」が設けられ「鉄閔城」が築造されたとする『三国史記』の記事である(後述)。

そもそも、新羅の比列忽方面への進出とは、『三国史記』卷35・地理志に、

朔庭郡、本と高句麗の比列忽郡。真興王十七年、梁大平元年、比列州と為し、軍主を置く。孝昭王の時、城を築く、周一千一百八十歩。

とあるように、真興王代における比列忽(安辺)への進出がまずあって、新羅本紀には、この時に比列州に沙浪・成宗を軍主として派遣したとある。井上秀雄は、この地理志にみえる孝昭王代(692-702)の築城記事をもって、これを「北鎮」の築造とみなした(5)。

しかしながら、池内宏の仔細な考証に従えば、池内は北鎮と比列州とを同一視していない。

池内が新羅による比列州の復地に関わって注目するのは、この方面に対する新羅の進出の基点として築かれた前述の「鉄関城」である。池内が行っているのは、必ずしも北鎮を特定するための考証ではないが、木書がもたらされた接境地域としての「北鎮」の位置を明らかにするためには、まず池内が注目する「鉄関城」に関する考証の過程を検討する必要がある。

鉄関城については、『三国史記』巻7・新羅本紀には、文武王15年(675)秋9月29日条に、

安北河に縁りて関城を設く、又た鉄関城を築く。

とある。一方、『三国遺事』巻2・文虎王法敏条にも、次のように同様の内容を伝えている。

安北河辺に鉄城を築く。

ここに見える「関城」・「鉄関城」・「鉄城」の位置比定について、池内宏は『高麗史』地理志・宜州(徳源)条、『龍飛御天歌』第38章所引注、『世宗実録』地理志・宜川郡(徳源)条、『新增東国輿地勝覧』徳原府古跡条など諸史料を精査した上で、徳源邑の北方約6kmの東海岸に沿って文川に赴く街道(安辺会寧街道)の左側に位置する望徳山に注目している。これこそが『世宗実録』地理志に記す鉄関山であり、上記史料が挙げる「鉄関」に比定すべきことを指摘している。さらに、この「鉄関」の名は、高麗恭愍王以前にも遡って蒙古に備える要害の地として『高麗史』に散見され、望徳山の鉄関城が蒙古の侵入を防ぐために築かれていることを確認し、この城が新羅時代から存在したものと認め、これと『三国史記』新羅本紀の同名の鉄関城に比定している(6)。

また、この地域を実見したことのある池内は、徳源の北方に所在する望徳山(標高346m)の地理的な条件に着目し、安辺・文川間の海岸道を扼して天然の要害となっていることから、これが『世宗実録』地理志の鉄関山であり、徳源もまたこの方面の要害の地であることを強調した(7)。

さらに、この望徳山の南の盆地を過ぎて東海に注ぐ北面川の南にも、望徳なる小山(標高191m)があって、鉄関の望徳山と南北で対峙しており、高麗時代の鉄関城址の存在する望徳山と、徳源の北面川の岸辺の望徳山とは、相呼応する要衝であるので、上記の文武王15年条の「安北河に縁りて関城を設く、又た鉄関城を築く」は、両望徳山における同時期の築城を意味するものと断言する。さらに「安北河」に比定すべきは、北面川であることを付言し、高麗時代の宜州城は、新羅時代の旧城の改築とみなしている(8)。

以上の考察に基づき、池内宏は、文武王8年秋9月に、善徳王7年以来、30年間高句麗の領域内にあった比列州を復置すると、7年後の文武王15年(675)に、新羅は比列州(安辺)とそれほど離れていない徳源に防御的設備(鉄関城)を施したとし、その目的は、靺鞨の侵入する通路を扼するためであったと結論づけている(9)。

ところで、北鎮の所在を李丙燾や井上秀雄のように比列忽の地にあるとすると、まずは池内が考証した「鉄関城」「鉄城」との両者の関係が問題となるであろう。さらに問題とすべきは、それらの北鎮と鉄関城の北方に位置する井泉郡(徳源)に築かれたとする「炭項関門」との関係である。

すなわち『三国史記』巻35・地理志は、井泉郡について、

井泉郡、本と高句麗の泉井郡、文武王二十一年之を取る、景德王名を改む、炭項関門を築く、今の湧州なり。

と記しており、比列忽（安辺）の北方に位置した井泉郡に「炭項関門」が築かれたとしており、池内が考証した比列忽（安辺）の「関城」「鉄関城」（鉄城）と「炭項関門」との相互関係が改めて問われることになる。要するに、北鎮、鉄関城（関城）、炭項関門の3者の関係が問題となるのである。

かつて、拙稿においては炭項関門の所在を、徳源の鉄関付近に求めようとした安鼎福の説に従ったことがある（10）。しかしながら、池内はそれを厳しく批判して、まず井泉郡について地理志が記す炭項関門の築造は、景德王代ではないことを指摘する。つまりは、景德王代には名称を改めただけであって、炭項関門の築造は、それとは別個に、聖徳王20年（721）において北鎮に長城を築いたとする新羅本紀参照し、それを新羅と渤海の境界に求めた。その位置は、『新唐書』渤海伝が記している新羅と渤海の国境地帯（「南与新羅以泥河爲境」）にあるとし、炭項関門の築設を徳源付近とする安鼎福の所説は疑問であるとした（11）。

この点をさらに追究したのが赤羽目匡由であり、池内の考証を前提にして、次のような結論を導き出している。まず、「北鎮」については、李丙燾と同様に比列忽郡とし、この地が9世紀前半から886年の間に、比列忽郡から北鎮に改められたとする。比列忽郡から「北鎮」への改編は、新羅東北境からの後退であり、新羅の東北境防備に対する危急への対応であるとする。また、その前提として新羅の東北境は、唐の高句麗征伐に乗じて669年頃に、新羅は一時的に泉井郡（永興または徳源）まで進出したが、671年頃には比列忽州（朔庭郡・登州・北鎮。現在の安辺）まで後退したと見ている。

その後、文武王15年（675）に、安北河（北面川）の河川に沿って築かれたのが鉄関城であり、それらは関城・鉄関城・鉄城などの異称があるが同一の実体とみなした。

赤羽目の仮説で重要なのは、新羅が675年に鉄関城を築き、さらにその外側にある泉井郡を681年に再び奪取して、その外側に炭項関門を築造したと見なしている点である。その時期は、池内宏の所説を踏襲して、聖徳王20年（721）条の「何瑟羅道の丁夫二千を徴し、長城を北境に築く」とある記事の「長城」をもって炭項関門の築造と見なした。

赤羽目によれば、炭項関門は、北方からの侵入を防ぐ最終ラインであり、かつ山峽を利用したものであって、関城・鉄関城（鉄城）の外側に位置していたと推定する。それは新羅最北端の防衛施設とも言うべきものと位置づけられている。赤羽目の仮説を時系列に即して、鉄関城、北鎮、炭項関門の築造の推移は次のとおりである。

文武王15年（675） 安北河に鉄城を設けて、鉄関城を築く（新羅本紀）鉄関城
 孝昭王代（692-702）比列州に城を築く、周一千一百八十歩。（地理志）州⇒北鎮
 聖徳王20年（721） 何瑟羅道の丁夫二千を徴し、長城を北境に築く（新羅本紀）炭項関門
 関門 / 井泉郡に炭項関門を築く。（地理志）

これを要するに、南からの位置は、北鎮（比列忽）→鉄関門・安北河→泉井郡→炭項関門となる。炭項関門の具体的な位置比定については、南川江支流の分水山脈に注目し、その峠にある泥峴に比定している。

後述するように、赤羽目の以上の仮説については、それなりの史料的な根拠に基づく仮説として重視したい。しかし現在、入手できる情報を加えながら、接境地域における北鎮、鉄関城、炭項関門の三者の機能と位置関係について、あらためて検討してみたい。

二. 北鎮と黒水靺鞨族

前節では、木書15字が「北鎮」からもたらされた接境地域に関わっているため、新羅の辺防施設について、これまでの研究成果に基づいて整理を試みた。憲康王12年の木書は、「北狄人」によってもたらされたと伝わるが、この地域に至るまでの行程をあえてシミュレーションすれば、次のようになる。黒水国、寶露国を名乗る「北狄人」は、炭項関門（泥峴）を越えて、鉄関城（望徳山）を通過し、北鎮（安辺）に辿り着き、北鎮内の樹木に木書を掛けて去った、ということになるであろう。

もし、そうであるとすると、木書15字を北鎮にもたらした者たちは、炭項関門（泥峴）から北鎮までを素通りしたかのようであり、この当時すでに新羅の辺防施設が機能していない状況があったことになる。率直に言えば、いささか現実離れしているように思われてならない。

それゆえ、上記の仮説を提起した赤羽目は、池内の考証に基づく仮説に依拠して、木書がもたらされた887年当時には、「黒水国・寶露国」の「寶露」は黒水靺鞨の一部族（寶露＝勃利）とみなし、彼らは安辺の西30里にあった「奉龍駅」付近の瑞谷廢県に存在していたとする（12）。つまり黒水靺鞨人は、鉄関城の内側である瑞谷付近に居住しており、新羅の衰頹に伴い境界での緊張が弛緩し、それに乗じて、黒水・鉄勒・達姑の諸族が8世紀中葉において境界である泥河（金津川）を越え、炭項関門・鉄関までの新羅領域に侵入できたというのである（13）。しかも、彼らの進出した地域とは、赤羽目の作図した地図（14）にあるように、黒水靺鞨の一部である寶露国を名乗った集団の居住地が瑞谷であるとするならば、それは鉄関城の南側になる。このような仮説は、にわかに従いがたい。

こうした赤羽目の仮説の最大の根拠は、三上次男の黒水靺鞨徙民説に依拠している。すなわち、三上は新羅末高麗初に新羅東北辺に現れる黒水・鉄勒・達姑等の諸族とは、彼らのかつての居住地であった渤海北辺の辺境ではなく、渤海の征服によって渤海東南隅に強制移住させられた集団であって、黒水靺鞨の遷住者たちであったとする。当時の状況から、新羅末に黒水靺鞨が彼らの居住地から自主的に南下することなどはありえないという（15）。当該論文を見る限り、史料的な根拠は殆どなく、その仮説は小川裕人「三十部女真に就いて」（16）に対する批判のための批判に終始しており、反論と出された仮説は大凡認めがたいものである。そのような根拠薄弱な仮説を前提にした上記の赤羽目の仮説はおおよそ従いがたい。

北鎮が安辺の比列忽に所在したとの前提に立つとはいえ、新羅の辺防上、重要な軍事拠点である鉄関城から奥深く入り込んだ瑞谷に木書をもたらした集団が居住していたとすれば、10kmほどを隔てた北鎮に赴いて、直接の交渉をせずに北鎮内の樹木に「寶露国と黒水国人、共に新羅国に向きて和通せんとす」と通告しなければならなかったのは、どのような事由によるものなのだったのであろうか。また、そのような木書を北鎮は、遠路、王京に報告する意味はどこにあるのであろうか。全く説明に困窮する事象と言わなければならない。

確かに、9世紀末、新羅人にとって黒水靺鞨は脅威の対象であり、真聖王代の全国に及んだ盗賊の蜂起と共に、真聖王の讓位を決断せざるをえない難題となっていた。すでに指摘があるように崔致遠の新羅本紀に一部が引用されている「讓位表」は、そのことを雄弁に物語っている。また李基東が指摘したように、次の文中で出てくる「黒水侵疆、曾噴毒液」は、憲康王12年の北鎮からの報告にある「黒水国・寶露国」と符合していたであろう（17）。

愚臣（真聖王）継守するに及び、諸患併びに臻たり、始めに則ち黒水疆を侵し、曾て毒

液を噴き、次いで乃ち緑林（群盜）党を成し、競いて狂気を簸る、所管の九州、仍標の百郡、皆な寇火に遭い、劫灰（戦火）を見る若とし（18）。

しかしながら、これをもって北鎮付近に居住していた黒水徙遷民とするわけにはいかない。そもそも、古来アムール川流域にも及ぶ中国東北地方北辺には挹婁と呼ばれる集団が盤踞しており、彼らが船舶で周辺地域を寇盗して周辺地域ではこれを大いに憂いていたことが伝わる。挹婁と接していた北沃沮もまた、挹婁の寇抄を畏れ穴居して守備していたという（19）

こうした挹婁の活動と関わって興味深いのは、彼らの居住地で産出される貂皮に関わって劉敬叔の『異苑』（巻3、刀子換貂皮）に次のような記事があることである（20）。

貂は句麗に出づ。常に一物の共に穴に居る有り。或ひと之を見るに、形貌は人に類し、長さは三尺なり、能く貂を制し、刀子を愛樂す。其の俗に、人が貂皮を得んとすれば、刀を以て穴口に刺す。此者は夜に穴を出でて、皮を刀辺に置き、人が皮を持ちて去るを待つて、則ち刀を取る（松田寿男校訂による）。

すなわち、貂皮をめぐる刀子との交換の際に接触を忌避しておこなわれた場景が描かれている。南朝人のデフォルメが加わっており、一見、荒唐無稽の物語のようであるが、注意を要するのは、松田寿男の指摘のとおり、ここに挹婁の地域における沈黙交易が窺えることである。接触をさけながら貂皮と刀子を交換する行為の中に、北鎮において接触を避けて木書を送り届けた行為に繋がるものがあるように思えるのである。

三. 接境地域の文字伝達

以上、北鎮と黒水靺鞨族との交渉のあり方を検討し、接境地域である北鎮、鉄関城、炭項関門が所在した地域における黒水靺鞨族の動向を素描し、当時の北鎮周辺の状況を確認した。

こうした新羅と渤海の接境地域については、現地調査ができない中で、『朝鮮郷土大百科』に伝えられた情報に基づきつつ、グーグル・アースを利用し、この地域の地形を検討することで、この地域についての知見を可能な限り高めることにする。

まずもって『朝鮮郷土大百科』の文川市の「遺物遺跡」の項には、鉄関城の項目があり、下記のように記されている。

鉄関城 国家子弟文化財保存級 第324号

江原道文川洞にある城址。文川洞の西南望徳山に位置している。山の峰を中心に方形に近く築城されている。城の周囲は700mで、城壁は石積である。3つの雉と城門の痕跡がある。後期新羅と渤海の国境接点地帯と伝えられており、壬辰倭乱時代に、ここで熾烈な激戦があったという（21）。

また、「山と川」には望徳山については次のようにある。

江原道文川市柯坪洞、関豊洞と元山市竹山里との境界にある山。海拔347m。

東西500m～1200mで、南北3.5km程度である。北側と東側傾斜面は35度～60度と急勾

配である。山頂は丸く平らになっている。山頂は東海や元山市を展望するのによいところである(22)。

赤羽目が炭項関門に比定した泥岨については同書は全く言及がないが、文川市の玉坪洞と橋城里の間は二筋の川が流れているが、ここは峠となっており、その東西が小高くなっているため泥岨と推定される。それを裏付けるように、西側に位置する橋城里については、『朝鮮郷土大百科』には次のような地形の説明がある。

この地域は西部が高く、玉坪原がある東側に向かって次第に低くなる地勢となっており、領域内の玉女峰(147m)をはじめ海拔100m~300mの丘陵となっている。河川は南川江が流れている(23)。

鉄関城、安辺に向かうには、この地を通過しなければならず、地形からも関門を置くには最適の位置にあるが、城壁などの記録や関連記事は『朝鮮郷土大百科』には見られない。

ただし、この地から数百メートル南には、伊均城が国家指定文化財保存級第327号として紹介されており注目される。

江原道文川市橋城里にある古城址。玉坪洞西側にある玉女峰を中心にして築城されている。玉女峰山麓にしたがい南側平地に続く平山城で、周囲2km、城壁は土で築かれている。現在、底部の広さ2m、高さは5m程度である。984年に築造されて文州防衛使営を置いたという(24)。

写真に示したように、衛星写真で確認される推定城壁をたどると周囲2kmとなっており、大百科の内容と符合する。

ただし、文州防衛使については、『高麗史』巻58、地理志・東界には、

文州古称妹城、成宗八年、爲州防衛使、後合于宣州。

とあり、これが『朝鮮郷土大百科』の記す伊均城の由来であろうが、成宗8年であれば、989年となる。また『高麗史』兵志・城堡には成宗3年(985)に文州の築城があったとされるので、これが伊均城の築造に関わるのかもしれない。

しかし、ここで注目したいのは、伊均城が周囲2kmの城壁の中に、二つの山を取り囲むように築造された平山城の規模と、その位置である。伊均城の北に所在する泥岨が炭項関門に比定できるとすれば、南の鉄関城との間に位置している伊均城は、軍事戦略上において重要な位置を占めるのではないだろうか。というのも、拙稿において炭項関門を『新唐書』新羅伝の長人記事の鉄門、鉄関と関連づけたことがあるが、そこには、

其の国、連山数十里、峽あり。固むるに鉄門を以てし、之を鉄関と号す。新羅、常に弩士数千を屯し之を守る。

とあるように、多くの駐屯兵を置く軍事施設であった(25)。そのような関門の後方に、関門を支援し、補完する施設を必要とするのではあるまいか。ましてや鉄関城やさらに後方の比列忽

(安辺) では、補給は行いがたいであろう。

それゆえ、従来、比列忽に所在したとされる北鎮の所在地は、炭項関門の位置を泥岬とするならば、泥岬に隣接する伊均城に比定するのが合理的であると思われる。勿論、付言すべきは、高麗初期の築造とされる伊均城が新羅時代の旧城の改築であったということである。

その上で、改めて憲康王12年に木書15字がもたらされた北鎮を、接触領域の最前線であった炭項関門すなわち泥岬の南に隣接する伊均城に比定してみたい。そこは、長く新羅が渤海と対峙する最前線であった。木書15字が新羅の王京に伝達されたにも拘わらず、その意味を中央の為政者には届かなかった。その素朴な内容は、文運隆盛の新羅の翰林貴族たちには野卑で取るに足らないものと見捨てられたに違いない。

華麗な文飾を尽くした崔致遠の「讓位表」を木書15字と比べると、その落差はあまりに大きい。唯ならぬ格差である。「北狄人」・黒水靺鞨族たちが木書15字に籠めたメッセージは、王京の翰林貴族に全く無視されたが、それは受け止められなかった新羅の代償はこれもまた、あまりに大きかった。新羅にとって木書15字は「千丈の堤も蟻蟻の穴を以て潰ゆ」に譬えられるのではあるまいか。

おわりに

9世紀末から10世紀前半は渤海の衰頹、滅亡によって、渤海領域内の諸部族の統制がおよばず、渤海による唐や日本への交易を組織化する従前の力を失い、渤海の支配に服していた靺鞨諸部族が自立的な活動を開始した時期にあたっていた。本稿は、そのような動向を新羅東北辺において雄弁に物語るのが憲康王12年に北鎮にもたらされた木書15字であることを論じてきた。

本稿で論じた新羅東北部は紀元前より、古来、穢族の活動地域であり、その活動は元朔元年(B C 128) の蒼海郡設置頃まで遡ると言われる。現在の元山を境界とする江原道と咸鏡道この地域は、百濟・高句麗滅亡後の唐との戦闘の過程で、8世紀前半、聖徳王が咸興以南の地まで進出し、ここに炭項関門を築造すると、この地域は渤海領域と新羅領域とに分断され、南北の交流は二つ王朝の境界管理の下におかれた。この接境領域における従前の活動は、こうした事態によって著しく制限されることになった。8世紀前半期には、この地方へ新羅の防備策が進められた。井泉郡への鉄関(鉄関城) や炭項行関門の設置は、そのような新羅の国境防御策の一環であったと推定される。

新羅側の積極的な接境地域の分断は、接境地域の境界を隔てた人びとに対する非人間的な異形のイメージが新羅人に造成されたことが認められる(26)。接境する異域の住民に対するステレオタイプは、それを共有する集団の社会的凝集(われわれ意識) の契機ともなりうるものである。それは異域に対する恐怖によってもたらされるものでもあった。

憲康王12年(886) に北鎮にもたらされた木書15字は、この地域の社会的な変化の予兆を語るものであり、渤海国の統制下にあった靺鞨諸部族の活動の一環として考えられる。木書に記された「黒水国」は、高麗太祖王建の建国期の軍事活動においても散見される「黒水」「黒水蕃衆」などがあり、さらに顯宗時代に猖獗を極める東海岸を襲う女真族の略奪活動の初期段階におけるものとみられる。

また新羅側にとって「黒水」については、真聖王11年(897) に唐に送られた崔致遠の手になる「讓位表」にも見られるが、そこには889年以来の全国的盗賊蜂起と共に、「黒水」が新羅疆域を侵犯して危害を加えていたことが記される。北鎮からの奏上から間もなく、新羅の辺境は「黒水」を始めとする靺鞨諸部族の侵犯を被っていたことになる。接境地域の変化は、それ以前からあつ

たことも推察されるが、木書が「北狄人」によって北鎮にもたらされるに際して、直接の接触が忌避されていたことから、その交渉はそれ以前には認めがたく、この木書を接触の端緒を物語るものと捉えることができる。また、「黒水国」「寶露国」と国号を名乗ることから、北鎮と該当する集団との日常の接触は考えがたい。彼らとの平和的な交渉が日常化していたならば、接触を避けて木書をもたらすという方法は想定しがたいからである。

新羅人によって境界をこえた地域の靺鞨諸族は異形の人びととの認識を形成することは8世紀の唐にも伝えられていたが、新羅東北辺は、9世紀末に大きく変貌しようとしていた。高麗太祖王建の建国前後には、「黒水蕃」「黒水蕃衆」の侵攻は具体的な姿をもって現れ、やがて彼らは王建の対後百済戦の軍にも組み込まれることになる。さらに高麗太祖以降、10世紀前半に至ると東海からの来寇によって多大な被害を被っていたことが知られているが、それらの詳細は、顯宗二年の契丹来寇により記録の焼亡によって顯宗以前の女真族(靺鞨族)の海寇の事実が後世に伝わらなかったとされる(27)。

9世紀末以降は、新羅・渤海の並存時代において長く隔てられていた当該地域での相互関係は決して平和的な交渉とは言えないものの、古来の東北海浜部における活動が再開した様相を呈するようになったとみることができる。高麗時代における北進に伴う活動と共に、北辺地域の集団との新たな関係が生み出されていくことになる。

以上を要するに、憲康王12年の木書15字は、新羅東北辺の接境地域における歴史的な変化を予兆するものと捉えることができるのである。

注

- (1) 李成市「序論－境界・接触領域・交流」(『岩波講座日本歴史』第20巻、地域論、2014年)。
- (2) 鄭求福他『訳註三国史記』3、註釈篇(上)、韓国精神文化研究院、1997年、335頁)は、李基白「高麗太祖時の鎮」(『高麗兵制史研究』一潮閣、1968年、230頁)に基づき、憲康王代の北鎮の所在地を三陟とする。
- (3) 池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」(『朝鮮総督府古蹟調査特別報告』第6冊、1928年、原載、池内宏『満鮮史研究上世第二冊』吉川弘文館、1960年、所収)23-72頁。
- (4) 李丙燾『国訳三国史記』(乙酉文化社、ソウル、1977年)195頁。李成市「八世紀新羅・渤海関係の一視角－『新唐書』新羅伝長人記事の再検討」(『古代東アジアの民族と国家』岩波書店、)、赤羽目匡由「渤海・新羅接壤地域における黒水・鉄勒・達姑の諸族の存在様態－渤海の辺境支配の一側面」(『渤海王国の政治と社会』吉川弘文館、2011年)。
- (5) 井上秀雄訳註『三国史記』(1、平凡社、東洋文庫、1980年)387頁。
- (6) 池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」(前掲書)42頁。
- (7) 池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」(前掲書)42-43頁。
- (8) 池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」(前掲書)45頁。
- (9) 池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」(前掲書)45頁。
- (10) 李成市「八世紀新羅・渤海関係の一視角－『新唐書』新羅伝長人記事の再検討」(『古代東アジアの民族と国家』岩波書店、1998年)396頁。
- (11) 池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」(前掲書)46-48頁。
- (12) 池内宏「麗初の偽鉄利」(『満鮮史研究』中世第一冊、萩原星文館、1943年)170頁。池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」(前掲書)56頁。
- (13) 赤羽目匡由「渤海・新羅接壤地域における黒水・鉄勒・達姑の諸族の存在様態－渤海の辺境支配の一側面」(前掲書)180頁。なお、池内は『高麗史』兵志の站駅に、文州(今の文川)の嵐山駅と登州(安辺)の朔安駅との間に、瑞谷の寶龍駅がある。この寶龍が寶露に比定され、寶露国は、黒水国と共に安辺地方(朔庭郡)に割拠していた靺鞨の部族を指したものと推定している(池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」前掲書)。
- (14) 赤羽目匡由「補説第一 新羅泉井(井泉)郡の位置について」(前掲書)191頁。
- (15) 三上次男「新羅東北境における黒水・鉄勒・達姑等の諸族について」(『高句麗と渤海』吉川弘文館、1990年、初出『史学雑誌』50-7、1939年)。
- (16) 小川裕人「三十部女真に就いて」(『東洋学報』24-4、1937年)。
- (17) 李基東「新羅下代の王位継承と政治過程」(『新羅骨品制社会と花郎徒』韓国研究院、1980年)175頁。
- (18) 『東文選』に伝わる「讓位表」の全文は下記の通りである。ゴチックは本文における引用箇所である。

臣某言、臣聞欲而不貪、駕説於孔門弟子、德莫若讓、騰規於晋国行人、苟窃位自安、則妨賢是責晋仮威、臣假威天眷、承之海隅、雖非法令滋彰、未免寇盜充斥、遑恤于後、勇退爲先、敢言善自爲謀、実慮刑茲無赦、臣以当国、雖鬱壘之、蟠桃接境、不尚威臨、且夷齋之、孤竹連疆、本資廉退、矧仮九疇之、余範早襲八条之教、源言必畏天行、皆讓路、蓋稟仁賢之化、得符君子之名、故籩豆饁田鉞矛寄戸、俗雖崇於帶劔、武誠貴於止戈、爰從建国而來、罕致反城之釁。嚮化則南閩、是絶安仁、則東戸何慙。是以直至臣兄贈大傳臣晟、遠沐皇澤、虔宣詔条、供職一終、安辺万里。而及愚臣継守、諸患併臻、始則黒水侵疆、曾噴毒液、次乃緑林成

党、競簸狂氣、所管九州、仍標百郡、皆遭寇火、若見劫灰。加復殺人如麻、曝骨如莽、滄海之橫流日甚、昆岡之猛焰風顛、至使仁鄉、變爲疵國。(此皆由臣守中迷道、馭下乖方。鷗梟沸響於鳩林、魚鱉勞形於鰈水、況乃西歸瑞節、則鷁艦平沈、東降冊書則鳳輶中輟、阻霑膏雨、虛費薰風、是乖誠動於天、實懼罪深於海。群寇既至今爲梗、微臣固無所取材、日辺居義仲之官、非常臣素分、海湖畔守延陵之節、是臣良圖、久苦兵戎、仍多疾瘵

深思自適其適、難避各親其親、竊以臣姪男嶠、是臣亡兄最息、年將志學、器可興宗。山下出泉、蒙能養正、丘仲有李、衆亦思賢、不假外求、爰從內舉。近已俾權藩寄、用靖國災。然屬蟻至壞堤、蝗猶隱蔽境、熟無以濯、溺未能援帑、廩一空、津途四塞、槎不來於八月、路猶於匱於九天、不獲早託梯航、上聞施辰。雖唐虞光被、無憂後至之誅、奈蠻夷寇多、久疎遄征之使、禮實乖闕情莫遑寧。臣每思量力而行、輒遂牽身而退。自開自落、竊狂花、匪劉匪雕、聊全朽木。所顓恩無虛受、位得夷歸。既睽分東顧之憂、空切詠西歸之什。謹原因當國賀正使某官入朝、付表陳讓以聞。

(19) 『三国志』魏書東夷傳挹婁條、東沃沮條。

(20) 松田寿男「戎塩と人參と貂皮」(『史學雜誌』66-6、1957年原載、『松田寿男著作集』3、東西文化の交流、1987年所収) 341頁。

(21) 朝鮮科學百科事典出版社・韓國平和研究所編『朝鮮郷土大百科』(11卷、江原道、平和問題研究所、2004年) 181頁。

(22) 同上、177頁。

(23) 同上、192頁。

(24) 同上、181頁。

(25) 李成市「八世紀新羅・渤海關係の一視角」『新唐書』新羅伝長人記事の再検討(前掲書)。

(26) 同上。

(27) 池内宏「高麗朝に於ける東女眞の海寇」(『滿鮮史研究』中世第二冊、吉川弘文館、1937年) 296頁。

접경지역의 문자 전달

: 현강왕 12년 ‘木書十五字’를 중심으로

이성시(와세다대학)

목 차

머리말	3. 접경지역의 문자 전달
1. 접경지역에서의 북진(北鎭)	맺음말
2. 북진과 흑수말갈족	

머리말

이번 국제회의는 ‘접경과 변경, 그리고 문자생활’이라는 주제를 내걸고 있다. 이 주제에 대하여 나는 접경지역과 변경지역에서의 문자 전달이라는 시점에서 9세기 신라와 발해 영역의 관계를 고찰하고자 한다. 접경지역이라는 역사적인 시각에 대해서는 일찍이 일본열도의 지역론으로서 지리적으로도 역사적으로도 떨어져 있던 사람들이 서로 접촉하고, 관계를 형성하는 ‘컨택트 존(접촉 영역)’의 관점에서, 상호영향권에 주목하여 그러한 접경지역에서 나타나는 다양한 역사상을 파악할 수 있는 가능성에 대해 개괄적으로 논한 적이 있다. (1)

원래 ‘컨택트 존’이라는 개념은 메리 프랫에 의해 주창되었는데, 식민지에서의 만남의 상호작용적, 즉흥적인 차원을 부각시킴으로써 전파주의에서는 무시되기 쉬운 관계성을 컨택트라는 시점을 도입하여 어떻게 주체가 상호 관계에서 구축되는가 하는 점이 강조된다. 따라서 ‘컨택트 존’은 꼭 식민지 지배의 분석에만 활용되는 분석의 틀이라고 하기보다는 인류가 타자와 접촉하고 사회를 형성해 왔다는 사고방식에 바탕을 두면서, 사회와 문화를 자생한 것으로 간주하는 것이 아니라 다양한 타자와의 교섭의 결과라는 시점에서 문화와 사회를 논하는 틀로서 폭넓게 인류사에 적용할 수 있는 것으로 여겨지고 있다.

그런데 신라의 접경영역에 대해서는 동북지방이 주목을 받는다. 특히 7세기 후반에 백제와 고구려를 멸망시키고 나아가 당나라와의 전투를 거쳐 옛 고구려 지역과의 접경지역에 진출하여 이를 통합하는 과정에서 북진하면서 축성을 계속해 나가는 한편, 690년에는 군단인 우수변수당(牛首邊守幢)을 배치하는 등 북변(北邊)을 방비하였다. 그러한 신라의 동북 변경에서 9세기 말에 일어난 일이 다음과 같이 기록되어 전하고 있다. 『삼국사기』 권11, 현강왕 12년(886) 봄조에는,

북진(北鎭)에서 아뢰기를, “적국인(狄國人)이 진에 들어와 판자 조각을 나무에 걸고 돌아갔습니다. 드디어 가져다 바칩니다”라고 하였다. 그 나무에는 글이 15자 쓰여 있었는데, “보로국(寶露國)과 흑수국(黑水國) 사람이 함께 신라국으로 와서 화통(和通)하고자 한다”고 하였다.

즉, ‘적국인(이역의 백성)’이 경계를 넘어 신라에게 교섭을 요구하며 북진으로 침입하였고,

나무 조각에 ‘寶露國與黑水國人共向新羅國和通’이라는 15자를 적고, 나무에 걸어놓고 도망간 사건이 신라 왕도에 보고되었다. 여기서 신라 측이 말하는 ‘적국인’이란 나무 조각에 적힌 ‘보로국과 흑수국 사람’을 가리키며, 발해국 영역에 거주한 말갈계 종족으로 간주되어 왔다.

본고에서는 이 사건이 발생한 9세기 말 신라와 말갈계 주민 간의 접경지역에서의 교섭 양상에 대하여 ‘木書十五字’를 단서로 하여 이러한 문자 전달이 행해진 지역 공간과 이 시대를 살았던 사람들의 정신세계에 접근해 보고자 한다.

1. 접경지역에서의 북진(北鎭)

현강왕 12년에 접경지역에서 ‘적국인’이 가져온 목서(木書)에 관한 보고는 북진에서 중앙으로 전달되었다. 본고에서 대상으로 삼는 접경지역을 구체적으로 특정하기 위해서도 우선 북진의 위치를 비정하기로 한다.

북진에 대해서는 『삼국사기』 권11, 신라본기, 현강왕 12년(886)조 이외에는 『삼국사기』 무열왕 5년(658) 3월조에 다음과 같이 적혀 있다.

왕이 하슬라(何瑟羅)의 땅이 말갈(靺鞨)에 맞닿아 있어 사람들이 편안치 못하다고 여겨, 경(京)을 폐지하고 주(州)로 삼았다. 도독을 두어 이를 지키게 하였다. 또한 실직(悉直)을 북진(北鎭)으로 삼았다.

즉, 하슬라 지방(지금의 강릉)은 말갈족과 맞닿아 있으므로, 인심이 불안정하기 때문에 소경(小京)을 폐지하고 주로 삼아, 도독을 두고 진호(鎭護)시켰다. 나아가 실직(지금의 삼척)을 북진으로 삼았다고 한다. 따라서 9세기 말의 북진에 대해서도 그 소재지를 무열왕 대의 기사에서 근거를 찾아 실직으로 보는 견해가 일부에서는 답습되고 있다. (2)

한편, 이케우치 히로시(池内宏)는 6세기 이후 신라 말 고려 초기까지의 한반도 동북경계의 변천, 특히 삼척 이북, 영흥 이남 지역에서의 신라의 북진 혹은 후퇴에 대하여, 시계열에 맞추어 과정의 사료 고증을 시도하고 있다. (3) 이에 따르면 북진은 결코 실직에 그대로 머무르지 않았고, 신라의 해당 지역의 동향과 연관되어 이동하였을 가능성이 있다. 실제로 이러한 이케우치 히로시의 고증을 전제로 하여 이병도와 이노우에 히데오(井上秀雄)는 북진의 소재를 삭정군(朔庭郡, 비열홀<比列忽>, 지금의 안변)에 비정하고 있다. 필자도 졸고에서 이병도설을 답습한 적이 있다. 이후 아카바메 마사요시(赤羽目匡由)도 이를 따르고 있다. 요컨대 북진(北鎭)은 신라 문무왕 이후의 북진(北進)에 의해 그 위치를 안변으로 옮겼다는 인식이 공유되어가고 있다. (4)

목서 15자를 중앙에 전달한 ‘북진’의 위치와 관련해서 중시되는 것은 문무왕 15년(675) 비열홀주 복치(復置)로부터 7년 뒤 안북하(安北河)를 따라 ‘관성(關城)’이 설치되고 ‘철관성(鐵關城)’이 축조되었다는 『삼국사기』의 기사이다. (후술)

애초에 신라의 비열홀 방면 진출이란 『삼국사기』 권35, 지리지에 삭정군, 원래는 고구려의 비열홀군. 진흥왕 17년, 양(梁) 대평(太平) 원년에 비열주(比列州)로 삼고 군주(軍主)를 두었다. 효소왕 때에 성을 쌓으니 둘레는 1180보이다.

라고 적힌 것처럼, 진흥왕 대에 비열홀(안변)로 진출한 일이 먼저 있었고, 신라본기에는 이 때에 비열주에 사찬 성종(成宗)을 군주로 파견하였다고 되어 있다. 이노우에 히데오는 이 지리

지에 보이는 효소왕 대(692-702)의 축성 기사를 가지고 이를 ‘북진’의 축조로 보았다. (5)

하지만 이케우치 히로시의 자세한 고증에 따르면, 이케우치는 북진과 비열주를 동일시하지 않고 있다. 이케우치가 신라에 의한 비열주 복지(復地)에 대하여 주목하는 것은 이 방면에 대한 신라의 진출 기점으로서 축조된 앞서 언급한 ‘철관성’이다. 이케우치가 말하는 것은 반드시 북진을 특정하기 위한 고증은 아니었지만, 목서를 가져온 접경지역으로서의 ‘북진’의 위치를 명확히 하기 위해서는 먼저 이케우치가 주목하는 ‘철관성’에 관한 고증 과정을 검토할 필요가 있다.

철관성에 대해서는 『삼국사기』 권7, 신라본기에는 문무왕 15년(675) 가을 9월 29일조에,

안북하를 따라 관성을 설치하였다. 또 철관성을 쌓았다.

라고 되어 있다. 한편, 『삼국유사』 권2, 문호왕법민조에도 다음과 같은 동일한 내용이 전해지고 있다.

안북하 강변에 철성을 쌓았다.

여기에 보이는 ‘관성’, ‘철관성’, ‘철성’의 위치 비정에 대하여 이케우치 히로시는 『고려사』 지리지 의주(덕원)조, 『용비어천가』 제38장에 인용된 주(注), 『세종실록』 지리지 의천군(덕원)조, 『신증동국여지승람』 덕원부 고적(古跡)조 등 여러 사료를 자세히 조사한 다음, 덕원읍(德源邑)에서 북쪽으로 6km 떨어진 동해안을 따라 문천(文川)으로 향하는 가도(안변회령가도)의 왼쪽에 위치하는 망덕산(望德山)에 주목하고 있다. 이것이 바로 『세종실록』 지리지에 기록된 철관산(鐵關山)이며, 위의 사료에 제시된 ‘철관’에 비정되어야 한다고 지적하였다. 나아가 이 ‘철관’이라는 이름은 고려 공민왕 이전으로도 거슬러 올라가며 몽골에 대비하는 요충지로서 『고려사』에 종종 등장하며, 망덕산의 철관성이 몽골의 침입을 막기 위해 세워졌음을 확인하고, 이 성이 신라시대부터 존재한 것이라고 보며 이 곳과 같은 이름인 『삼국사기』 신라본기의 철관성에 비정하고 있다. (6)

또한 이 지역을 실견(實見)한 적이 있는 이케우치는 덕원 북쪽에 소재한 망덕산(표고 346m)의 지리적 조건에 주목하여, 안변-문천간의 해안도를 막고 천연의 요새를 이룬다는 점에서, 이것이 『세종실록』 지리지에 나오는 철관산이고, 덕원도 또한 그 방면의 요충지임을 강조하였다. (7)

게다가 이 망덕산 남쪽 분지를 지나서 동해로 나가는 북면천(北面川) 남쪽에도 망덕이라는 작은 산(표고 191m)이 있어, 철관의 망덕산과 남북으로 대치하고 있으며, 고려시대의 철관성지(鐵關城址)가 존재하는 망덕산과 덕원의 북면천 기슭 망덕산은 서로 호응하는 요충지였으므로, 위의 문무왕 15년조의 ‘안북하를 따라 관성을 설치하였다. 또 철관성을 쌓았다’는 두 망덕산에서 같은 시기에 축성이 이루어졌음을 의미하는 것으로 단언한다. 나아가 ‘안북하’로 비정해야 할 것은 북면천임을 부연하고, 고려시대 의주성은 신라시대 옛 성을 개축한 것이라고 간주하였다. (8)

이상의 고찰을 바탕으로 이케우치 히로시는 문무왕 8년 가을 9월에, 선덕왕 7년 이래 30년간 고구려의 영역 안에 있었던 비열주를 복치하자, 7년 뒤인 문무왕 15년(675)에 신라는 비열주(안변)에서 그다지 멀지 않은 덕원에 방어적 설비(철관성)를 두었다고 보고, 그 목적은 말갈이 침입하는 통로를 막기 위한 것이었다고 결론짓고 있다. (9)

그런데 북진의 소재를 이병도와 이노우에 히데오처럼 비열홀 땅에 있다고 하면, 우선 이

케우치가 고증한 ‘철관성’, ‘철성’과의 양자의 관계가 문제가 될 것이다. 더욱 문제가 되는 것은 이들 북진과 철관성 북쪽에 위치하는 정천군(井泉郡, 덕원)에 축조되었다고 하는 ‘탄향관문(炭項關門)’과의 관계이다.

즉, 『삼국사기』 권35, 지리지의 정천군에 대하여,

정천군은 원래 고구려의 천정군(泉井郡)으로, 문무왕 21년에 이를 취하였다. 경덕왕이 이름을 고치고, 탄향관문을 쌓았다. 지금의 용주(湧州)이다.

라고 적고 있으며, 비열홀(안변)의 북쪽에 위치한 정천군에 ‘탄향관문’이 축조되었다고 하며, 이케우치가 고증한 비열홀(안변)의 ‘관성’, ‘철관성’(철성)과 ‘탄향관문’과의 상호 관계에 다시 의문이 제기된다. 요컨대 북진, 철관성(관성), 탄향관문 3자의 관계가 문제가 되는 것이다.

일찍이 졸고에서는 탄향관문의 소재를 덕원의 철관 부근에서 찾으려고 한 안정복의 설을 따른 적이 있다. (10) 그렇지만 이케우치는 그것을 엄하게 비판하며, 먼저 정천군에 대해서 지리지에 기록한 탄향관문의 축조는 경덕왕대가 아님을 지적하였다. 요컨대 경덕왕대에는 명칭을 바꾸었을 뿐이고, 탄향관문의 축조는 그와는 별개로 성덕왕 20년(721)에 북쪽 경계에 장성을 쌓았다고 하는 신라본기를 참조하여 그것을 신라와 백제의 경계로 보았다. 그 위치는 『신당서』 발해전에 적혀 있는 신라와 발해의 국경지대(‘南與新羅以泥河爲境’)에 있다고 하며, 탄향관문의 축조를 덕원 부근으로 보는 안정복의 설은 의문이 든다고 하였다. (11)

이 점을 더 추구한 것이 아카바메 마사요시인데, 이케우치의 고증을 전제로 하여 다음과 같은 결론을 도출하였다. 우선 ‘북진’에 대해서는 이병도와 마찬가지로 비열홀군으로 보고, 이 땅이 9세기 전반부터 886년까지의 사이에 비열홀군에서 북진으로 개칭되었다고 보았다. 비열홀군에서 ‘북진’으로의 개편은 신라 동북 경계로부터의 후퇴이며, 신라의 동북 경계 방비의 위급에 대한 대응이라고 보았다. 또한 그 전제로서 신라의 동북 경계는, 당나라의 고구려 정벌을 틈타 669년 무렵에 신라는 일시적으로 천정군(영흥 또는 덕원)까지 진출했지만, 671년 무렵에는 비열홀주(삭정군, 등주, 북진, 지금의 안변)까지 후퇴했다고 보고 있다.

그 후 문무왕 15년(675)에 안북하(북천면)의 하천을 따라 축조된 것이 철관성이고, 그것들은 관성, 철관성, 철성 등의 이칭이 있지만 실체가 같은 것으로 간주하였다.

아카바메의 가설에서 중요한 것은 신라가 675년에 철관성을 쌓고, 나아가 그 바깥쪽에 있는 천정군을 681년에 다시 탈취하여, 그 바깥쪽에 탄향관문을 축조했다고 보고 있는 점이다. 그 시기는 이케우치의 설을 답습하여 성덕왕 20년(721)조의 ‘하슬라도의 정부(丁夫) 2천을 징발하여, 장성을 북쪽 경계에 쌓았다’고 하는 기사에 ‘장성’을 탄향관문의 축조로 보았다.

아카바메에 따르면, 탄향관문은 북쪽으로부터의 침입을 막는 최종 라인이고, 산골짜기를 이용한 것이며, 관성, 철관성(철성)의 바깥쪽에 위치했다고 추정한다. 그것은 신라 최북단의 방어시설이라고도 할 수 있는 것으로 평가되었다. 아카바메의 가설을 시계열에 맞추어 철관성, 북진, 탄향관문의 축조의 추이를 정리하면 다음과 같다.

문무왕 15년(675), 안북하에 철성을 세우고, 철관성을 쌓음 (신라본기) **철관성**
 효소왕대(692-702), 비열주에 성을 쌓음. 둘레 1180보 (지리지) 주⇒**북진**
 성덕왕 20년(721), 하슬라도의 정부 2천을 징발하여 장성을 북쪽 경계에 쌓음 (신라본기) **탄향관문** / 정천군에 탄향관문을 쌓음 (지리지)

이를 정리하자면 남쪽으로부터의 위치는 북진(비열홀)→철관문·안북하→천정군→탄향관문의

순서가 된다. 탄항관문의 구체적인 위치 비정에 대해서는 남천강(南川江) 지류의 분수산맥에 주목하여 그 고개에 있는 이현(泥峴)에 비정하고 있다.

후술하듯이 아카바메의 위와 같은 가설에 대해서는 나름의 사료적인 근거에 바탕을 둔 가설로서 중시하고자 한다. 하지만 현재 입수 가능한 정보를 추가하면서, 접경지역에서의 북진, 철관성, 탄항관문 3자의 기능과 위치관계에 대하여 다시 검토해 보고자 한다.

2. 북진과 흑수말갈족

1절에서는 ‘북진’에서 온 목서 15자가 접경지역과 관련되어 있기 때문에, 신라의 변방 시설에 대하여 지금까지의 연구 성과를 바탕으로 하여 정리를 시도하였다. 현강왕 12년의 목서는 ‘북적인’이 가져온 것으로 전해지는데, 이 지역에 이르기까지의 노정을 시뮬레이션해보면 다음과 같이 된다. 흑수국, 보로국을 칭하는 ‘북적인’은 탄항관문(이현)을 넘어 철관성(망덕산)을 통과하고 북진(안변)에 당도하여 북진 안의 나무에 목서를 걸고 떠나갔다는 것이 될 것이다.

만약 그렇다면 한다면 목서 15자를 북진으로 가져온 자들은 탄항관문(이현)에서 북진까지를 그냥 지나친 듯한데, 당시 이미 신라의 변방 시설이 기능하고 있지 않은 정황이 있었던 것이 된다. 솔직히 말하자면 아무래도 약간 현실감이 떨어진다는 생각이 든다.

그렇기 때문에 앞서 가설을 제기한 아카바메는 이케우치의 고증에 기반을 둔 가설에 의거하여 목서를 가져온 887년 당시에는 ‘흑수국, 보로국’의 ‘보로’는 흑수말갈의 한 부족(보로=발리<勃利>)로 보고, 그들은 안변의 서쪽 30리에 있었던 ‘봉룡역(奉龍驛)’ 부근의 서곡폐현(瑞谷廢縣)에 존재했다고 보았다. (12) 요컨대 흑수말갈인은 철관성의 안쪽에 있는 서곡 부근에 거주하고 있었고, 신라가 쇠퇴함에 따라 경계에서의 긴장이 이완되고, 이를 틈타 흑수, 철록(鐵勒), 달고(達姑) 등의 제족(諸族)이 8세기 중엽에 경계인 이하(금진천<金津川>)을 건너 탄항고나문, 철관까지의 신라 영역으로 침입할 수 있었다고 하는 것이다. (13) 게다가 그들이 진출한 지역은 아카바메가 작성한 지도(14)에 보이는 것처럼 흑수말갈의 일부인 보로국을 칭한 집단의 거주지가 서곡이라고 한다면 그것은 철관성의 남쪽이 된다. 이러한 가설은 선불리 따르기 어렵다.

이러한 아카바메 가설의 최대 근거는 미카미 쓰기오(三上次男)의 흑수말갈 사민설(徙民說)이다. 즉, 미카미는 신라 말 고려 초에 신라 동북변에 나타난 흑수, 철록, 달고 등의 제족이란 그들의 예전 거주지였던 발해 북변의 변경이 아니라, 발해의 정복에 의해 발해 동남쪽 구석으로 강제 이주되었던 집단으로, 흑수말갈 이주자들이었다고 보았다. 당시 상황으로 보아 신라 말에 흑수말갈이 그들의 거주지에서 자주적으로 남하하는 일 따위는 있을 수 없다고 한다. (15) 해당 논문을 보는 한 사료적인 근거는 거의 없고, 그 가설은 오가와 히로토(小川裕人)의 「삼십부여진(三十部女眞)에 대하여」(16)에 대한 비판을 위한 비판으로 일관하고 있으며, 반론으로 제출된 가설은 대체로 인정하지 어려운 것이다. 그러한 근거가 박약한 가설을 전제로 한 아카바메의 가설은 대체로 따르기 어렵다.

북진이 안변의 비열홀에 소재하였다는 전제에 입각하였다고는 하나, 신라의 변방 상에서 중요한 군사 거점인 철관성에서 안쪽으로 깊숙히 들어간 서곡에 목서를 갖고 온 집단이 거주하고 있었다고 한다면, 10km 정도 떨어진 북진으로 가서 직접 교섭을 하지 않고 북진 안의 나무에 ‘보로국과 흑수국인이 함께 신라국으로 향하여 화통하려고 한다’고 통지해야 했던 것은 무슨 이유에서일까? 또 그러한 목서를 북진은 멀리 왕경에까지 보고하는 의미는 어디에 있는 것일까? 전혀 설명이 되지 않는 현상이라 하지 않을 수 없다.

분명 9세기 말에 신라인에게 있어 흑수말갈은 위협의 대상이었고, 진성왕 대의 전국에서 발

생한 도적의 봉기와 더불어, 진성왕이 양위를 결단하지 않을 수 없는 난제가 되었다. 이미 지적된 것처럼 최치원의 신라본기에 일부가 인용되어 있는 「양위표(讓位表)」는 이를 웅변적으로 말해주고 있다. 또한 이기동이 지적한 것처럼 다음 문장 속에 나오는 ‘黑水侵疆, 曾噴毒液’은 헌강왕 12년의 북진으로부터의 보고에 보이는 ‘흑수국, 보로국’과 부합하였을 것이다. (17)

우신(愚臣=진성왕)이 계승하여 직을 지킴에 미쳐서는 모든 환란이 한꺼번에 밀어닥치어, 처음에는 흑수가 경계를 침범하여 독액을 내뿜었사옵고, 다음에는 녹림(綠林=군도)이 무리를 이루어 다투어 광기를 풍기니, 관할하는 구주(九州)와 백군(百郡)이 다 도적의 불난리를 만나서 겁회(劫灰=전화<戰火>)를 보는 것 같았습니다. (18)

그렇지만 이를 가지고 북진 부근에 거주했던 흑수 사천민(徙遷民)으로 볼 수는 없다. 애초에 예로부터 아무르강 유역에까지 이르는 중국 동베이 지방 북변에는 읍루라 불리는 집단이 반거(盤踞)하고 있었으며, 그들이 선박으로 주변 지역을 도적질하여 주변 지역에서는 이를 크게 근심하였다는 이야기가 전한다. 읍루와 접해 있는 북옥저도 역시 읍루의 침략을 두려워하여 혈거(穴居)하며 수비하였다고 한다. (19)

이러한 읍루의 활동과 관련하여 흥미로운 것은 그들의 거주지에서 산출되는 담비 가죽(貂皮)에 대하여 유경숙(劉敬叔)의 『이원(異苑)』(卷3, 刀子換貂皮)에 다음과 같은 기사가 있다는 점이다. (20)

담비[貂]는 구려(句麗)에서 난다. 늘 한 존재[一物]가 함께 굴에서 산다. 어떤 이가 이를 보니 형체는 사람과 닮았고, 길이는 3척이며, 담비를 잘 다루고, 손칼[刀子]을 좋아한다고 한다. 그 습속에 사람이 담비 가죽을 얻으려고 하면 손칼을 굴 입구에 꽂는다. 이 존재는 밤에 굴을 나와서 가죽을 칼 곁에 두고, 사람이 가죽을 가져가는 것을 기다려 바로 칼을 취한다. (마쓰다 히사오<松田壽男> 교정에 의함)

즉, 담비 가죽을 둘러싸고 손칼과 교환할 때 접촉을 기피하여 교환이 행해지는 정경이 묘사되어 있다. 남조인의 데포르메가 더해져 얼핏 보기엔 황당무계한 이야기 같아 보이지만, 주의해야 할 점은 마쓰다 히사오가 지적한 것처럼 여기서 읍루라는 지역에서의 침묵교역을 엿볼 수 있다는 것이다. 접촉을 피하면서 담비 가죽과 손칼을 교환하는 행위 속에 북진에서 접촉을 피하고 목서를 보낸 행위와 연결되는 것이 있다고 여겨진다.

3. 접경지역의 문자 전달

이상으로 북진과 흑수말갈족 사이의 교섭의 양상을 검토하고, 접경지역인 북진, 철관성, 탄항관문이 소재한 지역에서의 흑수말갈족의 동향을 소묘하여, 당시의 북진 주변의 정황을 확인하였다.

이러한 신라와 발해의 접경지역에 대해서는 현지 조사가 불가능한 가운데 『조선향토대백과』에 전해지는 정보를 기반으로 하면서 구글 어스를 이용해 이 지역의 지형을 검토함으로써 이 지역에 대한 지식을 가능한 한 향상시키기로 하겠다.

우선 『조선향토대백과』의 문천시(文川市) ‘유물유적’ 항에는 철관성 항목이 있는데, 다음과 같이 기록되어 있다.

철관성 국가지정문화재 보존급 제324호

강원도 문천동에 있는 성터. 문천동의 서남쪽 망덕산에 위치해 있다. 산봉우리를 중심으로 사각형에 가깝게 축성되어 있다. 성의 주위는 700m로, 성벽은 돌로 쌓았다. 3개의 치(雉)와 성문의 흔적이 있다. 후기 신라와 발해의 국경 접점지대로 전해지고 있으며, 임진왜란 시기에 여기서 치열한 전투가 있었다고 한다. (21)

또한, '산과 강'에는 망덕산에 대하여 다음과 같이 적혀 있다.

강원도 문천시 가평동(柯坪洞), 관풍동(關豐洞)과 원산시 죽산리(竹山里)와의 경계에 있는 산. 해발 347m.

동서 500m~1200m이며, 남북 3.5km 정도이다. 북쪽과 동쪽 경사면은 35도~60도로 급경사이다. 산 정상은 둥글고 평탄하게 되어 있다. 산 정상은 동해와 원산시를 조망하기에 좋은 곳이다. (22)

아카바메가 탄향관문에 비정한 이현에 대해서는 이 책에서는 전혀 언급이 없지만, 문천시의 옥평동(玉坪洞)과 교성리(橋城里) 사이는 두 줄기 강이 흐르고 있는데, 여기는 고개로 되어 있고 그 동서가 약간 높게 되어 있으므로 이현으로 추정된다. 이를 뒷받침하듯이 서쪽에 위치한 교성리에 대해서는 『조선향토대백과』에는 다음과 같은 지형 설명이 있다.

이 지역은 서부가 높고, 옥평원(玉坪原)이 있는 동쪽 방면으로 점차 낮아지는 지세로 되어 있으며, 영역 안에 있는 옥녀봉(玉女峰, 147m)을 비롯하여 해발 100m~300m의 구릉으로 되어 있다. 하천은 남천강이 흐르고 있다. (23)

철관성, 안변으로 향하기 위해서는 이곳을 통과해야 하며, 지형으로 보아도 관문을 두기에는 최적의 위치에 있는데, 성벽 등의 기록이나 관련 기사는 『조선향토대백과』에는 보이지 않는다.

다만, 이 땅으로부터 수백 미터 남쪽에는 이균성(伊均城)이 국가지정문화재 보존급 제327호로서 소개되어 있어 주목된다.

강원도 문천시 교성리에 있는 고성지. 옥평동 서쪽에 있는 옥녀봉을 중심으로 하여 축성되어 있다. 옥녀봉 산록을 따라 남쪽 평지로 이어지는 평산성이며, 주위 2km, 성벽은 흙으로 축조되어 있다. 현재, 저부(底部)의 넓이는 2m, 높이는 5m 정도이다. 984년에 축조되어 문주방어사영(文州防禦使營)을 두었다고 한다. (24)

사진에 제시하였듯이, 위성사진에서 확인되는 추정 성벽을 더듬어 보면 둘레 2km로 되어 있으며, 대백과의 내용과 부합한다.

다만, 문주방어사에 대해서는 『고려사』 권58, 지리지 동계에는,

문주는 옛날에 매성(妹城)이라 불렸다. 성종 8년에 주 방어사라 하였고, 나중에 의주(宜州)에 합쳤다.

라고 하여, 이것이 『조선향토대백과』에 기록된 이균성의 유래이겠으나, 성종 8년이면 989년

이 된다. 또한 『고려사』 병지, 성보(城堡)에는 성종 3년(985)에 문주의 축성이 이루어졌다고 하므로, 이것이 이균성의 축조와 관련되는 지도 모른다.

그러나 여기서 주목해야 할 점은 이균성이 둘레 2km의 성벽 안에 2개의 산을 에워싸듯이 축조된 평산성의 규모와 그 위치이다. 이균성 북쪽에 위치하는 이현과 탄항관문에 비정 가능하다고 한다면, 남쪽 철관성과의 사이에 위치하는 이균성은 군사 전략 상 중요한 위치를 차지하는 것이 아닐까? 그도 그럴 것이 줄고에서 탄항관문을 『신당서』 신라전의 장인(長人) 기사에 나오는 철문, 철관과 관련지은 적이 있는데, 그 기사에서는,

그 나라는 산이 수십 리씩 연결되어 있고 골짜기가 있다. 쇠문짝으로 굳건히 하고 이를 **철관**이라 이름하였다. 신라는 늘 노사(弩士) 수천을 주둔하여 이곳을 지켰다.

고 되어 있듯이, 많은 주둔병을 두는 군사시설이었다. (25) 그러한 관문의 후방에 관문을 지원하고 보완하는 시설이 필요하지 않았을까? 하물며 철관성과 그보다 후방에 있는 비열홀(안변)에서는 보급을 행하기 어려웠을 것이다.

그렇기 때문에 종래 비열홀에 소재했다고 여겨졌던 북진의 소재지는, 탄항관문의 위치를 이현으로 본다면, 이현에 인접한 이균성으로 비정하는 것이 합리적이라고 생각된다. 물론 부연해야 할 점은 고려 초기에 축조된 것으로 알려진 이균성이 신라시대 옛 성을 개축한 것이라는 점이다.

그런 다음에 현강왕 12년에 목서 15자가 걸려 있었던 북진을 접촉 영역의 최전선이었던 탄항관문 즉 이현의 남쪽에 인접한 이균성으로 다시 비정해 보고자 한다. 그곳은 오랫동안 신라가 발해와 대치하는 최전선이였다. 목서 15자가 신라의 왕경으로 전달되었음에도 불구하고, 그 뜻은 중앙의 위정자에게는 전해지지 않았다. 그 소박한 내용은 문운(文運)이 융성한 신라의 한림귀족(翰林貴族)들에게는 야비하고 보잘것없는 것으로서 관심 밖에 놓였음에 틀림없다.

화려한 문식(文飾)을 잔뜩 사용한 최치원의 「양위표」를 목서 15자와 비교하면 그 차이는 너무나도 크다. 보통이 아닌 격차이다. ‘북적인’-흑수말갈족들이 목서 15자에 담은 메시지는 왕경의 한림귀족에게는 완전히 무시되었지만, 그것을 받아들이지 못한 신라의 대가 또한 너무나도 컸다. 신라에게 있어서 목서 15자는 ‘천장(千丈) 제방도 개미 구멍으로 무너진다’고 비유되는 것이 아닐까?

맺음말

9세기 말부터 10세기 전반은 발해의 쇠퇴, 멸망에 의해 발해 영역 내의 여러 부족들에 통제가 미치지 않으며, 발해에 의한 당나라나 일본과의 교역을 조직화하는 종전의 힘을 잃고, 발해의 지배에 복종하고 있던 말갈 여러 부족들이 자립적인 활동을 개시한 시기에 해당하였다. 본고는 그러한 동향을 신라 동북변에서 웅변적으로 말해주는 것이 현강왕 12년에 북진에서 등장한 목서 15자였음을 논하였다.

본고에서 논한 신라 동북부는 기원전부터 고래로 예족의 활동지역이었으며, 그 활동은 원삭(元朔) 원년(BC 128)의 창해군 설치 무렵까지 거슬러 올라간다고 이야기된다. 지금의 원산을 경계로 하는 강원도와 함경도 지역은 백제와 고구려 멸망 후 당나라와의 전투 과정을 거쳐, 8세기 전반에 성덕왕이 함흥 이남 땅까지 진출하고 여기에 탄항관문을 축조하자, 이 지역은 발해 영역과 신라 영역으로 분단되어 남북 교류는 두 왕조의 경계 관리 하에 놓였다. 이 접경

영역에서의 종전의 활동은 이러한 사태에 의해 현격히 제한되기에 이르렀다. 8세기 전반기에는 이 지방으로 신라의 방비책이 진행되었다. 정천군에 철관(철관성)과 탄향관문이 설치된 것은 그러한 신라의 국경 방어책의 일환이었다고 추정된다.

신라 측의 적극적인 접경지역 분단은 접경지역의 경계를 사이에 둔 사람들에 대한 비인간적인 이형(異形)의 이미지가 신라인에 의해 조성되었음을 확인할 수 있다. (26) 접경하는 이역(異域)의 주민에 대한 스테레오타이프는 그것을 공유하는 집단의 사회적 응집(우리 의식)의 계기도 될 수 있는 것이다. 그것은 이역에 대한 공포에 의해 유발되는 것이기도 했다.

현강왕 12년(886)에 복진에 나타난 목서 15자는 이 지역의 사회적 변화의 전조를 말해주는 것이었고, 발해국의 통제하에 있었던 말갈 여러 부족들의 활동의 일환으로 추정된다. 목서에 적힌 ‘흑수국’은 고려 태조 왕건의 건국기 군사 활동에서도 종종 보이는 ‘흑수’, ‘흑수번중(黑水蕃衆)’ 등이 있으며, 나아가 현종 시대에 창궐의 극치에 달했던 동해안을 침범한 여진족의 약탈 활동의 초기 단계에 있었던 것으로 보인다.

또한 신라 측에 있어서의 ‘흑수’에 대해서는 진성왕 11년(897)에 당나라에 보내진 최치원 작 「양위표」에도 보이는데, 거기에는 889년 이래 전국적인 도적 봉기와 더불어 ‘흑수’가 신라 강역을 침범하여 위해를 가하고 있었음이 기록되었다. 복진으로부터의 주상(奏上)으로부터 얼마 지나지 않아 신라의 변경은 ‘흑수’를 비롯한 말갈 여러 부족들의 침범을 받고 있었던 것이 된다. 접경지역의 변화는 그 이전부터 있었던 것으로도 짐작되지만, 목서가 ‘북적인’에 의해 복진으로 전달된 때에는 직접적인 접촉이 기피되고 있었다는 점에서 그 교섭은 그보다 이전에는 확인하기 어렵고, 이 목서를 접촉의 단서를 말해주는 물건으로 파악할 수 있다. 또한 ‘흑수국’, ‘보로국’이라고 국호를 칭한 점에서 복진과 해당 집단 사이의 일상적인 접촉은 생각하기 어렵다. 그들과의 평화적인 교섭이 일상화되어 있었다면 접촉을 피하여 목서를 가져온다는 방법은 상정하기 어렵기 때문이다.

경계를 넘어서 지역의 말갈 제족이 신라인에 의하여 이형의 사람들로 여겨지는 인식이 형성된 것은 8세기 당나라에도 전해져 있었는데, 신라 동북변은 9세기 말에 크게 변모하려고 하였다. 고려 태조 왕건의 건국 전후에는 ‘흑수번’, ‘흑수번중’의 침공은 구체적인 형태로 나타났고, 마침내 그들은 왕건의 대후백제전의 군대에도 편입되기에 이르렀다. 게다가 고려 태조 이후 10세기 전반에 이르러서는 동해로부터의 외적 침입에 의해 크나큰 피해를 입었음이 알려져 있는데, 그 상세한 내용은 현종 2년의 거란 침입에 의해 기록이 불타 없어짐에 따라 현종 이전의 여진족(말갈족) 해적의 사실이 후세에 전해지지 않은 것으로 여겨진다. (27)

9세기 말 이후는 신라와 발해의 병존 시대에서 오랫동안 가로막혀 있었던 해당 지역에서의 상호 관계는 결코 평화적인 교섭이라고는 말할 수 없으나, 예로부터의 동북 해안부에서의 활동이 재개되는 양상을 보이게 된 것이라고 볼 수 있다. 고려시대의 복진에 동반한 활동과 더불어, 북변 지역의 집단과의 새로운 관계가 창출되어 가게 된다.

이상의 내용을 정리하자면, 현강왕 12년의 목서 15자는 신라 동북변의 접경지역에서의 역사적 변화를 예고하는 것으로 파악할 수 있다.

주

- (1) 李成市, 「序論—境界・接触領域・交流」, 『岩波講座日本歴史』第20卷, 地域論, 2014.
- (2) 정구복 외, 『역주 삼국사기』(鄭求福 他, 『訳註三国史記』 3, 註釈篇(上), 韓國精神文化研究院, 1997, 335쪽)는 이기백, 「高麗太祖時의 鎮」(『高麗兵制史研究』, 一潮閣, 1968, 230쪽)에 근거하여 현강왕대의 복진 소재지를 삼척으로 보았다.
- (3) 池内宏, 「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」, 『朝鮮總督府古蹟調査特別報告』第6冊, 1928(→池内宏, 『滿鮮史研究上世第二冊』, 吉川弘文館, 1960), 23-72쪽.
- (4) 李丙燾, 『国訳 三国史記』, 乙酉文化社, 1977, 195쪽; 李成市, 「八世紀新羅・渤海關係の一視角—『新唐書』新羅伝長人記事の再検討」, 『古代東アジアの民族と国家』, 岩波書店, 1998; 赤羽目匡由, 「渤海・新羅接壤地域における黒水・鉄勒・達姑の諸族の存在様態—渤海の辺境支配の一側面」, 『渤海王国の政治と社会』, 吉川弘文館, 2011.
- (5) 井上秀雄 訳註, 『三国史記』1, 平凡社, 東洋文庫, 1980, 387쪽.
- (6) 池内宏, 「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」(전게서), 42쪽.
- (7) 池内宏, 「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」(전게서), 42-43쪽.
- (8) 池内宏, 「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」(전게서), 45쪽.
- (9) 池内宏, 「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」(전게서), 45쪽.
- (10) 李成市, 「八世紀新羅・渤海關係の一視角—『新唐書』新羅伝長人記事の再検討」, (전게서), 396쪽.
- (11) 池内宏, 「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」(전게서), 46-48쪽.
- (12) 池内宏, 「麗初の偽鉄利」, 『滿鮮史研究』中世第一冊, 萩原星文館, 1943, 170쪽; 池内宏, 「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」(전게서), 56쪽.
- (13) 赤羽目匡由, 「渤海・新羅接壤地域における黒水・鉄勒・達姑の諸族の存在様態—渤海の辺境支配の一側面」(전게서), 180쪽. 또한 이케우치는 『고려사』 병지, 참역에서 문주(지금의 문천)의 남산역(嵐山驛)과 등주(안변)의 삭안역(朔安驛) 사이에 서곡의 보룡역이 있는데, 이 보룡을 보로로 비정하고, 보로국은 흑수국과 함께 안변 지방(삭정군)에 할거하고 있던 말갈 부족을 가리키는 것으로 추정하고 있다. (池内宏, 「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」, 전게서)
- (14) 赤羽目匡由, 「補説第一 新羅泉井(井泉)郡の位置について」(전게서), 191쪽.
- (15) 三上次男, 「新羅東北境における黒水・鉄勒・達姑等の諸族について」, 『高句麗と渤海』, 吉川弘文館, 1990(←『史学雑誌』 50-7, 1939).
- (16) 小川裕人, 「三十部女眞に就いて」, 『東洋学報』 24-4, 1937年.
- (17) 李基東, 「新羅下代の 王位繼承과 政治過程」, 『新羅骨品制社会와 花郎徒』, 韓國研究院, 1980, 175쪽.
- (18) 『동문선(東文選)』에 전해지는 「양위표(讓位表)」 전문은 아래와 같다. 고딕체는 본문에 인용한 부분이다.

臣某言、臣聞欲而不貪、駕說於孔門弟子、德莫若讓、騰規於晋国行人、苟窃位自安、則妨賢是責晋假威、臣假威天睽、承之海隅、雖非法令滋彰、未免寇盜充斥、遑恤于後、勇退爲先、敢言善自爲謀、実慮刑茲無赦、臣以当国、雖鬱壘之、蟠桃接境、不尚威臨、且夷齋之、孤竹連疆、本資廉退、矧仮九疇之、余範早襲八条之教、源言必畏天行、皆讓路、蓋稟仁賢之化、得符君子之名、故簞豆饁田鉞矛寄戸、俗雖崇於帶劔、武誠貴於止戈、爰從建国而來、罕致反城之釁。嚮化則南閭、是絶安仁、則東戸何慙。是以直至臣兄贈大傳臣最、遠沐皇澤、虔宣詔条、供職一終、安辺万里。而及愚臣繼守、諸患併臻、始則黒水侵疆、曾噴毒液、次乃緑林成党、競簸狂氣、所管九州、仍標百郡、皆遭寇火、若見劫灰。加復殺人如麻、曝骨如莽、滄海

之橫流日甚、昆岡之猛焰風顛、至使仁鄉、變爲疵國。(此皆由臣守中迷道、馭下乖方。鷗梟沸響於鳩林、魚鱉勞形於鰈水、況乃西歸瑞節、則鷁艦平沈、東降冊書則鳳輶中輟、阻霑膏雨、虛費薰風、是乖誠動於天、實懼罪深於海。群寇既至今爲梗、微臣固無所取材、日辺居義仲之官、非常臣素分、海湖畔守延陵之節、是臣良凶、久苦兵戎、仍多疾瘵、深思自適其適、難避各親其親、竊以臣姪男嶠、是臣亡兄最息、年將志學、器可興宗。山下出泉、蒙能養正、丘仲有李、衆亦思賢、不仮外求、爰從內舉。近已俾樞藩寄、用靖國災。然屬蟻至壞堤、蝗猶隱蔽境、熟無以濯、溺未能援帑、廩一空、津途四塞、槎不來於八月、路猶於篋於九天、不獲早託梯航、上聞施辰。雖唐虞光被、無憂後至之誅、奈蠻夷寇多、久疎遄征之使、禮實乖闕情莫遑寧。臣每思量力而行、輒遂奉身而退。自開自落、竊狂花、匪劉匪雕、聊全朽木。所願恩無虛受、位得實歸。既睽分東顧之憂、空切詠西歸之什。謹原因當國賀正使某官入朝、付表陳讓以聞。

(19) 『삼국지』 위서 동이전, 음루조, 동옥저조.

(20) 松田寿男, 「戎塩と人參と貂皮」, 『史学雑誌』 66-6, 1957(→『松田寿男著作集』 3 東西文化の交流, 1987), 341쪽.

(21) 朝鮮科学百科事典出版社・韓國平和研究所 編, 『朝鮮郷土大百科』 11卷, 江原道, 平和問題研究所, 2004, 181쪽.

(22) 朝鮮科学百科事典出版社・韓國平和研究所 編, 『朝鮮郷土大百科』 11卷, 177쪽.

(23) 朝鮮科学百科事典出版社・韓國平和研究所 編, 『朝鮮郷土大百科』 11卷, 192쪽.

(24) 朝鮮科学百科事典出版社・韓國平和研究所 編, 『朝鮮郷土大百科』 11卷, 181쪽.

(25) 李成市, 「八世紀新羅・渤海關係の一視角」『新唐書』新羅伝長人記事の再検討(전게서).

(26) 李成市, 「八世紀新羅・渤海關係の一視角」『新唐書』新羅伝長人記事の再検討(전게서).

(27) 池内宏, 「高麗朝に於ける東女眞の海寇」, 『満鮮史研究』 中世第二冊, 吉川弘文館, 1937, 296쪽.

(번역: 김현경)

「接境地域における文字伝達」에 대한 토론문

주보돈(경북대학교)

1.

원전 사료를 접할 때 대체로 주요 관심꺼리에만 편중하다보면 단편적 기사는 무심코 지나치기 일쑤이다. 계속해서 되풀이하더라도 잘 잡아내지 못한 채 흘려보내는 경우가 다반사다. 설사 이를 잡아내더라도 재구성해내고 역사 복원에 활용하기란 쉽지가 않다.

그런 사정에 견주어 이성시교수의 이번 글은 매우 많은 측면을 깨우쳐주면서 지나온 궤적을 되돌아보도록 하는 흥미로운 시도로 평가할 만하다. 이교수는 『삼국사기』 11 신라본기 헌강왕 12년(886)에 있는 북진(北鎭)에서 정식 보고하였다는 흔히 스쳐가기 쉬운 짧은 기사를 주목하였다. 내용은 ‘적국인(狄國人)이 입진(入鎭)해서 나무 조각을 큰 나무에 걸어두고 돌아갔다는 보고였다. ‘寶露國與黑水國人共向新羅國和通’이란 지극히 간단한 15글자로 이루어진 내용으로서 두 나라가 같이 신라국과 화통(和通)하고 싶다는 의사 전달이었다. 그들이 요구한 구체적인 내용은 물론 그에 대한 사후처리 등의 향방은 더 이상 기록상에 등장하지 않아 잘 알 수가 없는 상황이다.

2.

목간으로 추정되는 내용을 눈여겨본 이교수는 접경지에서 이루어진 일이라는 점에 착목해 거기에 내재된 의미를 깊이 음미하고 천착해보려는 시도를 하였다. 무척 짧은 기록을 매개로 신라와 발해가 접경한 동해연안의 최전선에서 이루어진 일을 비롯해 지명, 영토 변화, 주변 접경지 인식 등에 대해 온갖 자료를 최대한으로 동원해 치밀하게 점검을 도모함으로써 적지 않게 성과를 올리고 있는 것으로 여겨진다.

돌이켜보면 이 시기 연구자들이 영토 문제와 관련하여 삼국통일 이후 주된 관심을 서해연안 쪽의 옛 고구려 영토에 두어왔음이 일반적 경향이었다. 그 가운데 특히 김춘추가 당태종과 맺었다는 밀약 가운데 보이는 ‘平壤以南百濟土地’의 해명이었다.

사실 이는 다루는 논자마다 현실 인식은 물론이고 근본 역사 인식까지 달라 쉽게 풀어낼 수 있는 대상이 아니다. 거기에도 그 사료 속에는 신라 당대조차도 다양하게 해석되어 해답이 없는 소지까지 스며들어가 있는 상태이다. 따라서 앞으로도 새로운 자료가 달리 출현하지 않는 한 논리적으로는 풀기 불가능한 難題라 여겨진다. 그럼에도 지금껏 지나칠 정도로 쓸데없이 관심을 쏟았다는 느낌이 강하게 든다.

사실 당과의 싸움에서 戰勝하였다거나 실증적인 적업을 거치지 않고 무조선 통일 이후의 영토를 대동강으로부터 원산만에 이르기까지로 굵고 9주6소경의 경역을 쉽게 구획한 기존의 통설적 이해는 근본적인 한계를 지니고 있었다. 그럼에도 아무런 의심을 하지 않고 마냥 그대로 받아들이어 왔다. 앞으로 그렇게 되기에 이르는 과정은 치밀한 실증적인 검토를 기다리는 대목이다.

그런 실상에 견주어 동해연안은 거의 방치하다시피 해온 대상이었다. 대체로 발해사 연구자들이 일부 신라와의 관계를 다루면서 교통로나 국경선 문제와 관련하여 약간 관심을 기울여왔을 따름이다. 그런 측면에서 비록 단편적이기는 하지만 이번 이성시교수의 시도가 갖는 의미는 대단히 크다고 평가된다.

다만, 글을 읽으면서 아쉽다고 느낀 부분이나 약간이라도 보완하였으면 하는 부분에 대해서 몇 몇 마디 던져 토론자로서의 소임을 다하려고 한다.

3.

1)이교수는 狄國人을 보로국과 흑수국인만을 지칭하는 좁은 의미로 쉽게 단정하고 말았다. 하지만 이때의 적국은 차라리 발해로 보고 그 속에서 보로국이나 흑수국을 설정함이 어떠할지 모르겠다. 『삼국사기』에서 발해를 北國이라 하였지만 『삼국유사』 기이편2의 「孝成王」조에는 北狄, 탑상편 「栢栗寺」조에는 적적(狄賊)이라고 한 표현을 사용하고 있다. 크게 발해를 총칭한 狄이란 단어 속에서 다양한 구체적 종족의 존재를 상징함이 올바른 접근이 아닌가 싶다. 그럴 때 이들이 바로 이 무렵 특정 종족이 독자성을 지닌 ‘國’을 스스로 표방한 것은 일단 당시 발해 내부의 동향과 관련하여 참고해볼 만한 사항이다.

2)北鎮에 대한 개념이 문제이다. 거의 모든 연구자들이 북진을 특정 군사적 거점으로서만 국한해서 사용하는 경향이 강하다. 하지만 鎮이나 小京 등이 곧장 州로 전환되기도 한 데서 드러나듯이 북진은 당연히 특정 거점을 의미함이 기본이지만 더 나아가 그 관할 아래에는 놓인 다른 여러 城을 비롯한 구체적 거점까지 포괄하는 넓은 管區의 의미도 아울러 내재하고 있었다. 이를테면 철관성이나 탄화관문 등은 서로 거리가 떨어져 있지만 크게 보면 모두 북진의 관할 아래에 놓인 거점인 것이다. 그런 측면이 큰 전제로서 고려될 때 비로소 북적인이 입진(入鎮)해서 편목(片木)을 나무에 걸어두고 돌아간 사정도 순조롭게 이해될 듯하다. 그렇다면 북진의 위치를 구태여 북쪽으로 한층 더 올라간 伊均城과 같은 곳으로 따로 비정할 필요도 없지 않을까?

3)평소 서로 교류하거나 소통하지 않고 적대적 상태였던 대상에 대해 교류 의사를 타진하는 방법으로 목편(목간)을 걸어두고 돌아가서 기다리는 행위가 주변 국경 지역에서 상호 소통의 방식으로 쓰였다는 지적은 무척 흥미롭게 다가온다. 다만, 그 결과에 대한 이해에는 약간의 의문이 든다. 이교수는 文運隆盛한 신라의 입장에서 목간이 내용이 卑野하여 제대로 취급되지 않은 채 무시하였으리라고 단정하였다. 그렇다면 과연 굳이 기록으로 역사서에까지 남길 필요가 있었을까? 오히려 신라에서 논의하고 적절한 대책을 마련하려고 시도하였으나 사정이 여의치 않았기 때문에 결과를 남기지 못하게 된 것이 아니었을까. 가령 당시는 憲康王이 사망하기 바로 직전이었고 따라서 이를 본격적으로 다루어서 대책을 마련할 겨를을 거의 갖지 못한 데서 처음 논의는 진행하였으나 끝내 명확한 결론이 내려지지 않았기 때문이 아닐까? 그런 상태에서 멸망으로 치달아 가던 발해의 내부 상황까지 더해짐으로써 더 이상 적절한 대응책이 나오지 못한 것이 아닐까?

4)이런 시도를 통해 차라리 당시 발해의 내부 사정을 고려함이 어떨까 싶다. 발해 왕조가 내분으로 무너져 내리는 도중이었고 이를 기회로 변경의 종족집단들은 국명을 표방해 이탈해 나가는 분위기 속에서 신라와 화통하여 도움을 요청하는 등등과 같은 일이 벌어진 것은 아닐까? 그럴 때 그들이 요구한 내용은 과연 무엇이었을까? 이에 대한 고민을 좀 더 구체적으로 해봄이 어떠할지? 여하튼 무조건 신라가 비야하라고 무시한 것으로 이해한 데 대해서는 재고의 여지가 있을 듯하다.

이상 두서없이 그냥 몇 마디 던져본 셈이다.

발표2

角筆 資料로 본

古代 東아시아의

文字文化

角筆 資料로 본 古代 東아시아의 文字文化

권인한(성균관대학교)*

목 차

I. 緒言	
II. 角筆의 定義와 特性, 그리고 文獻 現況	IV. 角筆點의 異同 樣相 II: 角筆 口訣
III. 角筆點의 異同 樣相 I: 角筆 符號와 漢字	V. 結言

<국문 초록>

本稿는 角筆로 記入된 各種 符號와 文字들(以下略 ‘角筆點’)을 中心으로 古代 東아시아 文字文化의 또다른 側面을 紹介 兼 考察함에 目標을 둔 것이다. 이를 위하여 角筆 研究의 世界的인 權威者이신 小林芳規 先生의 著作을 비롯한 國內·外 先學들의 論著 및 筆者의 角筆 調査 經驗 등을 綜合하여 “中國大陸→韓半島→日本列島”로 이어지는 古代 東아시아 文字文化의 異同 樣相과 影響 關係에 대한 再照明을 試圖해보고자 한다.

第2章에서는 角筆과 角筆 文獻 現況에 대한 全般的인 理解를 圖謀하였다. 먼저 角筆에 대해서는 “象牙나 딱딱한 나무[堅木], 대나무[竹], 짐승의 뿔, 鐵製 短棒 등을 짓가락 한 쪽 모양으로 만들어, 한 쪽을 붓끝[筆尖] 모양으로 깎고, 그 뾰족한 部分을 종이나 羊皮紙, 樹皮, 貝葉 등의 面에 눌러 오목하게 자국을 내서 文字나 그림[繪] 등을 記入한 것이다.”라고 定義한 후, 角筆의 特性과 長點에 대해서는 “角筆은 붓[毛筆]과 다르게 ①色이 없기 때문에 눈에 띄지 않는다, ②먹[墨]을 묻히는 不便함이 없다, ③神聖한 經典의 紙面을 더럽히지 않는다, ④旅行길에 가지고 갈 수 있다” 등 小林芳規 先生의 說明을 引用하면서, 이러한 特性을 活用한 實例들로서 ①經典 讀誦 메모, ②獄中 意思傳達, ③下繪線 등을 紹介하였다. 이어서 中國·韓國·日本의 角筆 文獻 現況을 整理한 후, 三國에서의 角筆 文獻의 時間的 順序가 “中國大陸(406) > 韓半島(733 以前) > 日本列島(749)”로 나타나고 있으므로 角筆 文字文化도 이러한 흐름과 同軌였을 可能性을 于先의으로 確認할 수 있었다.

第3章에서는 中·韓·日 三國에서의 角筆 符號와 漢字의 異同 考察에 焦點을 맞추었다. 먼저 角筆 符號의 例로는 梵唄符(=節博士), 合符, 聲點, 句切符(≡句讀點)으로 나누어 異同 樣相을 考察하였고, 角筆 漢字의 例로는 音注와 義注로 나누어 異同 樣相을 比較 考察하였다. 이들을 綜合하여 角筆 資料도 毛筆 資料와 다르지 않게 東洋 三國의 漢字文化의 傳播와 擴散에

* 成均館大學校 國語國文·東Asia學科 教授

관한 說明 機制로서 “選擇的 受容과 變容”의 틀이 有用함을 再確認할 수 있었다.

이어서 第4章에서는 韓國의 口訣과 日本의 訓讀에 대한 比較 考察에 焦點을 맞추었다. 이를 위하여 角筆/毛筆 資料의 區分없이 ①逆讀符, ②口訣吐와 口訣字, ③呼應 構文 및 其他로 나누어 比較한 結果, 韓國의 初期 角筆 口訣點들이 日本의 訓讀 發達에 一定한 影響을 미쳤을 것으로 結論을 내릴 수 있었다. 특히, “當只~音叱” 構文, “願~賜上” 構文에서의 副詞(句)와 助動詞 呼應上의 體系的 一致, 初期 東大寺 關聯 文獻들에 보이는 主格助詞「」의 例들에서의 字形 및 機能上의 一致는 兩國 間의 影響 關係를 否定하기 어려울 것으로 判斷되었기 때문이다.

・核心語: 角筆, 角筆 符號, 角筆 漢字, 角筆 口訣, 東아시아 文字文化, 選擇的 受容과 變容

I. 緒言

本稿는 角筆로 記入된 各種의 符號와 文字들(이하 ‘角筆點’으로 줄임)을 中心으로 古代 東아시아 文字文化의 또다른 側面을 紹介 겸 考察함에 目標을 둔 것이다. 이를 위하여 角筆 研究의 世界的인 權威者이신 高木亞矢 요시노리 小林芳規 先生の 著作¹⁾에 크게 依支하되, 國內 先學들의 論著 및 筆者의 角筆 調査 經驗²⁾ 등을 綜合하여 “中國大陸→韓半島→日本列島”로 이어지는 古代 東아시아 文字文化의 異同 樣相과 相互間의 影響 關係에 대한 再照明을 試圖해보고자 한다.

II. 角筆의 定義와 特性, 그리고 文獻 現況

2.1. 角筆이란?

小林 先生은 角筆을 다음과 같이 定義하고 있다.

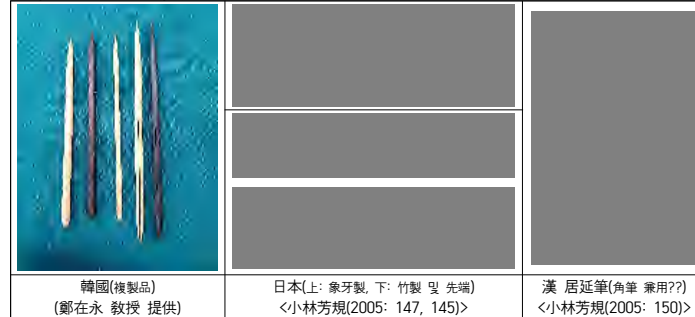
“角筆은 象牙나 딱딱한 나무[堅木], 대나무[竹] 등을 젓가락 한 쪽 모양으로 만들어, 한쪽을 붓끝[筆尖] 모양으로 깎고, 그 뾰족한 部分을 韓紙/和紙 등의 面에 눌러 오목

1) 小林 先生の 最初 角筆 研究 論文은 「訓點記載の一様式について」(『訓點語と訓點資料』 24, 1962.12.)로서 當身の 該當 研究 履歷은 60년에 達한다고 할 수 있다. 本稿에서 주로 依據한 小林 先生の 著作은 다음과 같다. 『角筆文獻研究導論』上卷·中卷, 別卷(汲古書院, 2004, 2005), 『角筆のひらく文化史 -見えない文字を読み解く』(2014, 岩波書店)/한국어역: 정재영 외 번역, 『각필문화사』(한국문화사, 2016), 『平安時代の佛書に基づく漢文訓讀史の研究Ⅱ・Ⅲ』(2017·2012, 汲古書院) 등.

2) 筆者가 角筆 文獻을 처음 만난 것은 2002년 여름 경으로 記憶된다. 2002년 3월부터 口訣學會 總務理事를 맡으면서 自然스레 當時의 學會 最關心事였던 “角筆 文獻들의 調査와 整理”에 관한 일들에 關與하게 되었는바, 2002년 7월 어느날 鄭在永 先生の 勸誘로 舊誠庵古書博物館에서 進行되었던 『晉本華嚴經』 卷20의 資料 調査 現場을 參觀한 것이 그것이다. 그 후 2003년 12월 21일 口訣學會 任員들과 함께 東大寺圖書館에서 『大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔』 卷第三(續大藏經)에 대한 調査를 始作으로 2009년 1월에 있었던 東大寺圖書館藏 『大方廣佛花嚴經』 卷12~卷20(縮約本)에 대한 豫備調査 및 本調査 2차(2010.1.), 5차(2012.2.), 6차(2012.8.), 7차(2013.1.), 10차(2014.7.), 15차(2020.1.)에 參與한 바 있다. 또한 2012년 7월 石山寺에서 鄭在永 教授가 『釋摩訶衍論』에서 新羅 角筆字「叱」자를 찾아낸 現場에 있었고, 2016년 8월에는 鄭在永 教授와 함께 大谷大學에서 『判比量論』 角筆 調査를, 2018년 11월에는 東國大學校에서 南豐鉉·金星周 教授와 함께 『判比量論』 斷簡 2種에 대한 角筆 調査를, 2018년 1월~12월에는 李勇·張景俊 教授 등과 함께 高麗時代 11世紀代 文獻인 『瑜伽師地論 66』에 대한 角筆 調査 및 解讀 作業의 責任을 맡은 바 있다. 그 동안 筆者를 角筆의 世界로 이끌어 주신 小林芳規·南豐鉉 先生, 鄭在永·金永旭 教授 등 諸位께 이 자리를 빌려 感謝의 人事를 올리고자 한다.

하게 자국을 내 文字나 그림[繪] 등을記入한 것이다.” <小林芳規(2014/2016), p.5>

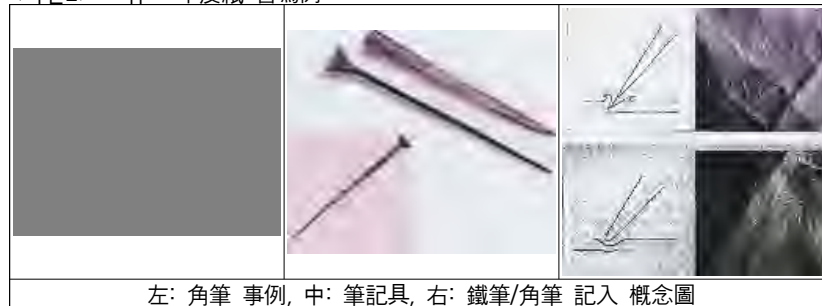
<사진1> 各國의 角筆 寫眞



小林 先生은 위의 定義에 이어서 “(*角筆은) 붓[筆]이 주된 筆記具이던 時代에, 오늘날의 鉛筆처럼 使用하는 것으로 붓을 補助하는 또다른 筆記具였다. 붓이 검정이나 빨강 등의 色으로 文字나 그림을 적는데 반하여, 角筆의 文字는 빛과 그림자로 드러나는 오목선[凹線]이다.”라고 하고 있다.

그런데 위의 定義와는 다르게 角筆의 材料가 象牙나 木製에 그치는 것이 아님에 留意할 必要가 있다. 스위스의 事例로 報告된³⁾ 羊皮紙用 筆記具로서의 鐵筆Stylus/Griffel도 있기 때문이다.

<사진2> 스위스 羊皮紙 書寫例



書寫 材料가 종이가 아닌 羊皮紙라면 그 記入用 筆記具는 材料의 特性上 위의 그림에서 보는 바와 같은 鐵이나 짐승의 뿔로 만들어진 筆이 使用되어야 하므로 이러한 事例 등⁴⁾을 考慮한다면, 위의 定義를 “角筆은 象牙나 딱딱한 나무[堅木], 대나무[竹], 짐승의 뿔, 鐵製 短棒 등을 젓가락 한 쪽 모양으로 만들어, 한 쪽을 붓끝[筆尖] 모양으로 깎고, 그 뾰족한 部分을 종이나 羊皮紙, 樹皮, 貝葉 등의 面에 눌러 오목하게 자국을 내서 文字나 그림[繪] 등을 記入한 것이다.”라는 정도로 修訂함이 좋을 것이다.

2.2. 角筆의 特性과 用度

角筆의 特性에 대하여 小林 先生은 다음과 같이 說明하고 있다.

3) 아래의 寫眞들은 Andreas Nievergelt(2006?), “Das Phänomen der mittelalterlichen Griffelglossierung in Europa”에서 引用한 것인데, 2006년 12월 경에 南豐鉉 先生으로부터 전해받은 것임을 밝혀둔다.

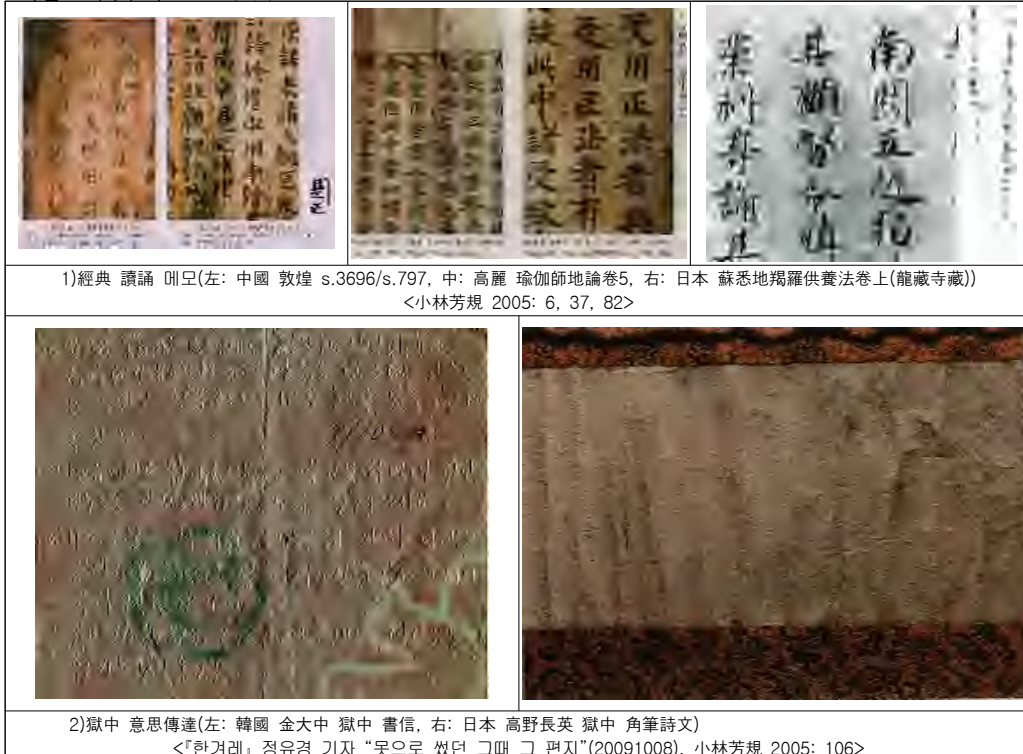
4) 이 밖에 러시아의 자작나무片紙 資料(權京俊(2014) 參照)나 多羅樹 나뭇잎에 經典을 새긴 印度의 貝葉經 등도 考慮될 수 있다.

“筆記具로서의 角筆은 붓[筆]과 다른 몇 가지 特性을 지닌다. 色이 없기 때문에 눈에 띄지 않는다, 먹[墨]을 묻히는 不便함이 없다, 神聖한 經典의 紙面을 더럽히지 않는다, 旅行길에 가지고 갈 수 있다 등이다.” <小林芳規(2014/2016), p.6>

말하자면 角筆은 保安 維持(隱匿), 着墨 不要, 書寫面 無毀損, 携帶 簡便 등의 長點들을 지닌다는 것이다. 勿論 角筆에 이러한 長點만 있는 것은 아니다. 위에서 角筆點은 빛과 그림자로 드러나는 오목선[凹線]이라고 한 바 있거니와, 角筆로 記入된 文字나 符號의 確認을 위해서는 원편의 사진과 같은 角筆 Scope, LED Lantern 또는 촛불 등과 같은 빛을 비춰줄 수 있는 補助裝置가 必須的일 뿐만 아니라, 時間이 지날수록 그리고 修理 등을 거치면서 外部 衝擊이 가해지면 角筆點의 確認이 어려운 短點도 없지 않기 때문이다.

이러한 特性들을 지니는 角筆의 用度는 1)貴重한 紙面을 더럽히지 않는다는 점에서 經典 讀誦의 痕迹을 記入하기에 容易하고, 2)먹을 묻히는 不便이 없다는 점에서는 스승의 講義를 聽講할 때의 Memo에 適合하며, 3)눈에 잘 드러나지 않는다는 점에서는 秘密스런 意思 傳達에 알맞기도 하다. 이 밖에 肖像畫 등의 밑그림[下繪線] 作業이나 欄上 注記를 위한 野線 긋기 등에도 角筆의 有用성이 報告되어 있다. 아래에 몇 가지 事例들을 紹介하고자 한다.

<사진4> 角筆의 用度別 實例





2.3. 角筆 文獻 現況

現在까지 中·韓·日의 東洋 三國에서 發見된 角筆 文獻의 現況은 아래와 같다(小林芳規 2004a: 30-63, 2014: 169-187, 189-261, 2017: 10-12 등 綜合).

1) 中國

中國의 角筆例는 주로 敦煌 出土 文獻들에서 찾아진다. 時期的인 範圍는 5世紀에서 10世紀에 걸치고 있으며, 角筆 符號 및 漢字 등이 發見되어 있다.⁵⁾ 大英圖書館, France Paris 國立圖書館, 臺灣 國家圖書館, 日本 龍谷大學圖書館 등이 主要 所藏處이며, 여기서 發見된 文獻은 45點인 것으로 報告되어 있고, 그 代表的인 것들을 보이면 다음과 같다.

- ◎-1 『十誦比丘波羅提木叉戒本』 (S.797_406)
- ◎-2 『四分戒本疏』 卷4 (S.6889_858?)
- ◎-3 『大乘稻芊經隨聽手鏡記』 (P.2208_859)
- ◎-4 『救諸衆生苦難經』 (S.3696_10世紀 戊戌年)
- ◎-5 『觀音經=妙法蓮華經觀世音菩薩普門品』 第25 (S.5556_10世紀 戊申年)
- ◎-6 『瑜伽師地論』 卷30 (S.5309_857) 등

이밖에 日本 東大寺圖書館藏의 唐寫經, 醍醐寺藏의 宋版一切經(北宋~南宋代), 中國 各地의 明·清代 寫本·刊本 등에서도 角筆點들의 存在가 알려져 있다.

2) 韓國

韓國의 角筆 文獻은 統一新羅時代의 것과 高麗時代의 것으로 大別된다. 前者는 8世紀 資

5) 다만, 小林芳規(2014/2016)의 “第7話 勞幹先生”에서 紹介된 『居延漢簡』 711號 1面(=1049號 B面)에서의 “左側無字處有刻文”이라는 注記를 바탕으로 漢簡에서 찾을 수 있는 最初 事例로 보아 角筆의 起源을 求한 바 있으나, 金秉駿 教授의 敎示에 의하면 이는 角筆에 대한 것이 아니라 刻齒에 대한 注記로 봄이 옳을 듯하므로 中國 大陸의 角筆 事例에서 除外한 것임을 밝혀둔다.

料로 推定되며 日本 各處에 3點이 所藏되어 있는 반면, 後者は 10~12世紀代 文獻들로서 2000년 7월 小林 先生에 의한 첫 發見 以來 60餘 點을 헤아리며, 韓國內 博物館이나 大學圖書館 등에 所藏되어 있다. 代表的인 것들을 보이면 다음과 같다.

- ㉔-1 『判比量論』 (大谷大學藏(105行 斷簡); 733 以前 推定)
- ㉔-2 『大方廣佛花嚴經』 卷12~20 (東大寺圖書館藏(1141行 縮約本); 740년대 推定)
- ㉔-3 『晉本 華嚴經』 卷20 (舊誠庵古書博物館藏; 10世紀 推定)
- ㉔-4 『周本 華嚴經』 卷6·36·57 (舊誠庵古書博物館藏; 11世紀 推定)
『周本 華嚴經』 卷31·34(湖林博物館藏; 11世紀 推定)
- ㉔-5 『瑜伽師地論』 卷5·8/66 (舊誠庵古書博物館藏/國立한글博物館藏; 11世紀 推定)
- ㉔-6 『妙法蓮華經』 卷1 (延世大 中央圖書館藏; 12世紀 推定)
- ㉔-7 『禮念彌陀道場懺法』 (1502年刊) 등

이밖에 朝鮮時代의 것도 『唐柳文先生文集』(1440) 등 15~20世紀의 文獻들에서 發見된 바 있다.

3) 日本

日本 全國 47都道府縣에서 發見된 角筆 文獻은 3,350餘 點에 달하며, 時期的인 범위는 9~20世紀初에 걸치고 있다(最古: 正倉院文書 天平勝寶元年(749)牒, 最新: 沖繩 『尚泰侯實錄』 1914년 原稿). 그 代表的인 것들을 보이면 다음과 같다.

- ㉕-1 正倉院文書 「大納言藤原家牒東大寺司務所」 (749)
- ㉕-2 『華嚴刊定記』 卷13(別本) (749, 犬甘木積萬呂)
/ 『華嚴刊定記』 卷13·9·8 (758, 安宿廣成)
/ 『華嚴刊定記』 卷5 (783, 新羅 正本으로 校勘)
- ㉕-3 『華嚴經探玄記』 卷19·9 (828)
- ㉕-4 『蘇悉地羯羅供養法』 卷上 (平安中期, 龍藏寺藏)
- ㉕-5 『妙法蓮華經』 卷2 (平安中期, 新藥師寺如來像納入本)
- ㉕-6 『瑜伽師地論』 卷72 (744)
- ㉕-7 『根本說一切有部毗奈耶』 卷2 (768?)
- ㉕-8 『大乘廣百論釋論』 卷10 (841)
- ㉕-9 『御遺告』 高幡不動尊金剛寺藏 萬壽2年點 (1025) 등

以上 小林 先生의 論議에 依據할 때, 三國의 最初 角筆 文獻의 順序가 “中國大陸(406) > 韓半島(733 以前) > 日本列島(749)”로 나타나고 있으므로 角筆 文字文化도 이러한 흐름과 同軌였을 可能性을 于先의으로 確認해두고자 한다.

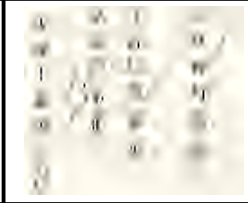
Ⅲ. 角筆點의 異同 樣相 I: 角筆 符號와 漢字

以上과 같은 東아시아의 角筆 資料 現況을 바탕으로 이제부터 좀더 具體的으로 各國의 角筆點의 異同을 살펴보기로 한다. 첫 번째의 比較 對象은 角筆 符號와 漢字에 관한 資料들이

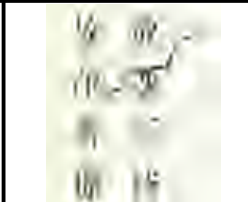
다.

3.1. 角筆 符號

1) 梵唄符(=節博士) 短型(B)

		
㉠-5: 11~13張 〈小林芳規 2004a: 51〉	㉡-2: 664~668行 〈小林芳規 2020〉	㉢-5: 7~9張 〈小林芳規 2004a: 360〉

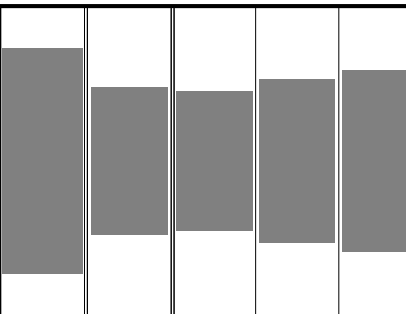
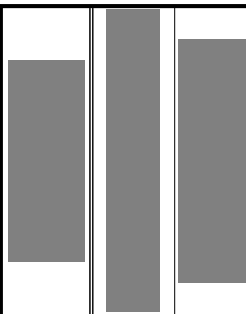
梵唄符(=節博士) 長型(A)

		
?	㉣-2: 97~102行 〈小林芳規 2020〉	㉤-5: 1張 〈小林芳規 2004a: 360〉

梵唄唱(또는 經典 讀誦唱)의 樂譜 表示인 梵唄符는 短型(1行 幅)과 長型(2行 以上の 幅)으로 區別된다. 다만, 現在의 筆者는 中國에서의 長型 梵唄符의 存在 與否를 가리기 힘든 處地 이므로 短型의 異同 與否에 焦點을 맞추어 살피고자 한다.

위에서 보면, 短型의 境遇, 韓國이나 日本의 事例는 波狀形이 主流임에 비하여 中國의 例는 波狀形과 함께 ‘ㄴ’이나 ‘ㄴ’字 모양의 꺾임형[折狀形]도 보임이 그 主要한 差異點 중의 하나이다. 이는 中國의 두 系統 중에서 韓國이나 日本에서는 주로 波狀形을 選擇의 受容하여 各國의 曲調에 맞게 變容된 것으로 說明될 수 있을 것이다.

2) 合符

		
㉥-5: 10 5 4 11行 〈小林芳規 2004a: 48-49〉	㉦-5: 18張 ㉧-1: 25 ㉨-2: 587 675 528行 〈小林芳規 2004a: 151 2005: 58 2020〉	㉩-2(卷5): 1 3張 〈小林芳規 2004a: 361〉

漢字 熟語(또는 臨時的 漢字成句)를 表示하는 合符의 境遇는 東洋 三國에서 大同小異한 樣

相을 보이고 있다. 즉 合符線 通過 位置를 基準으로 a_中央型(), b_右側型(), c_左側型()으로 三分됨이 一致하는 가운데,⁶⁾ 部分的으로 半弧形(㉔-5: 10行, ㉔-1: 25行),⁷⁾ ‘合符+逆讀線’複合(㉔-5: 18張)이나 ‘左側+中央型’複合(㉔-2: 1張)도 보이기 때문이다. 이 또한 角筆文字文化의 選擇的 受容과 變容의 機制⁸⁾로써 說明될 수 있음을 意味할 것이다.

3) 聲點

平	上	去	入	平	上	去	入	平	上	去	入
㉔-3: 17 13 16 ㉔-2: 21張 <舊> ㉔-5: 2 11 1張 <新> <小林芳規 2004a: 87-88(上), 53(下)>				㉔-2: 1110 963 221 600行 <舊> ㉔-2: 426 273 534 195行 <新> <小林芳規+南豐鉉 2020>				㉔-2(卷五): 9 2 18張 <新> <小林芳規 2004a: 362>			

漢字의 聲調를 表示하는 聲點도 三國間에 選擇的 受容과 變容의 機制로 說明될 수 있는 것으로 判斷된다. 즉 中國에 共存하였던 舊型()과 新型()의 聲調/破音 加點法⁹⁾이 韓國에 傳播·受容되는 가운데, 韓國漢字音에서의 ‘上去相混’現象의 端初에 該當되는 ‘上→去’例마저 나타나는 變容을 보이고 있을 뿐만 아니라, 이것이 다시 日本으로는 新型의 聲調/破音 加點法만 受容되는 再變容을 보이고 있기 때문이다. 여기에 더하여 中國에서의 斜線 表示法이 韓·日에 와서 卷點 表示法 中心으로 달라진¹⁰⁾ 것도 또다른 變容例로 追加할 수 있을 것이다.

6) 小林芳規(2014/2016:196-197)에서는 a形이 熟語를, b~c形이 臨時的 合成語句를 表示하는 區別이 있음을 말하고 있다. 中國과 韓國의 事例들에는 適合한 說明으로 보이나, 日本의 事例에 適用될 수 있을지는 疑心스러운 面이 없지 않다.

7) 小林芳規(2012: 450)에는 日本에서도 半弧形 角筆 合符가 있음을 알려주고 있다.

8) 漢字文化圈 文字文化의 흐름을 “選擇的 受容과 變容”의 틀[機制]로 說明할 수 있음에 대해서는 李成市(2005), 權仁瀚(2013)의 論議를 參照.

9) Ishizuka(1993)의 論議를 參照. ※舊型=Ishizuka’s II Type, 新型=Ishizuka’s IV Type.

10) 中國 大陸의 近代 文獻들에 新型의 圈點 表示法이 있음은 잘 알려진 事實의 하나다. 問題는 그것이 어느 時代로까지 溯及될 수 있는가에 있다. 管錫華(2002: 168)에 破音 加點 用法의 小圈句號 事例로 宋代 如廖氏 善本『論語集解』卷7「述而篇」에서의 “孔曰。言人能奉禮。自行束脩。上。則皆教誨之”를 들고 있을 뿐이어서 只今으로서는 確定的인 陳述은 어려우나, 原理上 中國의 두 聲調 表示法(斜線, 圈點) 중에서 圈點法이 韓·日에 選擇的으로 受容된 것으로 볼 수도 있다.

4) 句切符(≡句讀點)

非想通言聖戲論相義之故如世間出世間	時之往曰後一林 處人衆生心十也四聲區如 而受諸苦下不就品音礙難由	有說者本^(角)得自在隨意	雜幻偽眞性實直故	一菩提資糧・到彼岸・方便・	摩訶般若經法華	是故名爲專注一趣云何等	若比丘衣見(下略)
左: ㉠-1, 中・右: ㉠-6 <小林芳規 2004a: 68>	左: ㉠-5(卷5), 中: ㉠-4(卷57), 右: ㉠-7 <小林芳規 2004a: 146-149>	左: ㉠-2(卷13), 右: ㉠-6 <小林芳規 2004a: 368, 383>					

위에서 보듯이 句切符의 境遇는 多少 複雑한 樣相을 띄고 있으나, 이 亦是 選擇的 受容과 變容의 틀을 크게 벗어나는 것은 아니라고 判斷된다. 中國의 角筆 事例에서는 單點(·.), 垂直 雙點(:), 橫斷 三點(…) 등으로써 讀點 또는 句點을 表示하고 있음에 비해, 韓國이나 日本의 事例에서는 單點 外에 橫斷線(一)이나 갈고리표(=鉤號; ∟) 등으로 句讀를 表示하고 있음이 差異라고 할 수 있으나, 橫斷線(一) 또는 單點類(·.)가 句讀點의 役割을 보이는 것은 甲骨文 또는 漢簡 등에서 이미 確認할 수 있기에¹¹⁾ 韓·日에서의 橫斷線(一)도 中國의 例를 벗어나는 符號 使用例로 보기 어렵기 때문이다.¹²⁾

11) 仔細한 것은 管錫華(2002: 34-70)의 論議를 參照.

12) 이밖에 科段符, 注示符, 削除符, 補入符 등의 符號 事例가 더 있으나, 三國의 比較가 可能할 만큼의 資料 確保가 쉽지 않은 關係로 이들은 本稿에서의 考察 對象에서 除外한 것임을 밝혀둔다.

3.2. 角筆 漢字

1) 音注

◎-5: 2 11張 <小林芳規 2005: 8, 46>	◎-2: 85 541 729 ◎-1: 53 <小林芳規+南豐鉉 2020 權仁瀚 2016a>	◎-9: 14張 <小林芳規 2005: 89>			

音注는 漢字의 右側에 同音 또는 類音字로써 該當字의 字音を 表示하는데, 위에서 보듯이 三國의 差異는 크지 않다. 即 「刹」≡「切」(?), 「慈」≡「自」, 「瞻」≡「占」, 「葡」≡「甫」, 「憂」≡「宇」, 「寂」≡「借」, 「共」≡「宮」(?), 「驚」≡「敬」의 字音 表示의 共通點을 보여주는바, 다만 差異點은 日本의 事例가 손꼽을 만큼 그 數字가 顯著히 줄어든다는 것이다. 이는 中·韓과는 달리 日本에서는 仮名 發達 以後 字音의 注音를 同音 또는 類音字에 依하지 않고 가타카나片仮名로 代身한 結果(例: ①-9: 20行 등)으로서 이를 日本의 變容 事例로 삼아도 좋을 것이다.

2) 義注(=釋義)

◎-5: 6 11張 <小林芳規 2005: 9 2004a: 47>	◎-2: 178~179 251 <小林芳規+南豐鉉 2020>	①-7 <小林芳規 2004a: 380>	

義注 또는 釋義는 音注와 마찬가지로 漢字의 右側에 同義 내지 類義字로써 該當字의 字義를 指定하거나 該當字를 包含한 文義를 提示하는 機能을 하는바, 위에서 보듯이 三國의 差異는 크지 않다. 即, 「得度者」를 文脈上 「修行者의 여러 條件을 채운[滿] 자」로 解釋했음을, 「爲人所推墮」(사람을 爲하여 推墮한다)의 「推」字를 「나아간다[進]」로 解釋했음을 보여주는 한편, 「布施」=「普施(普遍施予)」, 「言」≡「白」, 「捨居家」≡「切世」, 「宜」=「當」 등의 同義 乃至 類義關係를 보여주기 때문이다. 다만, 音注의 境遇와 同一한 事由로 日本에서의 例가 懸隔히 줄어들고 있음 亦是 또다른 變容의 事例로 보아도 좋을 것으로 判斷된다.

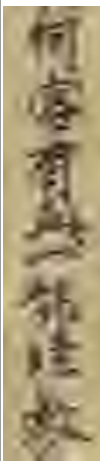
以上 角筆로 記入된 符號와 漢字에 대한 考察을 整理해보면, 毛筆 資料와 비슷하게 東洋 三國의 漢字文化의 傳播와 擴散에 관한 說明 機制로서의 “選擇的 受容과 變容”의 틀이 有用함을 再確認한 데에 그 意義를 말할 수 있겠다.

IV. 角筆點의 異同 樣相Ⅱ: 角筆 口訣

앞 章에서의 角筆 符號와 漢字에 대한 論議에 이어서 이 張에서는 角筆 口訣에 관한 比較 考察을 행하기로 한다. 周知하듯이 ‘口訣’이란 漢文에 吐를 넣어 읽는 韓國의 漢文 讀法을 이르는 用語이다.¹³⁾ 이에 對應되는 日本側 用語는 ‘訓讀’인바, 中國側에는 이에 相應하는 資料가 없으므로¹⁴⁾ 여기에서의 比較 考察은 韓·日 間에 集中될 수밖에 없다. 또한 앞 章에서와는 달리 必要에 따라서 角筆 口訣뿐만 아니라 字吐 口訣 資料도 함께 提示될 것임을 미리 말해 두고자 한다.

4.1. 逆讀符

앞서 말한 韓國(또는 日本)의 漢文 讀法이란 漢文 原文을 韓國語(또는 日本語)로 풀어읽는 [釋讀] 것이니, 口訣(또는 訓讀)에는 中國語(=漢文)과 韓國語(=日本語)의 語順 差異를 克服하기 위한 逆讀符가 必須的이다. 韓·日 兩國의 資料들에 나타나는 逆讀符 事例를 보이면 다음과 같다.

					
(1) ㉔-2: 742行 (2) 『華嚴文義要訣』7張 26行 (3) ㉔-5(卷66): 2張 <小林芳規+南豐鉉 2020/權仁瀚 外(2018: 371)>			(4) ㉔-8: 324行 (5) ㉔-8: 132行 (6) ㉔-9: 12張 <小林芳規 2004b: 450, 499>		

(1) 梵行 從何處來? (梵行은 어느 곳을 좇아서(=어느 곳으로부터) 오는가?)

(2) 何處一 有二 此一部經教? (어찌 이 한부의 經의 가르침[經教]만 있다고 할 수 있겠느냐?)

(3) 生[不捨思 起不捨行 (不捨의 思를 生하고 不捨의 行을 일으키고 하기 때문에)

(4) 由二 心轉變一 似外諸塵 (마음이 轉變함에 말미암아 바깥의 모든 티끌에 닮아)

(5) 汝 何 緣 不 能 三 遮 二 破 眞 空 義 (너는 무슨 緣由로 眞空義를 遮破할 수 없느냐?)

(6) 遑二 他事一 勿 駐 (다른 일을 遑急하게 멈추지/머물지 말 것)

위에서 逆讀符의 變化를 살펴보면, 韓國(統一新羅⇒高麗)에서는 ‘弧線(740年 以前) → 漢數字+逆讀線(800年頃) ⇒ 水平線(11世紀)’의 變化를 보임에 비해, 日本에서는 ‘弧線+漢數字의 共存(841年) → 漢數字+ㄴ點(返點의 一種)의 共存(1025年)’의 變化를 보이는 異同點을 찾을 수 있다.

이는 兩國의 逆讀符가 共通의 弧線의 形態에서 出發하여 漢數字點으로까지 移行된 이

13) 『韓國民族文化大百科辭典』(Naver 지식백과_韓國學中央研究院 提供) ‘구결’ 項目 參照. ‘吐’는 ‘句讀’(또는 ‘句逗/逗/讀’)에서의 ‘讀/逗/逗/讀’에 기원을 두고 있는 것으로 推定되는데, 韓國式 句讀에 들어가는 機能語를 ‘讀/逗/逗/讀’와 관련시켜 t'o 또는 t'u로 읽었고, 이것을 音借 表記한 것이 ‘吐’라고 推定된다. 南豐鉉(1999: 16) 및 權仁瀚(2021: 19, 곧나옴) 參照.

14) 中國에도 書名上으로는 『~口訣』이 없는 것은 아니나, 그 內容上으로는 ‘口訣’의 원뜻인 ‘口授秘訣’, 即 스승이나 大學者가 把握한 經典 內容의 傳承物에 該當되므로 韓國의 口訣이나 日本의 訓讀과는 距離가 있는 것으로 判斷된다.

後 各國의 事情에 맞게 變容된 것으로 볼 수 있을 듯하다.¹⁵⁾ 여기에 時間的인 先後 關係까지를 考慮하면 口訣/訓點의 發達에 있어서도 ‘韓國⇒日本’으로의 受容과 變容의 틀로 說明될 수 있는 可能性을 찾을 수 있는 듯하다.

4.2. 口訣吐와 口訣字

먼저 東大寺圖書館藏『華嚴經』卷12~20과 大谷大學藏『判比量論』을 中心으로 統一新羅의 角筆 口訣에 쓰인 口訣吐들을 整理해보면 다음과 같다(出典은 代表的인 곳, 排列 順序는 無順).

1) 助詞

- ①主格助詞: 「 <伊> <㉔-2: 157行>, 「 <伊> <㉔-2: 824行> ⇒ -이
- ②目的格助詞: 「 = 盼」 <㉔-2: 170行> ⇒ -을/를
- ③冠形格助詞: 「 = 叱」 <㉔-2: 32行> ⇒ -스
- ④處格助詞: 「 <良> <㉔-2: 2行> ⇒ -아
- ⑤呼格助詞: 「 <良> <㉔-2: 27行> ⇒ -아
- ⑥具格助詞: 「 <以> <㉔-2: 202行> ⇒ -로
- ⑦接續助詞: 「 = 臥」 <㉔-2: 643行> ⇒ -와/과
- ⑧特殊助詞: 「 = 分」 <㉔-2: 167行> ⇒ -뿐, 「 = 沙」 <㉔-2: 1077行> ⇒ -사(>-Δ),
「 = 古常」 <㉔-2: 31行>, 「 = 古常」 <㉔-2: 1128行> ⇒ -ㅅ장

2) 語尾

- ①連結語尾: 「 <弥> <㉔-2: 716行> ⇒ -며
- ②終結語尾: 「 <乎多> <㉔-2: 1077行> ⇒ -오다
- ③冠形語尾: 「 = 隱」 <㉔-2: 293行> ⇒ -은
- ④疑問形語尾: 「 = 古」 <㉔-2: 228行> ⇒ -고
- ⑤感歎形語尾: 「 = 占」 <㉔-2: 149行> ⇒ -ㄴ더
- ⑥請誘形語尾: 「 = 立」 <㉔-2: 247行> ⇒ -시셔>-쇼셔

15) 周知하듯이 12~13世紀代 資料인 字吐 釋讀口訣들에서는 逆讀點으로 다시 變化하게 된다. 日本의 境遇, 小林芳規(2004b: 528-529)에는 13世紀 資料인 『四分律刪繁補闕行事鈔』卷上과 『四分律行事資持記』上一之上·上四·中一上·中四上(1252年, 泉湧寺藏)에 角筆 返點이 報告되어 있는데, 高麗時代의 逆讀點과의 同一性 與否는 未詳이다. 앞으로 返點의 具體相을 把握하여 우리의 逆讀點과의 異同을 考察할 必要가 있을 것이다.

⑦先語末語尾: 「=音叱」 <㉔-2: 172行> ⇒ -음-

3) 字訓

①坐[=阿*] <㉔-2: 3行> ⇒ ㉔ L앗-

②言[ <乃伊] <㉔-2: 48行>, 說[ <乃伊] <㉔-2: 161行> ⇒ ㉔ *나이-

③或[=刀] <㉔-2: 49行> ⇒ ㉔ H또

④名[ <伊留] <㉔-2: 49行> ⇒ ㉔ *잉-

⑤悉[=多] <㉔-2: 55行>, 皆[=多] <㉔-2: 97行> ⇒ ㉔ R다

⑥乃[=沙] <㉔-2: 167行> ⇒ ㉔ *사

⑦懈[ <戒利] <㉔-2: 196行> ⇒ ㉔ 게이르-

⑧唯[=烏] <㉔-2: 219行>, 唯[=烏直只] <㉔-2: 967行> ⇒ ㉔ L오H딕

⑨成[ <伊尸利] <㉔-2: 222行> ⇒ ㉔ *일이-

⑩平坦[ <古以] <㉔-2: 427行> ⇒ ㉔ L고Lㄹ-

⑪前[=阿巴] <㉔-2: 601行> ⇒ ㉔ L앞

⑫悉[=毛多] <㉔-2: 602行>, 皆悉[=毛多] <㉔-2: 880行> ⇒ ㉔ L모H다

⑬聚[=毛刀] <㉔-2: 717行> ⇒ ㉔ *모도

⑭得[=示留] <㉔-2: 892行> ⇒ ㉔ L실-

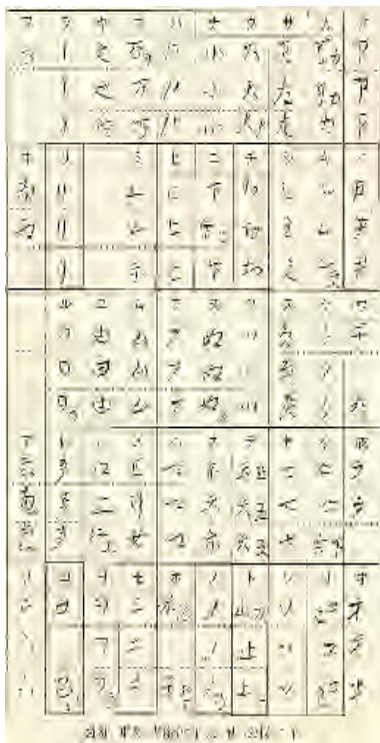
⑮現[]=那刀] <㉔-2: 990行> ⇒ [圖] L나H타~L나Hㅌ-

⑯演說[]<火以乃伊] <㉔-2: 995行> ⇒ [圖] *브로나이-

⑰普[]=那比] <㉔-2: 1012行> ⇒ [圖] L나H비~L너H비

⑱離[]<斗呂知留] <㉔-1: 31行> ⇒ [圖] L떠H러H딜-

以上이 統一新羅의 角筆 文獻들(8世紀 前半)에 나타나는 口訣吐의 全體相인바, 여기에 쓰인 口訣字 중 一部가 東大寺에 關係하는 스님들이 白點에 使用한 가나仮名 字體와 類似함이 指摘되어 있다(小林芳規 2014: 270-276).



즉, 원편의 표에서 現代 日本語의 가타가나片仮名 ‘ア, イ, カ, チ, ト, ニ, ノ, ヒ, モ, リ, ロ’에 該當되는 東大寺僧들의 字形과 新羅 口訣吐에 쓰인 字形과의 類似성이 論議된 바 있다. 이들은 便宜上 다음과 같이 區分될 수 있는 듯하다.

- (1) 完全 一致: ① [] ↔ [], ② [] ↔ [],
③ [] ↔ []
- (2) 部分 一致: ① [] ↔ [], ② [] ↔ [],
③ [] ↔ [], ④ [] ↔ [],
⑤ [] ↔ [], ⑥ [] ↔ [],
⑦ [] ↔ []

小林 先生은 東大寺華嚴經에 쓰인 「尹」(<伊)와 同一한 字形이 東大寺의 學僧 明一이 著述한 『金光明最勝王經註釋飯室切古點』에 그대로 쓰임을 根據로 日本 가타가나의 一源流로 新羅 經典들에서의 口訣吐 表記字와의 一致에 注目하고 있다. 이 점에 있어서는 筆者의 생각도 同一하다.

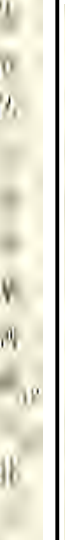
그런데 小林 先生이 省劃字 「尹」에 이어서 「尔」(<弥), 「リ」(<利)에 대해서까지 同一한 說明을 한 점에 대해서는 同意하지 않는다. 왜냐하면 省劃字 「尹」의 경우는 韓·日에 있어서 同一

한 音相 [i]의 자리에 쓰이고 있음에 비해서 省劃字 「尔」의 경우는 [myə]↔[ni], 「リ」의 경우는 [i]↔[ri]의 差異에서 보면 字形의 一致에도 不拘하고 音相의 不一致가 있기 때문이다. 비슷한 例는 (2)-④ 「乃」의 경우로서 여기에서도 [na]↔[no]의 音相差가 있기 때문이다. 이렇게 字形上의 一致에도 불구하고 音相의 不一致를 보이는 예들에 대해서는 非體系的 一致로 봄이 옳을 것이므로 가타카나 源流論의 論據로는 不足한 것으로 보고자 한다.

다만, 이들을 除外한 나머지 예들 중에서 字形 및 音相의 一致를 보이는 (1)-② 「」(=知), (2)-⑦ 「口」(<呂)의 예는 둘 다 『判比量論』에 보이는 字形例로서 判讀上의 問題만 없다면,¹⁶⁾ 이들은 가타카나 發達 初期에 미친 新羅 口訣字의 影響 關係를 생각해볼만 예로 보고 싶다. 結局 가타카나 源流論의 論據로서의 新羅 口訣字의 影響은 否定할 수는 없으나, 그것이 어느 程度인지는 앞으로 追加 論議가 必要한 것으로 結論을 내리고자 한다.

4.3. 呼應 構文 및 其他

이제 마지막으로 東大寺圖書館藏 『華嚴經』 卷12~20에 보이는 呼應 構造의 構文 등을 對象으로 口訣/訓讀의 影響 關係에 대한 考察을 마무리짓고자 한다(小林芳規 2014/2016: 286-295 參照).

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
			 (1090~1091行)		 (242~243行)					
“爾時~告~言” 構文			“當~” 構文		“願~” 構文		“~及~” 構文		主格助詞	

1) “爾時~告~言” 構文

①/②“爾時_에 文殊師利菩薩/法慧菩薩_께 告_하여 諸菩薩/精進慧菩薩_께 말_하다=사_되다.”

③“爾時_에 부처님께서 (告_하여) 妙幢菩薩_{에게} 말_하다.”

⇒助辭(- : -に), 連結語尾(- : -て) 및 動詞(言=白 : 言はく)의 構造的 對應

16) ‘離’의 字訓語 ‘斗^呂知留’의 角筆에 대해서는 筆者와 鄭在永 教授가 함께 한 2016년의 調査時에는 確認이 어려운 예로 보았으나, 小林芳規(2005: 64)에 提示된 寫眞으로 다시 보면서 該當 角筆點을 認定한 것임을 밝혀둔다. 向後 再調査가 必要할 것임을 記憶해두고자 한다.

2) “當只~音叱” 構文

④ “나는 반드시(반득) 一切衆生으로 하여금 無上清淨念에 安住케 하리라(訥).”

⑤ “나는 당연히(まさに) 不善으로써 죽을 것이며(ベシ)……”

⇒副詞(當只 : 當に), 推量 助動詞(-音叱 : -ベシ)의 呼應

3) “願~賜立” 構文

⑥ “父母께 孝事할 때에는 반드시 願컨대 衆生이 부처님께 善事하여 一切 護養케 하소서 (-시서賜立).”

⑦ “이 諸 善根으로써 願컨대(ㄱ) 共히 一切衆生과 俱히 正覺을 이루어주소서(む).”

⇒“願~”과 願望法 語尾(-賜立 : -む)의 呼應

4) “~及~” 構文

⑧ “諸天과 人(과)/부처님과 大衆(과)…”

⑨ “星宿와 風雨와…/四行과 一切法과…”

⇒連詞 ‘及’과 接續助詞(-臥 : -と)의 呼應

5) 主格助詞

⑩ “莊嚴 佛子, 菩薩摩訶薩이 此 三昧에 住하며” <東大寺藏『大方廣佛華嚴經』卷41(768)>

⑪ “世間の 有情이 壽量無限하며” <石山寺藏『瑜伽師地論』卷第二之一帖(779 書寫)>

⇒主格助詞의 機能 및 字形이 新羅寫經들과 完全 一致

以上 韓·日 間 口訣과 訓讀의 異同의 考察에 焦點을 맞추어 角筆/毛筆 資料의 區分없이 ①逆讀符, ②口訣吐와 口訣字, ③呼應 構文 및 其他로 나누어 比較 考察를 行하였다. 그 結果, 韓國의 口訣이 日本의 訓讀 發達에 一定한 影響을 미쳤던 것으로 結論을 내리고자 한다. 특히, “當只~音叱” 構文, “願~賜立” 構文에서의 副詞(句)와 助動詞 呼應上的 體系的 一致, 初期 東大寺 關聯 文獻들에 보이는 主格助詞 「」의 例들에서의 字形 및 機能上的 一致는 兩國 間의 影響 關係를 否定하기 어려울 것으로 判斷되기 때문이다.

V. 結言

<追後 完成 豫定>

參考文獻

- 管錫華(2002), 『中國古代標點符號發達史』, 成都: 巴蜀書社.
- 權京俊(2014), 「러시아 자작나무片紙 研究의 動向」, 『木簡과 文字』 13, 韓國木簡學會, 15-31.
- 權仁瀚(2013), 「漢文 語法の 選擇的 受容과 變容」, 陳在教(主編), 『學問場과 東아시아』, 成均館大學校出版部, 131-160.
- 權仁瀚(2014), 「東大寺圖書館藏 華嚴經의 角筆로 본 新羅漢字音」, 『口訣研究』 33, 口訣學會, 133-159.
- 權仁瀚(2016a), 「大谷大藏 『判比量論』 角筆 移點本」, (ms.)
- 權仁瀚(2016b), 「古代 韓國漢字音의 研究(I)- 最近 發掘된 角筆 聲點 資料를 中心으로」 『口訣研究』 37, 口訣學會, 5-38.
- 權仁瀚(2018), 「大谷大學藏 『判比量論』의 判讀과 解釋」, 『安秉禧 先生 10周忌 追慕 論文集』, 亦樂, 485-523.
- 權仁瀚 外(2018), 「角筆口訣 初彫大藏經 瑜伽師地論 66」, 國立한글博物館.
- 權仁瀚(2019), 「大谷大學藏 判比量論 角筆點의 言語文化史的 意義」, 『口訣研究』 42, 口訣學會, 5-32.
- 權仁瀚(2020), 「第15次 東大寺圖書館藏 華嚴經 角筆 調査記」, 1-13. (ms.)
- 權仁瀚(2021), 「新發見 『判比量論』 斷簡 2種의 角筆 調査記」, 東國大學校 佛教文化研究院 HK研究團 畝음, 『元曉 『判比量論』의 新譯註』, 동국대학교 출판문화원, 199-212.
- 權仁瀚(2021, 곧 나옴), 「『妙法蓮華經釋文』으로 본 統一新羅의 漢字文化」, 1-24, (ms.)
- 金永旭(2006), 「佐藤本 『華嚴文義要訣』의 新羅時代 點吐口訣 研究」, 李丞宰 外, 『角筆口訣의 解讀과 翻譯2』, 태학사, 47-68.
- 南豐鉉(1999), 『國語史를 위한 口訣 研究』, 태학사.
- 南豐鉉(2009), 『古代韓國語研究』, 시간의 물레.
- 南豐鉉(2014), 『古代韓國語 論攷』, 태학사.
- 文玄洙(2017), 「周本 『華嚴經』 點吐釋讀口訣의 解讀 研究」, 高麗大學校 博士學位 論文, viii + 1-597.
- 小林芳規(2004a·b, 2005), 『角筆文獻研究導論』 上卷·中卷, 別卷, 東京: 汲古書院.
- 小林芳規(2017·2012), 『平安時代の佛書に基づく漢文訓讀史の研究 II·III』, 東京: 汲古書院.
- 小林芳規(2014), 『角筆のひらく文化史 -見えない文字を読み解く』, 東京: 岩波書店)/한국어역: 鄭在永 外譯(2016), 『角筆文化史』, 韓國文化社.
- 小林芳規·西村浩子/尹幸舜(譯)(2003), 「日本에 있어서 華嚴經의 講說과 初期加點資料에 대해서」, 鄭在永 外, 『韓國 角筆 符號口訣 資料와 日本 訓點 資料 研究』, 태학사, 117-132.
- 小林芳規+南豐鉉(2020), 「東大寺圖書館藏(101-2) 大方廣佛華嚴經[自卷第十二 至卷第二十] 1卷 角筆(新羅語) 加點本」, 1-72. (權仁瀚 校合本: ms.)
- 尹幸舜(2003), 「周本 華嚴經 卷第二十二에 대하여」, 鄭在永 外, 『韓國 角筆 符號口訣 資料와 日本 訓點 資料 研究』, 태학사, 55-71.
- 李建植(2013), 「中國 古代 標點 符號의 類型과 韓國 古代와 中世의 標點 符號에 대하여」, 『口訣研究』 31, 口訣學會, 31-70.
- 李成市(2005), 「古代朝鮮의 文字文化」, 平川南(編), 『古代日本文字의 來た道』, 東京: 大修館書店, 32-53.
- 李丞宰 外(2005, 2006, 2009), 『角筆口訣의 解讀과 翻譯 1, 2·3, 4·5』, 태학사.

장규언(2014), 「空有 論爭에 대한 圓測의 和諍 論理」, 『哲學論集』 37, 西江大學校 哲學研究所, 291-325.

鄭在永 外(2003), 『韓國 角筆 符號口訣 資料와 日本 訓點 資料 研究』, 태학사.

鄭在永 外(2012), 『皇龍寺 表員の 『華嚴文義要決問答』 研究 1』, 태학사.

鄭在永 外(2015), 『東大寺圖書館 所藏 『大方廣佛花嚴經』 卷第12~20 校勘 研究』, 태학사.

Ishizuka, Harumichi(1993), The Origins of the Ssŭ-shêng Marks, ACTA ASIATICA 65, The TÔHÔ GAKKAI, 30-50(한국어역: 김혜진.오미영(共譯)(2003), 「聲點의 起源」, 『口訣研究』 11, 口訣學會, 23-44).

通过角笔资料看古代东亚的文字文化

权 仁 瀚*

本稿的主旨在于以角笔记录的各种符号和文字(以下简称“角笔点”)为中心,介绍和考察古代东亚文字文化的另一个侧面。为此,综合角笔研究的世界权学者小林芳规先生的著作、国内外先学的论著,以及笔者的角笔调查经验,试图重新照明以“中国大陆→韩半岛→日本列岛”为径路的古代东亚文字文化的异同情况与影响关系。

第二章,笔者试图对角笔与角笔文献现况进行全方位理解。首先,所谓角笔,“将象牙、坚木、竹、兽骨、铁製短棒制作成筷子一端的模样,另一端削成笔尖状,用削尖的部分在羊皮纸、树皮、贝叶等材料上压出痕迹,记入文字或绘画”。这样定义角笔后,针对角笔的特性和优点,引用小林芳规先生的说明可知,“角笔不同于毛笔,①因其无色,所以并不显眼;②没有沾墨的不便;③不会污染神圣经典的纸面;④便于旅行携带”,作为灵活运用这些特性的实例,有①经典读诵便签记录;②在狱中传达想法;③下划线作用。整理中国、韩国、日本的角笔文献现况可知,叁个国家的角笔文献时间顺序为“中国大陆(406)>韩半岛(733年以前)>日本列岛(749年)”,因此,可以认识到,角笔文字文化也与此种发展进程是统一的可能性。

第三章中,笔者将讨论焦点集中于中、韩、日三国的角笔符号与汉字异同的考察上。首先,角笔符号实例可分为“梵呗符(=节博士)、合符、声点、句切符(≡句读点)”,考察了它们的异同情况。角笔汉字可以分为“音注和义注”,对它们的异同情况进行了比较考察。综上讨论,角笔资料与毛笔资料相同。由此可以再次确定的是,作为关于东方三国汉字文化的传播和扩大散播的说明机制,“选择性接受和改变”的框架是有用的。

第四章,将考察的重点集中于韩国口诀与日本训读的比较分析。为此,将包括角笔、毛笔资料在内的资料按照①逆读符、②口诀吐与口诀字、③呼应句式结构,以及其他进行分类后比较分析。结果可知,韩国初期的角笔口诀点对日本训读发展产生一定影响。特别是,“当只~音吐”的句式结构和“愿~赐立”句式结构中的副词(句)与助动词在呼应体系是一致的。根据初期东大寺关联文献中的主格助词「」的事例可知,其字形和机能上的一致等情况,可以充分地说明两国间的影响关系。

角筆資料から見た古代東アジアの文字文化

權 仁 瀚*

本稿は角筆で記入された各種記号と文字（以下「角筆点」と略す）を中心に、古代東アジア文字文化のもう一つの側面について紹介し、考察したものである。角筆研究の世界的な権威者である小林芳規先生の著作をはじめとする国内外の先行研究をふまえ、「中国大陆→韓半島→日本列島」へとつながる古代東アジア文字文化の共通点・相違点とその影響関係について再検討している。

第2章では、角筆と角筆文献の現状に関する全般的な理解を図った。まず、角筆については、「象牙や固い木、竹、動物の角、鉄製の短い棒などを箸一本の形にし、その一方の先端を筆先のように削りとがらせ、その尖った部分を紙や羊皮紙、樹皮、などの面に押しあて凹ませることによって文字や絵などを記入したものである」と定義した。角筆の特性と長点に関しては、「角筆は筆と違って、①色がつかないため目立たない、②墨を付ける不便さがない、③神聖な経典の紙面を汚さない、④旅に持っていくことができる」と小林芳規先生の説を引用したうえで、このような特性を活用した実例として、①経典の読誦メモ、②獄中の意思伝達、③下絵の線などを紹介した。続いて、中国・韓国・日本の角筆の文献現況を整理した後、三カ国における角筆文献の時間的順序が「中国大陆(406)>韓半島(733以前)>日本列島(749)」となっているため、角筆の文字文化もこのような流れと軌を一にしていた可能性があることを確認できた。

第3章では、中国・韓国・日本の三カ国における角筆記号と漢字の異同を検討することに焦点をあてた。まず、角筆の記号の例として、梵唄符(=節博士)、合符、声点、句切符(≡句読点)に分け、その異同の様相を考察した。また、角筆の漢字の例としては、音注と義注に分けて異同の様相を比較検討した。これらを組み合わせることで、角筆資料も毛筆資料と同じく、東洋三カ国の漢字文化の伝播と拡散に関する説明材料として、「選択的受容と変容」の枠組みの中で言えることを再確認した。

第4章では、韓国の口訣と日本の訓読に対する比較検討に焦点をあてた。そのため、角筆と毛筆資料の区分なしに①逆読符、②口訣の吐（助詞）と口訣字、③呼応の構文及びその他に分けて比較した結果、韓国の初期角筆口訣点、日本の訓読発達に一定的な影響を与えたという結論をだすことができた。特に、「當只~音叱」構文、「願~賜立」構文での副詞(句)と助動詞は係り結びの関係が一致し、初期の東大寺関連文献に見られる主格助詞「」の例における字形および機能の一致は、両国間の影響関係が否定できない。

「角筆 資料로 본 古代 東아시아의 文字文化」에 대한 토론문

장경준(고려대학교)

발표자는 동아시아 지역을 중심으로 ‘종이의 면에 각필로 오목한 자국을 내어 문자나 부호를 기입한’ 각필 자료를 소개하고, 이들 자료에서 구체적으로 관찰되는 특징들이 중국 대륙 → 한반도 → 일본을 거치면서 ‘수용’과 ‘변용’의 양상을 보이는 것으로 설명할 수 있다고 하였습니다.

이 발표를 통해서도 충분히 알 수 있듯이, 각필점은 눈에 잘 띄지 않아 묵서 자료에 비해 연구하기가 훨씬 까다롭습니다. 이런 각필 자료를 오랜 동안 직접 연구하시고, 다른 연구자들을 위해 최신 연구 결과를 소개해 주신 발표자의 노고에 깊이 감사드립니다. 발표문의 내용과 관련하여 몇 가지 질의를 함으로써 토론에 갈음하고자 합니다.

1. 角筆의 용도 또는 사용 범위와 관련하여

발표문 2.2.에서는 각필의 용도를 (1) 經典 讀誦의 痕迹을 記入, (2) 스승의 講義를 聽講할 때의 Memo, (3) 秘密스런 意思 傳達, (4) 肖像畵 등의 밑그림[下繪線] 作業이나 欄上 注記를 위한 罫線 긋기의 네 가지로 소개하고 小林芳規(2005)에 실린 사진 자료 일부를 인용하였습니다. 이 가운데 (1), (2)에 주목하여 살펴보면,

먼저 중국 문헌에서 발견된 각필점은 합부, 구두점, 단락부, 전도부, 주석(음주, 훈주) 등이 한문의 일부에 산발적으로 기입되어 있어 (1)이나 (2)의 단편일 수는 있으나, 하나의 문헌 안에서 어떤 체계 내지 경향성을 파악할 만큼의 데이터가 되지는 않는 듯합니다. 그리고 제시된 자료에서 각필점 외에 모필의 기입은 잘 보이지 않습니다.

다음으로 한국의 고려시대(10~14세기) 문헌에서 발견된 각필점은, 우리가 점토석독구결이라고 부르는 유형의 자료로서, 한문 원문을 한국어로 해석하여 읽을 수 있도록 각필만을 사용하여 다양한 구결점(점, 선으로 문자의 기능을 함)과 부호를 기입하고 모필은 사용하지 않았습니다. 14세기 자료인 『합부金光明經』 卷3이 유일한 예외인데, 아래 사진에 보이듯 각필에 먹물을 묻혀 기입한 것처럼 구결점이 매우 작고 섬세하게 찍혀서 잘 보이지 않습니다. 이런 경우 각필과 모필의 구분은 별다른 의미를 지니지 못한다고 할 수도 있겠습니다.



(사진A)



(사진B)

『합부金光明經』 권3:6:13 “邊”자에 기입된 점토: 단점(·) 형태 3개와 역사선(\) 형태 1개로 구성됨.

따라서 고려의 점토석독구결은 (모필이 아닌) 각필에 최적화된 서사 방식이었다고 할 수 있고, 이러한 유형의 서사 방식은 중국과 일본 자료에서는 보이지 않는 듯합니다.

한편 일본 문헌에서 발견된 각필점은 (1), (2)와 관련된 훈점이나 주석 자료의 경우 대체로 모필과 함께 사용되어 모필을 보조하는 수단으로써 문헌의 일부분에서 관찰되는 것이 대부분이고, 온전히 각필만으로 훈점이나 주석을 문헌 전체에 기입한 사례는 드문 것 같습니다.

이처럼 경전의 독송이나 해석과 관련한 각필의 사용 범위는 중국, 한국, 일본 자료가 서로 다른 모습을 보입니다. 이것을 발표자가 언급한 ‘수용’과 ‘변용’이라는 관점에서 어떻게 설명할 수 있을까요?

2. ‘梵唄符(=節博士)’와 관련하여

발표문에서는 각필로 기입된 범패부에 대해 “短型の 境遇, 韓國이나 日本의 事例는 波狀形이 主流임에 비하여 中國의 例는 波狀形과 함께 ‘ㄴ’이나 ‘ㄴ’字 모양의 꺾임형[折狀形]도 보임이 그 主要한 差異點 중의 하나이다. 이는 中國의 두 系統 중에서 韓國이나 日本에서는 주로 波狀形을 選擇的으로 受容하여 各國의 曲調에 맞게 變容된 것으로 說明될 수 있을 것이다”라고 하였습니다. 중국 자료에서 물결형[波狀形]과 꺾임형[折狀形]이 (형태상의 차이 외에) 서로 다른 계통으로 분류할 만한 근거가 있는지요?

3. ‘逆讀符’와 관련하여

발표문에서는 한문과 다른 언어(한국어, 일본어)의 어순 차이를 극복하기 위한 부호를 ‘逆讀符’라 하고, 한국에서는 “‘弧線(740年 以前) → 漢數字+逆讀線(800年頃) ⇒ 水平線(11世紀)’의 變化”를 보인다고 하였습니다. 그런데 여기서 ‘漢數字+逆讀線’의 예로 제시한 『華嚴文義要訣』(각필 문헌은 아님)의 사례가 일반화할 수 있는 것인지 검토가 필요하고,¹⁾ ‘水平線’의 예로 제시한 『유가사지론』 권66의 사례도 과연 11세기 자료를 대표할 만한 것인지 재고가 필요해 보입니다.²⁾ 그리고 일본에서는 “‘弧線+漢數字의 共存(841年) → 漢數字+ㄴ點(返點의 一種)의 共存(1025年)’의 變化”를 보인다고 하였는데, 841년의 예로 제시한 (5)에 ㄴ點의 예(‘不’자와 ‘能’자 사이)가 포함되어 있어 자료 인용에 문제가 있는 듯합니다.

아울러 한국의 경우 발표문에서 굵은 화살표인 ‘⇒’를 사용한 데서도 드러나듯이, 신라의 구결이 반영된 것으로 알려진 大谷大學藏 『判比量論』, 佐藤本 『華嚴文義要訣』, 東大寺圖書館藏 『大方廣佛花嚴經』 卷12~20에 사용된 어순 관련 부호와 고려시대 자료의 어순 관련 부호 사이에는 과연 연속성이 있는지 의심이 들 만큼 커다란 차이가 있습니다. 이러한 차이를 ‘수용’과 ‘변용’의 관점에서 어떻게 설명할 수 있을까요?

한편, 한반도나 일본에서뿐 아니라 거란족, 여진족, 몽골족, 위궤족 등 알타이 계통의 언어를 사용하는 중국 주변 민족들 사이에서도 한문을 자신의 언어에서 사용하는 어휘와 어순으로 읽는 한문 혼독 현상이 광범하게 퍼져 있었고, 중국 내부에서도 특히 원대 이후 고전 한문을

1) 김성주(2009: 144)에서는 “일본의 훈점에서 ‘ㄴ’로 표시될 부분이 ‘ㄴ’로 표시되어 마치 反讀符와 같은 모양”이라고 하였는데, 이에 따르면 발표문에서 ‘弧線’으로 가리킨 것이 숫자 ‘一’의 기능을 하는 것이므로 발표문의 판독문 “何容 有 此一部經教”과 일치하지 않음.

2) 『유가사지론』 권66은 부호의 사용이 일반적이지 않아서, 예컨대 발표문에 표시된 水平線은 보통은 『화엄경』 계통에서만 관찰되는 ‘술목선’(관점에 따라 ‘술목선’을 역독부로 볼 여지도 있음)이며, 발표문에 언급되지 않은 ‘시작표시점’과 ‘끝표시점’(사진 (3)에서 “思”자 왼쪽에 빨간색으로 표시된 점이 ‘끝표시점’의 사례임)이라 불리는 부호가 있어 어순 표시와도 관련지을 수 있음(장경준 2021: 60-63).

백화문으로 번역하여 읽는 일종의 한문 혼독 현상이 있었습니다(金文京 2010: 149-273). 따라서 한국어나 일본어 이외의 언어에서도 한문 혼독과 관련한 각필 자료가 존재했을 가능성이 충분히 있어 보입니다. 혹시 발표자께서 이와 관련하여 아는 바가 있으신지요?

4. 8세기의 口訣字와 관련하여

小林芳規(2014) 등에 생생히 기록되어 있듯이 종이 위에 각필로 눌러 기입한 오목의 선은 시간이 흐를수록 흐릿해져 오래된 자료일수록 판독이 대단히 어렵습니다. 8세기 자료인 大谷大學藏『判比量論』과 東大寺圖書館藏『大方廣佛花嚴經』卷12~20도 그동안 여러 사람이 여러 차례 조사를 거듭하여 조금씩 판독이 진척되어 왔고, 그 최신 결과물이 발표문 4.2.에 정리되어 있습니다. 발표자의 노고에 다시 한 번 감사드리면서 다음 몇 가지 사항을 여쭙겠습니다.

(1) 박부자(2014: 169, 176-179)에서는 주격조사 ‘이’를 기입한 ‘亦’과 보조사 ‘곰’을 기입한 ‘尠’의 사례들을 들었는데, 발표문에는 반영되어 있지 않습니다. 이 사례들에 대해 발표자는 어떻게 판단하셨는지요?

(2) 발표문에서 ‘로’를 표기한 것으로 본 ‘ㄹ’자와 ‘리’를 표기한 것으로 본 ‘ㄴ’자의 자형(<ㄹ-1: 31行>)이 서로 구분이 되는지요?

(3) 발표문에서 판독된 글자 ‘古常’에 대해 ‘-ㅅ장’의 표기로 추정한 근거는 무엇인지요?

(4) 발표문에서 ‘게이르-’의 표기로 추정한 ‘戒ㄴ’와 ‘*일이-’의 표기로 추정한 ‘伊尸ㄴ’에 나오는 ‘ㄴ’의 음가를 ‘이’로 보았는데, 그렇다면 ‘이’의 표기에 ‘伊’와 ‘ㄴ’이 혼용되는 것에 대해서는 어떻게 생각하시는지요?

<참고문헌>

金文京(2010), 『漢文と東アジア』(岩波新書 1262), 東京: 岩波書店.

김성주(2009), 「사토본 『화엄문의요결문답』의 부호」, 『동악어문학』 53, 동악어문학회, 123-148.

박부자(2014), 「東大寺圖書館 소장 『大方廣佛花嚴經』 권제12~20의 角筆을 통해 본 신라어 문법형태소」, 『口訣研究』 33, 口訣學會, 161-195.

小林芳規(2005), 『角筆文獻研究導論』別卷 資料篇, 東京: 汲古書院.

小林芳規(2014), 『角筆のひらく文化史 -見えない文字を読み解く』, 東京: 岩波書店)/한국어역: 정재영 외(2016), 『각필의 문화사』, 한국문화사.

張景俊(2013), 「釈読口訣と訓点資料に使われた符号について」, 『訓點語と訓點資料』 131, 訓點語學會, 8-28.

장경준(2021), 「법응스님 소장 『법화경』 구결의 어순 표시」, 『口訣研究』 47, 口訣學會, 41-78.

발표3

新疆出土佉卢文书所见

僧人世俗生活研究

신강출토 카로슈티 문서에
보이는 승려의 세속생활연구

新疆出土佉卢文书所见僧人世俗生活研究

李博(陝西中醫藥大學)

摘要：新疆出土的佉卢文书所见僧人过着世俗的社会生活，是三至五世纪鄯善王国突出的社会现象之一。僧人广泛参与社会事务性的活动亦是这一时期僧人群体的鲜明特征之一。导致僧人生活世俗化的原因则是多方面的。僧人的世俗生活表明，佛教自开始传入鄯善便呈现出世俗化的发展趋势，鄯善王国上层统治阶层对佛教较为宽松的管理使得佛教的世俗化发展与王权政治之间形成良性的互动，二者相互作用,共同推动社会的发展。

关键词：佉卢文书 僧人 世俗生活

20世纪初以来，在我国新疆地区陆续出土的佉卢文书为研究古代鄯善国¹⁾史及其社会发展状况提供了重要的资料。在这些文书中，值得注意的是，僧人的世俗化生活成为这一时期鄯善王国社会生活中尤为突出的一种社会现象。缘何会出现此种情形呢？为更为深入地了解古代鄯善王国的社会状况，有必要就此问题予以探讨。有关古代鄯善王国僧人的世俗生活，学术界曾进行过一些有益的探索²⁾，但不足以反映出僧人世俗生活的全貌，仍有进一步研究的余地。本文试图在探究三至五世纪³⁾鄯善王国僧人世俗化生活群体特征的基础上，对鄯善王国僧人生活世俗化的缘由及佛教的发展状况予以分析，以考察古代鄯善王国的社会发展状况及其社会特征，为当今新疆的社会治理提供借鉴。

一、佉卢文书所见鄯善王国僧人的世俗生活

新疆出土的佉卢文书反映出，僧人广泛地参与各项社会事务性的活动是三至五世纪鄯善王国较为普遍的一种社会现象。这也成为该时期内鄯善王国僧人群体的鲜明特征之一。

(一) 成为户主，行使户主权利和职责

在这些佉卢文书中，147号文书是一件籍帐文书⁴⁾。在此件文书中明确记载：“唯9月5日，是时凡户主人均一份”⁵⁾，表明凡是具有户主身份的人都可得到一份。但因“太侯卢达罗耶和沙门寿友告病”⁶⁾之原因，身为户主的僧人寿友暂时没有拿到应属于他自己应得的那一份。此处所提到的僧

1) 马雍：《佉卢文》，《西域史地文物丛考》，北京：文物出版社，1990年，第160页。

2) 夏雷鸣：《从佉卢文文书看鄯善国僧人的社会生活——兼谈晚唐至宋敦煌世俗佛教的发端》，《丝绸之路民族古文字与文化学术讨论会会议论文集》，2005年；许娜：《佉卢文书所见鄯善国佛教僧侣的生活》，《甘肃民族研究》2006年第4期；(印)阿格华尔：《佉卢文书所见鄯善国佛教僧侣的生活》，杨富学、许娜译，《甘肃民族研究》，2006年第4期；杨富学：《论鄯善国出家人的居家生活》，《敦煌学》(第二十七辑)，南华大学敦煌学研究中心编印，台北：乐学书局有限公司，2008年。

3) 苗普生、田卫疆主编：《新疆史纲》，乌鲁木齐：新疆人民出版社，2004年，第136页。

4) 林梅村：《中国所出佉卢文书初集——沙海古卷》(以下简称《沙海古卷》)，北京：文物出版社，1988年，第155页。

5) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第187页。

6) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第188页。

人寿友具有户主身份，是一个值得注意的现象。

(二) 娶妻生子 (或收养养子女)

僧人的世俗生活还表现为娶妻生子或是收养养子女以组建自己的家庭。418号文书载：“法师舍利布多罗 (sariputra) 曾领登纽伽·阿没托 (Denuga Amta) 之女尸舍特耶 (Sirsateyae) 作养女。法师舍利布多罗将该女正式嫁给法师菩达伐摩为妻。”⁷⁾此件文书至少说明：第一，名叫舍利布多罗的法师不仅收养了登纽伽·阿没托的女儿作其养女，而且在该养女长大成人后还亲自为养女张罗婚事，使其正式成为他人之妻，以保护养女的权益；第二，名叫菩达伐摩的法师娶了法师舍利布多罗的养女为妻，组建自己的家庭。在425号文书中，从“今后，夷伐迷多罗之子女对注伽钵无要求之权利”⁸⁾也反映出名叫夷伐迷多罗的僧人育有子女。在474号文件中，也反映出僧人众力娶妻的情况，“叶吠县领地叶波怙子姊妹被哲蒂女神县领地之沙门众力娶为妻室。”⁹⁾553号文书中“彼现已将沙门觉友之男孩帕特罗耶收为养子”¹⁰⁾反映出，僧人觉有娶妻并育有一子名叫帕特罗耶。621号文书同样反映出僧人苏达罗娶妻并育有一女名叫善爱，“此位左多曾娶沙门苏达罗之女善爱为妻。”¹¹⁾655号文书间接反映出僧人菩达尸罗养育子女的情况，其子名叫菩度娑，“僧人菩达尸罗及其子菩度娑 (Budhosa) 愿将misi地一块卖给僧人kutajiadaga菩达钵诃摩 (Budhapharma)。”¹²⁾此外，从358号文书中的“每日寺主从领地私有财产中应发给彼子既随从人员四瓦查厘面粉和粗粉当口粮”、“狮法之子应由彼自己赶快送来作沙弥”¹³⁾等信息，间接地反映出僧人养育的情况。由此信息中可见：其一，具有寺主身份的僧人不仅有自己的孩子，而且还拥有一定的私有财产，需每日从其私产中发放一定的口粮给自己的儿子及随从人员；其二，有可能该寺主的名字叫狮法，因其僧人身份，其子也要被送去当沙弥，接受佛事洗礼。这既应是其僧人身份的一种继承方式，也体现出该家庭对佛教的尊崇。

(三) 从事各种交易活动，拥有一定的私产

在日常生活中，鄯善僧人表现的较为活跃，常忙于各种经济交易活动。其交易活动主要有以下几类：

1、买卖人口

437号文书反映出僧人菩达犀那购买女孩的情况，“彼等将身高5 distis之女孩一名卖给僧人菩达犀那及摩色地祇。”¹⁴⁾至于购买这个女孩之后是将其当作奴仆使用还是当作养女，则不得而知。无独有偶，在564号文书中也反映出僧人室利般摩出卖鸠尼陀养子的事情，“今有鸠尼陀上奏，彼曾收养一子，被沙门室利般摩卖给贵人沙罗斯帕。”¹⁵⁾但是，这里沙门室利般摩出卖鸠尼陀养子的

7) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第109页。

8) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第113页。

9) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第119页。

10) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第136页。

11) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第141页。

12) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第144页。

13) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第100页。

14) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第116-117页。

15) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第138页。

这一行为是违法的，因为“出卖别人养子者，殊不合法”¹⁶⁾。

僧人之所以能够进行合法的人口买卖的一个重要原因就在于他们拥有自己奴仆，即僧人完全占有这些奴仆，可以对其为所欲为。如在佉卢文589、590号两件契约文书中就分别提到的罗没索蹉对买来的女孩、妇人就拥有为所欲为的权力，“故现罗没索蹉对该女孩色迷蹉有权为所欲为”¹⁷⁾、“自今以后，司书罗没索蹉对该妇人有所权，可以打她，弄瞎她之眼睛、出卖、作为礼物赠送他人，交换、抵押，为所欲为”¹⁸⁾。这一时期，僧人拥有奴仆的情况在社会上还是较为普遍的。如佉卢文345号文书中反映出，僧人阿难陀犀那就拥有一名名叫明菩达瞿沙奴仆，“该僧人阿难陀犀那之奴，明菩达瞿沙又从余及鸠瞿钵之屋窃取丝绢(pata) 12马身长(length)，urnavarande 3，绳索(rasamna) 2条，毡衣(namati) 3件，绵阳4只，aresa 1，共计(sarvapimdagamnaanaena) 价达100穆立。”¹⁹⁾再来看看506号文书的内容：“僧人耽提伽(Tatiga)曾自僧人僧凯处领僧人婆多罗。彼带婆多罗一起到达都城。为该僧婆多罗，耽提伽给奴隶色罗色达(Srasdha)一名为僧凯做活。彼等达成下列协议：该奴隶色罗色达不得留在屋内。彼应在僧凯处干活，直到耽提伽及婆多罗回来为止。该二僧甚至迄今尚未由都城回来。色罗色达将属耽提伽所有的另一名奴隶舍难摩交给僧凯，代彼干活。该色罗色达则通过僧凯之奴隶一名逃至支摩(Khema)。”²⁰⁾从这件文书中透露出的信息有：其一，僧人耽提伽(Tatiga)拥有两名奴隶，一位叫色罗色达，一位叫舍难摩；其二僧人僧凯也有属于自己的奴隶；其三，僧人婆多罗没有完全的人身自由，其附庸于僧人僧凯。

拥有奴仆，也是三至五世纪鄯善王国僧人占有一定私产的表现之一。但是，这一时期内像506号文书中的僧人婆多罗那样成为他人附庸或是沦为他人奴仆的情行也并非个案。如358号文书也反映出这一情况，“……沙门应当别人的奴仆。”²¹⁾笔者推测，造成这一现象的原因与僧人自身经营不善有较大的关系。如佉卢文345号文书中所反映的情况，僧人阿难陀犀那在拥有奴仆，占有一定私产的情况下，还向他人借过谷物和酒，“据罗孚申称，僧人阿难陀犀那(Anamdasaena)于凯度多曾向注瞿钵(cugopa)借得谷物30米里马。后彼又借酒15希。”²²⁾，表明其自身的生活一度处于紧张的状态，要靠一时借来的这些东西度过难关。三至五世纪鄯善王国的僧人，除具有僧人身份之外，与普通人实则并无异样，尤其是在自谋生路的情况下，在实际生活中因自身经济状况不佳而导致沦为他人奴仆的事是极有可能发生的，尤其是在孤家寡人的情况下。

2、买卖土地

僧人买地的情况：如佉卢文549号文书反映的情况，“该式兄弟将能种1米里马10希籽种之土地卖给僧人僧伽苦地。”²³⁾购买之后的土地完全归属于僧人所有，“关于该地，僧伽苦地有权播种、耕种及给其他人。”²⁴⁾

16) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第138-139页。

17) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第161页。

18) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第162页。

19) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第85页。

20) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第128页。

21) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第100页。

22) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第85页。

23) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第141页。

僧人卖地的情况：如佉卢文582号文书反映的情况，“有一名僧人，名夷毕耶，住于凯度多。彼愿将内有25kuthala之misi地卖给sothamgha罗没索蹉。”²⁵⁾佉卢文652号文书也反映了这一情况，僧人摩啰陀卖地给司书莱钵多伽，“有一僧人，名达摩啰陀。彼愿将能种1米里马籽种之土地一块卖给司书莱钵多伽。彼得酒10希及agisdha 3作为地价。该事业已决定。自今以后，莱钵多伽对该地有全部所有权。”²⁶⁾

佉卢文655号文书则反映出僧人菩达尸罗卖地、僧人kutajiadaga菩达钵河摩 (Budhapharma) 买地的情况，“僧人菩达尸罗及其子菩度娑 (Budhosa) 愿将misi地一块卖给僧人kutajiadaga菩达钵河摩 (Budhapharma)。该地之播种量为1米里马5希。”²⁷⁾

在经济交往活动中，僧人既可以买卖土地，那么抵押土地也理应成为其经济活动中的一个组成部分。但目前还尚未找到直接的材料说明这一点，仅能从部分文书中透漏出些许的信息。如佉卢文473号文书记载：“今有叶怙上奏，沙门众吉将彼之一座葡萄园和一块耕地抵押给他人。汝应亲自详细审理此事，确认该葡萄园和耕地是否已被抵押。该葡萄园和耕地为叶怙之私有财产，彼不得放弃。该葡萄园和耕地为私有财产，彼应归还。”²⁸⁾

3、其他交易

425号文书虽存有残缺，但从中依旧可以看出名叫夷伐迷多罗的僧人与kala注伽钵曾进行了一笔交易，“有一僧人，名夷伐迷多罗。彼同kala注伽钵作一交易[……]解除（义务）。”²⁹⁾关于交易结束之后两人的权利与义务也做了明确的说明，并强调僧人夷伐迷多罗的子女对交易方无权干涉，“关于该二人，僧人夷伐迷多罗以及注伽钵今后彼此互不偿付或占有。今后，夷伐迷多罗之子女对注伽钵无要求之权利。”³⁰⁾

(四) 上交赋税

税收关乎国家的整体发展，只有税收有了保障，国家机器才能正常运转以维持国内的稳定和国家的发展。僧人既然可以当户主，那必然承担一定的赋税任务，也要向国家交税。这点与普通百姓并无任何差别。三至五世纪鄯善王国的赋税种类比较繁多。如164号文书中所言，身为僧人甚至还要交专门的沙弥税，“至于彼等所问该州之其他税收沙弥税、tsamghina税、及kvemamdina诸税，务必从速征收送来。”³¹⁾385号文书提到，僧人所交的赋税有明确的规定，“余应向本地百姓索取（税收）。沙门众车交arnavaji一件，苏衍摩交毡衣一件，探长迟牟耶交毡衣一件，司帐鸠韦尼交毡衣一件。”³²⁾

24) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第141页。

25) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第155页。

26) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第173页。

27) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第174页。

28) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第118页。

29) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第113页。

30) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第113页。

31) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第283页。

32) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第301页。

(五) 参与其他社会事务的处理

1、为他人作证

209号文书载：“证人为僧人钵利瑜沙 (Priyosa)，钵那伽罗 (Panagara) (?)，克毘那伽 (Kvinaga)。”³³⁾419号文件载：“僧人菩达伐摩和僧人跋多罗 (Bhatra) 为证人。”³⁴⁾592号文书载：“证人为cozbo剑支耶，vasu阿注尼耶，sothamgha鸠伐耶，舍利伐罗，鸠僧多，莱莫，ageta凯托，vasu伐毕迦，僧人达米啰及舍啰钵罗伐，ageta奥钵吉耶。”³⁵⁾604号文书载：“证人为asgara莱没苏及僧人犀伐犀那。”³⁶⁾

2、书写文书，担任司书职责

如575号文书：“此文件系由余，国家司书 (rajadivira)、僧人达摩钵利耶所写。”³⁷⁾677号文书：“此字据系由余，皇家司书，僧人[……]奉[……]之命并根据妇女柯犀那耶之请求所写。”³⁸⁾

3、拥有一定的职权，为国家服务

收取违约罚款的权力。如348号文书中明确说明了僧伽 (Samgha) 收取违约罚款的情况，“今后无论任何人若违犯此项协议，将付罚款布匹12马身长 (lenght)，全部交给僧伽 (Samgha)。”³⁹⁾

收取税收的权力。如225号文书sramana僧伽钵利耶向钵楼伽 (Paruga) 收取谷物，“谷物亦由sramana僧伽钵利耶向钵楼伽 (Paruga) 收取。”⁴⁰⁾703号文书中所言，“这些谷物须征收并交僧伽沙五弥里码二晒之samiyena。”⁴¹⁾

逮捕他人的权力。如在706号文书中提到，沙门阿难陀有权和御牧牟尔德耶逮捕一名女子，“致御牧牟尔德耶和沙门阿难陀 (谕令)”，“当汝接到此楔形泥封木牍时，应即刻从迦波格耶之庄园内将该女子逮捕，务必交还迦喇施陀之兄弟阿支罗之手。”⁴²⁾

这些权力表明，僧人拥有一定的行政职务，具有较高的社会地位，在一定程度上是国家 (或政府) 的代表，发挥行政职能。

从以上梳理中不免使人形成这样一种印象，即三至五世纪鄯善王国的僧人在日常的社会生活中是非常活跃的。僧人们的这些世俗生活表现更加鲜活地展示了三至五世纪鄯善王国丰富的社会生

33) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第50页。

34) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第110页。

35) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第164页。

36) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第165页。

37) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第151页。

38) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第178页。

39) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第87页。

40) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第54页。

41) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第315页。

42) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第147页。

活，也体现出这一时期鄯善王国独特的社会风情。

二、鄯善王国僧人生活世俗化的缘由

三至五世纪鄯善王国僧人的这些世俗社会活动表现与世人一般传统印象中的僧人形象有着极大的迥异，这不禁使人产生疑问：究竟是什么原因导致这一时期鄯善僧人生活的世俗化呢？

（一）“地沙鹵，少田，寄田仰谷旁国”，寺院难以解决集体僧人的吃饭问题

《汉书》记载，鄯善“地沙鹵，少田，寄田仰谷旁国。”⁴³⁾《佛国记》有云：“其地崎岖薄瘠”⁴⁴⁾。《魏书》中载，鄯善“地沙鹵，少水草，北即白龙堆路”⁴⁵⁾。“沙则流漫，聚散随风，人行无迹，遂多迷路。四远茫茫，莫知所指，是以往来者聚遗骸以记之。乏水草，多热风。风起则人畜昏迷，因以成病”⁴⁶⁾。可见，鄯善王国的自然生态条件较差，该地区干旱少雨的气候以及土地的沙化、贫瘠不适宜农业生产，人们面临的生存环境恶劣。“地沙鹵，少田，寄田仰谷旁国”表明，国内可供耕种的土地不足，粮食供应有限，不能有效满足本国需求。但即便是在这样的情况之下，其还要供给一定的粮食给媼羌供，因为媼羌“仰鄯善、且末谷”⁴⁷⁾。在如此艰难的生存状况之下，鄯善要满足国内人口需求，其在粮食供应方面显然面临严峻的挑战和巨大的压力。

解决人口的吃饭问题是人得以生存的首要必备条件。从实际情况来看，受鄯善恶劣自然环境条件的影响，在地崎岖薄瘠、地沙鹵、少田、少水草这样的现实境况中，佛教寺院要想解决集体居住僧侣们的吃饭问题实属不易，难以提供足够的粮食解决集体僧人的口粮问题⁴⁸⁾。因此，僧人们需要自谋出路，而广泛参与社会事务性活动中以寻求生存之道，自行解决个人的吃饭问题成为必然抉择。

（二）身为户主担负养家糊口之责，寻求谋生之道以解决基本生存

如前所说，寺院难以担负起集体僧人的吃饭问题，需要其自行解决吃饭问题。这样一来，他们也就无需过集体生活，而是各自为家，居家生活，乃至于成家立业也就成为顺理成章之事，娶妻生子（或是收养养子女）组建家庭也就不足为怪。为了养家糊口，维持基本生存问题，身为户主的僧人与普通百姓一样，也从事一些世俗活动以维持生计，这就需要其必须融入到世俗社会生活当中。再加之，还承担向国家交税的义务。因而僧人拥有一定数量的私有财产也就不足为奇了。日常基本生活问题及税收问题的解决，都依赖于僧人自身的辛勤劳作和努力经营，因而他们积极参与到购买（549、655号文书⁴⁹⁾）、出售土地（582号文书⁵⁰⁾）或是抵押耕地、葡萄园（473号文书⁵¹⁾），甚至进行人口买卖（437⁵²⁾、564号文书⁵³⁾）等世俗经济活动中。否则其在上将难

43) (东汉)班固：《汉书·西域传》，卷九十六上，北京：中华书局，1962年，第3875-3876页。

44) (东晋)法显：《佛国记》，章巽校注，北京：商务印书馆，2016年1月，第40页。

45) (北齐)魏收：《魏书·列传》，卷一百二补，北京：中华书局，1974年，第2261页。

46) (唐)玄奘、辩机：《大唐西域记》，董志翘译，北京：中华书局，2014年，第470页。

47) (东汉)班固：《汉书·西域传》，卷九十六上，北京：中华书局，1962年，第3875页。

48) 对于寺院不供应僧人日常饭食的情况，参见郝春文：《唐后期五代宋初敦煌僧尼的社会生活》，北京：中国社会科学出版社，1998年。

49) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第141、174页。

50) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第155页。

51) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第118页。

以立足，如358号文书⁵⁴⁾中提到的僧人沦为他人奴仆的情形就说明了这一点。

如前所言，面对艰难的生存环境，为了自身或是整个家庭的基本生活，具有户主身份的僧人必须积极谋求生存之道，而参与各种经济贸易交流活动便成为其世俗社会生活的典型特征之一。这是其在现实生活环境逼迫下做出的必然选择。

魏晋时期鄯善僧人的世俗居家生活方式，对后来佛教僧尼的生活产生较大的影响，以至唐末五代时期敦煌的僧尼也在一定程度上受此影响，过着居家修行的生活。⁵⁵⁾大量的敦煌文献中反映出僧尼世俗化的生活之事，“8至10世纪敦煌尼僧不但有住家的现象，而且大部分靠自身劳动经营籍以维持生活。”⁵⁶⁾在敦煌文献中，还将吃住在寺外家中的僧人称之为是“散众”。由此，也就不难理解这一时期鄯善僧人的居家世俗生活了。

(三) 鄯善地处丝绸之路沿线要道，经济贸易活动往来频繁

“鄯善国，本名楼兰”⁵⁷⁾，汉初之际，楼兰是丝路要道上一个重要的绿洲城邦。它是离开敦煌后中国进入西域的第一入口处，是丝绸之路的第一个大站口，更是由此向中亚扩展的关重要口，是联通西域与中原地区的重要交通枢纽。斯坦因曾说道：“楼兰一道东边的起点是一有堡垒的边城，古代中国史书称此为玉门关。玉门之得名始于阆的美玉，和阆玉自古到今是塔里木盆地输入中国的一宗重要货品”⁵⁸⁾。在从中原通往天山南路的两条道路中，鄯善就是南道沿途重要的站点之一，《汉书》载：“自玉门、阳关出西域有两道。从鄯善傍南山北，波河西行至莎车，为南道；南道西逾葱岭，则出大月氏、安息。自车师前王庭随北山波河西行至疏勒，为北道；北道西逾葱岭则出大宛、康居、奄蔡焉”⁵⁹⁾。

鄯善地处交通要塞，“从楼兰鄯善北上或西行，可通达西亚、中亚和南亚地区”⁶⁰⁾，是古丝绸之路上的一个重要驿站，成为过往商客贸易的云集之地，“古楼兰——鄯善国正处于古代丝绸之路的必经之地，来往于这条丝路上的东西方使者、商队和僧侣都要经过这里。由于古丝绸之路路途遥远，绵延几千公里，长途跋涉在这条丝路上的旅人，就得依靠于沿途各国一段一段地提供向导、骆驼、水和粮食，甚至是守卫的人。”⁶¹⁾可见，地处古丝绸之路要道的鄯善，具有十分重要的交通地理位置，往来人员及经济贸易交流活动异常频繁。受此种社会大环境的影响，僧侣们在熙熙攘攘的繁杂尘世生活氛围中，难以避免世俗生活中经贸往来频繁带来的影响亦在情理之中。

(四) 国家上层统治阶层在宏观管理上向社会现实的妥协与调和

僧人世俗化生活的形成，也是国家统治阶层基于对鄯善王国现实情况的考虑，从宏观管理层面上向现实社会做出的一种妥协和调和，以谋求国家发展之需。

52) T·巴罗：《新疆出土佉卢文残卷译文集》，王广智译，乌鲁木齐：中国科学院新疆分院民族所印，1965年，第116-117页。

53) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第138页。

54) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第100页。

55) 郝春文：《唐后期五代宋初敦煌僧尼的生活方式》，《郝春文敦煌学论集》，上海：上海古籍出版社，2010年，第21-72页。

56) 石小英：《浅析8至10世纪敦煌尼僧居家生活》，《宗教学研究》，2016年第2期，第98页。

57) (东汉)班固：《汉书·西域传》，卷九十六上，北京：中华书局，1962年，第3875页。

58) (英)斯坦因：《斯坦因西域考古记》，向达译，北京：中华书局，1987年，第118页。

59) (东汉)班固：《汉书·西域传》，卷九十六上，北京：中华书局，1962年，第3872页。

60) 李菁：《古楼兰鄯善艺术综论》，北京：中华书局，2005年，第41页。

61) 穆舜英：《神秘的古城楼兰》，乌鲁木齐：新疆人民出版社，1987年，第119页。

1、扩大税收来源以增加政府财政收入

西汉时期，鄯善有“户千五百七十，口四千一百”⁶²⁾。到了公元四百四十二年之际，“鄯善王比龙将四千余家，因据鄯善”⁶³⁾，又因“由于比龙率领的四千家为鄯善国人口的一半，所以估计当时的鄯善国约有八千户人家”⁶⁴⁾。虽然，这一时期的人口数量有所增长，但其人口总量还是比较有限的。法显到印度取经途经鄯善之时，鄯善有“四千余僧，悉小乘学”⁶⁵⁾，这就意味着鄯善“平均两户有一僧人，占当地人口的百分之十”⁶⁶⁾。这一局面是令人十分吃惊的，“中国僧侣界的实际人数（包括全部真正以出家人为职业而生活的人），从来也只占中国人口中的一小部分，其人数始终低于（包括某些不太显著的变化）1%”⁶⁷⁾。这表明鄯善僧人数量占其总人口之多。这对国家的财政收入产生了严重影响，长此以往是不利于国家整体发展的。因此，国家从大局出发考虑，允许僧人娶妻生子，过世俗的家庭生活，扩大税源，保持国家稳定的税收收入。如杨富学先生就曾指出，“鄯善国僧侣可娶妻生子，很有可能是受到政府的支持和鼓励的，因为这样既可增加人口，同时，沙门本身也成为纳税人，扩大政府的税源。”⁶⁸⁾鄯善统治阶层的这一做法可谓是一举两得，有效维护了国家的稳定发展。

2、维持基本人口数量，保证充足的兵源以备战争之需

西汉时期，鄯善人口“万四千一百”，而其“胜兵二千九百十二人”⁶⁹⁾。可见，军人数量在鄯善人口总量中所占比重之高，说明鄯善王国对军事力量的重视。这与来自鄯善外部环境的严重威胁有着密切的关系。佉卢文272号文书提到，“朕下令处理国事之时，汝务必日夜关心国事，同时，不惜汝之性命小心戒备。若扞弥和于阗有什么消息，汝要向朕，伟大的国王陛下禀报，汝之报告应交督军伏陀送来。朕，伟大的国王便能从报告中得悉一切。去年，汝因来自苏毗人的严重威胁曾将州邦之百姓安置于城内，现在苏毗人已全部撤离，以前彼等居住在何处，现仍应住在何处。汝州的局势现已缓和，汝处理已安定，没有来自于阗的侵扰。现对劳特伽地方的人须作登记，所以该城仍须防守。”⁷⁰⁾由此说明，鄯善经常遭受来自周围其它势力的袭击，尤其受到苏毗人的威胁较为严重。为维护国家安全，鄯善必须加强其军事力量，保证一定的兵源数量，以备战事之需。

受鄯善国佛教的影响，更多的男子出家为僧，在一定程度上会影响到兵源人数，致使本国的国防军队力量受到削弱。因此，立足鄯善的基本国情，从国家发展的全局考虑，鄯善统治上层从僧侣的管理方式上入手，允许他们同普通百姓一样娶妻生子（或是收养养子女），成家立业过着世俗的家庭生活，并积极从事社会经济活动以谋生立足。这既保证了本国基本的人口数量，也有效缓解军队兵源不足的压力，对巩固国防，维护国家安全起到了积极作用。

从以上对鄯善僧人世俗生活成因的分析中可以看出，其中蕴藏着这样的逻辑关系：因受地域自然生态环境条件的影响和制约，农业在鄯善地区的发展在一定程度上有所受限。为了解决生存之道、维持基本的生活，鄯善僧人以入世的态度积极参与世俗社会生活。在世俗社会中，僧人广泛

62) (东汉)班固：《汉书·西域传》，卷九十六上，北京：中华书局，1962年，第3875页。

63) (梁)沈约：《宋书·氐胡传》，卷九十八，北京：中华书局，1974年，第2417页。

64) 夏雷鸣：《从佉卢文文书看鄯善国僧人的社会生活——兼谈晚唐至宋敦煌世俗佛教的发端》，《丝绸之路民族古文字与文化学术讨论会文集》，西安：三秦出版社，2007年，第101页。

65) (东晋)法显：《佛国记》，章巽校注，北京：商务印书馆，2016年，第41页。

66) 夏雷鸣：《从佉卢文文书看鄯善国僧人的社会生活——兼谈晚唐至宋敦煌世俗佛教的发端》，《丝绸之路民族古文字与文化学术讨论会文集》，西安：三秦出版社，2007年，第101页。

67) (法)谢和耐：《中国5—10世纪的寺院经济》，耿昇译，上海：上海古籍出版社，2004年，第18页。

68) 杨富学：《论鄯善国出家人的居家生活》，《敦煌学》第二十七辑，台北：南华大学敦煌学研究中心，2008年，第221页。

69) (东汉)班固：《汉书·西域传》，卷九十六上，北京：中华书局，1962年，第3875页。

70) 林梅村：《沙海古卷》，北京：文物出版社，1988年，第81—82页。

参与各种经济贸易活动中,以维持自身及其家庭的发展。而统治阶层基于对国家现实国情状况的考虑,从维护国家发展需求、保障国家稳定发展的大局出发,在宏观管理方面采取宽松的有效措施,允许僧人过着居家的世俗生活。由此一来,在一定程度上,既扩大了国家税收来源又维持了基本人口的增长,从人力和物力两个方面有效保障了国家的稳定发展和国家机器的正常运转。如此,社会的稳定发展和国家的长远发展两者相互促进,从而形成一种良性的互动,推动社会不断向前发展。

三、鄯善僧人世俗生活折射出的鄯善佛教发展状况

从僧人一系列的世俗生活现象中不难看出,僧人除具有佛教徒这一层身份之外,在其他方面似乎与普通民众并没有太大的差异性,其以入世的态度积极融入到社会世俗事务中去。这既是三至五世纪鄯善王国僧人社会生活的客观呈现,也是这一时期僧人群体所具有的典型特征之一。这在一定程度上折射出了这一时期内鄯善王国佛教的发展状况。

(一) 佛教的世俗化发展

鄯善佛教并非由本土文化所产生,“这些贵霜王朝的移民来到罗布泊地区时,也同时把原本的佛教和佛教艺术带了进来。”⁷¹⁾佛教最初在传入西域之初时,“一开始就带有佛教源头所特有的西方色彩”⁷²⁾。但是作为一种外来的文化,佛教在初传鄯善地区时,基于自身要想真正地在鄯善这块土地上扎根发展的目的,必然要适应当地的文化体系,“佛教世俗化从一开始就已存在,并非是进入中国后的特殊现象”⁷³⁾,在传播和发展过程中不断地加以改变和调整,将自身积极融入到当地的文化氛围中去,以满足当地人的文化需求和地方发展需要。因此,其必会呈现与当地的社会发展特征不断融合的世俗化发展倾向。诚如夏雷鸣先生所言,“佛教在西域扎根壮大,不得不迎合所处世俗社会环境的地理条件、风俗习惯、政治主张、人文思想和道德观念等,因此,佛教世俗化的整体趋势不可阻挡。”⁷⁴⁾

佛教在其传播发展过程中,比较认同世俗社会结构与互动原理的融通,积极通过寺院组织的各种佛事活动沟通和调节寺院与世俗社会的互动,以适应不同地区的实际情况,从而达到扎根本土赢得群众信仰的立足之基。从鄯善“浴佛”活动方式方法的变化就充分地说明了佛教在鄯善地区世俗性的发展特征。佉卢文511号文书详细地记载了这一情况。⁷⁵⁾夏雷鸣先生对此指出说,“若以浴佛方法为‘形’,浴佛的目的为‘神’,鄯善国的浴佛法会则‘形’变而‘神’不变,形成符合鄯善国地域特征的‘形神兼备’”⁷⁶⁾,并且“佉卢文书511号将浴佛时对宗教理念的感受、体验,对精神升华境界深入的需要直接替换成现世现时的需求,即要求因陀罗增多雨水和不得上述皮肤病”⁷⁷⁾。以此足见,佛教在鄯善的世俗化发展状况,它是以满足现实需要为直接目的的。

而鄯善佛教在传播发展的过程中与鄯善的社会现实密切结合,带有的鲜明世俗化特征对后来我

71) 王嵘:《塔里木河传》,保定:河北大学出版社,2009年,第75页。

72) 王嵘:《塔里木河传》,保定:河北大学出版社,2009年,第75页。

73) 夏雷鸣:《从佉卢文文书看鄯善国僧人的社会生活——兼谈晚唐至宋敦煌世俗佛教的发端》,《丝绸之路民族古文字与文化学术讨论会会议论文集》,第102页。

74) 杨富学:《论鄯善国出家人的居家生活》,《敦煌学》(第二十七辑),台北:南华大学敦煌学研究中心,2008年,第220页。

75) T·巴罗:《新疆出土佉卢文残卷译文集》,王广智译,乌鲁木齐:中国科学院新疆分院民族所印,1965年,第130-131页。

76) 夏雷鸣:《从“浴佛”看印度佛教在鄯善国的嬗变》,《西域研究》,2000年第2期,第48页。

77) 夏雷鸣:《从“浴佛”看印度佛教在鄯善国的嬗变》,《西域研究》,2000年第2期,第50页。

国佛教的发展产生重要的影响,“敦煌的佛教世俗化是鄯善世俗佛教东渐的结果”⁷⁸⁾。因此可以说,鄯善佛教的世俗化奠定了佛教在中国发展世俗化的总体趋势,这也成为佛教得以不断发展壮大的根源所在。

(二) 佛教管理上的松弛

佛教在其发展过程中,必然会形成一套法规戒条以约束教徒的行为。但鄯善僧人一系列的世俗生活却反映出,鄯善王国在佛教管理方面的松弛。

首先,佛教戒律体制尚未形成。鄯善佛教传入时间较短,在极短的时间内如何使其得以广泛传播,扩大信众基础,在鄯善得以扎根立足是亟待解决的问题。而在其传播发展的过程中,拥有信众基础成为其立足的首要条件。而至于佛教戒律的形成或进一步完备则成为次要问题。因此,在发展鄯善佛教的过程中,没有受到过多条条框框的限制和约束,在对僧人的管理问题上是比较宽松的,从而奠定了鄯善佛教的信众基础。从鄯善王国所面临的现实状况来看,是否遵守佛教戒律信条在现实生存环境的考验下,也已变得不那么重要了。这也成为这一时期鄯善佛教戒律难以形成的一个重要因素。杨富学先生曾指出,鄯善国于五世纪中叶灭亡时,佛教戒律体制尚未形成,至少可以说是尚未完备。⁷⁹⁾

其次,佛教戒律的推行滞后于佛教的传播发展。任何一种思想的传播总是要早于制度体系的订立和完善,佛教的传播亦是如此。佛教作为一种外来的文化,传入鄯善地区之时并不是将与其有关的所有东西都一股脑地传入进来的。它也需要时间将与之相关的经典教律戒条等慢慢渗入,而这需要一个时间上的过程,“佛教戒律的推行往往要迟于佛教的流行”⁸⁰⁾。这与佛教传播过程中先要在该区域内扎稳根基得以立足的传播特点有着密切的关系。而在这个规章制度的形成过程中,必然由于一些条件的不足而导致一些混乱局面的产生。事实上亦是如此。正如当今世界任何一种文化的流行一样,主流文化局面的形成,随后才会逐渐形成与其相适应的各种规章制度等。

需要注意的是,鄯善王国僧人的世俗化生活也受佛教“世俗性”的发展特点和管理上的松弛等因素的影响,与佛教自身在鄯善王国的传播发展特点有着密切的关系。

(三) 佛教与王权政治的互动发展

法显西行求法,途径鄯善,其对鄯善的佛教信仰情况做了记载“其国王奉法,可有四千余僧,悉小乘学。”⁸¹⁾可见,鄯善佛教流行之盛,僧众之多。国王作为最高统治者信仰佛教,对佛教的广泛传播与发展起到了引领性的作用。此外,国王以身作则,还亲自参加一些重大的法会,利用佛教教化民众。如511号文书中提到,“当Ganas之最高国王、长老及中小和尚尚未到达之时,让那些作奉供之人享受其应得之酬报;当彼等到达时,让彼等永生得到教化”⁸²⁾。由此可见,佛教显然已成为鄯善王国上层建筑的重要组成部分,其教化作用的发挥已成为强化国家统治和巩固国家政权的重要手段。

相当一部分的僧人实际上也是国家的管理人员,担任某些重要的职务,有权处理一些社会事务。这说明,一部分僧人拥有较高的政治地位,具有较高的社会威望。这部分人一方面肩负法师

78) 夏雷鸣:《从佉卢文文书看鄯善国僧人的社会生活——兼谈晚唐至宋敦煌世俗佛教的发端》,《丝绸之路民族古文字与文化学术讨论会会议论文集》,西安:三秦出版社,2007年,第103页。

79) 杨富学:《论鄯善国出家人的居家生活》,《敦煌学》(第二十七辑),台北:南华大学敦煌学研究中心,2008年,第221页。

80) 杨富学、徐焯:《佉卢文书所见鄯善佛教研究》,《五台山研究》,2013年第3期,第6页。

81) 章巽校注:《法显传校注》,上海:上海古籍出版社,1985年,第7-8页。

82) T·巴罗:《新疆出土佉卢文残卷译文集》,王广智译,乌鲁木齐:中国科学院新疆分院民族所印,1965年,第130页。

의职能,一方面又与政府间有着密切的联系,成为国家管理层当中的重要组成人员,依赖于世人对佛教的信仰加强对世俗事务的管理和处理,从精神层面服务于王权。

鄯善僧人表面看来似乎是“有信无戒”,但实则不然。尽管僧人虽然也担任一定的职务,拥有一定的权力,属于国家部分“公务员”,但国家对僧人的宽松管理并不是毫无任何底线的。僧人们也要遵守僧界之规定,定期参加集会活动,并且在一定的活动中还要身穿袈裟,使之具有的重要仪式感充分体现出来,否则就要受到惩罚,“任何僧人不参加僧界之各种活动,将交付罚款丝绢一匹,任何僧人不参加posath仪式,罚款丝绢一匹。任何被邀请参加posath仪式之僧人,身着俗服前来,应付罚款丝绢一匹。”⁸³⁾对僧人而言,袈裟是其身份的象征。对于毁坏僧人袈裟的行为,则要依法做出判决,如606号文书中提到,“今有沙门阿夷罗上奏,有一名妇女,名左迪,将彼之黄袈裟焚毁。当汝接到此楔形泥封木牍时,应即刻对此事详加审理,依法作出判决”⁸⁴⁾可见,任何有违佛教仪规和有损僧人形象的不良行为都是要受到相应处罚的,这反映出鄯善王国上层统治者对佛教的重视和尊崇。基于这样的因素,鄯善佛教和王权政治之间形成良性的互动发展。

四、结语

三至五世纪鄯善王僧人的世俗生活展现了这一时期鄯善王国社会发展状况的独特性。鄯善僧人生活的世俗化是受多方面因素影响的,其成因既有现实客观因素的制约,又有主观人为因素的干预,但无论哪种因素都呈现出三至五世纪鄯善王国社会发展及其国家治理的特征。在这样的社会氛围中,统治阶层对社会的治理依赖于鄯善佛教的广泛传播和发展,以不断教化世人,从而在精神领域加强对世人思想的钳制,使其为统治阶层服务,稳定民心。统治阶层对僧人宽松的管理方式,并使其中的一部分僧人担任一定的职务,有权处理一些具体的社会事务,无形中也扩大了佛教的影响力,夯实佛教信仰的群众基础。这对后来佛教自身的世俗化发展和统治阶层的国家治理都产生重大的影响,二者在良性互动中推动社会不断向前发展。这也成为后来敦煌佛教世俗化发展的源头所在,对整个中国佛教的世俗化传播和发展都产生着深远的影响。

83) T·巴罗:《新疆出土佉卢文残卷译文集》,王广智译,乌鲁木齐:中国科学院新疆分院民族所印,1965年,第124页。

84) 林梅村:《沙海古卷》,北京:文物出版社,1988年,第141页。

新疆 출토 카로슈티 문서에서 본 승려의 세속적 생활 연구

李博(陝西中醫藥大學)

[초록]

신장에서 출토된 카로슈티 문서에서 본 승려는 세속적인 사회생활을 하였으며, 3~5세기 전선 왕국의 두드러진 사회현상 중 하나이었다. 승려들이 폭넓게 사회 사무적인 활동에 관여하는 것도 이 시기 승려 집단의 뚜렷한 특징 중의 하나이었다. 승려들의 삶이 세속화되는 이유는 여러 측면에서 나타나고 있다. 승려의 세속적인 생활은 불교가 전선 왕국에 전입된 이후로부터 세속화 추세가 나타나기 시작했고, 전선 왕국 상층 지배층의 비교적 느슨한 불교 관리로 인해 불교의 세속화 발전과 왕권정치 사이에 양성적인 상호작용이 이루어졌다. 이와 같은 양자 간의 상호작용은 사회를 발전시켰다.

키워드: 카로슈티 문서 · 승려 · 세속적 생활

20세기 초 이래, 중국 신장 지역에서 잇달아 출토된 카로슈티 문서는 고대 전선 왕국(전국사)¹⁾과 그 사회 발전 상황을 연구하는 데 중요한 자료를 제공했다. 해당 문서에서 주목할만한 점은 승려의 세속화 생활이 이 시기 전선 왕국의 사회생활에서 두드러진 사회현상으로 표현된 것이다. 왜 이런 일이 생겼을까? 고대 전선 왕국의 사회상을 좀 더 깊이 이해하기 위해서는 이 문제를 검토할 필요가 있다. 고대 전선 왕국 승려의 세속생활에 대해 학계에서는 유익한 연구가 있었지만,²⁾ 승려의 세속생활 전모를 반영하기에는 많이 부족하기 때문에 좀 더 깊이 연구할 여지가 있다. 이 글은 3~5세기 전선 왕국 승려들의 세속화 생활집단의 특징을 탐색하고,³⁾ 전선 왕국 승려들의 생활 세속화의 원인과 불교의 발전 양상을 분석하여 고대 전선 왕국의 사회발전양상과 사회특징을 고찰하여 오늘날 신장의 사회관리에 참고 경험을 제공하고자 한다.

I、카로슈티 문서에서 본 전선 왕국 승려의 세속 생활

신장에서 출토된 카로슈티 문서는 승려가 사회 사무적인 활동에 폭넓게 참여한 것이 3~5세기 전선 왕국의 비교적 보편적인 사회현상임을 반영할 수 있다. 이것은 해당 시기 전선 왕국의 승려 집단의 뚜렷한 특징 중 하나다.

1) 馬雍, 『西域史地文物叢考』, (北京)文物出版社, 1990, p.160.

2) 夏雷鳴, 「從佉盧文文書看鄯善國僧人的社會生活——兼談晚唐至宋敦煌世俗佛教的發端」, 『絲綢之路民族古文字與文化學術討論會會議論文集』, 2005; 許娜, 「佉盧文書所見鄯善國佛教僧侶的生活」, 『甘肅民族研究』, 2006, 第4期; (印)阿格華爾, 「佉盧文書所見鄯善國佛教僧侶的生活」, 楊富學、許娜譯, 『甘肅民族研究』, 2006, 第4期; 楊富學, 「論鄯善國出家人的居家生活」, 『敦煌學』(第27輯), 南華大學敦煌學研究中心編印, (臺北)樂學書局有限公司, 2008.

3) 苗普生、田衛疆, 『新疆史綱』, (烏魯木齊)新疆人民出版社, 2004, p.136.

1. 세대주가 되어 세대주의 권리와 직책을 행사함

이와 같은 카로슈티 문서 중의 147호 문서는 일종의 籍帳 문서이다.⁴⁾ 이 문서에는 “9월 5일에 모든 호주는 한 몃씩을 받는다(唯9月5日, 是時凡戶主人均一份)”⁵⁾라고 명시되어 있으며 이것은 세대주의 신분을 가진 사람은 누구나 한 몃을 받을 수 있다. 그러나 “太侯 루트라야(Rutraya)와 승려 지바미트라(Jivamitra)가 병가를 고했다.”⁶⁾라는 이유로 세대주인 승려 지바미트라는 일단 자신이 받을 몃을 받지 못했다. 여기서 거론되는 승려 지바미트라는 세대주 신분이어서 주목할 만한 현상이다.

2. 아내를 맞아 아이를 낳는다(혹은 자녀 입양)

승려의 세속생활은 장가들어 아이를 낳거나 자녀를 입양해 가정을 꾸리는 것으로도 나타난다. 418호 문서에는 ‘법사 사리푸트라(Sariputra)가 데누가 암토(Denuḡa Amta)의 딸 쉬르사테아예(Sirsateyae)를 양딸로 데려갔다. 법사 사리푸트라가 이 딸을 정식으로 법사 부다바르마(Budhavarma)와 결혼시켰다’라고 밝혔다.⁷⁾ 적어도 우리가 이 문서를 통해 알 수 있는 것은 첫째, 사리푸트라는 승려 데누가 암토의 딸을 입양했을 뿐 아니라, 이 양녀가 어른이 되면 직접 정식으로 타인의 아내로 혼인을 시켜 양녀의 권익을 보호하고, 둘째는 부다바르마라는 승려가 법사 사리푸트라의 양딸을 아내로 맞이하여 가정을 꾸렸다는 것이다. 425호 문서에서 “앞으로 지바미트라(Jivamitra)의 자녀는 (추가파 Cuḡapa)에 대해 요구할 권리가 없다”라는 대목에서도 지바미트라(Jivamitra)라는 승려가 자녀를 두고 있음을 반영하는 것이다.⁸⁾ 474호 문건에도 승려 상가팔라(Saṃgapala)가 처를 맞이하는 상황을 기록하였고, “야베(Yave, 지명)현 領地 叶波怙(Yapḡu, 직책명)의 子姊妹가 哲蒂女神(Catisa Devi)현 領地의 승려 상가팔라의 처가 되었다.”⁹⁾ 553호 문서에는 “당신은 현재 이미 부다미트라(Budhamitra)의 아들인 파트라야(Patraya)를 양자로 받아들였다”라고 나와 있다.¹⁰⁾ 이것은 승려 부다미트라가 결혼하였으며 파트라야라는 아들이 있다는 것을 반영할 수 있다. 문서 621호에는 ‘승려 순다라(Sundara)는 처를 맞이하며 수프리야(Supriya)라는 딸이 있다’라고 기록되었고, ‘이 차토(Cato)는 승려 순다라의 딸 수프리야를 처로 맞이했다.’¹¹⁾ 655호 문서는 간접적으로 승려 붓다시라(Buddhaśira)가 자녀 양육하였다는 것을 표현한 것으로 아들 이름은 부도사(Budhosa)이었다. ‘승려 붓다시라와 그 아들 부도사(Budhosa)가 미지(misi)의 땅을 승려 kutajadaga 붓다파르마(菩達鉢訶摩, Budhapharma)에게 팔려고 한다’라고 하였다.¹²⁾ 이외에, 문서 358호에서 ‘매일에 사주(寺主)는 그 영지의 사유재산에서 彼の 아들, 즉, 수행인원에게 4 瓦查厘(vacari, 단위 이름인 듯)의 밀가루와 굵은 가루를 식료로 공급해야 한다’, ‘시하다르마(Sihadharma, 獅法)의 아들은 彼가 스스로 빨리 사미(沙彌)로 보내야 한다’¹³⁾라는 등의 메시지는 승려의 양육 상황을 간접적으로 보여주고 있다. 이와 같은 정보를 통해 알 수 있는 것은

4) 林梅村, 『中國所出佉盧文書初集——沙海古卷』(이하 『沙海古卷』이라고 약칭), (北京)文物出版社, 1988, p.155.

5) 林梅村, 앞책, p.187.

6) 林梅村, 앞책, p.188.

7) T·巴羅, 『新疆出土佉盧文殘卷譯文集』, 王廣智 譯, (烏魯木齊)中國科學院新疆分院民族所印, 1965, p.109.

8) T·巴羅, 앞책, p.113.

9) 林梅村, 앞책, p.119.

10) 林梅村, 앞책, p.136.

11) 林梅村, 앞책, p.141.

12) T·巴羅, 앞책, p.144.

13) 林梅村, 앞책, p.100.

다음과 같다. 하나는 사주(寺主) 신분인 승려가 자신의 자녀뿐 아니라 사유재산도 어느 정도 갖고 있어 매일 자신의 아들과 수행원들에게 일정한 식량을 나눠줘야 한다는 점, 다른 하나는 사주(寺主)의 이름이 시하다르마일 수도 있다는 점, 승려 신분상 그 아들도 사미(沙彌)로 보내져 불사를 받아야 한다는 점 등이다. 이것은 일종의 승려 신분의 계승 방식이자, 해당 집안이 불교에 대한 존경을 보여주고 있다.

3. 각종 교역 활동에 종사하며 일정한 개인 재산을 가지고 있음

일상생활에서 선선 승려는 비교적 활발히 행동하였으며 각종 경제 거래 활동에 분주하였다. 그 거래(교역) 활동에는 주로 다음과 같은 것들이 있다.

1). 인신매매

437호 문서는 ‘彼 등 다른 사람과 같이 키 5디스티(diṣṭis, 길이 단위)의 여자아이 한 명을 승려 부다세나와 마슈디게(Maṣḍhiḡe)에게 팔았다’라며 승려 부다세나(Budhaṣena)가 여자아이를 구입한 정황을 담고 있다.¹⁴⁾ 구입 후 노예로 사용했는지, 양딸로 했는지는 알 수 없다. 공교롭게도 564호 문서에도 ‘지금 쿠니타가 상주하여 1남을 입양해 쉬르파마가 귀인 샤라스파사(Śaraspaṣa)에게 팔았다’라는 승려 쉬르파마(Śrīpamma)가 쿠니타(Kuñita)의 양자를 팔아넘긴 사실이 반영되어 있다.¹⁵⁾ 그러나 여기서 쉬르파마가 쿠니타의 양자를 팔아넘기는 것은 불법이었다. 왜냐하면, ‘出賣別人養子者, 殊不合法’이라는 규정이 있었다.¹⁶⁾

승려가 합법적인 인신매매를 할 수 있었던 이유 중의 하나는 자신의 노예, 즉, 노예를 완전히 소유하고 자기 마음대로 처분(행동)할 수 있었기 때문이다. 예를 들면, 카로슈티 문서 589·590호 두 건의 계약서에서 람소차(Ramṣotsa)는 사들인 어린 여자, 부인(婦人)에게 제멋대로 행동할 권리를 갖고 있으며, ‘고로 현재 람소차는 어린 여자 스미차예(Smitsae)에게 자기 마음대로 행동할 권리가 있다’,¹⁷⁾ ‘앞으로 司書 람소차는 그 부인에게 소유권이 가진 것으로 때리거나, 그 부인의 눈을 멀게 하거나, 팔거나, 선물로 증여하거나, 교환하거나, 저당 잡히거나 람소차는 임의로 할 수 있다.’¹⁸⁾ 이 시기만 해도 승려가 노예를 소유한 경우는 사회적으로 흔한 상황이었다. 예를 들면, 345호 카로슈티 문서에 따르면, 승려 아난다세나(Anandāsena)는 한 명 부다고샤(Budhagoṣa)라는 노예를 소유한 것으로 알려져 있다. ‘승려 아난다세나의 노예인 부다고샤는 추고파(Cuḡopa)의 방에서 견사(pata) 12 마신장(length), urnavarande 3, 밧줄(rasamna) 2개, 펠트 옷(nasamna) 3벌, 면양 4마리, aresa 1개를 훔쳤고 총값은 (sarvapimda-gamnaana)100 물리(穆立 muli, 화폐단위로 추정됨)이다.’¹⁹⁾ 506호 문서의 내용을 보면 ‘승려 타티가(Tatiga)는 승려인 삼차(Śaṃca)로부터 승려 바트라(Bhatra)를 인도한 적이 있었다’. 타티가(Tatiga)가 승려 바트라와 함께 도성에 도착하였다. 타티가는 이 승려 삼차(Śaṃca)에게 노예 슈라스다(Śraṣḍha)를 주어 일을 시켰다. 쌍방은 다음과 같은 합의를 하였다. 즉, 그 노예 슈라스다는 가옥 내에 체류할 수 없다. 그는 삼차에게 가서 타티가와 바트라가 돌아올 때까지 거처에서 일해야 한다. 타티가와 바트라 두 승려는 지금까지도 도읍에서 돌아오지 않았다. 노예 슈라스다는 타티가가 소유한 또 다른 노예 샴나마(Śanaṃma)를 삼

14) T·巴羅, 앞책, pp.116-117.

15) 林梅村, 앞책, p.138.

16) 林梅村, 앞책, pp.138-139.

17) T·巴羅, 앞책, p.161.

18) T·巴羅, 앞책, p.162.

19) T·巴羅, 앞책, p.85.

차에게 맡기고 대신 일을 시켰다. 슈라스다는 승려 삼차의 노예와 함께 케마(Khema)에게로 도망쳤다.²⁰⁾ 해당 문서를 통해 우리가 알 수 있는 정보는, 첫째, 타티가는 슈라스다와 사남마라는 노예 2명을 소유한다; 둘째, 승려 삼차도 자신이 소유한 노예가 있었다. 셋째, 승려 바트라는 완전한 신체 자유가 없어 승려 삼차에 예속되어있다는 것이다.

노예를 소유한 것도 3~5세기 선선 왕국의 승려가 일정한 사재를 소유한 표현 중의 하나이었다. 그러나 이 시기에 506호 문서의 승려 바트라처럼 남의 종속이 되거나 남의 노예로 전락한 일도 예외가 아니었다. 358호 문서도 이를 반영하듯, '승려는 남의 노예이어야 한다'라고 했다.²¹⁾ 필자는 그 원인을 승려 자신의 경영 부실과 관련이 깊을 것으로 추정한다. 예를 들면, 카로슈티 345호 문서에 나타난 바와 같이 승려 아난다세나(Anamdasena, 阿難陀犀那)는 노예를 거느리고 일정한 사재를 점유하고 있음에도 타인으로부터 곡물과 술을 빌린다고 한다. '라르수(Larsu)의 말에 의해 승려 아난다세나(Anamdasena)는 차도타(Caḍ'ota)에 있는 추고파(注瞿鉢, Cuḡopa)로부터 곡물 30 밀리마(milima)를 빌렸다. 그 후에 도시 술 15 키(希, khi)를 빌렸다.'²²⁾ 이것은 자신의 생활이 한동안 빠듯했고, 일시적인 대출로 난관을 극복해야 한다고 밝힌 것이다. 3~5세기 선선 왕국의 승려들은 승려 신분이었던 것 외에는 일반인과 다를 바가 없으며, 특히 스스로 살길을 모색하는 상황에서 자신의 경제 사정이 좋지 않아 타인의 노예로 전락하는 가능성도 있으며 특히 외톨이인 경우이다.

2). 토지매매

승려가 땅을 매입하는 경우: 카로슈티 549호 문서에 따르면, '이 두 형제는 1 밀리마의 마 10키의 씨를 뿌려 농사를 지을 수 있는 땅을 승려 상가부디(Saṃghabudhi)에게 팔게 된다.'²³⁾ 매입한 토지는 전적으로 승려가 소유하며 '이 토지에 관해 승려 상가부디는 파종, 경작 혹은 타인에 양도한 권리는 가지고 있다.'²⁴⁾

승려가 땅을 판 경우: 카로슈티 582호문서에 따르면 '한 승려가 있는데 이름은 이피아(Yipiya)이고 차도타(Caḍ'ota)에 살고 있다. 람소차(Raṃṣotsa)에게 25kuthala (쿠탈라, 일정한 땅)의 miṣi(경작지로 추정)를 팔았다.'²⁵⁾ 카로슈티 652호 문서도 이러한 상황을 반영할 수 있다. 승려 달마라다(Dharmaladha)가 시書 리파트가(Lýipatga)에게 토지를 양도하였다. "한 승려가 있는데 이름은 달마라다이다. 이는 1밀리마의 리마 씨를 심을 수 있는 땅을 사서 리파트가에게 팔아넘겼다. 이 승려는 술 10키와 agiṣḍha (담요, 카페트 따위로 추정) 3을 땅값으로 받았다. 이 사업은 이미 결정됐다. 앞으로 리파트가는 이 땅에 대한 전적인 소유권을 가지고 있다.'²⁶⁾

카로슈티 655호문서는 승려 붓다시라(Buddhaśira, 菩達屍羅)가 땅을 팔고, 승려 쿠타다가가kutajiadaga 부다파르마(Budhapharma, 菩達鉢訶摩)가 땅을 사들인 것을 반영해, '승려 붓다시라와 그 아들 부도사(Budhosa)가 misi(경작지로 추정)의 땅 한 덩어리를 승려 kutajiadaga 부다파르마 菩達鉢訶摩(Budhapharma)에게 팔기를 원한다. 이 땅의 파종량은 1 밀리마 5키이다.'²⁷⁾

20) T·巴羅, 앞책, p.128.

21) 林梅村, 앞책, p.100.

22) T·巴羅, 앞책, p.85.

23) T·巴羅, 앞책, p.141.

24) T·巴羅, 앞책, p.141.

25) T·巴羅, 앞책, p.155.

26) T·巴羅, 앞책, p.173.

27) T·巴羅, 앞책, p.174.

경제 거래 활동 중에 승려가 토지를 사고팔 수 있으며 토지를 담보로 잡는 것도 경제활동의 한 가지 구성요소이었다. 그러나, 방증할 수 있는 직접적인 자료는 아직 찾지 못한 채 일부 문서로만 관련 정보를 찾아내고 있다. 예를 들면, 카로슈티 473호 문서는 '지금 叶怙(Yapgu)가 상주하여 승려 상가시라(Saṃgaśira)의 포도밭 중 한 채와 경작지 한 필을 다른 사람에게 저당 잡힌다. 당신은 응당히 직접 이 사안을 심사해 포도밭과 농경지가 담보로 잡혔는지 확인해야 한다. 그 포도밭과 농경지는 叶怙의 사유재산이라 포기할 수 없다. 이 포도밭과 농경지는 사유재산으로 반환해야 한다.'라고 말했다.²⁸⁾

3. 기타 거래(교역)

425호 문서는 비록 결함이 있지만 지바미트라(Jivamitra)라는 승려가 카라 추가파(Cuḡapa)와 거래한 것으로 보인다. '한 승려가 있는데 이름은 지바미트라이며 카라 추가파와 거래하여 [.....] (의무)를 해지.'²⁹⁾ 거래가 끝난 후 두 사람의 권리와 의무에 대해서도 명확하게 설명하고, 승려 지바미트라의 자녀는 거래처에 간섭할 권리가 없다고 강조하면서 "이 두 사람에 대해 승려가 지바미트라와 추가파는 앞으로 서로 상환하지 않고 점유하지 않는다. 앞으로 지바미트라의 자녀들은 추가파에 대해 요구할 권리가 없다"고 말했다.³⁰⁾

4. 세금 납부

세금은 국가의 전반적인 발전과 관련되며 세금이 보장으로 국가 기능은 비로소 정상적으로 운영할 수 있고 국내 안정과 국가발전을 유지할 수 있다. 승려는 호주가 될 수 있는 이상 일정한 세금도 부담하고 국가에 세금도 내야 한다. 이는 일반 서민과 다를 바 없다. 3~5세기 선선 왕국의 부세 종류는 비교적 다양하다. 예를 들면, 164호 문서에서 밝힌 대로 승려로서 전문적인 사미세까지 내면서 '그들이 물어본 다른 세금 사미세, tsamghina세, 그리고 kvemamdhina의 여러 세금은 반드시 속히 징수하여 상납한다.'라고 했다.³¹⁾ 385호 문서는 승려가 낸 세금에 대해 명확히 규정한 바가 있다. '남은 지방 백성들에게 (세금을) 받아야 한다. 승려 상가라타(Saṃgaratha)는 arnavaji(웃으로 추정) 한 벌을 납부하고, 수야마(Suyama)는 펠트 한 벌, 探長 지모야(Jimoya)는 펠트 한 벌, 司帳 쿠비네야(Kuviñeya)는 펠트 한 벌을 납부했다.'³²⁾

5. 기타 사회 사무의 처리에 참여함

(1). 다른 사람을 한 증명

문서 209호 '증인은 승려 프리요사(Priyosa), 파나가라(Panagara)(?), (크비냐가(Kviñaga)이다.'³³⁾ 419호에는 "승려 부다바르마(Budhavarma)와 승려 바트라(Bhatra)는 증인으로 채택했다'라고 기재되었다.³⁴⁾ 592호는 '증인은 cozbo 캄치야(Kaṃciya), vasu 아추니야(Acuñiya), sothamgha 쿠바야(Kuv'aya), 사리바라(Sarivara), 쿠삼타(Kuṣamta), 리모(Lýimo), ageta 차토(Cato), vasu 바피카(Vapika), 다밀라(Dhamila) 및 실라프라바(Śilaprava), ageta 옴게

28) 林梅村, 앞책, p.118.

29) T·巴羅, 앞책, p.113.

30) T·巴羅, 앞책, p.113.

31) 林梅村, 앞책, p.283.

32) 林梅村, 앞책, p.301.

33) T·巴羅, 앞책, p.50.

34) T·巴羅, 앞책, p.110.

야(Opgeya)등이 있다'라고 돼 있다.³⁵⁾ 604호에는 "증인은 승려 림수(Lýimsu)와 승려 세바세나(Sevasena)이다'라고 돼 있다.³⁶⁾

(2). 문서 작성, 사서 직책 담당

예를 들면, 575호 문서에는 '이 파일의 사유자, 국가 사서(rajadivira), 승려 달마프리아(Dharmapriya)가 작성한 것이다.'³⁷⁾ 문서 677호에는 '이 증명서는 왕실 사서, 승려 [.....]가 [.....]의 명을 받들어 부녀자 코세나야(Kosenaya)의 요청에 따라 작성되었다'라고 돼 있다.³⁸⁾

(3). 일정한 직권을 가지며 국가를 위해 봉사함

위약 과태료를 부과할 권리. 348호 문서에는 승가(Samgha)가 위약 벌금을 받는 경우를 명시된 바와 같이 '앞으로는 누구든지 이 협약을 어길 시에 벌금 천 12 馬身長(length)을 부과해 전부 승가(Samgha)에게 일임한다.'라고 돼 있다.³⁹⁾

세수를 받을 권리. 예를 들면, 252호 문서(원문에 기입된 문서번호 225호가 오류)에는 승려(śramana) 상가프리아(Saṃghapriya)가 파루가(Paruḡa)로부터 곡물을 받은 상황을 기록하였다. '곡물은 승려 상가프리아(Saṃghapriya)가 파루가(Paruḡa)로부터 받아낸다.'⁴⁰⁾ 703호 문서에는 '이 곡물은 반드시 5 밀리마(milima) 2 키(khi)의 삼예나(ṣamiyena)를 징수해 삼고사(Saṃgoṣa)에 교부해야 한다.'라고 돼 있다. ⁴¹⁾

타인을 체포하는 권력을 가진다. 706호 문서에서 밝힌 대로 승려 아난다(Ananda)는 御牧 물데야(Muldeya)와 함께 여성 한 명을 체포할 권리가 있으며, '御牧 물데야(Muldeya)와 승려 아난다에게 (諭令)을 내린다', '당신들이 이 楔形 泥封 목독을 받는 즉시 캅게야(Kapgeya)의 장원에서 이 여성을 체포해 칼라슈다(Kalaṣḍha)의 형제 아칠라(Acila)에게 돌려보내야 한다.'라고 기재되었다.⁴²⁾

상술한 권역을 종합해보면, 승려는 일정한 행정직을 가지고 있으며, 사회적 지위가 높고, 어느 정도 국가(또는 정부)의 대표로서 행정기능을 수행하고 있음을 보여주고 있다.

상술한 서술을 통해 우리에게 3~5세기 선선 왕국의 승려들이 일상적인 사회생활에서 활발히 활동했다는 인상을 줄 수 있다. 승려들의 이런 세속적 생활상은 3~5세기 선선 왕국의 풍부한 사회생활을 더욱 생생하게 보여주는 것으로, 이 시기 선선 왕국의 독특한 사회상을 보여주고 있다.

II. 선선 왕국 승려의 생활 세속화된 이유

3~5세기 선선 왕국 승려들의 이런 세속적 사회활동은 일반적 전통인상에 비친 승려의 이미지와 사뭇 다른 양상을 띠고 있으며 이 시기 선선 승려의 삶을 세속화시킨 이유가 뭘까 하는 의문이 들게 된다.

35) T·巴羅, 앞책, p.164.

36) T·巴羅, 앞책, p.165.

37) T·巴羅, 앞책, p.151.

38) T·巴羅, 앞책, p.178.

39) T·巴羅, 앞책, p.87.

40) T·巴羅, 앞책, p.54.

41) 林梅村, 앞책, p.315.

42) 林梅村, 앞책, p.147.

1. ‘地沙鹵，少田，寄田仰穀旁國’... 사원은 승려 집단의 급식문제를 해결하기 힘들다

『漢書』에는 선선 왕국에 대해 ‘地沙鹵，少田，寄田仰穀旁國.’이라고 기록돼 있다⁴³⁾. 『佛國記』에 말하기를 ‘其地崎嶇薄瘠’라고 했다.⁴⁴⁾ 『魏書』에는 선선 왕국이 ‘地沙鹵，少水草，北即白龍堆路’라고 기록되어 있다.⁴⁵⁾ ‘沙則流漫，聚散隨風，人行無跡，遂多迷路。四遠茫茫，莫知所指，是以往來者聚遺骸以記之。乏水草，多熱風。風起則人畜昏迷，因以成病.’⁴⁶⁾ 선선 왕국은 자연생태 조건이 열악하고 가뭄과 비가 적게 오는 기후와 토지의 사막화, 척박함으로 농업생산에 적합하지 않아 생존환경이 열악하다는 것을 알 수 있다. ‘地沙鹵，少田，寄田仰穀旁國’은 국내에서 경작할 수 있는 토지가 부족하고 식량 공급이 제한되어 있어 자국의 수요를 효과적으로 충족시키지 못한다는 것을 보여준다. 그러나 이 경우에도 일정한 식량을 야강(婁羌)에게 공급해야 하는데, 이것은 婁羌이 ‘鄯善과 且末으로부터 곡식을 받기’(仰鄯善、且末穀) 때문이다.⁴⁷⁾ 이런 어려운 생존 상황에서 국내 인구 수요를 감당하기에는 식량 공급에 대한 심각한 도전과 상당한 압박이 따랐다.

인구의 식사(끼니) 문제를 해결하는 것은 인간이 생존하기 위한 가장 중요한 필수 조건이다. 실제 상황으로 보면, 선선 왕국의 열악한 자연환경의 영향으로 울퉁불퉁하고 척박한 땅, 사막화, 경작지 부족, 수자원의 부족과 같은 현실에서 불교사원이 집단거주 승려들의 끼니를 해결하기는 쉽지 않아 집단승려들의 식량 문제를 해결할 충분한 식량을 제공하기는 쉽지 않다.⁴⁸⁾ 따라서 승려들은 스스로 살길을 모색해야 하고, 사회 사무적 활동에 폭넓게 참여해 살길을 찾고, 개인의 끼니를 스스로 해결하는 것이 필연적인 선택이 될 수밖에 없다.

2. 호주(세대주)로서 가족을 먹여 살려야 할 책임을 지고, 생계를 도모함으로써 기본적인 생존문제를 해결함.

상술한 내용처럼 사찰은 집단승려의 끼니를 감당하기 어려우니 스스로 식사를 해결해야 한다. 이러한 상황에서 승려들도 집단생활이 아닌 각자의 집안을 꾸리고 살게 되고, 나아가 가정을 꾸리게 되는 것이 순리이며, 혼인해서 아이를 낳게 되는 것(혹은 입양 자녀)이 가정을 꾸리게 되는 것도 정상적인 일이었다. 가족을 먹여 살리고 기본적인 생존을 위해 호주인 승려들도 일반 백성들과 마찬가지로 세속적인 활동을 하며 생계를 꾸려나가기 위해서는 세속적인 사회생활에 동참해야 한다. 또한, 국가에 세금을 내야 하는 의무도 있다. 따라서 승려가 일정한 사유재산을 소유하는 것은 놀랄 만한 일이 아니다. 일상생활의 문제 및 세금 문제의 해결은 승려 자신의 노고와 노력에 의존해 토지 매입(549·655호 문서)⁴⁹⁾이나, 토지 매각(582호 문서)⁵⁰⁾이나 농경지·포도원 저당잡기(473호 문서)⁵¹⁾는 물론 인신매매(437⁵²⁾·564호 문서⁵³⁾ 등

43) (東漢)班固, 『漢書·西域傳』, 卷96上, (北京)中華書局, 1962, pp.3875-3876.

44) (東晉)法顯, 『佛國記』, 章巽校注, (北京)商務印書館, 2016, 1月, p.40.

45) (北齊)魏收, 『魏書·列傳』, 卷102補, (北京)中華書局, 1974, p.2261.

46) (唐)玄奘·辯機, 『大唐西域記』, 董志翹譯, (北京)中華書局, 2014, p.470.

47) (東漢)班固, 『漢書·西域傳』, 卷96上, (北京)中華書局, 1962, p.3875.

48) 사원에서 승려의 급식을 제공하지 않다는 상황에 관해 郝春文의 『唐後期五代宋初敦煌僧尼의 社會生活』(北京, 中國社會科學出版社, 1998) 참조.

49) T·巴羅, 앞책, p.141、174.

50) T·巴羅, 앞책, p.155.

51) 林梅村, 앞책, p.118.

52) T·巴羅, 앞책, pp.116-117.

53) 林梅村, 앞책, p.138.

세속적 경제활동에 적극적으로 참여하고 있다. 그렇지 않으면 사회적으로 발붙일 수 없고, 358호 문서에 나오는 승려가 남의 종으로 전락한 경우가 이를 말해 주고 있다.⁵⁴⁾

이처럼 어려운 생존환경, 자신 또는 가족의 기본생활을 위해서는 호주 신분인 승려가 적극적으로 살길을 모색해야 하고, 각종 경제무역 교류에 참여하는 것이 세속적 사회생활의 대표적인 특징 중의 하나이다. 현실 환경의 압박에 따른 불가피한 선택이었다.

위진(魏晉) 시기에 선선 승려의 세속 거가(居家) 생활방식은 훗날 불교 승려의 생활에 큰 영향을 미쳤고, 심지어 당나라 말기 5대까지 돈황(敦煌) 승려도 어느 정도 이러한 영향을 받아 거가 수행 생활을 하였다.⁵⁵⁾ 많은 돈황 문헌에는 8-10세기 돈황의 승려가 집에서 살았을 뿐 아니라 대부분 스스로 노동을 하며 생활했다는 승려의 세속화된 생활상이 담겨 있다.⁵⁶⁾ 돈황 문헌에는 사원 외의 집에서 먹고 사는 승려를 ‘산중(散衆)’이라고 부르기도 한다. 따라서 해당 시기 선선 승려의 세속적인 생활을 이해할 수 있다.

3. 선선은 실크로드 연선의 길목에 위치하여 경제무역 활동 왕래가 빈번함.

‘선선 왕국의 원래 국명은 樓蘭이었다(鄯善國, 本名樓蘭)’.⁵⁷⁾ 한나라 초기에 누란은 실크로드의 길목에서 중요한 오아시스 도시국가이었다. 돈황(敦煌)을 떠나 서역으로 들어가는 첫 번째 입구이자 실크로드의 첫 번째 역이자 이곳을 통해 중앙아시아로 확장되는 관문이며, 동시에 서역과 중원지역을 연결하는 중요한 교통 중심지이었다. 스타인은 ‘루란 동쪽의 시작점은 보루가 있는 변성(邊城)인데, 고대 중국 사서에는 이곳을 옥문관(玉門關)이라고 불렀다. 옥문이라는 이름은 于闐의 미옥(美玉)에서 시작되었으며, 和闐의 옥은 예로부터 오늘날까지 타림 분지에서 중국으로 수출된 중요한 상품이다’라고 말하였다.⁵⁸⁾ 선선은 중원에서 텐산 남쪽 길로 가는 두 길 중에 남도 연도의 중요한 역 중의 하나로, 『한서(漢書)』에 이와 같은 기록이 있었다. ‘옥문(玉門)과 양관(陽關)에서 서역(西域)으로 나가는 두 길이 있다. 선선에서 남산 북면을 따라 타림(塔里木)강을 따라 西行하여 사차(莎車)까지는 南道이다; 남도에서 서쪽으로 葱嶺을 넘어 대월씨(大月氏)와 安息까지 도착할 수 있다. 차전왕정에서 북산 남면을 따라 타림강을 따라 서행(西行)에서 소록(疏勒)까지 가는 길은 北道이다. 북도에서 서쪽으로 葱嶺을 넘어 大宛, 康居, 奄蔡까지 이르는 길이었다.’고 말했다.⁵⁹⁾

선선은 교통의 요충지에 위치하며, ‘루란 선선에서 북상하거나 서행하면 서아시아, 중앙아시아, 및 남아시아 지역으로 통할 수 있다’,⁶⁰⁾ 이것은 옛 실크로드의 중요한 역참이자 지나가는 상인들이 무역하는 집산지이었다. ‘고대 루란-선선 왕국은 고대 실크로드의 필수 통과지점에 있었고, 실크로드를 오가는 동서양의 사자와 상단, 승려들이 모두 이곳을 지나야 했다. 옛 실크로드의 길은 멀고 수천 킬로미터에 달하기 때문에 이 실크로드를 오가는 여객들은 연도 각 국으로부터 구간마다 길 안내, 낙타, 물과 식량, 심지어 수위 인원까지 받아야 했다’라고 말했다.⁶¹⁾ 이와 같은 상황으로 알 수 있는 것은 옛 실크로드에 있는 선선 왕국이 매우 중요한 교

54) 林梅村, 앞책, p.100.

55) 郝春文, 「唐後期五代宋初敦煌僧尼的生活方式」, 『郝春文敦煌學論集』, (上海)上海古籍出版社, 2010, pp.21-72.

56) 石小英, 「淺析8至10世紀敦煌尼僧居家生活」, 『宗教學研究』, 2016, 第2期, p.98.

57) (東漢)班固, 『漢書·西域傳』, 卷96上, 北京:中華書局, 1962, p.3875.

58) (英)斯坦因, 『斯坦因西域考古記』, 向達 譯, (北京)中華書局, 1987, p.118.

59) (東漢)班固, 『漢書·西域傳』, 卷96上, ‘自玉門、陽關出西域有兩道。從鄯善傍南山北, 波河西行至莎車, 爲南道; 南道西逾葱嶺, 則出大月氏、安息。自車師前王庭隨北山波河西行至疏勒, 爲北道; 北道西逾葱嶺則出大宛、康居、奄蔡焉。’ (北京)中華書局, 1962, p.3872.

60) 李菁, 『古樓蘭鄯善藝術綜論』, (北京)中華書局, 2005, p.41.

61) 穆舜英, 『神秘的古城樓蘭』, (烏魯木齊)新疆人民出版社, 1987, p.119.

통의 지리 위치를 차지고 있으며 왕래하는 사람 및 경제무역 교류 활동은 활발했음을 알 수 있다. 이러한 사회 환경의 영향으로 승려들은 번잡한 속세의 생활 분위기 속에서 세속적인 생활 속에서 빈번한 경제무역의 왕래가 미친 영향을 피할 수 없다는 것은 인정과 도리에 맞는 일이었다.

4. 국가 상층 지배계층의 거시 관리에서 사회 현실로의 타협과 조화

승려 세속화 생활의 형성은 국가 지배층이 선선 왕국에 대한 현실 상황에 기초한 것이며, 거시적인 관리 차원에서 현실사회를 향한 일종의 타협과 조화로 국가발전을 도모하는 것이었다.

1. 정부 재정 수입을 늘리기 위한 세수 공급원의 확대

서한 시기에 선선 왕국의 ‘가구 수는 1,570호, 인구수는 4,100명’이었다.⁶²⁾ 442년에 이르러 “선선의 왕 比龍이 4,000여 호를 인솔해 이동하는 것은 선선이 점령되기 때문이다.”⁶³⁾ 또한, “比龍이 인솔한 4,000여 호는 선선 왕국 인구의 절반이기 때문에, 당시 선선 왕국에 약 8,000여 호의 가구가 있었다는 것을 추정할 수 있다.”⁶⁴⁾ 비록 이 시기의 인구는 증가했지만 총 인구수는 여전히 제한적이었다. 법현이 인도에 가서 불경을 구하는 길에 선선 왕국을 거쳐 지나갈 때 선선에는 ‘4천여 명의 승려가 있으며, 모두 소승학에 속한다.’라고 하였는데,⁶⁵⁾ 이는 선선에는 ‘평균적으로 두 집마다 한 승려가 있고, 현지 인구의 10%를 차지한다.’라는 것을 의미한다.⁶⁶⁾ 이러한 추세는 상당히 충격적이다. ‘중국 승려계의 실제 수(진정한 출가(出家)를 직업으로 삼아 생활하는 인원을 포함해 모든 사람)는 지금까지 중국 인구의 극히 일부에 불과했고, 그 수가 (현재까지 않은 변화까지 포함해) 늘 1%를 달하지 못한다.’⁶⁷⁾ 이것은 선선 승려가 전체 인구 중의 큰 비율을 차지하고 있음을 보여준다. 이러한 상황은 국가의 재정 수입에 심각한 영향을 미치며, 이대로 가면 국가 전체의 발전에 도움이 되지 않는다. 따라서 국가 차원에서 승려가 아내를 맞이하여 아이를 낳아 세속적인 가정생활을 할 수 있도록 하고 세원을 넓혀 안정적인 세금수입을 유지하도록 허용하였다. 양푸췌(楊富學)선생은 ‘선선 왕국 승려가 장가들어 아이를 낳을 수 있는 것은 국가의 지지와 장려를 받은 것으로 인구를 늘리는 동시에 승려 자체가 납세자가 되어 정부의 세원을 넓힌 역할을 하였다는 가능성이 크다’고 지적한 바 있다.⁶⁸⁾ 이와 같은 선선의 지배계층의 조치는 일석이조의 역할로 국가의 안정적 발전을 도모했다.

2. 기본 인구수를 유지하고, 전쟁 준비를 위해 충분한 병력을 확보함.

서한 시기에 선선은 인구는 ‘14,100명’인데, 그중에 ‘군사가 2,912명’이었다.⁶⁹⁾ 선선의 인구에서 군인이 차지하는 비중이 높다는 것은 선선 왕국이 군사력을 중시하고 있음을 보여준다.

62) (東漢)班固, 『漢書·西域傳』, 卷96上, (北京)中華書局, 1962, p.3875.

63) (梁)沈約, 『宋書·氏胡傳』, 卷98, (北京)中華書局, 1974, p.2417.

64) 夏雷鳴, 「從法顯文書看鄯善國僧人的社會生活——兼談晚唐至宋敦煌世俗佛教的發端」, 『絲綢之路民族古文字與文化學術討論會文集』, (西安)三秦出版社, 2007, p.101.

65) (東晉)法顯, 『佛國記』, 章巽校注, (北京)商務印書館, 2016, p.41.

66) 夏雷鳴, 「從法顯文書看鄯善國僧人的社會生活——兼談晚唐至宋敦煌世俗佛教的發端」, 『絲綢之路民族古文字與文化學術討論會文集』, (西安)三秦出版社, 2007, p.101.

67) (法)謝和耐, 『中國5—10世紀的寺院經濟』, 耿昇 譯, (上海)上海古籍出版社, 2004, p.18.

68) 楊富學, 「論鄯善國出家人的居家生活」, 『敦煌學』, 第27輯, (台北)南華大學敦煌學研究中心, 2008, p.221.

69) (東漢)班固, 『漢書·西域傳』, 卷96上, (北京)中華書局, 1962, p.3875.

이는 선선 외부 환경으로부터의 심각한 위협과 밀접한 관련이 있다. 카로슈티 272호문서는 ‘짐이 국사를 처리할 때 당신은 반드시 밤낮으로 국사를 돌보고, 목숨을 아끼지 않고 경계해야 한다. 만약 扞闐, 於闐에서 무슨 소식이 오면, 당신은 짐, 위대한 임금 폐하께 아뢰어야 하며, 당신의 보고는 督軍 북토(Vukto, 伏陀)에게 보내 짐에게 전달하게 한다. 짐, 위대한 임금은 보고에서 모든 것을 파악할 수 있다. 지난해 수피 (Supi, 蘇毗)의 심각한 위협으로 인해 국경 안에 있던 백성들을 모두 성안으로 대피시켰고, 수피인(蘇毗人)은 지금 이미 철수했기 때문에 백성들이 옛날에 살았던 곳으로 돌아가야 한다. 각 州의 형세는 이미 완화된 것이고, 현재 각 州는 이미 안정화되어, 於闐의 침공으로부터 자유로워졌다. 현재 라웃가임치(lautgaimci, 勞特伽) 지방의 사람에 대해 등록을 해야 하고, 이 성은 여전히 방어해야 한다.’⁷⁰⁾ 그만큼 선선은 주변의 다른 세력으로부터 습격을 많이 받았으며, 특히 蘇毗인의 위협이 비교적 심각했다는 것을 보여준다. 국가의 안전을 수호하기 위해서 선선은 반드시 국가의 군사력을 강화하고 일정한 병력 수량을 확보하여 전쟁의 수요에 대비해야 한다.

선선 왕국 불교의 영향으로 더 많은 남자가 출가하여 승려가 되며 일정한 수준에 병력 인원의 수에 영향을 미쳐 자국의 국방 군대의 역량이 약화되었다. 따라서 선선의 기본 국정에 입각하여 국가발전의 전반을 고려하여 선선의 지배층은 승려의 관리 방식부터 착수하여 일반 백성들과 똑같이 아내를 맞이하여 아이를 낳거나(혹은 자녀를 입양하여) 가업을 이루며 세속적인 가정생활을 할 수 있도록 하고, 사회경제적 활동에 적극적으로 나서도록 하였다. 이는 자국의 기본적인 인구 확보와 군사력의 부족을 해소하는 데 효과적이며 국방을 공고히 하고 국가안보를 시키는 데 긍정적인 역할을 하였다.

이처럼 선선 승려의 세속적 생활화의 원인을 분석한 결과를 통해 알 수 있는 것은 이 중에 다음과 같은 논리적 관계가 존재한 것이다. 즉, 지역 자연생태환경 조건의 영향과 제약으로 인해 선선 지역에서 농업의 발전이 일정 부분 제한되는 논리적 관계가 내재되어 있다. 선선 승려는 생존의 길을 해결하고 기본적인 생활을 유지하기 위해 입세의 자세로 세속 사회생활에 적극적으로 참여하였다. 세속사회에서 승려들은 자신과 그 가족의 발전을 위해 각종 경제무역 활동에 광범위하게 참여하고 있었다. 반면 지배계층은 국가의 현실적 국정 상황에 대한 우려에 따라 국가의 발전 욕구를 지키고 국가의 안정적 발전을 보장한다는 기조 차원에서 거시적 관리 측면에서 승려가 세속적 생활을 할 수 있도록 허용한 것이다. 이에 따라 국가 세입원 확대와 기초인구 증가를 일정 부분에서 유지함으로써 인적·물적 측면에서 안정적 국가발전과 국가 기계 정상가동을 효과적으로 보장받을 수 있게 된 것이다. 이와 같은 조치를 통해 사회의 안정적 발전과 국가의 장기적 발전을 서로 촉진하여 사회를 끊임없이 발전시켰다.

Ⅲ. 선선 승려의 세속생활에서 반영된 선선 불교 발전 상황

승려들의 일련의 세속생활에서 보듯이 승려들은 불교도라는 신분을 제외하고는 일반 대중과 큰 차이가 없는 듯 입세(入世)의 자세로 사회 속사에 적극적으로 녹아들었다. 이는 3~5세기 선선 왕국의 승려 사회생활을 객관적으로 보여주는 것이며 이 시기 승려 집단이 가진 전형적인 특징 중의 하나이다. 이 시기 선선 왕국 불교의 발전 양상을 어느 정도 보여주는 대목이다.

70) 林梅村, 앞책, p.81-82.

1. 불교의 세속화 발전

선선 불교는 결코 본토 문화에서 비롯된 것이 아니다. ‘쿠산(Kushan, 貴霜)왕조의 이민자들이 로프노르(Lop Nor) 지역으로 내려올 때 본래 불교와 불교 예술을 함께 가져왔다’라는 것이다.⁷¹⁾ 불교는 처음 서역으로 전입될 때 ‘처음부터 불교의 근원적인 서양적 색채를 띠고 있었다.’⁷²⁾ 그러나 불교는 외래문화로서 선선으로 처음 전파될 때 진심으로 선선이라는 땅에 뿌리를 내리고 발전하려는 목적으로 현지 문화 시스템에 적응해야 했고, ‘불교 세속화는 처음부터 있었던 것이며, 중국에 들어온 후 새로 출현한 특징적인 현상이 아니다.’⁷³⁾ 이러한 불교는 전파와 발전하는 과정에서 끊임없이 변화하고 조절하여 그 지역의 문화적 욕구와 지방에 적극적으로 녹아들도록 했다. 따라서 현지의 사회 발전 특징과 융합하는 세속화 경향을 보일 수밖에 없다. 夏雷鳴선생의 지적에 의해, ‘불교가 서역에 뿌리를 내리고 세속사회 환경에 놓인 지리적 여건, 풍속관습, 정치 주장, 인문사상, 도덕 관념 등에 영합할 수밖에 없는 만큼 불교 세속화의 전체적인 흐름은 막을 수 없었다.’⁷⁴⁾

불교는 그 전파 과정에서 세속사회의 구조와 상호작용의 원리를 비교적 잘 이해하고, 사찰 조직의 각종 불사를 통해 소통하고, 사찰과 세속사회의 상호작용을 조절함으로써 다양한 지역의 실정에 적응하여 본토에 정착하도록 대중 신앙을 얻을 수 있는 토대를 마련하였다. 선선 ‘욕불(浴)佛’ 활동 방식의 변화는 선선 지역에서 불교의 세속적 발전 특징을 잘 보여준다. 카로슈티 511호 문서에는 이와 같은 정황을 상세하게 기록하였다.⁷⁵⁾ 夏雷鳴선생은 이에 대해 “욕불방법은 ‘形’이고, 욕불의 목적은 ‘神’이면, 선선 왕국 浴佛法會則의 ‘形’은 변하고, ‘神’이 변하지 않으며, 선선의 지역적 특성에 맞는 ‘형신구비’가 형성된 것이다”라고 지적하였다.⁷⁶⁾ 또한, 511호 문서는 ‘욕불’ 시에 종교이념에 대한 느낌과 체험, 정신적 승화 경계에 깊이 몰입하는 수요를 바로 현실 세계의 수요로 교체해, 즉, 因陀羅에게 빗물의 증가와 피부 질환을 앓지 않은 요구를 하였다’라고 기록하였다.⁷⁷⁾ 이는 선선에서 불교가 선선 왕국에의 세속화 발전 상황은 현실적 수요를 충족시키는 데 직접적인 목적을 두고 있음을 알 수 있다.

선선 불교는 전파 발전 과정에서 선선의 사회 현실과 밀접하게 결합해 선명한 세속화 특징을 지니게 되며 훗날 중국 불교의 발전에 중요 영향을 미치며, ‘돈황의 불교 세속화는 선선 세속불교가 동점한 결과이다’.⁷⁸⁾ 따라서 선선 불교의 세속화는 불교가 중국에서 발전하는 데에 있어서 세속화하는 총체적인 흐름을 만들어주었고, 이것은 불교가 성장할 수 있었던 뿌리가 됐다고 할 수 있다.

2. 불교 관리상의 느슨함

불교는 발전 과정에서 필연적으로 교인의 행위를 단속하기 위한 법규와 계조가 형성될 것이다. 그러나 선선 승려의 일련의 세속 생활은 선선 왕국의 느슨한 불교 관리 양상을 보여주고

71) 王嶸, 『塔里木河傳』, (保定)河北大學出版社, 2009, p.75.

72) 王嶸, 앞책, p.75.

73) 夏雷鳴, 「從佉盧文文書看鄯善國僧人的社會生活——兼談晚唐至宋敦煌世俗佛教的發端」, 『絲綢之路民族古文字與文化學術討論會會議論文集』, p.102.

74) 楊富學, 「論鄯善國出家人的居家生活」, 『敦煌學』(第27輯), (台北)南華大學敦煌學研究中心, 2008, p.220.

75) T·巴羅, 『新疆出土佉盧文殘卷譯文集』, 王廣智譯, (烏魯木齊)中國科學院新疆分院民族所印, 1965年, pp.130-131.

76) 夏雷鳴, 「從“浴佛”看印度佛教在鄯善國的嬗變」, 『西域研究』, 2000, 第2期, p.48.

77) 夏雷鳴, 앞문, p.50.

78) 夏雷鳴, 「從佉盧文文書看鄯善國僧人的社會生活——兼談晚唐至宋敦煌世俗佛教的發端」, 『絲綢之路民族古文字與文化學術討論會會議論文集』, 西安: 三秦出版社, 2007, p. 103.

있다.

우선, 불교의 계율체제가 정착되지 않았다. 불교가 선선에 전입되는 기간이 비교적 짧아서 어떻게 짧은 기간에 널리 퍼질 수 있는지, 신중(信衆)의 기반을 넓히고 선선에 뿌리를 내릴 수 있는지는 급히 해결해야 할 숙제이었다. 그리고 그 전파의 발전 과정에는 신도를 확보하는 것이 정착하는 데에 있어서 최우선적인 조건이 되었다. 이에 불교 계율의 구축 혹은 완비되는 것이 그다음의 문제이다. 따라서 선선 불교를 발전시키는 과정에서 많은 규범의 제한과 구속 받지 않고 승려에 대한 관리가 느슨하며 선선 불교의 대중적 기반을 다졌다. 선선 왕국이 직면한 현실을 보면 불교의 계율 신조를 지키느냐 마느냐도 현실의 생존환경에서 크게 중요하지 않았다. 이것은 이 시기 선선 불교의 계율이 형성되기 어려운 요인이 되기도 했다. 楊富學 선생은 선선국은 5세기 중엽에 멸망했을 때 불교의 계율체제가 갖춰지지 않았으며 적어도 완비되지 못한 상태이었다고 지적하였다.⁷⁹⁾

둘째, 불교 계율의 추진은 불교의 전파와 발전보다 정체되어있다. 모든(각종) 사상의 전파는 항상 제도체계의 정립과 보완보다 앞서는데 불교의 전파도 마찬가지다. 불교는 외래문화로서 선선 지역에 전파될 때 관련된 모든 요소가 한꺼번에 들어오는 것은 아니다. 이와 관련된 경전 교율 계조 등은 서서히 스며드는데 시간이 걸리고, 이는 시간적 과정이 필요하고 ‘불교 계율의 추진은 항상 불교의 유행보다 늦어지는 사례가 많다.’⁸⁰⁾ 이는 불교 전파 과정에서 이 지역에 먼저 뿌리를 내려야 하는 전파의 특성과 밀접한 관련이 있다. 관련 규제의 형성 과정 중에 반드시 여건이 부족으로 인해 혼란을 겪게 마련이다. 사실은 그렇다. 오늘날 세계에서 그 어떠한 문화의 유행처럼 주류 문화 추세가 형성된 후에 그에 맞는 각종 규제 등이 점차 형성될 수 있는 것이다.

유의해야 하는 것은 선선 왕국 승려의 세속화 생활도 불교 ‘세속성’의 발전 특성과 관리상의 이완 등의 영향을 받았고, 불교 자체가 선선 왕국에서의 전파 발전 특성과 밀접한 관련이 있다.

3. 불교와 왕권정치의 상호작용 발전

법현이 서쪽으로 법경을 구하러 가는데 도중에 선선을 거쳐 선선의 불교 신앙에 대해서 다음과 같이 기록하였다. ‘그 임금은 법을 받들며, 4천여 명의 승려가 있고, 소승학(小乘學)이다’라고 적었다.⁸¹⁾ 이는 선선 왕국에는 불교가 크게 유행하고 승려가 많았음을 알 수 있다. 국왕은 최고 통치자로서 불교를 믿으며 불교의 전파와 발전에 선도적인 역할을 하였다. 또한, 국왕은 직접 중대 법회에 참석하여 불교를 이용하여 민중을 교화하였다. 511호 문서에는 ‘가나스(Ganas)의 최고 임금, 장로 및 중소 승려가 도착하지 않았을 때는 봉급을 받는 자에게 응당한 사례금을 받게 하고, 그들이 도착했을 때는 영생과 교화를 얻게 한다.’라는 내용이 있다.⁸²⁾ 이것으로 불교는 선선 왕국의 상부구조의 중요한 구성 부분이 된 것이 분명하며, 그 교화 작용은 국가통제를 강화하고 국가 정권을 공고히 하는 중요한 수단이 되었다는 것을 알 수 있다.

상당한 승려들은 실제로도 국가의 관리직으로 일정한 중요한 직책을 맡아 사회적인 일을 처리할 권리가 있다. 이것은 일부 승려가 정치적 지위가 높고 사회적 신망이 높다는 사실을 반

79) 楊富學, 「論鄯善國出家人的居家生活」, 『敦煌學』(第27輯), (台北)南華大學敦煌學研究中心, 2008, p.221.

80) 楊富學、徐燁, 「佉盧文書所見鄯善佛教研究」, 『五台山研究』, 2013, 第3期, p.6.

81) 章巽校注, 『法顯傳校注』, (上海)上海古籍出版社, 1985, p.7-8.

82) T·巴羅, 앞책, p.130.

영할 수 있다. 이들은 한편으로는 승려의 역할을 맡으면서도 다른 한편으로는 정부와 긴밀한 연계를 맺고 국가 경영진의 중요한 요원으로서 인간이 불교에 대한 신앙을 의지해 세속적 사무의 관리와 처리를 강화하고, 정신적으로 왕권에 봉사하고 있다.

선선 승려는 겉으로는 ‘믿음이 있고 계율이 없’는 것처럼 보이지만 실제로는 그렇지 않다. 승려도 일정한 직책을 맡아 권력을 행사하는 일부의 국가 ‘공무원’에 속하지만, 승려에 대한 국가의 관리는 어느 정도 하한선이 없는 것은 아니다. 승려들도 승려의 규정을 지켜야 하고 정기적으로 집회에 참석하고 일정 행사에 가사를 착용해 중요한 의식(행사) 느낌을 최대하게 표현하지 않으면 벌을 받도록 하며, ‘승려가 승계의 각종 행사에 참여하지 않으면 벌금으로 견사 한 필을 내야 한다. 승려가 포살(布薩 posadha) 의식에 참여하지 않으면 견사 한 필을 교부한다. 포살 의식에 초대된 승려는 속복을 입고 오면 견사 한 필의 벌금을 내야 한다’.⁸³⁾ 승려에게 가사는 신분의 상징이다. 승려의 가사를 훼손하는 행위에 대해서는 606호 문서에서 ‘지금 승려 아일라(Ayila, 阿夷羅)가 상주하고 있는데, 이름은 차디사에(Cadisaae, 左迪)라는 여성이 저쪽의 황가사(黃袈裟)를 불태웠다. 이 楔形 泥封 木牘을 받았을 때 즉시 이를 상세히 심리해 법대로 판결해야 한다’⁸⁴⁾라고 기록되었다. 이것은 불교 규정을 어긋나거나 승려의 이미지를 훼손하는 어떠한 나쁜 행위도 처벌받아야 하며, 이것은 선선 왕국의 상층 통치자들이 불교에 대한 존중과 존경을 반영할 수 있다. 이러한 요인에 의해 선선불교와 왕권정치 사이에 양적인 상호작용이 이루어졌다.

IV. 맺음말

3~5세기 선선 왕국 승인의 세속생활은 이 시기 선선 왕국 사회의 발전 양상을 독특하게 보여주고 있다. 선선 승려 생활의 세속화는 여러 가지 요인에 의해 영향을 받는데, 그 성인은 현실적이고 객관적인 요소의 제약이 있었고 주관적이고 인위적인 요소의 개입도 있었지만, 어떤 요인을 막론하고 3~5세기 선선 왕국의 사회 발전과 그 국가의 통치 특징을 나타내고 있다. 이러한 사회 분위기 속에서 지배계층의 사회 통치는 선선 불교의 광범위한 전파와 발전에 의존하여 끊임없이 교화함으로써 정신적인 영역에서 지배계층을 위해 봉사하고 민심을 안정시키기 위한 억제력을 강화하였다. 지배계층은 승려를 관대하게 관리하는 방식을 통해 일부 승려를 일정한 직책에 앉혀 사회적인 업무를 처리할 수 있도록 하였으며, 어느새 불교의 영향력이 확대되어 불교 신앙의 대중적 기반이 다져지게 되었다. 이것은 이후 불교 자체의 세속화 발전과 지배계층의 국가 지배에 중대한 영향을 미치고, 양자의 상호작용으로 사회를 발전시켜 나갔다. 이것은 훗날 둔황불교의 세속화 발전의 원천이 되었고, 중국 불교의 세속화 전반에 걸쳐 전파와 발전에 막대한 영향을 끼치고 있다.

83) T·巴羅, 앞책, p.124.

84) 林梅村, 앞책, p.141.

「新疆出土佉卢文书所見僧人世俗生活研究」에 대한 토론문

이지호(라이프치히대학교)

안녕하십니까? 리보 선생님께서 쓰신 신강 출토 카로슈티 문서에 보이는 승려의 세속 생활 연구 토론을 맡은 독일 라이프치히 대학교 박사과정 학생 이지호입니다. 귀한 자리에서 훌륭한 논문에 대한 토론을 맡게 되어 영광스럽게 생각합니다.

이 논문에서는 영국의 오렐 슈타인(Aurel Stein) 탐험대가 오늘날 신강 위구르 자치구에 해당하는 천산남로의 니야에서 발굴한 카로슈티 문서 자료를 주로 다루고 있습니다. 문서에 등장하는 당시의 지명은 차도타입니다. 이 문서들은 간다리어(Gāndhārī)를 카로슈티(Kharoṣṭhī) 문자를 사용하여 기록한 것으로 기원후 3세기에서 5세기 사이 이 지역에서 일어난 여러 법률적 문제에 대한 판결, 계약서 등이 주를 이룹니다. 본 논문은 문서자료에서 승려의 생활과 관련된 내용들을 발췌하고 정리한 1장과 이에 대하여 중국 측 역사서 등을 바탕으로 승려들이 세속적인 생활을 하게 된 이유를 살펴본 2장, 선선왕국 승려의 세속화 문제를 불교의 전파와 지역 문화의 맥락에서 살펴본 3장으로 이루어져 있습니다.

카로슈티 문서 원본은 현재 영국에 있기 때문에 서방에서도 꾸준히 이에 대해 연구하고 있습니다. T. 버로우(Burrow)가 일찍이 1940년대에 이 문서들을 번역한 이래 많은 학자들이 현재까지도 문서를 해석하는 작업을 하고 있습니다. 그러한 연유로 저는 이 논문의 2장에 해당하는 중국 역사서를 통한 해석을 주목하고 싶습니다. 니야가 속한 선선왕국의 경제적 정치적 문제점에 대하여 심도 있게 논하셨다는 점이 신선하고 중요한 의미가 있다고 생각했습니다. 또 중국이나 대만 쪽 자료를 많이 참고하셨는데, 이 또한 서방 학자들이 접하기 어렵기 때문에 학계에 도움이 되는 좋은 논문이었다고 생각합니다.

다만 조금 아쉬웠던 점은, 1차 자료인 문서 내용을 전하는데 오류가 있었다는 점입니다. 첫 번째로 358번 문서의 비하라발라(寺主, Viharavala)를 해석하는 문제입니다. 한 단어이지만, 학자들은 이 문서를 358번에서는 고유명사로, 489번 문서에서는 “사원을 감독하는 사람”으로 해석하고 있습니다. 선생님께서는 358번 문서의 비하라발라를 직책으로 해석하셨는데요, 학자들의 여러 논의에 대한 설명을 넣어주시면 좋을 것 같습니다. 같은 문서에 등장하는 시하다르마(獅法, Sihadarma)는 문맥상 승려일 수도 있을 것 같습니다. 그 다음으로, 문서에 별도로 승려라는 언급이 없는 사람을 승려라고 하신 부분이 있습니다. 보통 승려인 경우에는 문서에 “승려 아무개”라고 표시를 합니다. 그런데 358번 문서의 비하라발라의 경우에는 이름 앞에 “승려”라고 적혀있지 않습니다.

이제, 노비 계약서의 문구를 살펴보려고 합니다. 437번 문서를 해석하시면서 이 여자아이를 양녀로 들인 것인지 노비로 산 것인지 모르겠다고 하셨는데, 이미 아래에서 선생님께서 논하신 바와 같이 노비 계약서에 늘 등장하는 문구가 있습니다. 곧, “지금부터, 노비 주인 A는 노비에 대해서 이 노비에 대해서 원하는 대로 무엇이든 할 수 있다”라는 문구입니다. 이와 더불어

어 주로 등장하는 문구가 “노비 주인 A는 노비에 대한 모든 권한을 갖는다. 그를 때리거나 묶거나 팔거나 남에게 선물하거나, 교환하거나, 저당 잡히거나, 하고자 하는 대로 할 수 있다”입니다. 이 문구는 서기(司書, scribe) 람소차(羅沒索蹉, Ramšotsa)가 노비를 계약하는 카로슈티 문서 590번, 592번 문서와 소그드어로 작성된 노비 계약 문서에도 등장한 바가 있습니다.¹⁾ 590번 문서 해석에서 “눈을 멀게 하거나”라고 기록하신 부분은 버로우의 원문에서 “bind her 그녀를 묶거나”에 해당하는 부분입니다. 제 생각에는 버로우의 글을 한역한 분이 bind를 blind로 잘못 읽었는데 그것을 그대로 인용하셔서 오류가 생긴 것 같습니다. 참고로, 331번, 569번 등 입양 문서의 경우에는 보통 이와 달리 이 아이에 대해서는 입양부모가 아이를 친자식처럼 대해야 한다는 내용이 적혀 있습니다. 그래서 437번 문서에 등장하는 여자 아이는 노비가 맞다고 생각합니다.

한편 164번 문서에 대해서 사미세(沙彌稅)라고 해석하신 부분은 원문의 위치상 samarena라는 문구인데 이는 세금과 관련된 단어로 추정되고 있지만 정확한 뜻은 아직 밝혀지지 않았습니다. 참고로 사미라는 단어는 간다리어에서 śamaṇnera, śamanera, śramanera 등 비슷하기는 하지만 다른 글자로 시작합니다.

사소한 실수긴 하지만 252번 문서를 225번으로 쓰신 것도 있고, kutajadaga를 kutajiadaga로 쓰신 부분 등 철자가 틀린 부분이 있습니다. 추후에 출판하실 때는 카로슈티 문서 원문 로마자본과 영어 번역을 같이 참조하시면 좋겠습니다. 카로슈티 문서의 로마자 원문은 독일 뮌헨 대학교와 바이에른 주 학술원 소속 슈테판 바움스(Stefan Baums) 박사, 구드룬 멜처(Gudrun Melzer) 박사, 안드레아 술로셔(Andrea Schlosser) 박사의 간다리 프로젝트가 운영하는 웹사이트 <https://gandhari.org/catalog?section=documents>에 전부 기록되어 있습니다. 여기에는 간다리어 사전도 있습니다. 출판하시기 전에 문서 각각의 내용에 대하여 꼭 원문과 영어번역본을 직접 대조 확인하시면 좋을 것 같습니다.

앞서 사주(寺主)에 대해서 잠깐 이야기했습니다만, 寺主는 절을 후원하는 사람, 절의 주인을 가리키기도 합니다. 산스크리트어로는 이를 비하라스바민(vihārasvāmin)이라고 합니다. 이는 한 절을 후원하는 개인 또는 가족 단위의 후원자입니다. 이후 고창(高昌)에서도 麴寺, 張寺, 李寺, 郎中寺, 公主寺 등 개인이나 가족이 후원한 것으로 보이는 이름의 절들이 등장합니다.²⁾ 마리너 파드와(Mariner Padwa)는 니야에 사원은 없었지만, 승려들이 모여 살았던 것으로 추정되는 건물 유적 두 곳이 있었다고 지적하였습니다.³⁾ 선생님께서도 글에서 선선왕국의 국왕이 승려를 관리했다고 말씀해 주셨습니다. 그렇다면, 이것은 승려들을 관리하고 이들에게 영향을 미칠 수 있는 가장 큰 후원자가 국왕이었다는 뜻으로도 읽을 수 있을까요? 이곳이 경제적으로 어려워서 국왕 이외에는 작은 승려 공동체도 후원할 수 있는 사람이 없었다고 볼 수 있을까요? 이곳의 경제 상황에 대하여 조금 더 자세하게 설명해주시기 바랍니다.

- 1) 吉田豊, 森安孝夫, 新疆ウイグル自治区博物館, 1989, 「麴氏高昌国時代ソグド文女奴隷売買文書」, 『神戸市外国語大学外国学研究』 19, p. 7. <http://hdl.handle.net/11094/18715> (2021년 10월 26일 접속)
- 2) 왕신 Wang Xin, 2014, “Gaochang Buddhism and the Silk Road,” *International Journal of Korean History* 19-1, p. 33. <https://doi.org/10.22372/ijkh.2014.19.1.23> (2021년 10월 26일 접속)
- 3) Mariner Ezra Padwa, 2007, “An Archaic Fabric: Culture and Landscape in an Early Inner Asian Oasis (3rd–4th Century C. E. Niya),” Ph. D. Dissertation, Harvard University, p. 176.

한편, 3장에서는 당시에 계율이 잘 정립되지 않아서 선선왕국의 승려들이 세속적으로 생활하였을 것이라고 하셨습니다. 니야 유적에서 발굴된 문서 중 510번 문서는 아주 단편적으로나마 율장의 일부를 포함하고 있습니다. 언급하신 왕의 편지나 승려의 노란 가사를 태운 사건에 대한 문서도 당시 승려들이 포살 등 계율에 대하여 무지하지 않았을 가능성을 보여줍니다. 한 역 율장 경전들 또한 5세기에 번역된 것들이 많습니다. 이에 대하여 샘 밴샤익(Sam van Schaik)은 선선의 승려들이 율장을 알고 있었지만 지키지 않았으리라고 해석하였습니다.⁴⁾ 한편, 셰인 클라크(Shayne Clarke)의 최근 연구에 따르면 승려들의 계율에서 가족과 관련된 내용이 많이 등장하고, 승려들이 출가 이후에도 가족과 왕래하였을 가능성을 보여준다고 합니다. 예를 들면 앞서 언급하신 출가한 승려가 양녀를 혼인시키는 등의 행위와 관련해서 대중부(大衆部)의 『마하승기율(摩訶僧祇律)』에도 비록 잘못된 것을 꼬집는 사례이기는 하지만 비슷하게 출가 이후 자식을 혼인시키는 이야기가 나타난다는 것입니다.⁵⁾ 이런 점과 관련해서 선생님께서는 선선의 승려들이 세속화 된 데에 지역의 특수성과 불교 승단에 늘 존재한 승려 개인의 지계(持戒)의 어려움 중 무엇이 더 큰 영향을 미쳤다고 생각하십니까? 이에 대하여 어떻게 생각하시는지 조금 더 설명을 부탁드립니다.

풍부한 자료를 바탕으로 다양한 각도에서 문제를 다루어주신 좋은 글을 잘 읽었습니다. 리보 선생님께 다시 한 번 감사드립니다.

4) Sam van Schaik, 2014, "Married Monks: Buddhist Ideals and Practice in Kroraina." *South Asian Studies* 30-2, pp. 269-77. doi:10.1080/02666030.2014.962322.

5) Shayne Clarke, 2014, *Family Matters in Indian Buddhist Monasticisms*, Honolulu: University of Hawai'i Press, pp. 87-92. T 1425 《摩訶僧祇律》卷6:「復次佛住舍衛城,有二摩訶羅:一摩訶羅捨妻子出家,一摩訶羅捨婦女出家。各於人間遊行,來還舍衛城,共一房住。彼捨婦女者,便自念言:「我當還家看本婦女。」著入聚落衣,往到本家。其婦遙見摩訶羅來,即瞋恚言:「汝摩訶羅薄福無相,不能養活妻子,又避官役捨家遠走。女年長大,不得嫁處,今用來為?汝促還去。若不去者,當雙折汝脚。誰喜見汝?」時摩訶羅還本住處,如賈客失財,愁憂苦住。時捨婦兒出家者還家,亦復如是。共在一房住,捨兒出家者,少有智慧,語第二摩訶羅言:「長老!何故愁憂苦住?」答言:「長老!何須問是事?」又言:「必欲得知,云何我等二人共在一房,好惡之事而不相知?不向我說,更應語誰?」彼摩訶羅即廣說上事,捨兒摩訶羅言:「汝何足愁?我家亦爾。汝今知作方便不?汝可以女作我兒婦。」彼答言:「好。」爾時二摩訶羅俱得越比尼罪。是摩訶羅明日時到,著入聚落衣,各歸本家時。捨女者謂其婦言:「我為汝求得女婿。」婦即問言:「是誰家兒?」答言:「某家子。」捨男出家者謂其婦言:「我已為汝求得兒婦。」問言:「誰家女?」答言:「某家女。」作是語時,俱得偷蘭罪。時彼男女遊戲里巷,一摩訶羅語其女言:「此是汝婿。」第二摩訶羅語其兒言:「此是汝婦。」作是語時,俱得僧伽婆尸沙。時二摩訶羅展轉作婚姻已,各各歡喜,如貧得寶,更相愛敬,如兄如弟。」(CBETA 2021.Q3, T22, no. 1425, p. 275b18-c16) https://cbetaonline.dila.edu.tw/zh/T1425_006 (2021년 10월 26일 접속)

발표4

研究和學習越南漢字

喃字的資料

베트남 한자 쓰놈의

연구와 학습자료

研究和學習越南漢字喃字的資料

La Minh Hang(베트남 漢喃研究所)

位於漢字文化圈之中，越南受到漢文化多方面的影響：越南人用漢字漢文在生活各領域：用在外交和行政交涉，用在科舉，也用創作詩文等等。特別，借漢字及其部首越南人已造出喃字，形成了大量的喃籍。

漢喃書籍現存在越南國內外各個圖書館和藏書館。由於越南文化傳統知識皆用漢字喃字記載，想了解前人知識一定要領會漢喃書籍所記載的內容。本專題關注于4各問題：1/漢字，喃字及其書籍的概念，2/漢喃書籍大觀；3/喃字書籍簡介和4/學習漢字喃字的教材。

I. 引言

越南漢籍提及多領域：行政文件，醫學，軍事，教材和考題，詩文等內容。但，為記錄人名，地名和創作民族詩歌，越南人借用漢字及其部首造出喃字。從14世紀起，在越南並用兩種文字：漢字為國家的正統文字和喃字為民間的文字（只用記錄家譜，鄉譜，契約等內容）。

自十七世紀起，西方教士逗留越南講道，用漢字和喃字寫出聖經，聖傳，引起現代國語字之形成。這樣，越南文字共有三種：

(-) 漢字使用過程 (自第14世紀以前至今)

-----第14世紀-----第17世紀-----第19世紀-----至今-----→

(-) 喃字使用過程 (自第14世紀至今)

-----第14世紀-----第17世紀-----第19世紀-----至今-----→

(-) 國語字使用過程 (自第17世紀以前至今)

-----第14世紀-----第17世紀-----第19世紀-----至今-----→

本專題關注於漢字和喃字資料。從此找出漢字喃字教學之書，分析並指出此資料的數量和價值。本專題提及到：1/漢字，喃字及其書籍的概念；2/漢喃書籍大觀；3/喃字書籍簡介；和4/學習漢字喃字的教材。

II. 漢字，喃字及其書籍的概念

2.1. 漢字文化圈的方塊文字

為記錄越語，越南人已造出民族文字（即喃字）。借用和改變他國文字以造出自國文字不單純只是越南特有的現象。屬於漢字文化圈之國家和區域也借漢字，漢字部首和造字法，造出國家的文字，如：

和字： 衤 かみしも “裙子váy”

雫 しずく “水滴giọt nước”

壯字：主要為抄本，出現時期：12世紀（最早證據：大誦碑，862 年，唐朝）

越南少數民族岱字：Buon 𠵼“月”(班+月)；Tèngh 𠵼“上”(上+下)。

注意：以上所提文字系統中皆有漢借之類。如壯字：底 V: đáy, C: daej. 有"底"之義 (HV: đẽ, H: di3)；絲 V: tơ, C: sei. 有"系". (HV: ti, H: si1) 之義。

2.2. 漢字與喃字的差別

喃字書籍裏出現借漢字形，和不常用的漢字→喃字？漢字？→ 要分別漢字與喃字。大眾皆知：喃字構造有借用和自造兩大類 -->>> 漢字借用→為喃字，如下句的【才】和【命】皆為喃字：

𠵼𠵼𠵼𠵼𠵼𠵼

𠵼才𠵼命𠵼靠羅𠵼𠵼𠵼𠵼 (翹傳)

-->>> 認定：喃字的標誌：1/有沒有文字內部構造，2/有沒有遵守越語語法

→【才】【命】：為假借喃字。

2.3. 喃字書籍的定型類別

雖未曾成為國家的正式文字，但喃字真是越南文化部分之一。他的內容提及到社會生活多方面：哲學，宗教，政治，軍事，經濟，律法，曆史，教學，醫學，外交，藝術，文學等內容…

版本定型：紙板和刻板。紙板有寫版和印版：



圖1 白雲



圖2 大南國史演歌

刻在堅硬物體，如：刻在石頭（碑，山脈）金屬（銅書，銅鍾，銅磬）樹木（大字，對聯，家譜，木版）→現存在實地：佛寺，亭，廟宇，族堂等地…或刻在名勝古迹（山脈，坑，洞等等 …）

。

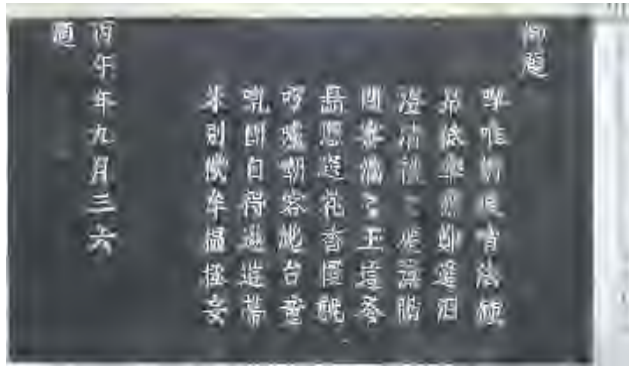


圖3：碑文，黎聖宗詩，刻在石頭



圖4



圖5

圖4和5：雲湖寺對聯，刻在瓦上



圖6

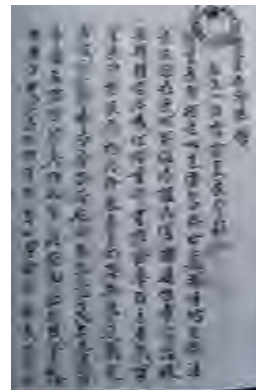


圖7

圖6和7：翁聖衣那樞傳，寫版，用鐵筆寫在紙上



圖8



圖9



圖10

圖8，9和10：寫在陶器。

III. 漢喃書籍大觀

3.1. 圖書館，藏書館和漢喃書籍總量

3.1.1. 圖書館和藏書館：漢喃書籍很多，現保管在各個藏書館：

保留多數漢喃書籍，有：漢喃研究所，越南國家圖書館，社會科學通信所，越南國家圖書館，國家保留中心（特別，第四庫國家保留中心正在保留多量漢喃資料。其中大量為阮朝皇帝寫的），文學所，歷史所。在國外，漢喃資料還被保存在法國，英國，美國，日本和中國等國家...

保留少數的，有：國內各座大學的圖書館(如人文社會科學大學-歷史系圖書館，化省師範大學)。各省的圖書館和博物館，如：海陽省綜合圖書館，河西省綜合圖書館(至今屬於河內市)等...也保存一些漢喃書籍。胡志明市天主教研究中心還保存很多關於天主教的漢喃資料。

除外，漢喃書籍還留在實地，在各座族堂。

3.1.2. 漢喃書籍總量：以上所提及到的藏書館之中，保留最多，最好的是漢喃研究所。按《越南漢喃遺產：數目提要》¹⁾(略《遺產提要》)漢喃書籍共有 5.038 作品(除外，還有30.000 縮微膠卷的資料²⁾)。這些作品，大部分屬於漢喃研究所的管理，其餘保留在法國。按陳義和 Francois Gros 教授：“此數量只占了含有漢喃資料的80%(1993:12)和“除了以上資料，還有從個地方剛搜集回來的729 版”(1993: 23, 此類還沒登記)。

《越南漢喃遺產：數目提要，補遺1》³⁾(略《遺產補遺》)已補充2.280 卷漢喃書籍，包含各內容：神敕(皇帝頒給各社祭祀神皇之版)，神跡(神皇事跡)，俗例(社村鄉法)，地簿(土地記錄版本)，古旨(有：公文，領旨，啟，奏，丁簿，田簿...)與社誌(社村地誌)。這樣，漢喃書籍總量為5038⁴⁾ + 2280 = 7318 作品⁵⁾。

3.2. 漢喃書籍分類和分庫

3.2.1. 漢喃書籍分類：漢喃書籍提及到多方面的領域。陳義和 Francois Gros 教授(1993:24)仔細分類《遺產提要》所記5.038作品的內容，結果：文學(2.500 作品)，歷史(1.000作品)，宗教(600作品)，文化教育(450作品)，政治社會(350作品)，醫藥學-衛生(300作品)，地理(300作品)，法制(250作品)，藝術(80作品)，經濟(70作品)，語言文字(60作品)，數學-物理學(50作品)，軍事國防(40作品)，還有一些作品提及到建築，農業，小工業等問題。其餘，一些書籍帶有綜合性：他提及到多方面的內容，因此同一個作品可屬於一，兩個小類。

據陳義教授的統計(2002:3-4),《遺產補遺》已補充很多書籍，具體：神敕(411 卷),神跡(568 卷),俗例(647卷),地簿(526卷),古旨(21卷)與社誌(107卷)。

以上兩部書目所統計的漢喃書籍總量，有5.038⁶⁾ + 2.280 = 7.318 作品⁷⁾；這真是研究越南文化，社會，醫藥學，技術科學的重要資料。

3.2.2. 漢喃書籍的分庫

*考察喃籍現狀的根據

按兩部書目《遺產提要》和《遺產補遺》所略述的內容，結果有：全喃籍(記載整體的喃字作品)

1) 法語名 *Catalogue Des Livres En Han Nom*, 中國語譯：越南漢喃遺產-書目提要。本書目統計了保存在漢喃研究所的資料。

2) 按陳義與 Francois Gros (1993: 24) : 30.000 資料單位是屬於漢喃研究所的，分為縮微膠卷與碑文副本。

3) 陳義(主編), *Di san Han Nom Viet Nam-Thu muc de yeu - Bo di 1*, Nxb Khoa học xã hội, Hanoi, 2002.

4)《遺產提要》(1993年)所提及到(還沒統計)的729 作品可能已出現在《遺產補遺》(2002年)。此考究，只根據兩部書目都統計的書籍。

5) 一作品可能有多異版。本論文只統計作品數量。

6) *Di san de yeu* (1993) 所提及到(還沒統計)的729 作品可能已出現在 *Di san Bo di* (2002)。這次考究，我們只根據兩部書目都統計的書籍。

7) 一個作品可能有多個異版。本論文只統計作品數量。

和雜寫喃籍（漢喃雜寫版本）。

書庫號碼：漢喃研究所書庫分別有：喃籍書庫帶有AN/AB/AC/VNb或 VNv的號碼；漢籍書庫帶有A/VHv 與 VHb 的號碼。

漢喃書庫現狀考察所得出的認定：

基本上，喃籍放置在喃籍書庫。但，有一些不遵守規則，如：《花箋潤正》，號碼VHb72 是六八詩律的喃傳；《左幼真傳遺書》，七言喃詩，號碼VHv782（VHb 與VHv皆為漢籍書庫號碼）⁸⁾。除外，漢越雙語詞典之內也不一貫，有部放置在漢籍書庫，有部放置在喃籍書庫，如：《南方名物備考》，號A155 與《指南備類》，號A1239（A：漢籍書庫的號碼）；反之，《嗣德聖制解義歌》，號AB5（AB：喃籍書庫的號碼）...這樣，分庫的標誌還沒弄清（按作品的來源還是按使用的文字）。但，這樣的誤解只是個別的。

本專題所收集的資料有全喃書籍和漢喃並用書籍。漢喃並用書籍有：1/在漢字作品里，上下文不只用一種語言，即遵守漢語語法的語段中有時插入喃字或越語語法的語段，和2/在漢字詩集中雜寫 1,2 首喃詩。

* 考察結果：

《遺產提要》搜集了漢喃研究所和法國遠東博古學院的書籍。本次只考察漢喃研究所的書庫。喃字書籍的分佈請看下表：

表1: 漢喃研究所的喃籍分佈

文字	漢喃研究所的書庫號碼													
	A	AB	AC	AD	AE	AF	AG	AH	AJ	AN	VHb	VHv	VNb	VNv
全喃	-	+	+	0	0	-	0	3	0	+	-	-	+	+
漢喃並用	+	0	0	-	-	-	-	-	0	0	+	+	0	0
漢	+	0	0	+	+	+	+	+	+	0	+	+	0	0

* 注: (+) 表示數量多; (-) 表示少數; AH 書庫記 3(即有三個少數民族的喃字作品)。

3.3. 喃字書籍簡介

與漢字和漢字文化的接觸過程可分別有三階段：接受→改變→創造。從喃字和喃字版本看，喃字造成之事屬於漢字接觸的第二階段。就是說：越南人不但只用漢字記載，創作詩歌（按漢詩律）（即接受階段）；繼續，借用漢字，漢字部首造出喃字（即改變階段）；最後，用創造出來的喃字創作詩文，記載勞動生產的經驗和技術科學等知識，形成了豐富的喃字書籍（創造階段）。

前輩學者還沒提出正確的喃籍數量。甚至，一直到現在，還沒提出保留在漢喃研究所的正確數量。橋秋獲教授寫曰“按研究者的初步統計，現存喃籍有1500 版本左右”。據呂明恆考察：漢喃研究所所藏的喃籍有1932 作品，占26,4% ⁹⁾。

表2: 保留在漢喃研究所的喃籍總量

8) 不據用在版本的文字。

9) 呂明恆 (La Minh Hang), 《20世紀前於越南漢字教學之考察, 漢字漢文教育》(Teaching Chinese Character in Vietnam before 20 century), 第三十七輯, 韓國, ISSN :1598-6160, 2015年5月, 120-135頁。

文字用在作品	調查資料		總量 (作品)
	遺產提要	遺產補遺	
全喃	1125	8	1133
漢喃並用	605	194	799
總量			1932

從上表看，用喃字寫的有1932作品，占漢喃研究所所藏書籍的26.4%。版本數量必然比作品數量多大（是因為一個作品有多異版）。此結果比現存喃籍總量（1500 版本）的傳言已超拔了。

據呂明恆考察：喃字書籍共有1932作品。其中，全喃：1133作品，漢喃並用799作品¹⁰⁾。

以上1932數額只算是紙版（刻印和抄寫）的作品，沒算刻在硬體的版本。這些資料（刻在銅，石，木等）現存很多。漢喃研究所里，這種副本被保留在另外書庫。杜氏碧選（2013:26）考察碑文副本藏庫并指出了喃字碑文副本的1500 版，其中全喃碑文共105版。

IV . 學習漢字喃字的教材

接受漢字漢文化之影響，越人已用漢字和喃字寫出不少內容豐富的作品。特別，第十九世紀起，為推進漢學之高峰，漢學教材和漢越雙語書順序問世。

4.1. 漢學教材分類：用於上學和不上學之教材

漢學教材分別有自學專用書和教科書。第二世紀，在越南，最初漢字講堂（學校）已成立。國子監成立后¹¹⁾，在國家，省，縣正式有漢學講堂。這樣，自第7至第11世紀初，出現多樣的漢學講堂：由師講之大小班¹²⁾和自學形班→漢學教材也分別，有：1、教學資料和2、自學資料。詳看下表：

表3：漢學資料之類別

秩序	書名	使用目的類別		內容類別
		不上學	上學	
1	《九章算法》		x	數學教科書
2	《幼學漢字新書》		x	漢字教科書
3	《漢字自學》 ¹³⁾	x		教漢字，分為10門：天氣，地與，人事，歷史...)
4	《啟童說約》		x	教社會科學知識，生物學，道理等
5	《詩運集要》		x	查韻部的音韻詞典
6	《字學求精歌》		x	漢字寫法教科書
7	《字學訓蒙》		x	漢語學手冊
8	《字典節錄》	x		據《康熙字典》收集罕見之字
9	《大南國語》	x		雙語詞典之代表

10) 呂明恆 (La Minh Hang)，韓國2015年，以上所引。實際上，喃字書籍還沒算刻在硬物的版本。此資料（刻在銅，石，木等）現存很多。漢喃研究所里，此種拓片被保留在另外書庫。杜氏壁選 (Đo Thi Bích Tuyen) (2014年26頁) 考察碑文拓片藏庫并指出喃字碑文拓片的1500 版，其中105版為全喃碑文拓片。

11) 第11世紀初國子監成立。1075 年在越南舉行第一科舉考試。

12) 一班甚至只有1位學生。

13) 《漢字自學》內容解釋漢字；書分為10門類：天氣，地與，人事，歷史等內容；它與雙語詞典構造相同。

4.2. 小學漢文教科書

越南中代期漢學教育分有：小學，中學和大學教育。小學教育（也叫“初學”或“幼學”¹⁴⁾）以漢文初入學徒為對象之教育。初學和開心學意思為開始（初期）學習之意，皆屬於小學級。



圖11 幼學漢文班¹⁵⁾

《三字經》為中國最初傳入并影響到越南的幼學漢文教科書¹⁶⁾。傳入之後《三字經》自有多改變。由此《三字經》諸版，特別據《三字經》文體和內容寫出新的小學



圖12 小孩練字¹⁷⁾

漢文教科書已次次編輯，如：1、文體影響有《聖教三字經》《女訓三字經》《蒙學越史三字教科》《漢學入門三字文》和 2、內容影響有《幼學文式》和《幼學漢字新書》¹⁸⁾等書。

現存在越南的小學漢文資料數多。據呂明恆考察，《遺產提要》¹⁹⁾越語A韻²⁰⁾里，小學漢文教科書有8作品，占A韻總數之14.54%。

表4：《遺產提要》A韻之小學級漢學教科書

秩序	書名	內容	注
1	幼學故事尋源	童幼之講課，內容：天文，年月，官職。親屬，身體，衣服，飲食，文章，科舉，人事，宮室。	VHv.2936,寫版：1942年，151頁,28 x15,5。
2	幼學對聯集	教童幼：創造對聯，詩，文等類的做法。	A.2241. MF1985.寫版：1879年，30頁，28 x 15。
3	幼學漢字新書	幼學教科書：第1冊開心教科書，第2冊修身教科書，第3冊：越南政治地理教科書，和第4冊：越南歷史教科書	VHv.1485：印版1908年，546頁，印15 x 21；VHv.1507：72頁，印16 x 22；VHv.2394, 240頁，印15 x 22；VHv.345, 80頁，寫15 x 22；VHv.346, 127頁，寫；VHv.469, 151頁，寫，16 x 27。
4	幼學五言詩	教普通知識（人類自然）的童幼之講課。正文	3印版，36頁，AB.230，

14) 阮俊強 (Nguyen Tuan Cuong) 從前越南小學漢文之教育：以“三字經”為中 (*Giao duc Han van bac tieu hoc tai Viet Nam thoi xua qua truong hop sach Tam tu kinh*)，河內，漢喃研究所，研究論文，2015年。

15) 圖1為Henri Oger之木刻影。

16) 據阮俊強，《三字經》傳入時點可為1820-1830年或1836年。參看阮俊強(Nguyen Tuan Cuong)：在國外“三字經”之傳入和改變 (*Luoc khao sach Tam tu kinh tai Trung Quoc va viec luu truyen ra nuoc ngoai*)，河內，詞典學和百科書雜誌，2015年5號，第19-27頁。

17) Henri Oger之木刻影。圖3：有喃四字，越語“小孩練字”之義。

18) 阮俊強 (Nguyen Tuan Cuong)：《“三字經”對古代越南漢文教材之影響》載《漢字研究》，韓國，2015第14輯，第53-71頁。

19) 陳義 (Tran Nghia) - Francois Gros編：越南漢喃遺產 - 數目提要《*Di san Han Nom Viet Nam-Thu muc de yeu ; Catalogue Des Livres En Han Nom*》，Hanoi, Éditions Sciences Sociales, 1993年，第一集：924頁，第二集：748頁，第三集：1254頁。

20)其他韻里，可以找出幼學漢書，如《啟童說約》《字學訓蒙》等。本人還沒統計其書目之整體。

		：用喃字解釋，一局5字	F.1928, VNb.62
5	幼學普通說約	關於道理，衛生，數學，物理，天文和地理等內容之童幼講課	VHv.64: 印版1908年，100頁，24 x 15； VHv.2937: 印版1908年，100頁，27 x 15。 A.892: 印版1908年，100頁，28 x 15。 VHv.468: 寫版1920年，130頁，27 x 16。
6	幼學說	各省召開學校情況，建立華省師範學校	VHv.617寫版（法語原版）1909年，42頁，30 x 18。
7	幼學文式	書有2部分：1、初學入門（6頁）和2、常用字眼（18頁）。為童幼漢學教科書。初學入門分別有：問答式，練字式，練句式等問題。	A.1144. 1印版1915年，26頁 ²¹⁾ ，23 x 13, 1.
8	幼學越史四字 ²²⁾	越南歷史的童幼講課，一句四字，有韻	VHv.31印版1907年，38頁，23 x 15。

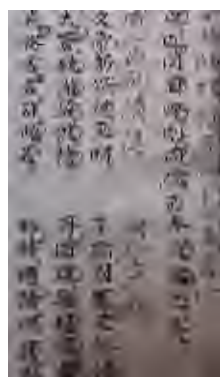
據上表《遺產提要》A韻里，小學級漢學教科書共有8作品（19異版），其8書可分為1、開心教科書（開心書用於漢學入門之人）和2、幼學教科書（用於完成漢學入門後之人）。《幼學漢字新書》為開心教科書；反之《幼學普通說約》屬於幼學教科書



照片13 《幼學對聯集》封面



照片14 《幼學對聯集》91頁



照片15 《幼學對聯集》65頁

《幼學漢字新書》講課內容：

a/短語和最簡句之講課；

例1：書曰“天地日月，天上地下，日晝月夜”→ 解釋：第1課講天地日月，其中，上和下為方位詞，指的是天和地的位置；

例2：書曰“星雲風雨，星見雲飛，風吹雨降”→ 解釋：第2課講星雲風雨：見，飛，吹和降皆為動詞。

b/句學講課

例3：第36課曰“家則有族，伯叔父母，從母之親，為我姨舅”。此課由1語4字之四短語構成，加以使用虛詞“則”成為整個完整的句子。

c/虛詞講課

例4書曰“梅必酸，桂必辛，糖必甘，桃則紅，柳則綠，菊則黃”→可見：事物及其性質可連成簡單三字句，其中“必”和“則”為虛詞，帶有連接之功能。

21)《遺產提要》誤記：“書有36頁？”

22)參看漢喃研究所所藏《小學書》，號VHv.1259，自61頁。

4.3. 據雙語詞典學和講漢字喃字

以為學習漢字，喃字及其知識有《撫邊雜錄》《雲臺類語》和“輿地”“記”“志”類書以及雙語詞典。講課和教學過程中此類漢字工具書為不可缺少之教程。特別，雙語詞典帶有工具書的基本屬性（即皆有周密性，簡明性，客觀性和連續性）越南人常用雙語詞典為講漢字喃字之書。關於雙語詞典，呂明恆（2015年）分別有²³⁾：

4.3.1. 用查韻部之音韻詞典，有《詩運集要》和《欽定輯韻摘要》。如《詩運集要》按平上去入（聲）秩序編排，詩文（駢文）寫出時必要參考之類書（每詞皆有解義）。

4.3.2. 用查漢字漢詞漢語之字典，詞典

根據使用目的可分為：

a/ 漢字寫法教科書，如《字學求精歌》：講漢字寫法和意義，分別同音異形字，遵守韻調，每韻四字，但沒有指出要查之標誌²⁴⁾。

b/ 漢字學手冊：《字學訓蒙》《字學四言詩》²⁵⁾。如《字學訓蒙》特點：一韻四局，每局四字；修改《字學四言詩》而成之書。此書加以典故解釋和形體相近辨別（特別注視於1ノ之差異引起易讀易義之字）。

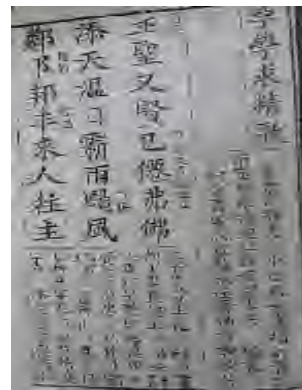


圖16 《字學求精歌》1頁

以下詳看《字學訓蒙》2 a之辭目例句

太昊六書義稽決決有意有聲或反或切



辭目名稱

書字上從事，下從日，意謂人言為信止戈為武之類，聲謂江河，以工可為聲為之類，反音翻，一音展轉相呼之謂，反以子呼母，以母呼子，如楚平聲則為初，聞上聲則為杜，是也，一韻相摩以為切，如苦得切則為刻，胡弓切則為雄，是也。

解釋內容

c/ 按《康熙字典》簡略而成，有《字典節錄》。此書略選《康熙字典》所記日常必要并罕見之5000難字²⁶⁾，詳記音注和義解，按《康熙字典》部首秩序編排。書有上下二卷。卷2終還收錄2,3,4聯字和二字相似之字。以下參看《字典節錄》之影印：

23) 呂明恆 (La Minh Hang) 《20世紀前於越南漢字教學的考察》，《漢字漢文教育》，第三十七輯，韓國2015年5月。

24) 陳文甲 (Tran Van Giap : 1990年) 和陳義 (Tran Nghia : 1993年) 皆介紹。

25) 書有四言詩59首，總236句，每局皆解釋音讀和準字寫法。漢喃研究所現狀：失傳。

26) 陳義 (Tran Nghia : 1993年) 之統計。



圖17

圖17《字典節錄》卷之二；



圖18

圖18《字典節錄》二聯字；



圖19

圖19《字典節錄》三聯字

d/按門類排列之雙語字典，詞典²⁷⁾，如：《指南玉音解義》、《日用常談》、《南方名物備考》、《大南國語》、《嗣德聖制自學解義歌》和《三千字纂要》等類字典和詞典。據以下3各標誌分類：（-）以詞為收拾對象（-）按門（或部）編排，和（-）以出現時代為對象：皆為越南阮朝（19世紀）出現有《日用》、《南方》和《大南》²⁸⁾

漢越雙語辭典之內：《指南》為最早期辭典²⁹⁾。《嗣德》由嗣德皇帝（1848-1883，阮朝）組織編輯。《嗣德》所搜集詞彙比其他辭典多大（搜集《康熙字典》所載之異字和不常用漢字）。此類大型辭典之編輯多有意義：催促漢字教學，肯定喃字位置（喃字正式得到王朝之關注和使用）。

表5: 漢越雙語辭典的構成

秩序	辭典	頁數	分類 (分類法/容量)			注
			門	類	部	
1	指南	164	40			門內有類+補遺
2	日用	104	32			
3	南方	158	32			
4	大南	170	47		3	有門下級
5	嗣德	602		7		

雙語字典：考究和翻轉



圖20



圖21

27) 屬於雙語字典，辭典還有《南藥國語賦》用喃字解釋漢字，但它組成結構有差別：即沒有宏觀結構，全作品按賦體構成。

28)《日用》：作者Phạm Đình Hổ (范庭虎)，完成年代1827年；《南方》：作者Đặng Xuân Bảng (鄧春榜)，完成年代1876年；《大南》：作者Nguyễn Văn San (阮文珊)，完成年代1880年。

29) 研究者皆以《指南》作者為鄭氏玉竹 (18世紀)。Ngo Đức Tho (吳德壽) 教授根據諱字證據，認定版本年代為15世紀 (胡朝) (看Ngo Đức Tho, 2006年, 第299頁)。

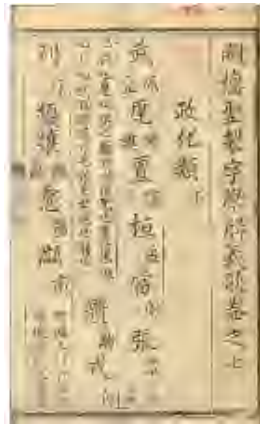


圖22

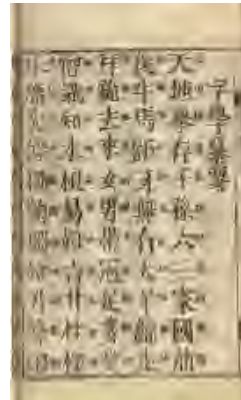


圖23

V.結語

本專題已介紹越南中代的大量漢喃書籍。具體：

漢字喃字的概念和辨別

現保留漢喃書籍的圖書館和藏書所。關於漢喃書庫，本專題介紹漢喃研究所所藏的資料，分庫和分類。現保留漢喃書籍的藏書館→保留大量漢喃書籍屬於漢喃研究所的圖書館。

大量和綜觀介紹漢喃書籍。進一步仔細介紹喃字書籍的演變，

介紹漢字，喃字的講學教材：

考察漢喃書籍能夠了解越南在歷史過程中漢字喃字的使用，教學的內容，研究實踐等問題。至今，雖國語字的普遍，漢字喃字的講課，研究還繼續使用；漢字喃字版本的造作還存在。漢字喃字研究對於越南文化傳統的領會帶來很多興趣。此為以後研究的方向。

베트남 한자 쯔놈의 연구와 학습자료

La Minh Hang(베트남 漢喃研究所)

국문초록: 한자 문화권에 위치한 베트남은 중국 문화의 영향을 다방면으로 받고 있다. 베트남 사람들은 한자 한문을 사용할 기회가 많았다. 외교나 행정 협의, 과거 시험, 시문 창작 등 여러 분야에 있어서 한자를 사용했던 것이다. 또한 베트남 사람들은 한자나 한자의 부수(部首)를 빌려서 쯔놈(喃字)을 창작하였으며 현재 많은 쯔놈 자료가 남아 있다.

한남(漢喃) 서적은 현재 베트남 국내외의 도서관과 장서관(藏書館)에 보관되어 있다. 베트남 문화나 전통 지식은 모두 한자 또는 쯔놈으로 기록되어 있기 때문에 선인들의 지식을 이해하려면 한남(漢喃) 서적에 기록된 내용을 반드시 이해해야 한다. 본고에서는 주로 아래와 같은 네 가지 문제에 대해 살펴보려고 한다. 첫째, 한자·쯔놈 및 그 서적의 개념. 둘째, 한남(漢喃) 서적 대관(大觀). 셋째, 쯔놈 서적에 대한 소개. 넷째, 한자·쯔놈을 학습하는 교재.

1. 머리말

베트남 漢籍은 행정문서, 의학, 군사, 교재와 시험문제, 시문 등 다양한 분야에 사용되고 있다. 그러나 인명과 지명의 기록, 민족 시가(詩歌) 창작에는 베트남인이 한자와 그 부수를 빌려 만든 쯔놈이 사용되었다. 14세기부터 베트남에서는 두 가지 문자를 병용하였다. 한자는 국가의 정통 문자로, 쯔놈은 민간 문자(가보(家譜), 향보(鄉譜), 계약 등 기록에만 사용)로 사용되었다.

17세기부터 서양 선교사들은 베트남에서 선교활동을 할 때에 성경, 성전을 한자와 쯔놈으로 기록하였다. 이때에 현대 국어문자도 형성되었다. 하여 베트남에서는 세가지 문자를 사용하게 되었던 것이다.

(-)한자 사용 과정 (14세기부터 현재까지)

-----14세기 -----17세기 -----19세기 -----현재----->

(-)쯔놈 사용 과정(14세기부터 현재까지)

-----14세기 -----17세기 -----19세기 -----현재----->

(-)국어문자 사용과정 (17세기부터 현재까지)

-----14세기 -----17세기 -----19세기 ----- 현재----->

본고에서는 한자와 쯔놈 자료에 주목하여 한자와 쯔놈 교재를 찾아내고 그 수량과 가치를 분석하고 지적하고자 한다. 주로 첫째, 한자·쯔놈 및 그 서적의 개념. 둘째, 한남(漢喃) 서적 대관(大觀), 셋째, 쯔놈 서적에 대한 소개, 넷째, 한자·쯔놈을 학습하는 교재 등 네 가지 문제에 대해 살펴보려고 한다.

2. 한자·쯔놈 및 그 서적의 개념

2.1 한자 문화권의 네모난 문자

베트남어를 기록하기 위해 베트남 사람들은 민족 문자(즉 쯔놈(喃字))를 만들어 냈다. 다른 나라 문자의 차용·변경을 통해 자국 문자를 만든 사례는 베트남에만 있었던 특유의 사례가 아니다. 한자 문화권에 속하는 다른 나라와 지역도 한자 또는 한자 부수나 조자법(造字法)을 이용하여 자기 나라의 문자를 만들었다. 예를 들어 아래와 같은 사례가 있다.

일본 문자(和字): 袴 かみしも “裙子váy”
 雫 しずく “水滴giọt nước”

장족 문자(壯字): 주로 초본(抄本)이 남아 있다.

출현 시기: 12세기(최초 자료: 大誦碑, 862년, 당나라 시기)

베트남 소수민족의 대자(岱字): Bươn “月”(班+月)
 Tênh “上”(上+下)

주의: 위에서 소개한 문자는 모두 한자 차용을 하는 방법으로 작성되었다. 예를 들어 중국 장족(壯族) 문자 중 “底”는 “V: đáy, C: daej”로 밑(底)이란 뜻이 있다(HV: đế, H: di3). 또한 “絲”는 “V: tơ, C: sei”로 실(系)이란 뜻이 있다(HV: ti, H: si1).

2.2 한자와 쯔놈의 차이점

쯔놈 서적에는 한자 형태를 빌려서 작성한 것과 잘 사용되지 않는 한자가 보인다(→쯔놈? 한자?→). 따라서 한자와 쯔놈을 분별해야 한다. 주지하다시피 쯔놈은 한자 차용과 자제(自製)의 두 종류가 있다(-->>> 한자 차용→ 쯔놈). 아래의 【才】과 【命】은 모두 쯔놈이다.

𡵓𡵓𡵓𡵓𡵓𡵓

𡵓𡵓𡵓𡵓𡵓𡵓 (翹傳)

-->>> 쯔놈의 인정: 1. 문자 내부 구조의 유무, 2. 베트남어 어법의 준수 유무

→【才】【命】: 한자 차용 사례로 되는 쯔놈

2.3 쯔놈 서적의 정형화된 분류

쯔놈은 국가의 공식 문자가 된 적은 없지만 베트남 문화 중 하나임은 틀림없다. 그 사용은 철학, 종교, 정치, 군사, 경제, 율법, 역사, 교육, 의학, 외교, 예술, 문학 등 사회생활 속 여러 분야에 이르렀다.

판본: 종이와 나무판자. 종이는 사본과 인쇄판이 있다.

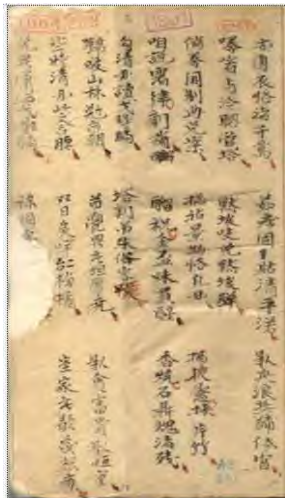


그림1 白雲



그림2 大南國史演歌

단단한 물체에 새겨져 있다. 예: 돌(비석, 산맥), 금속(동서(銅書), 동종(銅鍾), 동경(銅磬)), 나무(대자(大字), 대련(對聯), 가보(家譜), 목판) 등에 새겨져 있다.

→지금은 사찰, 정자, 묘우(廟宇), 족당(族堂) 등지 또는 명승고적(산맥, 구덩이, 굴 등)에 새겨져 있다.



그림3: 비문(碑文), 여성종 시(黎聖宗詩), 돌에 새겼음.



그림4



그림5

그림4와 5: 운호사(雲湖寺) 대련(對聯), 기와에 새겼음.



그림6

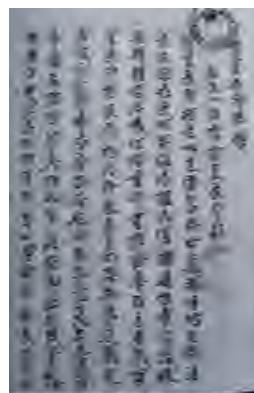


그림7

그림6과 7: 웅성의나추전(翁聖衣那樞傳), 사본, 철필(鐵筆)로 종이에 썼음.



그림 8



그림 9



그림 10

그림 8, 9와 10: 도자기에 씌여있음.

3. 한남(漢喃) 서적 대관(大觀)

3.1 도서관, 장서관과 한남 서적 총량

3.1.1 도서관과 장서관

한남(漢喃) 서적은 많이 남아 있으며 지금은 각 장서관(藏書館)에 소장되어 있다.

대량의 한남(漢喃) 서적을 소장하고 있는 기관으로는 한남(漢喃)연구소, 베트남 국가도서관, 사회과학통신소, 국가보류센터(특히 제4고국가보류센터에 많은 한남 자료가 보관되어 있다. 그 중 상당수는 완조(阮朝) 황제가 쓴 것이다), 문학소, 역사소가 있다. 해외는 프랑스, 영국, 미국, 일본, 중국 등 나라에 한남(漢喃) 자료가 보관되어 있다.

한남(漢喃) 서적 소장 수량이 많지 않은 곳으로는 국내 각 대학교 도서관(예를 들어 인문사회과학대학 역사학과 도서관, 화성사범대학), 각 성(省)의 도서관과 박물관(예를 들어 해양(海陽)성 종합 도서관, 허시(河西)성 종합 도서관(지금은 하노이시에 속함) 등이 있다. 호찌민(胡志明)시 가톨릭연구센터에는 천주교에 관한 한남(漢喃) 자료가 많이 남아 있다.

이외에 현지, 각 종당(族堂)에도 아직 한남(漢喃) 서적이 남아있다.

3.1.2 한남 서적 총량

이상 언급한 장서관(藏書館) 중 소장 양이 가장 많고 가장 잘 보관되어 있는 곳은 한남(漢喃)연구소이다. 『베트남 한남 유산: 수목제요』¹⁾(이하 『유산제요』로 생략)에 따르면 한남 서적은 총 5,038건(이외에 30,000건의 마이크로필름 자료도 있다²⁾)에 달한다. 이 자료의 대부분은 한남연구소에서 관리하고 있으며 나머지는 프랑스에 소장되어 있다. 진의(陳義)와 Francois Gros 교수는 “이 수량은 전체 한남자료의 80%에 불과하다(1993: 12)”, “이상의 자료 외에도 각 지방에서 갖 수집한 자료도 729건 있다(1993: 23, 이 자료는 아직 미등록)”라고 하였다.

『베트남 한남 유산: 수목제요 보유(補遺)』³⁾(이하 『유산보유』로 생략)에는 2,280권의 한남 서적이 보충되었다. 보충된 내용은 신칙(神敕 신황(神皇)에게 제사를 지낼 때 사용하는 황제가

1) 불어 명칭은 “*Catalogue Des Livres En Han Nom*”이다. 중국어로 번역하면 『越南漢喃遺產-書目提要』로 된다. 이 서책에는 한남연구소에 보관되어 있는 자료 통계가 실려있다.

2) 陳義 및 Francois Gros (1993: 24) 에 의하면 30,000건의 자료는 한남연구소에 소장되어 있는 것이며 마이크로필름 자료와 비문(碑文) 부분 자료가 있다.

3) 陳義(主編), *Di san Han Nom Viet Nam-Thu muc de yeu - Bo di 1*, Nxb Khoa học xã hội, Hanoi, 2002.

각 사원에 분배한 판본), 신적(神跡 신황의 사적), 속례(俗例 사촌향(社村鄉) 법), 지박(地薄 토지 기록본), 고지(古旨 공문서, 영지(領旨), 계(啟), 주(奏), 정박(丁薄), 전박(田薄) 등)과 사지(社誌 사촌(社村) 지지(地誌))가 포함되어 있다. 따라서 한남 서적의 총 수량은 5038⁴⁾+2280=7318건이 된다⁵⁾.

3.2 한남 서적의 분류와 분고(分庫)

3.2.1 한남 서적의 분류

한남(漢喃) 서적에는 많은 내용이 포함된다. 陳義 및 Francois Gros 교수(1993: 12)는 『유산제요』에 기재된 5,038건의 자료에 대해 상세하게 분류하였다. 문학(2,500건), 역사(1,000건), 종교(600건), 문화교육(450건), 정치사회(350건), 의학-위생(300건), 지리(300건), 법제(250건), 예술(80건), 경제(70건), 언어 문자(60건), 수학-물리학(50건), 군사 국방(40건) 외에 건축, 농업, 소공업 등 내용으로 분류되었다. 또한 일부 서적은 종합성을 가지고 있어 여러 방면의 내용이 담겨 있기에 자료 하나가 하나 또는 두 개의 작은 분류에 속하는 경우도 있다.

陳義 교수의 통계에 따르면(2002:3-4) 『유산보유』에는 신칙(神敕 411권), 신적(神跡 568권), 속례(俗例 647권), 지박(地薄 526권), 고지(古旨 21권), 사지(社誌 107권) 등과 같이 많은 서적이 보충되었다.

상술 두 서책에 통계되어 있는 한남 서적의 총수량은 5,038⁶⁾+2,280=7,318건⁷⁾으로 베트남 문화, 사회, 의학, 기술 과학을 연구하는데 있어서 중요한 자료로 된다.

3.2.2 한남 서적의 분고(分庫)

*쓰놈 서적의 현황을 검토하는 근거

『유산제요』 및 『유산보유』에 의하면 전남적(全喃籍 전체가 쓰놈으로 기재된 서적)과 잡서남적(雜寫喃籍 한자와 쓰놈이 섞인 판본)이 있다.

서고(書庫) 번호: 한남연구소 서고는 서적에 따라 번호가 다른데 쓰놈 서적 즉 남적(喃籍)의 서고 번호에는 AN/AB/AC/VNb 혹은 VNv가 포함되어 있고 한문 서적 즉 한적(漢籍) 서고의 번호에는 A/VHv, VHb가 있다.

한남 서고에 관한 현황 검토 결과는 다음과 같다. 기본적으로 남적(喃籍)은 남적 서고에 보관되어 있다. 하지만 이 규칙을 따르지 않는 서적도 있다. 예를 들어 『花箋潤正』(화전윤정)은 번호가 VHb72인 옥팔 시율의 남전(喃傳)이고 『左幼真傳遺書』(좌유진전유서)는 칠언 남시(喃詩)인데 번호는 VHv782(VHb와 VHv는 모두 한적(漢籍) 서고의 번호)이다⁸⁾. 이 외에 한월사전(漢越詞典)에 관해서도 일관성이 보이지 않는다. 일부는 한적(漢籍) 서고에 있고 일부는 남적(喃籍) 서고에 있다. 예를 들어 『南方名物備考』(남방명물비고)는 번호 A155이고 『指南備類』(지남비류)는 번호 A1239(A는 한적(漢籍) 서고의 번호)이다. 반대로 『嗣德聖制解義歌』(사덕성제해의가)는 번호AB5(AB는 남적(喃籍) 서고의 번호)로 되어 있다. 이와 같이 분고의 표준

4) 『遺產提要』(1993년)에 언급된 (아직 통계되지 않은) 729건의 자료에 관해서는 이 『遺產補遺』(2002년)에 포함되어 있을 가능성이 크다. 다만 두 서책에서 서목(書目)이 통계되어 있는 서적만 포함되어 있다.

5) 하나의 자료에 여러 판본이 있을 가능성이 있으나 여기서는 자료 수량만 계산하였다.

6) *Di san de yeu*(1993)에 언급된 (아직 통계되지 않은) 729건의 자료에 관해서는 *Di san Bo di*(2002)에 소개되었을 가능성이 있다. 다만 두 서책에서 서목(書目)이 통계되어 있는 서적만 포함되어 있다.

7) 하나의 자료에 서로 다른 판본이 여러 개 있을 가능성이 있으나 여기서는 자료 수량만 계산하였다.

8) 판본에 사용된 문자 제외.

(서적의 출처에 따르는지 아니면 사용된 문자에 따르는지)이 아직 확실하지 않다. 하지만 이러한 오류는 개별적인 것이다.

본고에서 수집한 자료에는 전체가 쯔놈으로 쓰인 서적, 즉 전남(全喃) 서적과 한남(漢喃) 병용(併用) 서적이 있다. 한남 병용 서적은 아래와 같이 두 종류로 나눌 수 있다. 첫번째, 한자 문장 중에 전후를 하나의 언어로만 기록한 것이 아니라 중국어 문법에 의한 구절에 때로는 쯔놈이나 베트남어 문법으로 된 구절이 삽입되는 경우가 있다. 두번째, 한자 시집에 1, 2편의 쯔놈 시(喃詩)가 섞인 경우가 있다.

* 고찰 결과 :

『유산제요』에는 한남연구소와 프랑스 원동박고학원(遠東博古學院)의 서적이 수록되어 있다. 여기서는 한남연구소 서고의 것만 검토하도록 하겠다. 쯔놈 서적의 분포 상황은 아래와 같다 (표1 참조).

표 1: 한남연구소의 남적(喃籍) 분포 상황

문자	한남연구소의 서고 번호													
	A	AB	AC	AD	AE	AF	AG	AH	AJ	AN	VHb	VHv	VNb	VNv
全喃	-	+	+	0	0	-	0	3	0	+	-	-	+	+
漢喃 병용	+	0	0	-	-	-	-	-	0	0	+	+	0	0
漢	+	0	0	+	+	+	+	+	+	0	+	+	0	0

* 주: “+”는 수량이 많다는 것을 나타낸다. “-”는 수량이 적다는 것을 나타낸다. AH의 “3”은 세 소수민족의 쯔놈 서적을 의미한다.

3.3 쯔놈 서적에 대한 간략소개

한자와 한자 문화의 접촉 과정은 3단계로 나눌 수 있다. 즉 수용→변경→창조이다. 쯔놈 또는 쯔놈 판본을 보면 쯔놈 창제는 한자 접촉의 제2단계에 속한다. 베트남 사람들은 한자만을 사용하여 무언가를 기록하고 시가 창작(한시의 시율에 따라)에도 한자를 사용했는데(즉 수용 단계), 이어서 한자나 한자 부수를 빌려서 쯔놈을 만들었다(즉 변경 단계). 최종적으로는 쯔놈으로 시문을 만들었고 노동 생산의 경험과 기술과학 등 지식을 기록하는 데에도 쯔놈을 사용하여(창조 단계) 풍부한 쯔놈 서적을 남기게 되었다.

기존연구에 있어서는 아직 정확한 남적(喃籍) 수량에 대해 언급한 연구가 없다. 심지어 한남연구소에 남아 있는 남적의 정확한 수량에 대해서도 아직 통계된 숫자가 제시되지 않고 있다. 다만 橋秋獲 교수가 “연구자의 초보적인 집계에 따르면 현존 남적은 약 1500건에 달한다”라고 하는데 呂明恆의 연구에 따르면 한남연구소가 소장한 남적은 1932건으로 26.4%를 차지한다⁹⁾.

9) 呂明恆 (La Minh Hang), 「20세기 전에 있어서의 베트남 한자 교학에 관한 고찰」(Teaching Chinese Character in Vietnam before 20 century), 『한자한문교육』제37집, 韓國, ISSN:1598-6160, 2015년5월, 120-135쪽.

표2: 한남연구소에 보관되어 있는 남적(喃籍) 총 수량

사용된 문자	조사자료		총 수량(건)
	유산제요	유산보유	
全喃	1125	8	1133
漢喃 병용	605	194	799
총 수량			1932

위의 표를 보면 쓰놈 자료는 1932건이며 한남연구소 소장 서적의 26.4%를 차지한다. 판본 수량은 자료 수량보다 많다(한 자료에는 여러 개의 판본이 존재하기 때문이다). 이 표의 통계로부터 남적 총 수량은 이미 기존에 지적되었던 1500건을 훨씬 뛰어넘었다는 것을 알 수 있다.

呂明恆의 연구에 의하면 쓰놈 서적은 1932건 된다. 그 중 전남(全喃) 자료가 1133건, 한남 병용 자료가 799건이다¹⁰⁾.

다만 1932건이란 숫자는 종이에 쓰인 자료(인쇄와 필사)만 계산한 것이며 단단한 물체에 새겨진 것은 포함되지 않는다. 동이나 돌, 또는 나무 등 단단한 물체에 새겨진 자료는 현재 많이 남아있다. 한남연구소에서는 이러한 자료의 부분을 다른 서고에 보존하고 있다. 杜氏碧選(2013:26)은 비문 부분이 저장된 서고에 대해 검토하고 쓰놈 비문의 부분 1500건 중 105건이 전남(全喃) 비문이라고 지적하고 있다.

4. 한자·쓰놈 학습 교재

한자 한문화의 영향으로 베트남 사람들은 한자와 쓰놈으로 내용이 풍부한 작품을 많이 쓰게 되었다. 특히 19세기부터 한학(漢學)이 절정기를 이루게 되었는데 이때에 한학 교재와 한어·베트남어 서적이 연이어서 출판되었다.

4.1 한학 교재 분류: 학교에 다닐 때의 교재와 다니지 않을 때의 교재

한학(漢學) 교재에는 독학 전용으로 사용되는 것과 교과서가 있다. 베트남에는 2세기에 이미 최초의 한자 강당(講堂=학교)이 세워졌다. 국자감(國子監)이 성립된 후¹¹⁾ 국가(國家), 성(省), 현(縣)에는 정식으로 한학 강당이 생기게 되었다. 그후 7~11세기 초까지 다양한 한학 강당이 생겼다. 이 강당에는 교사가 가르치는 대소반(大小班)¹²⁾과 자습 형태의 반이 있었으며 한학 교재에도 교학(敎學) 자료와 자습 자료가 있다. 구체적인 내용은 아래와 같다(표3 참조).

10) 呂明恆 (La Minh Hang), 2015년(앞의 글). 실제로 쓰놈 서적 중 단단한 물체에 새겨져 있는 판본은 집계에 넣지 않았다. 이러한 동이나 돌, 또는 나무에 새겨진 자료는 현재 많이 남아있다. 한남연구소에서는 이러한 탁본을 다른 서고에 보존하고 있다. 杜氏壁選 (Đo Thi Bích Tuyen 2014년 26쪽)은 비문의 탁본이 저장된 서고에 대해 검토하고 쓰놈 비문의 탁본 1500건 중 105건이 전남(全喃) 비문의 탁본이라고 지적하고 있다.

11) 11세기 초에 국자감(國子監)이 성립되었다. 1075년에 베트남에서는 처음으로 과거 시험이 치루어졌다.

12) 반(班) 하나에 학생이 1명인 경우도 있었다.

표3 : 한학(漢學) 자료의 분류

순서	서명	사용 목적		내용 분류
		학교에 다니지 않음	학교에 다님	
1	『九章算法』		x	수학 교과서
2	『幼學漢字新書』		x	한자 교과서
3	『漢字自學』 ¹³⁾	x		한자를 가르치는 교과서. 날씨, 지역, 인사(人事), 역사 등 10종류로 나누어진다)
4	『啟童說約』		x	사화과학지식, 생물학, 법칙 등을 가르친다.
5	『詩運集要』		x	운(韻) 부분을 검색하는 음운(音韻) 사전
6	『字學求精歌』		x	한자 서사 방식에 대한 교과서
7	『字學訓蒙』		x	한어학 수첩
8	『字典節錄』	x		『康熙字典』에 의하여 보기 드문 한자를 수집하였다.
9	『大南國語』	x		이중 언어 사전의 대표

4.2 소학(小學) 한문 교과서

베트남 중대기(中代期: 10-19세기)의 한학 교육은 소학(小學), 중학(中學)과 대학(大學) 교육으로 나누어 진다. 소학 교육(“초학”(初學) 또는 “유학”(幼學¹⁴⁾ 그림11 참조¹⁵⁾) 이라고도 한다)은 한문 입문 학생을 대상으로 한다. 초학과 개심학(開心學)은 공부 개시(초기)라는 뜻으로 모두 소학 급에 속한다(그림12 참조¹⁶⁾).



그림11 유학 한문반



그림12 어린이의 글자 연습

『삼자경』(三字經)은 중국에서 베트남으로 전래된 최초의 유학 한문 교과서로 그 영향은 아주 크다¹⁷⁾. 그러나 『삼자경』은 베트

남에 전해진 후 그대로 사용된 것이 아니라 변용된 부분도 많다. 따라서 『삼자경』에는 여러 판본이 생기게 되었다. 또한 『삼자경』의 문체나 내용을 본떠 새로운 소학 한문 교과서를 잇따라 편집하게 되었다. 예를 들어 문체 영향을 받은 서책으로는 『성교삼자경』(聖敎三字經), 『여훈삼자경』(女訓三字經), 『몽학월사삼자교과』(蒙學越史三字教科), 『한학입문삼자문』(漢學入門三字文) 등이 있고 내용의 영향을 받은 서책으로

는 『유학문식』(幼學文式)과 『유학한자신서』(幼學漢字新書)¹⁸⁾ 등이 있다.

13) 『漢字自學』은 한자를 해석한 것이다. 내용은 날씨, 지역, 인사(人事), 역사 등 10가지로 분류되어 있다. 이중 언어 사전과 구성이 같다.

14) 阮俊強(Nguyen Tuan Cuong), 「이전의 베트남 소학 한문 교육-『삼자경』(三字經)을 중심으로-」 (*Giao duc Han van bac tieu hoc tai Viet Nam thoi xua qua trung hop sach Tam tu kinh*), 하노이, 한남연구소, 연구논문, 2015년.

15) Henri Oger의 목각(木刻) 그림.

16) Henri Oger의 목각(木刻) 그림. 그림에는 쫓놈이 4자 쓰여있는데 이는 “어린이의 글자 연습”이란 뜻이다.

17) 阮俊強의 연구에 의하면 『삼자경』(三字經)이 전해진 시기는 1820-1830년 사이 또는 1836년이다(阮俊強(Nguyen Tuan Cuong), 「국외의 『삼자경』 유입과 변경 (*Luoc khao sach Tam tu kinh tai Trung Quoc va viec luu truyen ra nuoc ngoai*) 」, 하노이, 『사전학과 백과서 잡지』, 2015년 5호, 19-27쪽 참조).

18) 阮俊強(Nguyen Tuan Cuong), 「『삼자경』의 고대 베트남 한문 교재에 대한 영향」, 『漢字研究』, 韓國, 2015년 제14輯, 53-71쪽.

베트남에는 지금도 소학(小學) 한문 자료가 많이 남아있다. 呂明恆의 연구에 의하면 『유산제요』(遺産提要)¹⁹⁾ 베트남어 A운(韻)²⁰⁾에는 소학 한문 교과서가 8종류 있는데 이는 A운 총수의 14.54%에 달한다.

표4 『유산제요』 A운(韻)에 있는 소학 급 한학 교과서

순서	서명	내용	주
1	幼學故事尋源(유학 고사 순원)	어린이의 수업. 내용: 천문, 연월, 관직, 친족, 신체, 의복, 음식, 문장, 과거(科擧), 인사(人事), 궁실.	VHv.2936, 필사본:1942年, 151쪽, 28 x 15.5.
2	幼學對聯集(유학 대련 집)	아동 강의: 대련(對聯), 시, 문장 등의 창조 방법을 가르친다.	A.2241. MF1985. 필사본:1879年, 30쪽, 28 x 15.
3	幼學漢字新書(유학 한자 신서)	유학 교과서: 제1권 개심(開心) 교과서, 제2권 수신(修身) 교과서, 제3권 베트남 정치 지리 교과서, 제4권 베트남 역사 교과서	VHv.1485:인쇄본1908年, 546쪽, 印15 x 21; VHv.1507: 72쪽, 印16 x 22; VHv.2394, 240쪽, 印15 x 22; VHv.345, 80쪽, 寫15 x 22; VHv.346, 127쪽, 寫; VHv.469, 151쪽, 寫, 16 x 27.
4	幼學五言詩(유학 오언 사)	일반 교양(인간 자연)을 가르치는 어린이 강의용 교과서. 본문: 쓰놈으로 해석, 1구5자	3인쇄본, 36쪽, AB.230, F.1928, VNb.62
5	幼學普通說約(유학 보통 설약)	도덕, 위생, 수학, 물리, 천문과 지리 등에 관한 어린이 수업 교과서	VHv.64: 인쇄본1908年, 100쪽, 24 x 15; VHv.2937: 인쇄본1908年, 100쪽, 27 x 15. A.892: 인쇄본1908年, 100쪽, 28 x 15. VHv.468: 필사본1920年, 130쪽, 27 x 16.
6	幼學說(유학 설)	각 성(省)은 학교 상황을 보고하는 회의를 열고 화성사범학교(華省師範學校)를 건립.	VHv.617필사본(불어원본)1909年, 42쪽, 30 x 18.
7	幼學文式(유학 문식)	책은 2 부분으로 나누어 진다. 1. 초학(初學) 입문 (6쪽) 2. 상용어(18쪽). 아동 한학 교과서. 초학 입문에는 문답, 글자 연습, 구절 연습 등 여러 형식의 문제가 있다.	A.1144. 1인쇄본1915年, 26쪽 ²¹⁾ , 23 x 13, 1.
8	幼學越史四字 ²²⁾ (유학 월사 사자)	베트남 역사에 관한 아동 강의, 1구4자, 운(韻)이 있음.	VHv.31인쇄본1907年, 38쪽, 23 x 15.

19) 陳義 (Tran Nghia) · Francois Gros, 「베트남 한남 유산-수목제요(數目提要)(*Di san Han Nom Viet Nam-Thu muc de yeu: Catalogue Des Livres En Han Nom*)」, 하노이, 『Éditions Sciences Sociales』, 1993년, 제1집, 924쪽; 제2집, 748쪽; 제3집, 1254쪽.

20) 다른 운(韻)에서도 유학(幼學) 한서(漢書)를 찾아볼 수 있다. 예를 들어 『계동설약』(啓童說約), 『자학 훈몽』(字學訓蒙) 등이 있다. 서목의 전체에 대해 필자는 아직 통계를 하지 않았다.

21) 『유산제요』 오류: “책에는 36쪽?”

표4에 의하면 『유산제요』(遺産提要) A운에는 소학(小學) 급 한학 교과서가 총 8가지(19개의 판본) 있는데, 이 8가지는 1. 개심(開心) 교과서(開心書는 한학 입문자에게 사용됨)와 2. 유학(幼學) 교과서(한학 입문을 마친 사람에게 사용됨)로 나눌 수 있다. 『유학한자신서』(幼學漢字新書)는 개심(開心) 교과서이며 『유학일반설약』(幼學普通說約)은 유학 교과서에 속한다.



그림 13 『幼學對聯集』표지



그림 14 『幼學對聯集』91쪽



그림 15 『幼學對聯集』65쪽

『유학 한자 신서』(幼學漢字新書) 강의 내용 :

a/단어와 제일 짧은 구절을 강의

예 1: “天地日月, 天上地下, 日晝月夜”라고 기재되어 있다.

→ 해석: 제1과(第1課)는 천지일월(天地日月)을 가르치는데 그 중 상(上)과 하(下)는 방위를 이르는 단어로 하늘과 땅의 위치를 가리킨다.

예 2: “星雲風雨, 星見雲飛, 風吹雨降”이라고 기재되어 있다.

→ 해석: 제2과(第課)는 성운풍우(星雲風雨)를 가르치는데 見(보다), 飛(날다), 吹(불다), 降(내리다)는 모두 동사이다.

b/구절 강의

예 3: 제36과(第36課)에는 “家則有族, 伯叔父母, 從母之親, 為我姨舅”라고 적혀 있다.

이 수업은 1어4자(1語4字)의 구절 4개로 구성되었는데 허사(虛詞) “則”(칙)을 넣어서 전체 문장이 완성된다.

c/허사(虛詞) 강의

예 4: “梅必酸, 桂必辛, 糖必甘, 桃則紅, 柳則綠, 菊則黃”이라고 기재되어 있다.

→사물과 그 성질에 대해 3글자로 간단하게 표현하고 있는데 그중 “必”(필)과 “則”(칙)은 허사로 연결하는 역할을 한다.

4.3 이중 언어 사전에 의한 한자와 쓰놈 학습 및 강의

한자나 쓰놈 및 이에 관한 지식을 배우기 위한 자료로는 『무변잡록』(撫邊雜錄), 『운대류어』(雲臺類語)와 “여지”(輿地), “기”(記), “지”(志) 유서, 이중 언어 사전이 있다. 강의와 수업 과정에 있어서 이러한 한자 참고서는 없어서는 안 되는 것이다. 특히 이중 언어 사전은 소위 공구서(工具書)로서의 기본 성격(즉 주밀성, 간단성, 객관성, 연속성이 있음)을 가지고 있어 베트남 사람들은 이중 언어 사전을 한자·쓰놈 강의에 많이 사용하였다. 이중 언어 사전에 관해서는 呂明恆(2015년)에 의하면 아래와 같은 것이 있다²³⁾.

22) 한남연구소 소장 『소학서』(小學書), 번호 VHv.1259, 61쪽부터.

4.3.1 운부(韻部)를 찾는 음운(音韻)사전

운부(韻部)를 찾는 음운(音韻)사전으로는 『시운집요』(詩運集要)와 『흠정집운제요』(欽定輯韻摘要)가 있다. 예를 들어 『시운집요』는 평성(平聲)·상성(上聲)·거성(去聲)·입성(入聲) 순서로 배열되어 있어 시문 또는 변문(駢文)을 쓸 때 필요한 참고서이다(모든 어휘에 해설문이 있다).

4.3.2 한자·한어를 찾는 사전·사전

사용 목적에 따라 아래와 같이 분류된다.

a. 한자 서사 방법 교과서. 예를 들어 『자학구정가』(字學求精歌)는 한자 서사 방법과 의미를 설명하고 동음이형자(同音異形字)를 분별하는 사전이며 음조(韻調)를 준수하고 매 음(韻)마다 4자로 되어 있는데 어휘를 찾을 색인이나 표시가 되어 있지 않다²⁴⁾(그림 16).

b. 한자학 수첩. 『자학훈몽』(字學訓蒙), 『자학사언사』(字學四言詩)²⁵⁾. 『자학훈몽』의 특징은 일운사구(一韻四句), 일구사자(一句四字)이며 『자학사언사』를 수정하여 만든 책이다. 이 책은 전고(典故)를 가해서 어휘를 해석하였고 형태가 비슷한 글자도 분별할 수 있게 되어 있다(특히 형태가 비슷한 1과 丿의 차이를 알 수 있게 하여 읽기 쉽고 이해하기 쉽게 되어 있다).

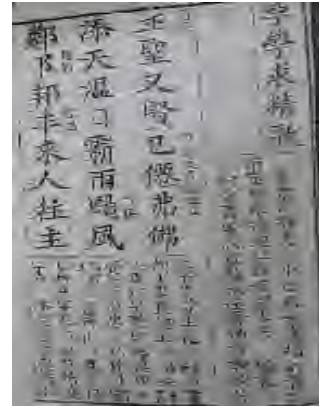


그림 16 『자학구정가』 1쪽

자세한 것은 아래의 『자학훈몽』 2a의 어휘 해설 예문 참조.

太昊六書義稽決決有意有聲或反或切



어휘 명칭

書字上從事，下從日，意謂人言為信止戈為武之類，聲謂江河，以工可為聲為之類，反音翻，一音展轉相呼之謂，反以子呼母，以母呼子，如楚 平聲則為初，闔上聲則為杜，是也，一韻相摩以為切，如苦得切則為刻，胡弓切則為雄，是也。

해석 내용

c. 『강희사전』(康熙字典)에 따라 간략하게 만들어졌고 『자전절록』(字典節錄)이 있다. 이 책은 『강희사전』에 기재된 일상 생활에 필요한 글자 및 보기 드문 난자(難字)를 5000개 수록하였고²⁶⁾ 음과 의미에 대해서 상세하게 기록하고 있다. 또한 『강희사전』과 같이 부수에 따라 글자 순서를 배열하였다. 상, 하 두 권으로 나누어져 있다. 권2 마지막 부분에는 2, 3, 4 자를 합쳐서 만든 합자(合字)가 수록되어 있고 비슷한 형태의 두 글자도 함께 기록되어 있다. 아래의 『자전절록』 영인본 참조.

23) 呂明恆 (La Minh Hang), 「20세기 전에 있어서의 베트남 한자 교학에 관한 고찰」(Teaching Chinese Character in Vietnam before 20 century), 『한자한문교육』, 제37집, 韓國, 2015年5月.

24) 陳文甲 (Tran Van Giap : 1990年)과 陳義 (Tran Nghia : 1993年)에 소개되어 있다.

25) 이 서책에는 사언(四言) 시 59수, 합계 236구(句)가 실려있는데 매 구(句)마다 독음과 글자 서사 방식이 기재되어 있다. 한남연구소 현황: 이실.

26) 陳義 (Tran Nghia : 1993年)의 통계에 따른다.



그림 17

그림 17 『자전절록』卷二



그림 18

그림 18 『자전절록』2자 합자

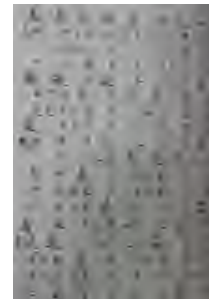


그림 19

그림 19 『자전절록』 3자 합자

d. 부류에 따라 배열된 이중 언어 자전·사전이 있다²⁷⁾. 예를 들어 『지남옥음해의』(指南玉音解義), 『일용상담』(日用常談), 『남방명물비고』(南方名物備考), 『대남국어』(大南國語), 『사덕성제자학해의가』(嗣德聖制自學解義歌)와 『삼천자찬요』(三千字纂要) 등 자전·사전이 있다. 분류는 1. 어휘를 수록 대상으로 하는 것, 2. 門(또는 部)에 따라 배열한 것, 3. 사용된 시대를 대상으로 한 것 3종류로 나누어진다. 세번째 분류에 속하는 자전·사전은 모두 베트남 완조(阮朝 19세기)에 작성된 것으로 『일용』(日用)과 『남방』(南方), 『대남』(大南) 등이 있다²⁸⁾.

한월(漢越) 이중 언어 사전 중 『지남』(指南)이 최초의 사전이다²⁹⁾. 『사덕』(嗣德)은 사덕황제(嗣德皇帝, 1848~1883, 완조(阮朝))에 의해 편집된 것이다. 『사덕』에 수록된 어휘는 다른 사전보다 많다(『康熙字典』에 기재된 이자(異字)와 상용되지 않는 한자를 수록). 이런 대형 사전의 편집은 많은 의미가 부여된다. 즉 한자 교육을 촉진시키며 쓰놈 위상을 긍정적으로 하는 역할을 한다(이로 인해 쓰놈이 정식으로 왕조의 관심을 받게 되었고 사용하게 되었다).

표5: 한월 이중 언어 사전의 구성

순서	사전	쪽수	분류(분류법/수량)			주
			門	類	部	
1	指南	164	40			門의 내부 분류+보유(補遺)
2	日用	104	32			
3	南方	158	32			
4	大南	170	47		3	門 분류의 아래단위가 있다.
5	嗣德	602		7		

27) 이중 언어 자전·사전에는 『南藥國語賦』도 있는데 이는 쓰놈으로 한자를 해석한 것이다. 하지만 이 책은 구성이 약간 다르다. 즉 부체(賦體)로 되어 있다.

28) 『일용』: 저자 Phạm Đình Hổ (範庭虎), 1827년에 완성. 『남방』: 저자 Đặng Xuân Bảng (鄧春榜), 1876년에 완성. 『대남』: 저자 Nguyễn Văn San (阮文珊), 1880년에 완성.

29) 『指南』의 저자를 鄭氏玉竹(18세기)로 보는 견해가 많으나 Ngo Đuc Tho (吳德壽) 교수는 사용된 휘자를 근거로 15세기(胡朝)의 판본으로 보고 있다(Ngo Đuc Tho, 2006年, 299쪽 참조).

이중 언어 사전: 연구와 번전(翻轉)



그림20

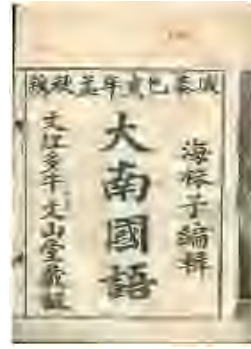


그림21

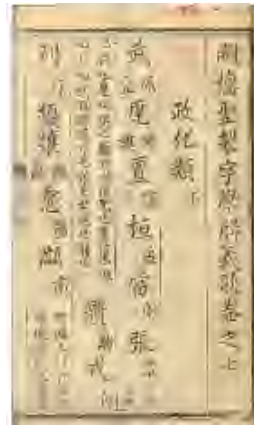


그림22

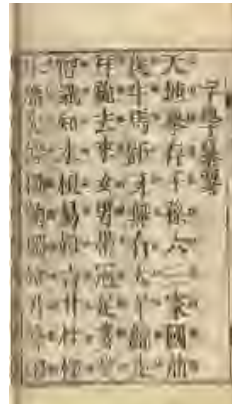


그림23

5. 맺음말

본고에서는 대량으로 남아있는 베트남 중대기(中代期)의 한남(漢喃) 서적에 대해 소개하였다. 그리고 한자와 쓰놈의 개념과 분류에 대해서도 소개하였다.

현재 한남 서적을 보존하고 있는 도서관에 관해서는 한남연구소에 소장되어 있는 자료의 분고(分庫)와 분류에 대해 소개하였고 한남 서적의 장서소(藏書所)에 대해서는 대량의 한남 서적을 보관하고 있는 한남연구소의 도서관에 대해 소개하였다.

대량으로, 그리고 종합적으로 한남 서적을 소개하였다. 또한 쓰놈 서적의 변천에 대해서도 상세하게 소개하였다.

그리고 한자, 쓰놈의 강의 교재에 대해서도 소개하였다.

한남 서적에 대한 연구를 통해 베트남 역사에 있어서의 한자·쓰놈의 사용, 강의 내용, 연구 실천 등 문제를 알 수 있다. 국어자(國語字)가 보편적인 현재이긴 하지만 한자·쓰놈 강의, 연구가 계속되고 있고 한자·쓰놈 판본의 제조도 아직 이어가고 있다. 한자·쓰놈 연구는 베트남 문화의 전통을 터득하는 데 있어서 많은 도움이 된다. 이후에도 이러한 방향으로 연구를 해나갈 것이다.

「研究和學習越南漢字喃字的資料」에 대한 토론문

이 용(서울시립대학교)¹⁾

先生님의 發表 感謝합니다. 이 글에서는 漢喃 資料를 主題로 삼아 다음과 같은 네 가지를 整理하고 있습니다. 첫째, 漢字, 字喃의 概念과 그 書籍의 概念, 둘째, 漢喃 書籍 概觀, 셋째, 字喃 書籍 紹介, 넷째, 漢字와 字喃 學習 教材입니다. 韓國도 漢字文化圈에 속하고 漢字를 빌려서 自國語를 表記하는 方法(借字表記法)을 가지고 있었기에 많은 韓國의 學者들도 越南의 狀況에 대해 궁금한 점이 많았습니다. 그런 狀況에서 先生님께서 字喃 研究에 있어 基礎가 되는 文獻 資料들을 仔細히 紹介해 주고 계셔서 앞으로 越南의 字喃을 研究하고자 하는 學者들에게는 이 發表가 도움이 되리라고 봅니다. 그런데 先生님의 글을 읽으면서 생긴 疑問도 있고 평소에 越南의 字喃에 대해 가졌던 궁금한 점도 있었기에 이 자리를 빌려 너덧 가지를 간단히 여쭙고자 합니다.

1. 字喃의 概念, 그리고 漢字와 字喃의 差異에 觀한 것입니다. 먼저 字喃의 概念에 대해 글에서 說明하신 것을 정리하면 “漢字를 借用·改變하여 越南語를 표기하는 데 사용한 文字 체계” 정도가 될 것 같습니다. 字喃의 概念을 이렇게 理解하면 괜찮은지요? 그렇다면 ‘自製’의 境遇에는 이것이 漢字 借用과 改變 중 어디에 속한다고 볼 수 있는지요?
先生님이 “2.1 漢字文化圈의 方塊文字”에서 인용한 日本 國字 ‘衤’, ‘零’와 類似하게 韓國에서도 이른바 固有漢字라고 하는 ‘畚’, ‘迕’와 같은 글자가 있습니다. 그런데 韓國에서는 이 글자를 固有漢字라는 用語가 말해 주듯 漢字의 一種으로 보고 있습니다. 韓國에서는 이러한 境遇 자기 나라의 文字를 만든다고 보지는 않는데 越南에서는 다르게 보고 있는 것 같습니다. 그런 점에서 越南에서도 ‘自製’를 혹시 漢字의 一種으로 보는 境遇도 있는지 여쭙고 싶습니다. 그렇지 않다면 漢字로 보기 어려운 理由가 따로 있는지 알고 싶습니다.
2. “2.2 漢字與喃字的差別”에 나오는 ‘越南語 語法の 遵守 有無’와 關聯된 것입니다. 이와 關聯해서는 越南語 語法和 中國語 語法の 差異가 重要한 役割을 하지 않을까 합니다. 越南語 語法 중에 中國語와 큰 差異를 보이는 것이 제게는 두 가지 정도가 떠오릅니다. 첫째, 修飾語와 被修飾語의 關係에 관한 것입니다. 中國語는 修飾語가 앞에 오고 被修飾語가 뒤에 오는 構成을 가진 데 반해 越南語는 被修飾語가 앞에 오고 修飾語가 뒤에 오는 構成을 가진 것으로 알고 있습니다. 둘째, 繫辭(羅 là)의 存在를 들 수 있을 것 같습니다. 혹시 이것 말고도 越南語와 中國語의 差異를 드러내는 語法の 例들로 어떤 것들이 더 있는지 궁금합니다.
3. 字喃의 起源과 形成에 關한 것입니다. 글에서 보면, 字喃이 14세기에 形成된 것으로 보고 계신 것 같습니다. 그런데 先生님의 글에서는 장르를 中心으로 分類하고 있어 時代相을 알기 어려운 면이 있습니다. 아무래도 장르별 分類가 時代別 分類와 어우러지면 字喃

1) The University of Seoul / leeyonghu@uos.ac.kr

의 形成이나 發達 過程과 關聯된 情報을 얻을 수 있지 않을까 합니다. 資料의 時代的 樣相은 어떠한지요? 이와 함께 별도로 짧은 質問을 하고자 합니다. 字喃이 14세기에 形成되었다는 것을 보여주는 資料로는 어떤 것이 있는지요? 그리고 以前에는 字喃 資料로 볼 만한 게 전혀 없었는지 궁금합니다.

4. 漢喃研究所의 喃籍 分布 狀況에는 매우 흥미로운 事實이 하나 目擊됩니다. 그것은 全喃 資料 중에 少數民族의 字喃 文獻이 있다는 것입니다. 作成 主體가 누구인지, 어떤 內容인지 등 關聯 內容이 궁금합니다. 더불어 越南 周邊의 民族文字와 字喃의 關係를 현재 越南 學界에서는 어떻게 把握하고 있는지도 여쭙고 싶습니다. 제가 이 問題에 關心을 갖게 된 것은 方塊 壯字 중 ‘위’를 뜻하는 글자로 ‘쫘’이 쓰이고 있는 것을 보고 字喃의 ‘쫘(하늘)’을 떠올리게 되면서부터였습니다. 이는 斷片的 事實이기는 하지만 歷史的·地理的으로 볼 때 偶然이 아닐 듯도 합니다.
5. “3.2.1. 漢喃 書籍의 分類”에서 ‘漢喃 竝用 書籍’으로 두 가지 種類를 들었습니다. 첫째, 漢字 文章 중에 前後를 하나의 言語로만 記錄한 것이 아니라 中國語 文法에 의한 句節에 때로는 字喃이나 越南語 文法으로 된 句節이 插入된 것, 둘째, 漢字 詩集에 1, 2편의 字喃 詩가 섞인 境遇를 들었습니다. 그런데 前者의 境遇에 대해서는 좀 더 具體的하게 說明을 듣고 싶습니다. 그리고 漢喃 竝用 書籍의 境遇에는 書籍을 계속 살펴보면 더 많이 發見될 수도 있을 것 같은데 先生님의 생각은 어떠신지 궁금합니다.
6. 韓國에서는 借字表記의 形成과 관련하여 漢字 學習이 重要한 影響을 끼친 것으로 생각해 왔습니다. 漢字 學習에서 漢字의 ‘訓’이 確立되고 이러한 訓을 利用한 訓讀이 可能해지면 서 漢字를 이용한 韓國語 쓰기가 本格的으로 이루어졌다고 보고 있습니다. 越南에서도 漢字 學習이 字喃의 發達에 影響을 미쳤는지, 그리고 影響을 미쳤다면 어떻게 影響을 미쳤는지 여쭙고 싶습니다.

이상 두서없이 質問을 하였습니다. 字喃에 대해 아직까지 韓國에서는 充分한 關心을 갖지 못했습니다. 하지만 이번 國際大會를 機會로 해서 앞으로 韓國과 越南 兩國의 學者가 交流를 가지고 兩國의 文字文化에 대해 理解할 수 있는 機會를 持續的으로 마련되었으면 합니다. 字喃에 대한 理解는 韓國의 文字文化에 대한 理解를 넓히는 데 많은 도움이 될 것으로 期待됩니다.

DAY 2

발표1

多賀城碑が刻む

「激動の北東アジア」

多賀城碑에 새겨진

‘격동의 북동아시아’

多賀城碑が刻む「激動の北東アジア」

平川南(일본 人間文化研究機構)

多賀城碑が刻む 「激動の北東アジア」

2021年11月6日

人間文化研究機構 機構長
平川 南



多賀城碑が刻む「激動の北東アジア」

一. 古代日本における石碑と多賀城碑—碑形と碑文—
古代日本の石碑・石塔

〔碑形〕

1. 蓋首碑 那須国造碑・多胡碑
2. 圭首碑 (山形県立石寺如法経所碑 天養元(一一四四)年)
3. 円首碑 多賀城碑

〔日本三古碑〕

1. 那須国造碑—墓碑・顕彰碑
2. 上野三碑—山上碑—追善供養碑

- 多胡碑—建郡碑
- 釜井沢碑—供養碑
3. 多賀城碑—修造記念碑

二. 多賀城碑建碑の時代的背景

1. 内政 藤原仲麻呂政権と東北政策の推進
藤原朝獨の東北政策
陸奥国桃生城・出羽国雄勝城の造営
陸奥国多賀城修造
出羽国秋田城修造
2. 外交 朝獨・新羅使節問
新羅征討計画
渤海国との交流

三. 藤原朝獨、多賀城修造碑の建立

碑文を記す—八世紀の多賀城と古代日本

1. 「此城神龜元年「大野朝臣東人之所置也」
政庁南大路跡石組暗渠出土木簡群による多賀城創建年代の検証
2. 「蝦夷国界」の表示—東北政策における朝獨の実績誇示
3. 「靺鞨国界」の表示の意義
多賀城支配領域の表示

東—「蝦夷国界」
西・南—「下野国界」・「常陸国界」
北—「靺鞨国界」

4. 修造記念碑「天平宝字六年十一月一日—朝獨参議(古代の太政官に
おいて朝政審議官)昇任日

結びにかえて



多賀城碑重文指定記念講演会 平成10(1998)年 5月 2日

一、古代日本における石碑と多賀城碑
— 碑形と碑文 —

古代日本の石碑・石塔

No.	名称	所在地または 由来地	年代	種類区分
1	宇治橋碑	京都府宇治市	大化2(646)年以降 辛巳(681)年	架橋記念碑
2	山上碑	群馬県高崎市	庚子(700)年 和開4(711)年	追善供養碑(僧)
3	那須国造碑	群馬県高崎市		建郡碑
4	多胡碑			
5	超明寺碑	滋賀県大津市	養老元(717)年	記念碑(僧)
6	元明天皇陵碑	奈良県奈良市	養老5(721)年	墓碑
7	阿波国造碑	徳島県石井町	養老7(723)年	墓碑
8	金井沢碑	群馬県高崎市	神亀3(726)年	供養碑(知識結縁)
9	竹野王多重塔	奈良県明日香村	天平勝宝3(751)年	記念銘(造塔)
10	仏足石	奈良県奈良市	天平勝宝5(753)年	仏足石
11	仏足石跡歌碑	奈良県奈良市	天平勝宝5(753)年	歌碑
12	多賀城碑	宮城県多賀城市	天平宝字6(762)年	記念碑(修造)
13	宇智川磨崖碑	奈良県五條市	宝龜9(778)年	磨崖碑(長文)
14	浄水寺南門碑	熊本県宇城市	延暦9(790)年	造寺碑
15	浄水寺灯籠羊石	熊本県宇城市	延暦20(801)年	造塔銘(僧)
16	山上多重塔	群馬県桐生市	延暦20(801)年	造塔銘(如法経)
17	浄水寺寺額碑	熊本県宇城市	天長3(826)年	寺額碑
18	浄水寺如法経碑	熊本県宇城市	康平7(1064)年	如法経塔
a	伊予道後温泉碑	(愛媛県松山市)	法興5(596)年	記念碑(温泉)
b	藤原鎌足碑		天智8(689)年	墓碑
c	南天竺婆羅門僧正碑	(大阪府太子町)	己丑(689)年	坐像碑
d	大安寺碑	(奈良県奈良市)	神護景雲4(770)年	造像碑
e	沙門勝道慈山水堂玄珠碑	(奈良県奈良市)	宝龜6(775)年	造寺碑
f	益田池碑	(栃木県日光市)	弘仁5(814)年	顕彰碑
g		(奈良県)	天長2(825)年	記念碑(造池)

1~18=現存するもの a~g=滅失したもの



1

古代中国の碑の形状



多賀城碑の拓本
(高さ196センチ×幅(最大)92センチ×厚さ(最大)70センチ)



円首碑
慶山寺舍利塔記碑の拓本
多賀城碑と同じ形状の円首碑(中国
陝西省、唐の開元29年(741)銘、石
灰岩、高さ77センチ×幅54センチ×厚さ13センチ)



蓋首碑(唐、嵩陽觀記聖德感應碑、
河南省登封)



圭首碑(魏、封宗聖侯孔羨碑、
山東省曲阜)

2



奈良・平安時代の上野国

3



山上碑
[687年]



多胡碑
[711年]



金井沢碑
[726年]

上野三碑〔群馬県高崎市所在〕



4

多胡碑



【寸法】 笠石 幅 9.5cm 碑身 高さ 129cm
奥行き 9.0cm 幅 6.9cm
中央厚さ 2.7cm 厚さ 6.2cm

【材質】 牛伏砂岩(石質ワッケ)

【碑文】

弁官符上野国片岡郡緑野郡甘
良郡并三郡内三百戸郡成給羊
成多胡郡和銅四年三月九日甲寅
宣左中弁正五位下多治比真人
太政官二品穂積親王左大臣正二
位石上尊右大臣正二位藤原尊

【読み方】

弁官符す。上野国の片岡郡・緑野郡・甘良郡并せて三郡の内、三百戸を郡と成
し、羊に給いて多胡郡と成せ。和銅四年三月九日甲寅に宣る。左中弁・正五位
下多治比真人。太政官・二品穂積親王、左大臣・正二位石上尊、右大臣・正二
位藤原尊。

【現代語訳】

中央政府の弁官局が命ずることには、上野国の片岡郡・緑野郡・甘良郡の三郡
の中から三百戸を分けて新たに郡をつくり、羊を首長とし、名は多胡郡としなさ
い。和銅四(七一一)年三月九日甲寅。左中弁正五位下多治比真人がこれ
を伝えた。太政官は二品穂積親王、左大臣は正二位石上(麻呂)尊、右大臣は
正二位藤原(不比等)尊である。

※用語 尊—敬称

5

韓国・磨雲嶺真興王巡狩碑



韓国・磨雲嶺真興王巡狩碑
咸鏡南道利原郡

長らく高句麗の影響下に置かれていた新羅は、五世紀後半以降自立をめ
ざし、六世紀には高句麗領へも領土を拡大していく。眞珍・眞坪碑、丹
陽・赤城碑(五四五年以降)、昌寧碑(五六一一年)などはこうした時期の
ものである。五六八年に眞興王は、この拡大した領域を巡幸して、各地に
石碑を建立した。磨雲嶺碑・黄草嶺碑・北漢山碑の三碑がそれで、いずれ
も「眞興太王巡狩管境」と明記されている。

6



多賀城碑全景

〔銘文〕

去京一千五百里
多賀城去蝦夷国界一百廿里

去常陸国界四百十二里

去下野国界二百七十四里

去靺鞨国界三千里

西

此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歲次壬寅參議東海山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝獨修造也

天平寶字六年十二月一日

〔訓読〕

多賀城。京を去ること一千五百里。

蝦夷の国の界を去ること一百廿里。

常陸の国の界を去ること四百十二里。

下野の国の界を去ること二百七十四里。

靺鞨の国の界を去ること三千里。

西

此の城は、神龜元年、歲は甲子に次る。按察使・兼鎮守將軍・從四位上・勳四等大野朝臣東人の置く所なり。天平寶字六年歲は壬寅に次る。參議・東海・東山・節度使・從四位上・仁部省卿・兼按察使・鎮守將軍藤原惠美朝臣朝獨。修造するなり。

天平寶字六年十二月一日

7

藤原朝獨系圖 (岸俊男氏『藤原仲麻呂』《人物叢書》よりの抜粋)



二、多賀城碑建碑の時代的背景

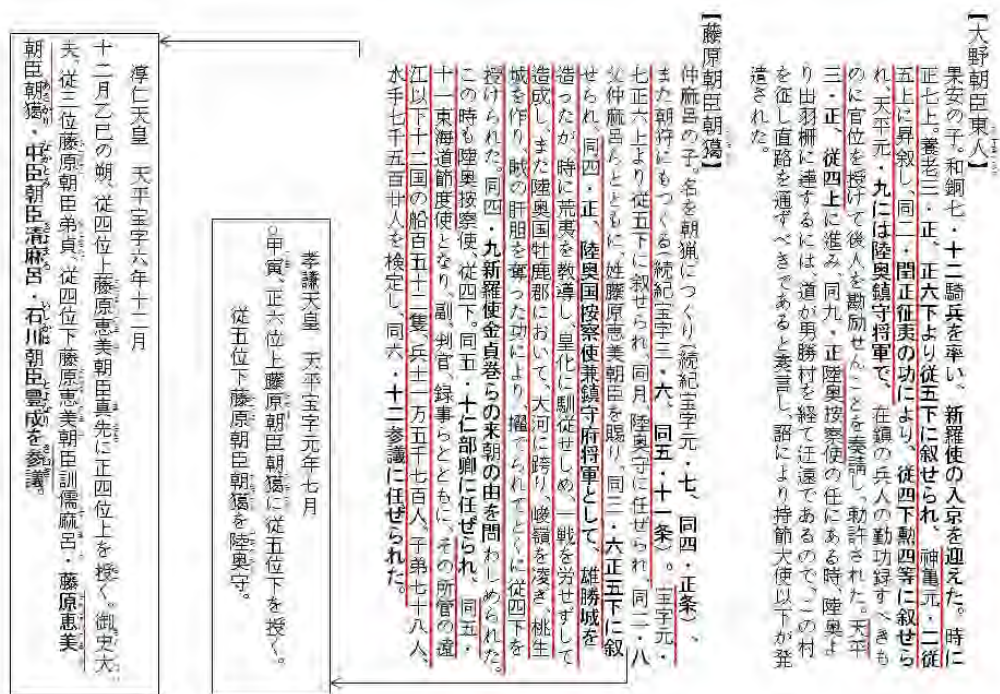
1. 内政 藤原仲麻呂政権と東北政策の推進

仲麻呂による官司名の変更
この変更には唐・渤海の官制が意識されている。しかし、名称のみの表面的な模倣にとどまったので、仲麻呂の乱後、さっそうもとに戻された。

改定前	改定後
太政官 太政大臣 左大臣 右大臣 大納言	乾政官 太師 太傅 太保 御史大夫
紫微中台	坤宮官
中務省 式部省 治部省 民部省 兵部省 刑部省 大蔵省 宮内省	信部省 文部省 礼部省 仁部省 武部省 義部省 節部省 智部省

【獺】
20723
日カツ
〔集韻〕居殺切
レフ
〔集韻〕力涉切
獺は、大きい狼。獺(20723)に同じ。〔玉篇〕獺、獸名。〔集韻〕獺、獺、巨狼、或从犬。●口の短い犬。歌(16141)に同じ。〔集韻〕歌、短喙犬、或作獺。●我の姓。〔集韻〕獺、或姓。●かり。獺(20723)に通ず。〔集韻〕獺、説文、放獺逐禽也、通作獺。





9

政庁変遷イメージ図



III期政庁 伊治公皆麻呂の焼き討ち後に再建された。

宝龜11(780)年

暫定的な復旧
本格的な再建
城内の整備(大畑・作貴・城前・六月坂地区の役所)
城外に町並みができ
る



I期政庁 大野東人によって創建された。主要な建物には瓦が葺かれていた。

神龜元(724)年

下伊場野窯跡群・木戸窯跡群・日の出窯跡群などで瓦が焼かれる
この頃東山官衙遺跡造営



IV期政庁 陸奥国大地震後に復興された。政庁北側に新たに建物が建てられた。

貞観11(869)年

火山灰降る(915)年



II期政庁 藤原朝鑑によって大改修された。建物や築地塹は礎石式となり、新たに東・西・後殿などが加えられた。築地塹は瓦葺き、広場は石敷きとなり、石組み排水溝が敷設されるなど、全期を通して最も機能性と装飾性を兼ね備えた政庁である。

天平宝字6(762)年

多賀城碑
城前地区の役所がつくられる
桃生城跡完成(759年)
伊治城跡完成(767年)

10

西海道	南海道	東海道	道
古備前臣貞備	西濟王教福	藤原美朝臣朝滿	正
佐伯宿禰美兼朝臣	藤原朝臣田原日	西諸朝臣足人	副
大隅・豊後・日向・大隅・豊後	紀伊・河内・藤原・美作・備前・備中・安芸・周防	上野・下野・安房・上野・下野・安房・上野・下野	管
一一一	一一一	一一一	船
一一五〇〇	一一五〇〇	一一五〇〇	兵士
六二	六二	七八	子弟
四九一〇	四九一〇	七五〇〇	水手

天平宝字五年(七六二)十一月東海・南海・西海の三道節度使任命

九月癸卯、新羅國、級食金貞卷を遣して朝貢せしむ。陸奥按察使從四位下藤原美朝臣朝滿らをして、その来朝くる由を問ほしむ。貞卷言して曰はく、「職貢を脩めずして、久しく年月を積む。是を以て本國の王、御調を貢して貢進らしむ。また聖朝の風俗言語を知る者無し。仍て學語一人を進める」といふ。問ひて曰はく、「凡そ是れ王命を執りて朝貢を行ふことは、本より忠信に副ひ、礼義を通はすを以てなり。新羅既に言信無く、また礼儀を闕く。本を棄て未を行ふことは、我が國の賤しむ所なり。また王子泰廉が入朝する日、申して云はく、「事毎に古迹に違ひて供奉せむ」といふ。その後、小野田守を遣す時、彼の國、礼を闕く。故に田守、使の事を行はすして還帰す。王子すら尚猶信無し。況や復輕便をや。豈獨とするに足らめや」といふ。貞卷曰はく、「田守未れる日、貞卷出でて外官と爲り。亦復賤しき人にして細旨を知らず」といふ。是に貞卷に告げて曰はく、「使人輕微なれば實待するに足らず。此より却き廻りて、汝が本國に報ぐべし。專對の人、忠信の礼、仍舊の調、明驗の言、四者の備に具れるを以て、乃ち来朝ぐべし」といふ。

2. 外交 新羅使勘問 新羅征討計画

淳仁天皇 天平宝字四年九月



8世紀の東アジアの情勢

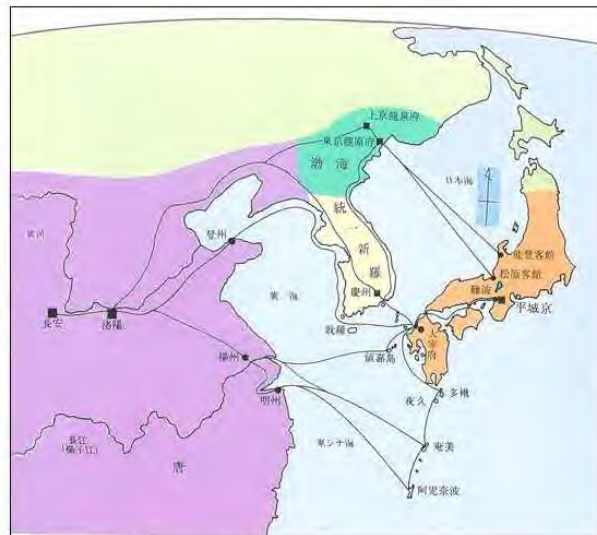


7世紀の東アジア



朝鮮半島の古代石碑と主な木簡(7・10・11) 文房具(9)出土地の位置図

古代朝鮮



外交使節の航路

「平城京展」図録★★★

編集 奈良国立文化財研究所
朝日新聞大阪本社企画部
発行 朝日新聞大阪本社企画部
©Asahi Shinbun 1989

13



道路に作られた暗渠排水施設
自然石を側石とし、丸木材や丸太を割った
材を横に並べて蓋としたもの。手前の集石
は改修時に設けられた暗渠の集水枡。

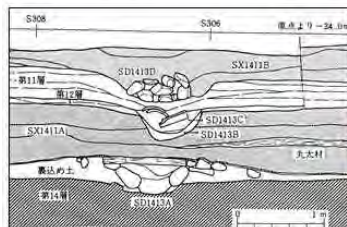


図 SD1413Aと裏込め土の状況



外郭南門復元イメージ図

三、藤原朝獨、多賀城修造碑の建立

碑文を記す「八世紀の多賀城と古代日本

1. 「此城神龜元年」大野朝臣東人之所置也」
政庁南大路跡石組暗渠出土木簡群による多賀城創建年
代の検証

14

大正二年(七〇二) 御野国戸籍

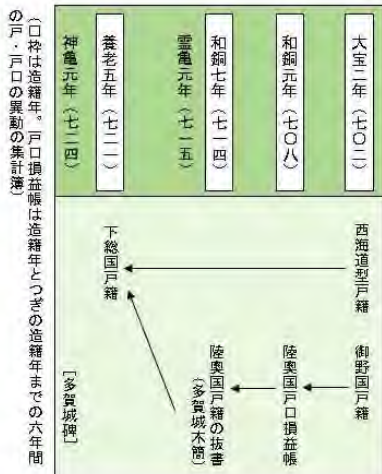
戸主同党久比正年卅
次伊世尔壳年十五
兒阿多麻志壳年三

戸主妻秦人阿伎太壳年五十二
次真木壳年十

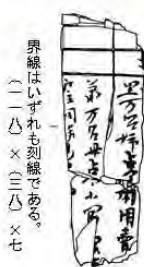
兒太須壳年廿
久比妻秦人太利壳年廿四



戸籍抜書木簡
(宮城県多賀城跡南北大路の
石組暗渠の裏込め土出土)



黒万呂姉占マ麻賣
弟万呂姉占マ小富賣
戸主同族



界線はいづれも列線である。
(一)八×(三)八×七

造籍年	西暦	戸口 年数
天智9 (近江令施行 庚午年籍)	670	20
持統4 (淨御原令施行 庚寅年籍)	680	
持統10	686	6
大正2 (大正律令施行)	702	6
和銅元	708	6
和銅7	714	6
養老5	721	6
神龜4	727	6
天平5	733	7
天平12	740	8
天平18	746	8
天平勝宝4	752	6
天平宝字2	758	6

15

〔裏〕

継目裏書

御野国加毛郡半布里太寛蔵戸籍
田島水王廿二
第一
次伊世尔壳年十五
兒阿多麻志壳年三

〔表〕

中政康人部弥啓十二
下戸都弥
次伊世尔壳年十五
屋同黨久比正年卅
次伊世尔壳年十五
兒阿多麻志壳年三
次真木壳年十
久比妻秦人太利壳年廿四
次久娘理年十四
屋妻秦人阿伎太壳年五十二
兒太須壳年廿
次伊世尔壳年十五
兒阿多麻志壳年三
次真木壳年十
久比妻秦人太利壳年廿四
次久娘理年十四
屋妻秦人阿伎太壳年五十二
兒太須壳年廿
次伊世尔壳年十五
兒阿多麻志壳年三
次真木壳年十
久比妻秦人太利壳年廿四

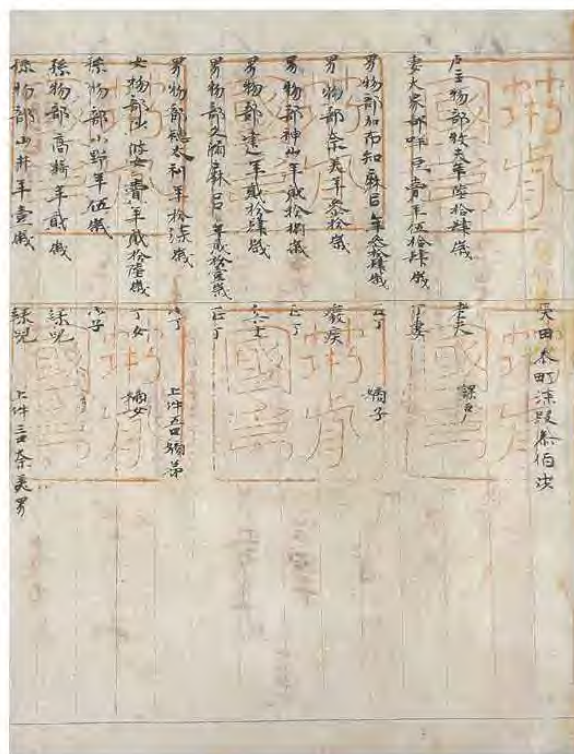
大正二年(七〇二) 御野国加毛郡半布里戸籍

〈国立歴史民俗博物館

『正倉院文書拾遺』一九九二年〉

16

大宝二年(七〇二) 筑前国嶋郡川辺里戸籍
 〈国立歴史民俗博物館
 『正倉院文書拾遺』一九九二年〉



17

養老五年(七二一)
 『正倉院文書』

○繼目裏に「下総国印」が半存。表に「下総国印」が十七顆。
 (正集二七)

○巻首に一行半の空白がある。

下総国葛飾郡大島郷戸籍	養老五年
甲和里戸主孔王部小山年肆拾捌歳	正丁 課戸
妻孔王部阿古売年伍拾貳歳	丁妻
妾孔王部小宮売年参拾捌歳	丁妾
男孔王部忍羽年貳拾貳歳	正丁 兵士、嫡子
男孔王部忍桑年柒歳	小子 嫡弟
男孔王部広国年伍歳	小子 嫡女
女孔王部大根売年貳拾柒歳	丁女
女孔王部古富根売年拾玖歳	次女
女孔王部若大根売年拾伍歳	小女
女孔王部刀自売年参歳	緑女
女孔王部小刀自売年貳歳	緑女
従父妹孔王部小宮売年参拾捌歳	丁女
従父妹孔王部宮売年肆拾歳	丁女
姪孔王部手子売年参拾貳歳	丁女

養老5年(721) 下総国葛飾郡大島郷戸籍〔正倉院文書〕

18



19



2. 「蝦夷国界」の表示―東北政策における朝敵の実績誇示
黒川以北十郡の城柵官衙跡と防衛ライン

20



21

3. 「靺鞨国界」の表示の意義

多賀城碑の「北の界」

多賀城支配領域の表示

七世紀後半における齊明天皇四（六五八）年から同六（六六〇）年にかけて国家的事業いわゆる阿倍比羅夫の北方遠征に關して、相澤秀太郎氏の專論「阿倍比羅夫の北方遠征と「靺愼」——國際情勢からみた北方遠征の目的をめぐって——」（熊谷公男編『古代東北の歴史像と城柵』高志書院 二〇一九年）から私の報告に關連する論点を整理して引用しておきたい。

「靺愼」と「靺鞨」

中国には、古くから中華とは言葉の通じない遠方の夷狄は近くの夷狄を媒介として中華に朝貢するという概念があり、それは皇帝の徳を体现するうえで非常に好ましいこととされていた。無論、中国にとつてみれば、六五九年の倭国に隨った蝦夷の来朝についても、近くの夷狄（倭国）を仲介役としてさらに遠方の夷狄（靺鞨）が来朝したものとして捉えられたのである。アシハセと靺愼が結びついた背景は、阿倍比羅夫の北征の目的が高句麗を目標す北方航路の開拓にあり、高句麗と政治的結びつきの強い「靺愼」がアシハセと結びつき、北方の種族を表す「アシハセ」に「靺愼」という漢字表記をあてたのである。この契機は阿倍比羅夫の北方遠征であり、以後、『日本書紀』編纂の段階において、「アシハセ」は漢字表記「靺愼」に統一されることとなったものと考えられる。

靺愼とは、中国春秋時代に実在したとされる種族で、春秋時代を記した歴史書の『国語』には、楢矢石磐の使用及び中国皇帝の徳を慕つて遠方より来朝し、楢矢石磐を貢納する種族として現れる。また、中国正史は中国東北方（現在の吉林省・黒龍江省からロシアの沿海州）に居住した種族を北狄として列伝に載せるが、それらに対する呼称は、漢代の檣婁、南北朝時代の勿吉、隋・唐時代の靺鞨と変遷し、それぞれ靺愼の後裔として位置づけられている。勿吉の次に靺愼と結びつけられた種族（北狄）が靺鞨である。『隋書』は「靺鞨、在三高麗之北」（略）自三私渚（以東、矢皆石磐、即古之靺愼氏也）（『隋書』靺鞨伝）として、靺鞨と総称される種族であつても矢に石磐をつける慣習のある私渚以東、すなわち私渚靺鞨・弓室靺鞨・黒水靺鞨こそが靺愼の後裔であると解釈している。

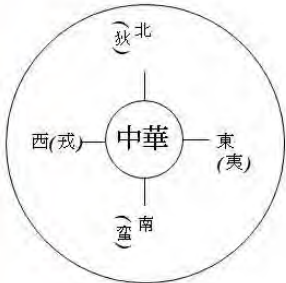
このように中国の為政者は、楢矢石磐の使用と中国への貢納という種族的特点を根拠として、正史の檣婁・勿吉・靺鞨を靺愼の後裔と解釈したものと考えられる。さらに後世まで靺愼の存在を強調した理由は、靺愼の来朝は皇帝の徳が遠方に及んだことを示す好事であるという『国語』以来の伝統的な觀念が、依然として中国の華夷秩序を維持するための基盤とされたからであり、それこそが中国における「靺愼」の存在意義であつたと考える。

『日本書紀』の靺愼は「アシハセ」という義訓が付されているが、倭語「アシハセ」に漢語「靺愼」を充てた漢語表現である。

22



8世紀の東アジアの情勢



華夷思想
中華思想と「蠻民」
中華思想に基づく日本列島における東夷・北狄・西戎・南蠻



渤海・靺鞨主要遺跡
(菊池俊彦, 一九八九年 を参考に作図)

『続日本紀』(七二〇) (二二三日)
養老四年正月丙子条

「丙子、遣菟嶋津輕津司從七位上諸君鞍男等六人於靺鞨國、觀其風俗。」
「菟嶋と津輕との津の司である從七位上諸君鞍男ら六人を靺鞨國に派遣して、その風俗を視察させた」

とあり、これに先立ち、養老元(七一七)年、第九次遣唐使多治比島守らが派遣され、翌年には帰国しており、唐の北狄とする「靺鞨部族」の最新情報を持たらされ、養老四年の「靺鞨國」風俗調査が実行されたと推測される。

一方、正倉院文書に見える例えば個人名で、天平十八年(七四六)「若湯坐靺鞨」を同一人物の別表記「若湯坐阿志波世」とみえる。天平十八年(七四八)の「東大寺写經所」の請經使を務めている人物である。このことから、近年、奈良時代(八世紀)も七世紀の阿倍比羅夫遠征記事にみえる肅慎(あしはせ)と同様に「靺鞨」は「あしはせ」とよみ、唐・渤海の「北狄」とする靺鞨(まつかつ)部族と解しないという説が広まっている。しかし、写經所文書などに登場する人名と、日本における為政者が、菟嶋津輕津司を派遣し、風俗視察させた「靺鞨國」と、さらに東アジア外交の牽引者・藤原朝橘が造立した多賀城碑文の「蝦夷國」と対をなす「靺鞨國」では同列で論ずることは避けるべきであろう。

27

齊明天皇五年 己未(六五九)

三月 阿倍比羅夫が蝦夷征討を行い、飽田・淳代・津輕・胆振組の蝦夷を響應し、後方羊蹄に政所を設置して帰還する。道奥・越の国司と評の官人に位を授ける。

『日本書紀』齊明天皇五年三月是月条

是月、遣阿倍臣、船師一百八十艘、討蝦夷國。阿倍臣、簡集飽田・淳代二郡蝦夷二百卅一人、其虜卅一人、津輕郡蝦夷一百二十人、其虜四人、胆振組蝦夷廿人於一所、而大饗賜祿。雙、与五色綵帛、祭彼地神。至三月入籠、一時、問菟嶋夷胆鹿嶋・菟穗名二人進曰、可下以二後方羊蹄、為中政所上焉。

是の月に、阿倍臣、名を開せり、を遣して、船師一百八十艘を率て、蝦夷國を討つ。阿倍臣、飽田・淳代、二郡の蝦夷二百四十一人、其の虜三十一人、津輕郡の蝦夷一百二十一人、其の虜四人、胆振組の蝦夷二十人を一所に簡ひ集めて、大に饗たまひ祿賜ふ。膽振組、此をば伊賀郡と云ふ。

齊明天皇六年 庚申(六六〇)

三月 阿倍比羅夫が遠征し、渡嶋蝦夷の救援要請を受けて肅慎と戦い、服属させる。

『日本書紀』齊明天皇六年三月条

三月、遣阿倍臣、船師二百艘、伐肅慎國。阿倍臣、以陸奥蝦夷、令乘三己船、到大河側。於是、渡嶋蝦夷一千余、屯聚海畔、一河而當。當中二人、進而急叫曰、肅慎船師多来、將殺我等。之故、願欲三濟河而仕官一矣。

三月に、阿倍臣、名を開せり、を遣して、船師二百艘を率て、肅慎國を伐たしむ。阿倍臣、陸奥の蝦夷を以て、己が船に乗せて、大河の側に到る。是に、渡嶋の蝦夷、千餘、海の畔に屯聚みて、河に向ひて急す。營の中の二人進みて急に叫びて曰はく、「肅慎の船師多に來りて、我等を殺さむとするが故に、願ふ、河を濟りて仕官へまつらむと欲む」といふ。

28

結びにかえて

日本列島に現存する古代の石碑は、わずか一八碑であり、碑すべてが独自の歴史資料として重要な意義をもつが、碑文の大半は、仏教関係（墓碑・供養碑など）、日本三古碑とされる「那須国造碑」（国宝）も個人の供養碑、「上野三碑」^{山ノ上碑・金井沢碑は供養碑、多胡碑のみ、行政に関わる建郡碑（ユネスコ「世界の記憶」二〇一七年登録）。}

古代日本における石碑の中で、異彩を放つのは多賀城碑。奈良時代中頃、時の最高権力者・藤原仲麻呂の四男として、東北地方支配の全権を託された藤原朝橘は着任と同時に陸奥国桃生城と出羽国雄勝城を新たに造営、あわせて多賀城と秋田城の修造事業を実施した。

国史『続日本紀』に全く記載のない多賀城創建年代「神龜元年」（七二四年）、修造年代「天平宝字六年」（七六二年）を明記している。多賀城跡の発掘調査で、両年代の妥当性が実証された。

さらに、仲麻呂の中国・唐風好みはよく知られているが、朝橘は東アジア情勢に精通し、七六〇年、新羅使来朝の折、自ら大宰府に赴き、欠礼を責め、本国に返す。

多賀城碑文に「蝦夷国界一百廿里」と記し、朝橘の強硬な東北経営の成果を主張した。さらに陸奥出羽を統括した朝橘は、北を、大海を越え大帝国唐および友好国・渤海の東北地方に居す「北狄」とされた靺鞨部族を「靺鞨国三千里」と表記した。日本列島における異民族とした「靺夷」と、唐・渤海（前身の高句麗）が北狄とした「靺鞨」部族を併記した仲麻呂政権下の軍事・外交の牽引者・藤原朝橘ならではの碑文といえよう。その石碑は一三〇〇年間、数多くの為政者・文人墨客そして地元の人々によって最良の状態で守り続けられてきた。

多賀城碑は「激動の古代東北」さらに八世紀の「激動の北東アジア世界」を見事に刻んでおり、日本列島に遺る古代の石碑のなかでも、古代国家に関わる比類なき価値を有する歴史資料である。

29

人間文化研究機構のビジョン

人間文化研究機構（人文機構）を構成する6機関は、人間文化研究の各分野におけるわが国の中核的研究拠点および国際的研究拠点である。

人文機構は大学等研究機関における人文学（人間とその文化を総合的に探求する学問）の発展に貢献する重要な使命を託されており、その責務はきわめて重いものがある。

日本の人文学が世界に向けて発信できる意義あるコンセプトは「真の豊かさを問うこと」「自然と人間の調和」そして「平和の創出」であろう。

4つの大学共同利用機関法人



国際日本文化研究センター
International Research Center
for Japanese Studies
日文研 | NICHIBUNKEN | KYOTO

総合地球環境学研究所
Research Institute
for Humanity and Nature
地球研 | RHN | KYOTO

国立民族学博物館
National Museum of
Ethnology
民族 | MINPaku | OSAKA

人間文化研究機構 本部
National Institutes
for the Humanities
Administrative Headquarters
人文機構 | NIHU | TOKYO

国立歴史民俗博物館
National Museum of
History and Folklore
歴史 | KEHAKU | CHIBA

国文学研究資料館
National Institute of
Japanese Literature
国文学 | NINJAL | TOKYO

国立国語研究所
National Institute for Japanese
Language and Linguistics
国語研 | NINJAL | TOKYO

大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-3-13 ヒューリック神谷ビル2階
Tel.03-6402-9200 (代表) <http://www.nihu.jp/>

30

おわり

多賀城碑에 새겨진 ‘격동의 북동아시아’

平川南(일본 人間文化研究機構)

多賀城碑가 새기는 ‘격동의 동북아시아’

2021년 11월 6일

人間文化研究機構 機構長
히라카와 미나미



多賀城碑가 새기는 「격동의 동북아시아」

「고대일본에서의 식민지와 多賀城碑—비형과 비문—
고대일본의 식민·식탑

〔비형〕

1. 蓋首碑 那須國造碑・多胡碑

2. 圭首碑 (山形縣立石寺如法經所碑 天養元年(1144))

3. 圓首碑 多賀城碑

〔일본 3 古碑〕

1. 那須國造碑—표비・현창비

2. 上野3碑—山上碑—추모비・양양비

多胡碑—전주비

金井澤碑—공양비

3. 多賀城碑—수축기념비

二. 多賀城碑 건비의 시대적 배경

1. 내정 藤原仲麻呂정권과 동원정책의 추진

陸奥國桃生城・出羽國雄勝城의 조영

陸奥國多賀城 수축

出羽國秋田城 수축

2. 외교 朝獨의 식민사상 취조

식민정벌계획

발해와의 교류

三. 藤原朝獨의 多賀城 수축기념

비문을 기록하다—8세기의 多賀城과 고대 일본

1. 「此城神龜元年」 「大野朝臣東人之所置也」

政廳南大路 유적 石組暗渠 출토 목간문에 따른 多賀城 창건연대 건립

2. 「蝦夷國界」의 표시—동원정책에서의 朝獨의 실적 과시

3. 靺鞨國界—표시의 의의

多賀城 지배영역의 표시

동「靺鞨國界」 서「下野國界」·「常陸國界」

4. 수축기념비「天平寶字六年十二月一日」朝獨의 參議고대의 太政官에서

조정실의 관(승지인)

백제시대말에 대시하오



多賀城碑 重要文化財 지정 기념강연회 1998년 5월 2일

No.	명칭	소재지 또는 유래지	연대	종류구분
1	宇治橋碑	京都府 宇治市	大化2年(646) 이후	교량가설기념비
2	山上碑	群馬縣 高崎市	辛巳年(681)	추복공양비(승려)
3	那須國造碑	群馬縣 大田原市	庚子年(700)	묘비·현장비(群臣)
4	多胡碑	群馬縣 高崎市	和珎4年(711)	건군비
5	超明寺碑	滋賀縣 大津市	養老원년(717)	기념비(승려)
6	元明天皇陵碑	奈良縣 奈良市	養老5年(721)	묘비
7	阿波國造碑	德島縣 石井町	養老7年(723)	묘비
8	金井澤碑	群馬縣 高崎市	神龜3年(726)	공양비(지식결연)
9	竹野王多重塔	奈良縣 明日香村	天平勝寶3年(751)	기념명(조탑)
10	佛足石	奈良縣 奈良市	天平勝寶5年(753)	불족석
11	佛足石跡歌碑	奈良縣 奈良市	天平勝寶5年(753)?	가비
12	多賀城碑	宮城縣 多賀城市	天平寶字6年(762)	기념비(수축)
13	宇智川磨崖碑	奈良縣 五條市	寶龜9年(778)	마애비(계문)
14	淨水寺南門碑	熊本縣 宇城市	延暦9年(790)	조사비
15	淨水寺燈籠竿石	熊本縣 宇城市	延暦20年(801)	기진비(승려)
16	山上多重塔	群馬縣 桐生市	延暦20年(801)	조탑명(여법경)
17	淨水寺寺額碑	熊本縣 宇城市	天長3年(826)	사원비
18	淨水寺山法經碑	熊本縣 宇城市	康平7年(1064)	여법경탑
a	伊子遺跡溫泉碑	(愛媛縣 松山市)	法興6年(596)	기념비(온천)
b	藤原鎌足碑		天智8年(669)	묘비
c	采女氏坐城碑	(大阪府 太子町)	己丑年(689)	묘역비
d	南天竺波羅門僧正碑	(奈良縣 奈良市)	神護景雲4年(770)	조상비
e	大安寺碑	(奈良縣 奈良市)	寶龜6年(775)	조사비
f	沙門勝道慈山水堂玄殊碑	(栃木縣 日光市)	弘仁5年(814)	현장비
g	龜田池碑	(奈良縣)	天長2年(825)	기념비(저수지 조성)

1~18 = 현존하는 것 a~g = 사라진 것



고대 일본의 석비·석탑

고대 일본에서의 석비와 多賀城碑
비형과 비문

1

고대 중국의 비 모양



多賀城碑의 탁본

(높이 196cm × 폭 <최대> 92cm × 두께 <최대> 70cm)



圓首碑

慶山寺舍利塔記碑의 탁본
多賀城碑와 같은 모양의 圓首碑 (中國 陝西省, 唐 開元29年 <741> 銘, 석회암, 높이 77cm × 폭 54cm × 두께 13cm)

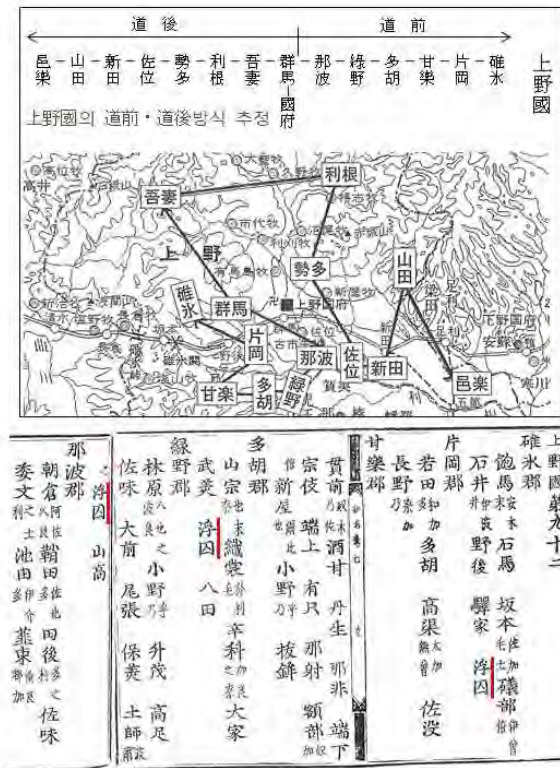


蓋首碑 (唐, 嵩陽觀記聖德感應碑, 河南省 登封)



圭首碑 (魏, 封聖侯孔羨碑, 山東省 曲阜)

2



奈良・平安時代の 上野國

3



山上碑
[687년]



多胡碑
[701년]



金井澤碑
[726년]

上野3碑〔群馬縣高崎市소재〕



4

多胡碑



[치수] 개석	폭	9 5 cm	비신	높이	1 2 9 cm
	안길이	9 0 cm		폭	6 9 cm
	중앙두께	2 7 cm		두께	6 2 cm

[재질] 우시부세 사암(석질: 점토기질사암)

5

〔碑文〕
弁官符上野國片岡郡綠野郡甘
良郡并三郡內三百戶郡成給羊
成多胡郡和銅四年三月九日甲寅
宣左中弁正五位下多治比真人
太政官二品穗積親王左大臣正二
位上尊右大臣正二位藤原尊

[직역]

弁官은 符한다. 上野國의 片岡郡・綠野郡・甘良郡아울러 3郡속에서 300戶를 郡으로 삼고, 羊에게 주어서 多胡郡으로 삼아라. 和銅4년 3월 9일 甲寅에 左中弁・正5位下 多治比眞人이 선코한다. 太政官・2品 穗積親王, 左太臣・正2位 石上尊, 右太臣・正2位 藤原尊。

[1995. 5. 22]

중요한 부서의 升官局이 변형하는 것에 上野國의 片岡郡·綠野郡·甘泉郡의 3郡을 多寺社 300戶를 加하여 새롭게 郡을 만들었고,羊倉 수장으로 삼아서 郡本部라고 하고 하라. 相銅 4년(711) 3월 9일 甲寅,左中弁 55歲以下 多治比眞人이 이직을 許하였다.太政官은 2品 德賴親王,左大臣은 正2位石上(麻呂)尊,右大臣은 正2位 藤原(不比等)尊이다.

※악어
쥬얼링

한국·마운령지농왕수수비



한국·마운령 진흥왕순수비
함경남도 이원군

6

오래도록 고구려의 영향하에 두어져 있었던 신라는 5세기 후반 이후
자립을 목표로 하고, 6세기의 고구려왕인도도 영토를 확대해 갔다.
을진분명비, 단양점성비(545년 이후), 창평비(561년), 1년(564년)
이러한 시기의 것이다. 568년의 진위왕이 단양에서 한대현 영토를 수혈하여
각지의 석비를 건립하였다. 마은발명비, 향충명비, 부연산비의 세 비가
그것이고, 이 것이나 眞興太王巡狩管境이라 고명되어 있다.



多賀城碑 전경

〔銘文〕

去京一千五百里
多賀城去蝦夷國界一百廿里

去常陸國界四百十二里
去下野國界二百七十四里
去韃靼國界三千里

西

此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣獨修造也
天平寶字六年十二月一日

〔考證〕

多賀城。京에서 떨어진 거리를 1500리。
蝦夷의 국경에서 떨어진 거리를 120리。
常陸國의 경계에서 떨어진 거리를 412리。
下野國의 경계에서 떨어진 거리를 274리。
韃靼의 국경에서 떨어진 거리를 3000리。

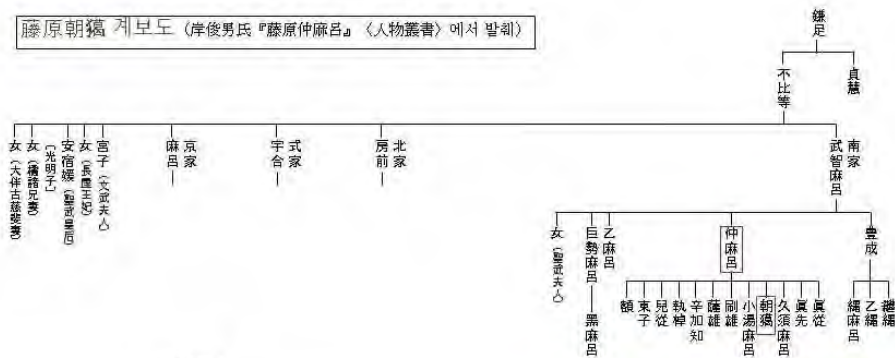
서쪽

이 시기는 神龜 원년 해는 甲子에 머무는, 按察使 겸 鎮守將軍, 從 4 位上・勳 4 等 大野朝臣 東人 이 설치한 바이다. 天平寶字 6 年 해는 壬寅에 머무는, 參議・東海東山節度使・從 4 位上・仁部省卿 兼 按察使・鎮守將軍 藤原惠美朝臣獨이 수축하였다.

天平寶字 6 年 12 월 1 日

7

藤原朝獨 거 지도 (岸俊男氏『藤原仲麻呂』《人物叢書》에서 발췌)



二. 多賀城碑 건비의 시대적 배경
1. 내정 藤原仲麻呂 정권과 동북정책의 추진

仲麻呂에 의한 관서인의 반란
이 반란은 唐, 蕃의 관계가 악화되고 있었다. 그러나, 唐의 朝廷은 倭寇의 討伐을 命하지 않았고, 倭寇의 討伐을 命하지 않았고, 倭寇의 討伐을 命하지 않았다.

개경 전		개경 후	
太政官	乾政官	太師	太傅
太政大臣	太師	太保	御史大夫
左大臣	太傅		
右大臣	太保		
大納言	御史大夫		
紫微中臺		坤宮官	
中務省	信部省	文部省	禮部省
式部省	兵部省	兵部省	義部省
治部省	刑部省	刑部省	節部省
民部省	大藏省	大藏省	智部省
兵部省	宮内省	宮内省	

【獨】 20723 日カツ (集韻) 居見切 獨
獨 20723 日カツ (集韻) 居見切 獨
獨 20723 日カツ (集韻) 居見切 獨
獨 20723 日カツ (集韻) 居見切 獨
獨 20723 日カツ (集韻) 居見切 獨
獨 20723 日カツ (集韻) 居見切 獨
獨 20723 日カツ (集韻) 居見切 獨
獨 20723 日カツ (集韻) 居見切 獨
獨 20723 日カツ (集韻) 居見切 獨
獨 20723 日カツ (集韻) 居見切 獨



8

【大野朝臣東人】
果安의 아들. 和銅7년 12월, 지방을 이끌고 신라 사신의 入京을 맞이하였다. 당시의 正7위에 養老3년 3월, 正6位下에서 從5位下에 임명되고, 神龜元年 3월에 從5位上으로 승진하여, 2년 유전왕의 蝦夷征伐의 공에 의해 勳4等に 임명되고, 天平 원년 9월에는 陸奥鎮守將軍으로 歸한 이후 兵士の 勳功을 기록하는 것으로 관위를 수여하며, 후일을 勳勳할 것을 주창하여 유력하였다. 天平3년 3월, 從4位上으로 승진하고, 9년 3월 陸奥按察使의 임무에 임명되어, 陸奥에서 出羽國의 이토기에는 男勝村을 지척 멀리 돌아카모로, 이 마을을 정벌하여, 전선도도를 통하게 해와 한다고 상주하며, 조서에 따라 持節大使 이하가 파견되었다.

【藤原朝臣朝獨】
仲麻呂의 아들. 이들을 朝獨으로 도도쓰고(續日本紀 實字 원년 7월, 4년 3월조). 또한 朝獨도 쓰였다(3년 6월, 5년 11월조). 實字 원년 7월에 正6位上에서 從5位下에 임명되고, 陸奥守에 임명되고, 8년 8월에 유전 仲麻呂 등과 함께 藤原惠美朝臣의 姓을 하사받으며, 8년 6월에 正5位下에 임명되고, 4년 3월 陸奥國按察使 鎮守府將軍으로서 雄勝城을 축조하였는데, 당시의 帝號를 教導하여 皇化에 승정시켜서, 한 번 씌우지도 않고 완성하며 또한 陸奥國 牡鹿郡에서 大河를 넘고 戰鬪을 작아서 桃生城을 만들어서, 도관의 戰鬪을 빼앗고, 그 해에 말리되어 특별히 從4位下를 제수받았다. 4년 9월에 신라 사신 舍自營 등의 내조 이유를 문해 되었다. 이 때에도 觀望·관망하는 것 같다. 5년 10월에 仁部卿에 임명되고, 8년 11월에 東海道節度使가 되며, 副使·判官·錄事 등과 함께 그 관할인 陸奥 이하 12國의 배 15, 2천 병사 1만 3, 700인, 지세 78인, 선원 7, 8, 2, 0인을 檢定하며, 6년 12월에 參議에 임명되었다.

孝謙天皇 天平實字 원년 7월
○甲寅(正6位上) 藤原朝臣朝獨에게 從5位下를 제수하다.
從5位下 藤原朝臣朝獨을 陸奥守.

淳仁天皇 天平實字 6년 12월
12월 乙巳의 초하루, 從4位上 藤原惠美朝臣眞先에게 正4位上을 제수하다. 御史大夫·從3位 藤原朝臣弟貞, 從4位下 藤原惠美朝臣訓 藤原呂·藤原惠美朝臣朝獨·中臣朝臣清麻呂·石川朝臣皇成을 參議.

政廳 변천의 이미지그림



Ⅲ기 政廳 伊治公皆麻呂의 화공 후에 재건되었다.

寶龜11년(780)
잠정적인 복구
본격적인 재건
성내의 경비(大畑·作實·城前·六月坂 지구의 관청)
성 밖에 시가지가 등장하다



1기 政廳 大野東人에 의해 창건되었다. 주요한 건물에는 기와가 덮여져 있었다.

神龜元년(724)
下伊場野 가마유적 군·木戸 가마유적 군·日の出 가마유적 군 등에서 기와가 구워지다
이 즈음 東山 관아 유적을 조성



Ⅳ기 政廳 陸奥國 대지진 후에 부흥되었다. 政廳 북쪽에 새롭게 건물이 세워졌다.

貞觀11년(869)
화산재 내리다(915)



Ⅱ기 政廳 藤原朝獨에 의해 크게 개수되었다. 건물이나 토담은 초석식이 되고, 재롭게 동·서·후 등, 후전 등이 더해졌다. 토담은 기와가, 광장은 돌이 덮이고, 돌로 된 배수구가 부설되는 등, 전시기를 통하여 가장 기능성과 장식성을 겸비한 政廳이다.

天平實字6년(762)
多賀城碑
城前 지구의 관청이 만들어지다
桃生城跡 완성(759)
伊治城跡 완성(767)

西海道	南海道	東海道	道
吉備朝臣眞備	吉備王敏備	藤原朝臣眞備	正
佐伯朝臣多實朝臣	藤原朝臣石根	田中朝臣多太麻呂	副
新前・筑後・肥前・豐前・豐後・肥後・大隅・薩摩	新前・筑後・肥前・豐前・豐後・肥後・大隅・薩摩	新前・筑後・肥前・豐前・豐後・肥後・大隅・薩摩	元班
121	121	152	役
12500	12500	15700	人
62	62	78	戸
4920	4920	7520	石

天平寶字3年(761)11월 東海・南海・西海の3道節度使任命

「은날, 眞備이 나가서 外官이 되었습니다. 또한 미천한 사람이어서 자제한 뜻을 올랐습니다」라고 하였다. 이에 眞備에게 말하기를, 「사상이 정미하므로 관직으로 대접하게 하려 한다. 지금부터 들려보내어, 너희 부구의 일려야 한다. 眞備하는 사람 眞備의 예의에 도우리의 訓明驗한 말 4가지로 구비하고 나서 곧 대조해야 한다」고 하였다.

신라 사신
4개 조의
문자생활

「은날, 眞備이 나가서 外官이 되었습니다. 또한 미천한 사람이어서 자제한 뜻을 올랐습니다」라고 하였다. 이에 眞備에게 말하기를, 「사상이 정미하므로 관직으로 대접하게 하려 한다. 지금부터 들려보내어, 너희 부구의 일려야 한다. 眞備하는 사람 眞備의 예의에 도우리의 訓明驗한 말 4가지로 구비하고 나서 곧 대조해야 한다」고 하였다.

「은날, 眞備이 나가서 外官이 되었습니다. 또한 미천한 사람이어서 자제한 뜻을 올랐습니다」라고 하였다. 이에 眞備에게 말하기를, 「사상이 정미하므로 관직으로 대접하게 하려 한다. 지금부터 들려보내어, 너희 부구의 일려야 한다. 眞備하는 사람 眞備의 예의에 도우리의 訓明驗한 말 4가지로 구비하고 나서 곧 대조해야 한다」고 하였다.

「은날, 眞備이 나가서 外官이 되었습니다. 또한 미천한 사람이어서 자제한 뜻을 올랐습니다」라고 하였다. 이에 眞備에게 말하기를, 「사상이 정미하므로 관직으로 대접하게 하려 한다. 지금부터 들려보내어, 너희 부구의 일려야 한다. 眞備하는 사람 眞備의 예의에 도우리의 訓明驗한 말 4가지로 구비하고 나서 곧 대조해야 한다」고 하였다.

「은날, 眞備이 나가서 外官이 되었습니다. 또한 미천한 사람이어서 자제한 뜻을 올랐습니다」라고 하였다. 이에 眞備에게 말하기를, 「사상이 정미하므로 관직으로 대접하게 하려 한다. 지금부터 들려보내어, 너희 부구의 일려야 한다. 眞備하는 사람 眞備의 예의에 도우리의 訓明驗한 말 4가지로 구비하고 나서 곧 대조해야 한다」고 하였다.

「은날, 眞備이 나가서 外官이 되었습니다. 또한 미천한 사람이어서 자제한 뜻을 올랐습니다」라고 하였다. 이에 眞備에게 말하기를, 「사상이 정미하므로 관직으로 대접하게 하려 한다. 지금부터 들려보내어, 너희 부구의 일려야 한다. 眞備하는 사람 眞備의 예의에 도우리의 訓明驗한 말 4가지로 구비하고 나서 곧 대조해야 한다」고 하였다.

淳仁天皇 天平寶字4年(9월)

2. 외교 신라 사신 勘問 신라 정벌 계획

11



8 세기의 동아시아 정세



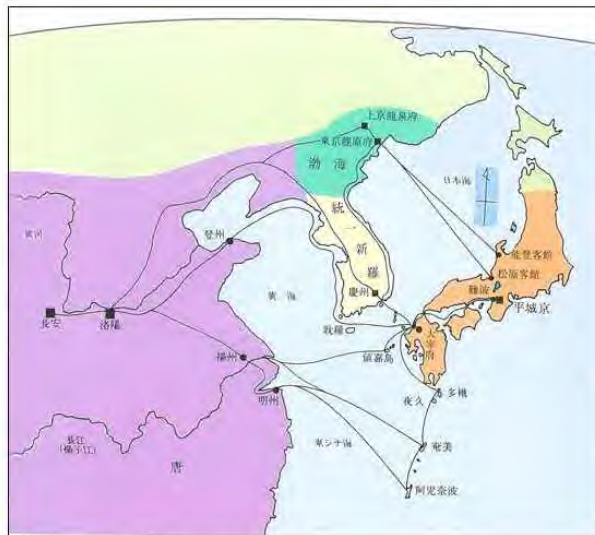
7 세기의 동아시아



한반도의 고대 석비와 주된 문방구(9) 출토지의 위치도

고대 한반도

12



외교사절의 항로

「平城京展」図録★★★

編 集 奈良国立文化財研究所
朝日新聞大阪本社企画部
発 行 朝日新聞大阪本社企画部
©Asahi Shinbun 1989

13



도로에 만들어진 暗渠 배수시설
자연석을 側石으로 삼아, 나무 동발이
통나무를 자른 목재를 가로로 줄지
두경으로 삼은 것. 바로 앞의 集石
개수시에 설치된 暗渠의 集水枋。

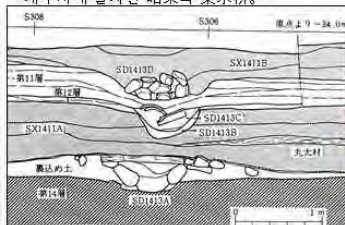


그림 SD1413A와 뒤채움 흙의 상황



三 藤原朝獺의 多賀城 수축비 건립

비무를 기록하다—8세기의 多賀城과 고대 일본

1. 「此城神龜元年」 「大野朝臣東人之所置也」
政廳南大路 유적 石組暗渠 출토문자 등에 다른 多賀城
창건연대의 기록을

14

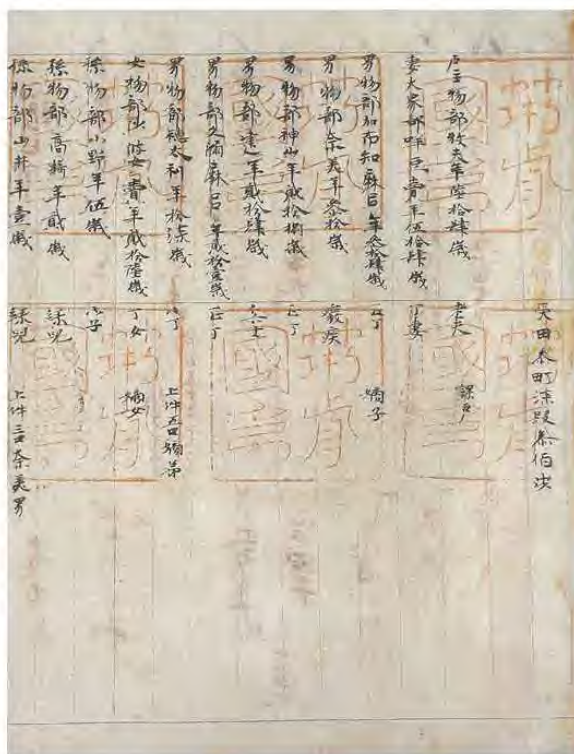
15

16

大寶2年(702)筑前國嶋郡川邊里 戶籍

〔國立歷史民俗博物館〕

『正倉院文書拾遺』1992年



17

養老5年(721)

〔正倉院 문서〕

○이음매이면에「下總國印」이 半存. 표면에「下總國印」이 17顆.
(正寶20)

○卷首에 1행반의 공백이 있다.

下總國葛飾郡大島郷戶籍

養老五年

甲和里戶主孔王部小山年肆拾捌歲

正丁 課戶

妻孔王部阿古賣年伍拾貳歲

丁妻

妻孔王部小宮賣年參拾捌歲

丁妻

男孔王部忍羽年貳拾貳歲

正丁 兵士、嫡子

男孔王部忍秦年柒歲

小子 嫡弟

男孔王部廣國年伍歲

小子 嫡女

女孔王部大根賣年貳拾柒歲

丁女

女孔王部古富根賣年拾玖歲

次女

女孔王部若大根賣年拾伍歲

小女

女孔王部刀自賣年參歲

綠女

女孔王部小刀自賣年貳歲

綠女

從父妹孔王部小宮賣年參拾捌歲

丁女

從父妹孔王部宮賣年肆拾歲

丁女

姪孔王部手子賣年參拾貳歲

丁女

養老5年(721)下總國 葛飾郡 大島郷 戶籍〔正倉院 문서〕

18



19



2. 「蝦夷國界」의 표시—동북정책에서의 朝獺의 실적—
 黒川 이북 10 郡의 城柵 관아유적과 방위라인

20



21

3. 「靺鞨國界」 표시의 의의
多賀城 지배영역의 표시

多賀城碑の「多賀城」

7세기 후반 齊明天皇4年(655)부터 658년에 걸쳐 쿠카지(久我)의 신라 阿倍比羅夫의 부 阿倍磐余(阿倍比羅夫의北方遠征と「羅國」國情勢がらむ北方遠征の目的をめぐって)(熊谷公明)면「古代東北の歴史像と城郭」高志書院, 2013)에서 내
한반도의 新羅國의 國情勢가 7세기 후반부터 8세기 초반에 걸쳐

肅慎斗鞞鞞

중국에서는 왜로부터 중화만(한자)이 불리고 있는 반면 倭寇(와코)는 가가온 夷寇(이코)를
 미개로 하여 蠻寇(만고)에 준용한다. 이는 가나미고 있었고, 그것을 황제의 덕을 체현하는
 의의(義義)와 仁(인)을 가지고 있는 사람이라고 하여 夷寇(이코)라고 부른 것이다. 그러나
 859년 倭寇(와코)를 따라온 韓夷(한이)의 내조의 미해(未解)로, 가가온 夷寇(夷寇)를
 중개(中開)로 하여 더 먼 夷寇(夷寇)에 대한 것이라 하고 파악되었던 것이다.

아시하시에 彌愼의 절부인 美佐은 阿倍比羅夫의 부방언정 美佐의
고구려를 무효로 하는 북방항로의 개척에 힘썼고, 고구려와 친척제 절부가 강한
『彌愼』이라는 한자표기를 붙인 것이다. 이 절기는 阿倍比羅夫의
부방언정의고, 이후 『日本書紀』 편찬단체의 『아시하시』는 한자표기 彌愼
으로 부방언정인것이라고 생각한다.

蕭愼의란 중국 춘추시대에 실재하였다고 이 어 기되는 중국어로 춘추시대를 기록한 역사서에서 國語에는 拙矢石鎗의 사용처 및 중국 황제의 명을 사모한 면 곳에서 나옴하여 拙矢石鎗을 궁남지에 있는 중국으로 나타냄. 또 중국경서에 중국 동북부만민현제의 吉林省 黑龍江省에서 러시아의 연해주에 거주한 중국을 北狄이라고 하였으며 연해주에 거주하는 데는 그들에 대한 호칭은 倭代의 拙戔, 또는 조선시대의 勿吉, 隋・唐시대의 靺鞨이라고 표현하고 각각 蕭愼의 후예의 어원을 나타내고 있다.

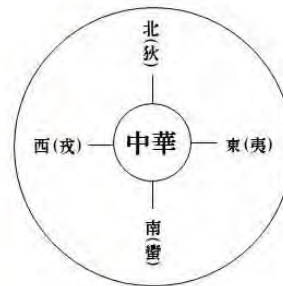
勿吉 다음에 靺鞨의 靺鞨(동쪽) 北의 靺鞨이다. 『隋書』는 靺鞨在高麗의 北(略) 自拂涅以東. 夫皆石鏹. 卽古之靺鞨氏也. 『隋書』 靺鞨傳의라고 하여, 靺鞨의라고 칭함도 있는 중조이다라고 한설의 들을을 붙이는 말도 있다. 靺鞨의 동쪽 靺鞨 靺鞨, 靺鞨靺鞨, 靺鞨靺鞨의 이름도 靺鞨의 후의라고 해서하고 있다.

이렇게 중국인의 위정자는 樛矢石墜의 사공과 중국으로의 망남이라는 중추적 특징을 얻어 楚集·勿吉·靺鞨을 靺嶺의 유예라고 해석한 것이라고 생각된다. 더욱이 후세까지 靺嶺의 존재를 강조한 이유는 靺嶺의 내주는 형제와 친구이며 靺嶺을 넘어서는 좋은 땅이라는 『國語』의 원의 전통적인 관념이 역사적·문화적·정치적 원의인식을 유지하기 위한 의도였기 때문이다. 그것은 하미대 중부 유적의 「靺嶺」의 존재하의 영토의 존재한다.

THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS



8 세기의 동아시아 정세



화이사상
중화사상과 「蠻民」
중화사상에 기초한 이분열도에서의 東夷・北狄・西戎・南蠻

23



발해・말갈 주요유적
(菊池俊彦, 1989년을 참고로 작성)

24

『續日本紀』 養老4년 정월 丙子(720)
23일

「丙子、遣渡嶋津輕津司從七位上諸君鞍男等六人於靺鞨國、觀其風俗。」
「渡嶋와 津輕의 津司인從7位上諸君鞍男等6인을靺鞨國에 파견하여,
그 풍속을 관찰시켰다。」

라고 하고, 이에 앞서서, 養老元年(717) 제9차 견당사 多治比縣守 등의
파견되어 이듬해에는 귀국하고 있어서, 唐의 北狄이라고 하는 「靺鞨部族」
의 최신 정보가 전달되어, 養老4년의 「靺鞨國」 풍속조사가 실행되었다고
추측된다.

한편, 正倉院 문서에 보이는 예를 들어 개인명으로서 天平18년(746) 「若
湯坐靺鞨」을 동인인물의 다른 표기 「若湯坐阿志波世」라고 보인다. 天平18년
(746) 「東大寺寫經所」의 讀經使로 근무하고 있는 인물이다. 이 사실에서
근년奈良시대(8세기)에도 7세기의 阿倍比羅夫의 讀經기사에 보이는 靺
(아시하세)과 마찬가지로 「靺鞨」은 「아시하세」라고 읽히고, 唐·발해의 「北狄」
이라고 하는 靺鞨部族이라고 해석되지 않는다는 실이 퍼져 있다. 그러나,
寫經所文書 등에 등장하는 인물과 일본에서의 위치자가 渡嶋津輕津司를
파견하여 풍속을 관찰시킨 「靺鞨國」과 다시 동아시아 외교의 전인자인 藤原
朝獨이 세운 多賀城碑文의 「蝦夷國」과 짝을 이루는 「靺鞨國」을 동일에서
논하는 것은 피해야 할 것이다.

27

齊明天皇5년 己未(659)

3월에 阿倍比羅夫가 蝦夷 정벌을 행하여, 飽田·淳代·津
輕·膽振鎬의 蝦夷를 정대하고, 후방의 羊蹄에 치소를
설치하고 귀환하였다. 道與·越의 國司와 評의 관위에 게
관위를 제수하였다.

〔日本書紀〕齊明天皇5년 3월 是月

是月、遣阿倍臣、率船師一百八十艘、討蝦夷國。阿倍臣、
簡集飽田·淳代二郡蝦夷二百卅一人、其虜卅一人、津輕郡蝦
夷一百十二人、其虜四人、膽振鎬蝦夷廿人於一所、而大饗賜
祿。胆振鎬、比云伊勢梨婆。伊勢梨婆、此云即以船一隻、與五色絲帛、祭彼地神。至肉入籠
時、問免蝦夷膽鹿嶋·免德名二人進曰、可以後方羊蹄、爲政
所焉。

이 달에 阿倍臣의 船師를 파견하여, 수군 180척을 이끌고 蝦夷國
을 토벌하였다. 阿倍臣은 飽田·淳代 2郡의 蝦夷 241인, 그 포로 31인,
津輕郡의 蝦夷 142인, 그 포로 4인, 膽振鎬의 蝦夷 21인을 한 곳에 모아
모아서, 크게 접대하고 祿을 하사하였다. 膽振鎬는 이들을 伊勢梨婆로 불렀다고 한다.

齊明天皇6년 庚申(660)

3월에 阿倍比羅夫가 원정하여, 渡嶋 蝦夷의 구원 요청을 받고
肅慎과 싸워서 누속시켰다.

〔日本書紀〕齊明天皇6년 3월

三月、遣阿倍臣、率船師二百艘、伐肅慎國。阿倍臣、以陸奧
蝦夷、令乘己船、到大河側。於是、渡嶋蝦夷一千餘、屯聚海
畔、向河而營。營中二人、進而急叫曰、肅慎船師多來、將殺
我等之故、願欲濟河而仕官矣。

3월에 阿倍臣의 船師를 파견하여 수군 200척을 이끌고, 肅慎國
을 정벌하였다. 阿倍臣은 陸奧의 蝦夷를 자신의 배에 태워서, 大河의 옆에
도착하였다. 이에 渡嶋의 蝦夷 1천여인이 바다가에 모여서 강을 향하여
진출하였다. 진출하는 2인이 나아가 급히 외치기를 「肅慎의 수군의
많은 것이니, 나와 배를 추위라고 하기 때문에, 바라건대 인양을 건너서 관직에

28

백제고대사의 대서

일본열도에 현존하는 고대의 석비는 겨우 18비이고, 비 전체가 독자의 역사자료로서 중요한 의의를 가지지만, 비문의 태반은 불교관계(묘비·공양비 등)이다. 일본 3古碑라고 이야기되는「那須國造碑」(國寶)도 개인의 공양비,「上野三碑」山ノ上碑・金井澤碑는 공양비, 多胡碑만 행정에 관한 건(군비) 유네스코 세계유산의「2017년 등」.

고대 일본의 석비 중에서 이채를 띄는 것은 多賀城碑. 奈良시대 중반경, 당시의 최고권력자인 藤原仲麻呂의 4남으로서 東北지방 지배의 전권을 위임받은 藤原朝彥은 임지도와 동시인 陸奥國 桃生城과 出羽國 雄勝城을 새롭게 조성하고, 아울러 多賀城과 秋田城의 수축 사업을 실시하였다.

國史「續日本紀」에 전해 기록이 없는 多賀城 창건년대「神龜元年」(724) 수축년대「天平寶字六年」(762)을 명기하고 있다. 多賀城跡의 발굴조사로 두 연대의 타당성이 실증되었다.

더욱이, 仲麻呂의 中國・唐風 취향은 잘 알려져 있는데, 朝彥은 동아시아 정세에 정통하여 760년에 신라 사신의 내조 때에 직접 大宰府에 가서 견례를 꾸짖고 본국으로 돌려보냈다.

多賀城碑文에「蝦夷國界一百廿里」라고 기록하여, 朝彥의 강경한 東北 정벌의 성과를 주장하였다. 더욱이 陸奥・出羽를 분할한 朝彥은 북쪽을 큰 바다를 넘어 대륙국 唐 및 우호국 발해의 동부지방에 거주하는「北狄」이라고 이야기된 靺鞨 부족을「靺鞨國三千里」라고 표기하였다. 일본열도에서의 이민족이라고 하였던「靺鞨」과 唐・발해(전신인) 고구려(가 北狄이라고 하였던) 靺鞨 부족을 병기한 仲麻呂 정권하 군사・외교의 전인자인 藤原朝彥만이 만들 수 있는 비문이라고 할 수 있겠다. 그 석비는 1300년간 수많은 위장자・문인복제 그리고 지역의 사람들에게 의해 가장 좋은 상태로 계속 지켜져 왔다.

多賀城碑는「적동의 고대東北」 나아가 8세기「적동의 동북아시아 세계」를 훌륭하게 새기고 있어, 일본열도에 남은 고대의 석비 중에서도 고대국가에 관련된다는 비할 데 없는 가치를 가지는 역사자료이다.

29

人間文化研究機構의 비전

人間文化研究機構(人文機構)를 구성하는 6기관은 인간문화연구의 각 분야에서의 우리나라의 중핵적 연구거점 및 국제적 연구거점이다.

人文機構는 대학 등 연구기관에서의 인문학(인간과 그 문화를 종합적으로 탐구하는 학문)의 발전에 공헌하는 중요한 사명을 위탁받고 있어, 그 책무는 극히 무거운 책임이 있다.

일본의 인문학이 세계를 향하여 발전할 수 있는 의미 있는 천재는「진리의 탐구」,「자연과 인간의 조화」 그리고「평화의 창출」일 것이다.

4つの大学共同利用機関法人

人間文化研究機構 NIHU

高エネルギー加速器研究機構 KEK

自然科学研究機構 NINS

情報・システム研究機構 ROIS

国際日本文化研究センター International Research Center for Japanese Studies 日文研 | NICHIEUNKEN | KYOTO

総合地球環境学研究所 Research Institute for Humanity and Nature 地球研 | RIHN | KYOTO

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology 民族 | MINPaku | OSAKA

国立歴史民俗博物館 National Museum of Japanese History 歴史 | KEHINAKU | CHIBA

国文学研究資料館 National Institute of Japanese Literature 国文学 | NIJL | TOKYO

国立国語研究所 National Institute for Japanese Language and Linguistics 国語研 | NINJAL | TOKYO

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-3-13 ヒューリック神谷ビル2階
Tel.03-6402-9200 (代表) <http://www.nihu.jp/>

30

끝

「多賀城碑が刻む「激動の北東アジア」」에 대한 토론문

김종복(안동대학교)

1. 오늘 「多賀城碑가 새긴 격동의 북동아시아」를 발표하신 平川 南 선생님은 한국의 발해사 연구자들에게 다하성비문 중의 靺鞨國을 발해로 보는 견해에 반대하여 광의의 말갈족 전체를 지칭하는 견해를 주장하신 연구자로 알려져 있다. 오늘발표문도 이러한 견해를 보강하는 차원에서 관련 자료들을 망라하여 多賀城碑에 대해 재론하였다. 자세하고 흥미로운 발표이지만 논쟁할 만한 부분이 없어 보충 설명을 요청하는 차원에서 몇 가지 질문하는 것으로 토론을 대신하고자 한다.
2. 다하성비 전면 상단에는 ‘西’가 크게 새겨져 있다. 일반적으로 비문에 방위를 표시하는 경우는 없는 것으로 알고 있어서 이 점이 궁금하다. 특별한 의미가 있는 것인지, 또 원래부터 새겨져 있는 것인지 아니면 나중에 추가한 것인지 등.
3. 비문에 따르면, 다하성은 神龜元年(724)에 大野朝臣東人이 ‘置’했고, 天平寶字 6년(762)에 藤原朝臣朝獬이 ‘修造’하였다. ‘置’는 築城인지, 그렇다면 38년만에 다시 ‘修造’한 이유나 배경이 궁금하다.
4. 사소하지만 12쪽 한반도의 고대 석비의 위치도에 忠州高句麗碑가 누락되어 있다.
5. 목차에는 다하성비 건비의 시대적 배경의 외교적 측면에서 「朝獬의 신라사 힐문」 다음에 「신라정토계획」과 「발해국과의 교류」이 있는데, 본문에는 이에 대한 언급이 없다. 설명을 부탁드립니다.
6. 비문의 말갈국이 발해와 무관하다면, 養老 4년(720)에 諸君按男 등이 파견되어 그 풍속을 조사한 靺鞨國은 발해를 포함하는지 아니면 발해를 제외한 말갈로 보시는지 궁금하다.
7. 맺음말 부분에서 藤原朝獬이 ‘동아시아 정세에 정통했다’라고 하였는데, 그렇게 볼 수 있는 근거에 대해 설명을 부탁드립니다.

발표2

접경으로서의 충주 지역과
신판독안에 기반한
충주고구려비 내용 검토

접경으로서의 충주 지역과 신판독안에 기반한 충주고구려비 내용 검토

이재환(중앙대학교)

I. 머리말

1979년 발견된 <충주 고구려비>는 이후 오랫동안 논쟁의 대상이 되어 왔다. 그 건립 연대에 대해서만도 5세기 전반의 403년,¹⁾ 421년,²⁾ 중반의 449~450년,³⁾ 후반의 475년,⁴⁾ 481년,⁵⁾ 문자왕대의 495년,⁶⁾ 496~497년,⁷⁾ 507년,⁸⁾ 평원왕대⁹⁾ 등 다양한 견해가 나와 팽팽히 대립하였다. 비문의 내용 연대와 건립 연대 간에 혹은 내용 사이에 수십 년의 시차가 존재하는 것으로 파악하는 경우도 많았다.¹⁰⁾

그런데 지난 2019년 그동안 예상치 못했던 <충주 고구려비>의 판독안이 발표되어 많은 연구자들을 놀라게 하였다. 비문 전면 상단에서 ‘永樂七年歲在丁酉’라는 연대를 읽어낸 것이다.¹¹⁾ ‘永樂’은 <덕흥리고분 목서명>과 <광개토왕릉비>에서 확인되는 廣開土王의 年號로서, 그 7년은 397년에 해당한다. 그렇다면 ‘五月中’으로 시작하는 면은 이 비의 첫 번째 면에 해당하며, 그 부분의 내용은 광개토왕 영락 7년(397)의 일이 된다. 이전에도 비의 연대를 광개

- 1) 木村誠, 2000, 「中原高句麗碑의 立碑年에 관해서」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究).
- 2) 木下礼仁, 1981, 「中原高句麗碑—その建立年次を中心として—」, 『村上四男博士和歌山大学退官記念朝鮮史論文集』, 開明書店.
- 3) 任昌淳, 1979, 「中原高句麗古碑小考」, 『史學志』13 ; 金貞培, 1979, 「中原高句麗碑의 몇 가지 문제점」, 『史學志』13 ; 金昌鎬, 1987, 「中原高句麗碑의 再檢討」, 『韓國學報』47 ; 鄭雲龍, 1989, 「5世紀 高句麗 勢力圈의 南限」, 『史叢』35 ; 林起煥, 2000, 「中原高句麗碑를 통해 본 高句麗와 新羅의 관계」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究) ; 李道學, 2000, 「中原高句麗碑의 建立 目的」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究) ; 시노하라 히로카타(篠原啓方), 2000, 「『中原高句麗碑』의 釋讀과 內容의 意義」, 『史叢』51 ; 張彰恩, 2005, 「中原高句麗碑의 판독과 해석」, 『新羅史學報』5 ; 박찬흥, 2013, 「중원고구려비의 건립 목적과 신라의 위상」, 『한국사학보』51.
- 4) 李丙燾, 1979, 「中原高句麗碑에 대하여」, 『史學志』13.
- 5) 邊太燮, 1979, 「中原高句麗碑의 內容과 年代에 대한 검토」, 『史學志』13 ; 申潁植, 1979, 「中原高句麗碑에 대한 考察」, 『史學志』13 ; 李昊榮, 1979, 「中原高句麗碑 題額의 新讀」, 『史學志』13 ; 武田幸男, 1980, 「序說 五~六世紀東アジア史の一視點」, 『東アジア世界における日本古代史講座 4』, 学生社 ; 朴眞奭, 2000, 「中原高句麗碑 建立年代 考証」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究) ; 耿鐵華, 2000, 「冉牟墓誌와 中原高句麗碑」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究) ; 여호규, 2020, 「충주고구려비의 단락구성과 건립시기」, 『한국고대사연구』98.
- 6) 南豊鉉, 2000, 「中原高句麗碑의 解讀과 史讀的 性格」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究) ; 최장열, 2004, 「중원고구려비, 선돌에서 한반도 유일의 고구려비로」, 『고대로부터의 통신』, 푸른역사.
- 7) 서지영, 2012, 「5세기 羅·麗 관계변화와 <中原高句麗碑>의 建立」, 『한국고대사연구』68.
- 8) 박성현, 2011, 「5~6세기 고구려 신라의 경계와 그 양상」, 『역사와 현실』 82.
- 9) 李殿福, 2000, 「中原郡의 高麗碑를 통해 본 高句麗 國名의 變遷」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究).
- 10) 李丙燾, 1979, 앞의 논문 ; 金英夏·韓相俊, 1983, 「中原高句麗碑의 建碑 年代」, 『教育研究誌』25 ; 김현숙, 2002, 「4~6세기 소백산맥 이동지역의 영역향방」, 『한국고대사연구』26 ; 최장열, 2004, 앞의 글.
- 11) 고광의, 2019, 「충주 고구려비 판독문 재검토」, 『충주 고구려비 발견 40주년 기념 학술회의』, 동북아역사재단·한국고대사학회. 해당 발표는 고광의, 2020, 「충주 고구려비의 판독문 재검토 -題額과 干支를 중심으로-」, 『한국고대사연구』98으로 공간되었다.

토왕대로 보아야 한다는 견해가 제기된 바 있지만, 403년 혹은 408년으로 추정한 정도였다.¹²⁾ 400년 이전까지 거슬러 올라갈 수 있을 것이라 보았던 경우는 없었다.

하지만 이 새로운 판독안은 많은 연구자들의 공감을 얻고 있지는 못한 것으로 보인다. 2019년 해당 견해와 더불어 ‘충주 고구려비 발견 40주년 기념 학술회의’에서 발표된 논고들과, 이후 발표된 연구들 대부분은 비문 정면 상단의 판독안과 전혀 상관없이 기존의 논의 흐름에 따라 해석과 의미 부여를 진행하였다.¹³⁾ 비문 상단에서 읽어낸 ‘永樂 7年’의 연도는 절대 받아들여질 수 없는 것일까? 해당 시점으로 비문 내용을 파악하는 시도는 불가능할까? 본 발표는 이에 대해 검토해 보는 것을 목표로 한다.

II. 前面 상단부 橫書의 판독과 年代

<충주 고구려비>는 三面碑인지 四面碑인지, 내용이 어느 면에서 시작하는지에 대해서도 논란이 있었다.¹⁴⁾ 후면에서도 글자의 흔적은 확인되므로,¹⁵⁾ 사면비임은 인정된다. 단, 후면의 구체적인 판독은 거의 어려운 상태이다. 그럼에도 종래 읽기 어려운 후면을 시작면으로 보는 견해들이 있었다. 이는 전면의 첫 행이 ‘五月中’으로 시작하는 것이 어색하기 때문에, 후면으로부터 내용이 이어지고 있다고 보았던 것이다.

하지만 ‘五月中’이 전면에서 처음 확인되는 글자는 아니다. ‘五’가 시작되는 열에 맞추어 다른 행들의 서사도 시작되는데, 그것들과 약간의 간격을 두고 비 상단부에 글자가 존재한다. 초창기에 李丙燾가 ‘建興四年’의 ‘題額’을 읽으면서 現夢을 언급한 뒤로,¹⁶⁾ 해당 부분의 판독을 터부시되는 분위기가 형성된 듯하나, 글자의 존재에 대한 인식은 꾸준히 이어져 왔다.¹⁷⁾ 2000년 高句麗研究會 新釋文에서도 해당 부분에 글자가 존재함은 인정되었다.¹⁸⁾

이 부분은 본문으로부터 약간 떨어져서 횡으로 서사되고 있음이 특이하다. 이를 ‘題額’으로 부르기도 하였으나,¹⁹⁾ 뒤에서 살펴볼 것처럼 그 내용이 標題가 아니라 年代이므로 ‘題額’이라

12) 木村誠, 2000, 앞의 논문.

13) 여호규, 2020, 앞의 논문 ; 임기환, 2020, 「충주고구려비의 高麗 大王과 東夷 寐錦」, 『한국고대사연구』98 ; 李成制, 2020, 「<忠州高句麗碑>의 건립 목적과 배경」, 『한국고대사연구』98 및 전덕재, 2019, 「충주고구려비를 통해 본 5세기 중반 고구려와 신라의 관계」, 『高句麗渤海研究』第65輯.

현재까지 해당 판독안에 긍정적 입장을 밝힌 연구는 李鎔鉉, 2020, 「忠州 高句麗碑 ‘忌’·‘共’의 재해석」, 『韓國史學報』제80호, p.11이 유일한 듯하다. 단, 이 논문에서 기년 문제는 본격적으로 다루지 않았다.

14) 발견 직후의 논의에서 李丙燾, 1979, 앞의 논문, p.22 ; 邊太燮, 1979, 앞의 논문, p.41 ; 申滢植, 1979, 앞의 논문 ; 李昊榮, 1979, 앞의 논문 등에서는 三面碑로, 李基白, 1979, 「中原高句麗碑의 몇 가지 문제」, 『史學志』13, p.33에서는 四面碑로 보는 등 의견이 갈렸다. ‘1+3면비’로 파악하는 견해도 나왔다(여호규, 2020, 앞의 논문, pp.135).

15) 2000년의 高句麗研究會 新釋文(고구려연구회, 2000, 『高句麗研究』第10輯(中原高句麗碑 研究), p.130)과 2019년 공동 판독안(양인호·고태진 정리, 2020, 「충주 고구려비 공동 판독안(동북아역사재단, 한국고대사학회)」, 『한국고대사연구』98, p.8)에서 모두 후면 마지막 행에 ‘巡(?)’으로 추정되는 글자의 존재를 인정하였다.

16) 檀國大學校 史學會, 1979, 「中原高句麗碑 學術座談會議錄」, 『史學志』13, p.114.

17) 李基白, 1979, 앞의 논문 ; 邊太燮, 1979, 앞의 논문 ; 李昊榮, 1979, 앞의 논문.

18) 徐吉洙, 2000, 「중원고구려비 신석문 국제워크샵과 국제학술대회」, 『高句麗研究』第10輯(中原高句麗碑 研究), p.144에서 비의 맨 위쪽에 ‘해 년(年)’자를 확인함으로써 題額이 있음에 석문위원들의 의견이 일치하였다고 밝혔다. 단, 新釋文에 ‘年’이 포함되지는 않았다. 아울러 新釋文은 ‘五月中’으로 시작하는 면을 ‘I:前面’으로 제시한 데 반해, 같은 책 pp.9~99의 ‘중원고구려비 비면 사진 및 탁본’에서는 “2000년 2월 열린 중원고구려비 신석문 국제워크샵에서는 글자가 없는 면이 1면일 것이라는 의견이 많았”다는 이유로 그 반대쪽 면을 1면으로 제시하고 있다.

19) 題額을 ‘편액이나 석비의 이수에 표기한 표제기록’으로 정의하고, 석비의 비신 윗부분에 주인공을 표

는 용어에는 걸맞지 않다.²⁰⁾ 그것을 어떻게 지칭하든, <충주 고구려비> 전면 상단부에 횡으로 글자가 새겨져 있음은 분명하다.

그런데 그 존재를 인정한 2000년 高句麗研究會 新釋文에 기반한 연구에서나, 2019년 공동 판독안에 기반한 연구들에서,²¹⁾ 마치 이 부분에 글자가 없는 듯 무시하고 논의가 진행되고 있음이 눈길을 끈다.²²⁾ 해당 부분의 서사 방식이 매우 특이하며 다른 사례를 찾아보기 어려움은 분명하다.²³⁾ 그러나 독특하고 이상하다고 해서 존재를 부정해도 괜찮은 것일까? 존재하는 글자임에도 판독이나 해석에서 배제하기 위해서는 오히려 합당한 이유와 근거가 제시되어야 하지 않을까?

이 부분을 글자가 아닌 흠집으로 취급하기에는 실책이 분명한 부분들이 확인된다.²⁴⁾ ‘五月中’으로 시작하는 본문과 다른 시기에 다른 의도로 새겨졌다고 보아 해석에서 제외하기 위해서는, 애초에 해당 부분이 왜 비워진 채로 만들어졌으며, 후대에 어떤 의도로 원래 비의 내용과 상관없는 연대를 새겨 넣었는지에 대한 설명이 먼저 제시되어야 할 것이다. 글자의 형태나 새긴 방식에 있어서는 아래의 본문과 큰 차이가 느껴지지 않는다.²⁵⁾ 존재 자체를 부정하기 어렵다면, 그 서사 방식이 이상해 보이더라도 매우 특이하며 이례적인 사례로 받아들이며 해석에 포함시켜야 한다고 생각한다.

해당 부분의 세 번째와 네 번째 글자인 ‘七年’은 과거에도 판독된 바 있었고, 충분히 인정 가능한 판독이다. 첫 번째 글자의 ‘永’ 판독도 받아들일 만하다. 여섯 번째 글자 또한 ‘在’로 판독하는 것이 가능하다. 다섯 번째 글자는 잘 남아있지 않아 확신하기 어려우나 <광개토왕릉비>나 천추총 출토 ‘千秋萬歲永固’銘塼의 ‘歲’와 유사함이 인정된다. 마지막 글자의 경우 세로로 ‘丁酉’의 두 글자를 붙여서 쓴 것으로 본 판독은, 연도를 ‘題額’처럼 비 상단부에 橫書하면서 그 중에서도 干支만은 縱書한 것이 되어 특이한 사례 중에서도 더욱 특이한 서사 방식이라고 볼 수밖에 없지만, 형태 상 불가능하지 않아 보인다. 단, 두 번째 글자는 특히 상태가 좋지 않아 판독이 어렵다. 비 상단부의 횡서 부분은 ‘永□七年[歲]在[丁酉]’ 정도로 판독안을 정리할 수 있겠다.

당시 고구려에서 연호의 사용이 확인되는 만큼, ‘七年’ 앞에 등장하는 두 글자는 고구려의 연호일 가능성이 높다. ‘永’을 포함하는 고구려의 연호로 주목되는 것은 역시 <광개토왕릉비>

시한 표제는 ‘頭篆’으로 구분하는 견해도 있다(孫煥一, 2008, 『石碑의 標題樣式과 書體 考察 I - 통일신라시대와 고려시대를 중심으로 -』, 『新羅史學報』13, pp.130~131). 그러나 『표준국어대사전』의 題額에 대한 정의는 ‘碑身 상단부나 이수에 비의 명칭을 새긴 부분’이라 하여 비신 상단부에 새긴 경우를 포괄하고 있다.

20) ‘年額’이라는 표현이 적당할지도 모르겠으나, 사례가 없으므로 존재하는 용어가 아니다.

21) 공동판독안에서 해당 부분은 ‘△? △? 七? 年? △? △?’로 제시되었고, “1~2차 판독회 결과 소위 ‘題額’으로도 불렸던 ‘前面’의 윗단 부분’에 대해, 글자가 존재할 가능성이 있다는 점까지는 합의함.”이라고 밝혔다.

22) 李成制, 2020, 앞의 논문에는 아예 관련된 언급이 없으며, 여호규, 2020, 앞의 논문, p.128에서는 “결론을 내리기 쉽지 않았다”고 하면서 판독문에서 배제하고 순서도 후면이 시작면인 것으로 파악하였다. 전덕재, 2019, 앞의 논문, p.139에서는 “판독에 異見이 있을 수 있기 때문에 추후에 보다 신중한 검토가 필요할 것”이라 하며 해당 부분을 논의에서 제외하였다.

23) 임기환, 2020, 앞의 논문, pp.145~146에서는 “전면에 제액의 존재가 확인되면 전면이 시작면이 될 수 있다”고 하고 육안으로도 ‘年’이라는 글자가 뚜렷하게 보임을 인정하면서도 해당 부분을 논의 진행에 포함시키지 않았다. 그 이유로 비면의 해당 위치에 제액이 아닌 紀年을 쓰는 사례가 있는지 확인되어야 하며, 전체 비문과 동시에 새겨졌다는 점도 증명되어야 함을 들며, ‘기년이 제액처럼 부각되는 것’이나 ‘후면과 우측면이 독립된 내용의 면이 되는 점’ 등이 ‘이례적’임을 강조하였다.

24) 네 번째 글자인 ‘年’의 경우 맨눈으로도 확인될 정도로 글자임을 부정하기 어렵다.

25) 2000년에도 자경이나 서풍에 있어서 아래 부분의 글자와 같은 맥락임이 지적된 바 있다(중원고구려비 신석문 국제워크샵 녹취 중 김양동 발언(고구려연구회, 2000, 앞의 책, p.168).

에 보이는 광개토왕의 연호 ‘永樂’이다. 1946년 평양 平川里 출토 <영강7년명 금동광배>에서 ‘永康七年’이 확인되어 이를 고구려 연호로 보고 있으나,²⁶⁾ 그 시점을 특정하기 어려우며 뒤에 나오는 干支도 甲 혹은 辛, 午 등으로 견해가 갈린다. 앞서 제시한 판독안에서 ‘丁酉’를 인정한다면 같은 연도로 보기 어렵다. 한편 안악 3호분의 묵서 중에는 ‘永和’의 연호가 나오는데, 이는 東晉 穆帝의 연호로 간주하고 있다. <충주 고구려비> 해당 부분의 남은 자형이 확실하지 않으나 ‘康’이나 ‘和’보다는 ‘樂’에 가까워 보이므로, ‘樂’의 판독을 받아들여 永[樂]으로 추독하고자 한다.

이렇게 볼 경우 전면 상단부에는 광개토왕의 영락 7년(397)이라는 연대가 새겨진 것이 된다. 이는 본문의 ‘五月中’으로 자연스럽게 이어져, 전면의 내용이 해당 연도 시점을 다루고 있음을 보여준다. 그런데 기존의 연대 파악에서는 전면 7행에 보이는 日干支와 좌측면 3행의 ‘辛酉年’이라는 干支가 중요하게 활용되었다.

그 가운데 좌측면 3행의 ‘辛酉年’은 2019년 공동 판독안에서 ‘功二百六十四’으로 수정되어 연도로 볼 수 없게 되었다. 다음 부분에도 숫자들이 확인되며, 2행에도 ‘功[百]’으로 판독할 만한 부분이 보여 모종의 작업을 수행한 인원수가 나열되고 있는 것으로 판단된다. 단, 좌측면 5행에서 ‘[辛][酉]’의 판독안이 제기되어, 이를 481년으로 파악한 견해가 나왔다.²⁷⁾ 하지만 그 다음 글자를 ‘年’으로 판독할 수 있을지는 의문이 들어, 年干支라고 확신하기 어렵다. 아울러 ‘辛酉年’을 인정하더라도 그 연대의 비정은 쉽지 않은 상황이다.

한편 전면 7행의 日干支는 종래 ‘十二月廿三日甲寅’으로 판독하며 비문의 내용 시점 파악에서 핵심적 근거로 활용되어 왔다. 해당 날짜와 간지가 들어맞는 449년과 480년이 유력한 연대로 간주되어 왔다. ‘三’은 이전에도 ‘五’로 판독하여 403년으로 비정한 異見이 있었으나,²⁸⁾ ‘甲’의 경우 의견이 일치했었다. 그런데 ‘甲’에 대해서도 상부가 떨어져 나간 것이므로 하부만으로 판단해야 하며, ‘庚’字일 가능성도 있음이 지적되었다.²⁹⁾ 아울러 ‘三’이나 ‘五’로 판독되었던 글자에 대해서 ‘七’의 가능성을 제시하였다.³⁰⁾ 397년 12월 27일의 일간지는 바로 ‘庚寅’에 해당한다.

‘七’로 새로 판독한 글자는 여전히 ‘三’으로 판독하는 견해들이 많다.³¹⁾ 관건은 세로선의 인정 여부가 되겠다. 과거에 ‘五’로 보았던 판독도 세로선의 존재를 인정하였던 것이다. 하지만 현재로서는 확신하기가 어렵다. ‘十二月’의 ‘二’도 현재 상태로는 ‘三’처럼 보임을 감안하면 이 글자가 ‘二’일 가능성도 남아 있다. 이 글자에 대해서는 판독이 어려운 것으로 판단하여, 해당 일자는 ‘十二月廿□[日]□寅’으로 파악하였다. 아직 확실하지 않은 글자들이 있으므로, 이 부분의 간지로 연대를 특정하기는 힘들다고 하겠다.

단, 12월 부분은 年代가 따로 언급되지 않아, 앞의 五月과 같은 연도로 판단된다. 그렇다면 이 부분 또한 상단 부분의 연대에 연결하여 해석해야 할 것이다. 결국 측면이나 후면의 경우는 알 수 없다고 해도, 전면의 내용은 영락 7년(397)의 시점으로 일괄하여 볼 수 있겠다.

26) 도유호, 1964, 「평천리에서 나온 고구려 부처에 대하여」, 『고고민속』1964-3, p.33.

27) 여호규, 2020, 앞의 논문, p.132.

28) 木村誠, 2000, 앞의 논문.

29) 고광익, 2020, 앞의 논문, pp.86~89.

30) 위의 논문, pp.84~86.

31) 여호규, 2020, 앞의 논문, p.108 ; 李成制, 2020, 앞의 논문, p.179 ; 전덕재, 2019, 앞의 논문, p.138.

Ⅲ. 碑 前面의 내용 파악

연도에 이어지는 비문의 내용은 어떻게 이해할 수 있을까? 판독이 가장 많이 이루어진 전면의 내용을 발표자가 파악한 바에 따라 단락을 구분하여 제시하면 다음과 같다.³²⁾

A(상단부 횡방향). 永□七年[歲]在[丁酉]

B-1. 五月中 高麗大王 祖王公□新羅寐錦 世世爲願如兄如弟 上下相知守天 東來之

B-2. 寐錦忌 太子共前部太使者多亏于桓奴主簿貴[德][句]□[王]□[聆]□[去]□□ 到至跪營[天]

B-3. 太子共[語]向[鑿]上共看 節賜[九][霍]鄒 教食[在]東夷寐錦之衣服建立處 [伊][者]賜之

B-4. 隨□諸□□奴客人□ 教諸位 賜上下[衣]服

B-5. 教東夷寐錦還來

B-6. 節教 賜寐錦土內諸衆[人]□[支]□ [大]王國土大位諸位上下衣服 □受教跪營之

C-1. 十二月廿□[日]□寅 東夷寐錦[上]下至于伐城 教來

C-2. 前部太使者多于桓奴主簿貴[德] □□□□ 募人三百

C-3. 新羅土內幢主 下部拔位使者補奴□[流]奴□[位]□□盖盧 共[其]募人

C-4. 新羅土內衆人 □□□ ……

年월에 이어 ‘高麗大王’이 주체로서 등장한다. 다음으로 ‘祖王公’이 이어지는데, ‘祖王’에 대해서는 太王의 祖에 해당하는 어느 王으로 보는 경우가 많았지만,³³⁾ 현 왕의 祖에 해당하는 과거의 특정 왕을 언급할 경우 諡號를 사용하는 것이 예의에 걸맞고 자연스럽다고 여겨진다. 이는 <지안 고구려비>나 <광개토왕릉비>에서도 확인되는 바이다. 한편 太王 휘하 별도의 王으로 본 견해도 있으나,³⁴⁾ 그러한 존재를 상정할 근거가 보이지 않으며, 비문의 다른 곳에는 나오지 않아 굳이 高麗大王과 언급되었어야 할 이유도 찾기 어렵다.

<광개토왕릉비>에서 ‘祖王先王’과 ‘祖先王’이 같은 맥락에서 등장하고 있음을 볼 때, 역시 과거의 특정 왕을 지칭한다기보다는 大王의 祖先王을 일컫는 것으로 보는 것이 자연스럽다.³⁵⁾ 다음 글자는 기존에 ‘승’으로도 판독되다가 2019년 공동 판독안에서 ‘公’으로 확정되었는데, 그 다음 글자가 판독되지 않아서 뒷부분과 이어져 의미를 갖는 것인지 ‘祖王公’으로서 祖先인 王公들로 해석해야 할지 판단하기 어렵다.

B-1 마지막의 ‘東來之’를 ‘동쪽에서 왔다’로 해석하여, 신라 매금을 주어로 파악한 견해도 나왔으나,³⁶⁾ <광개토왕릉비> 영락 5년(395)조에서 王이 양평도를 지나 동쪽으로 여러 성들로 왔다는 것을 ‘東來’로 표현하고 있음을 볼 때, ‘동쪽으로 왔다’로 해석하는 편이 자연스럽다. 이어지는 내용에서 ‘祖王(公)’은 더 이상 확인되지 않으므로, ‘동쪽으로 온’ 행동의 주체는 高麗大王으로 여겨진다. 그렇다면 祖王(公)은 왜 등장했을까? 사이에 위치한 ‘□新羅寐錦 世世爲願如兄如弟 上下相知守天’의 주어를 祖王(公)으로 볼 수 있겠다. 高麗大王은 조상들의 그러한 뜻을 받들어 新羅寐錦을 만나러 동쪽으로 온 것이 된다.

32) 판독은 2019년 공동 판독안에 기반하여, 발표자의 판단에 따라 일부 수정하였다.

33) 李丙燾, 1979, 앞의 논문, p.28 ; 南豐鉉, 2000, 앞의 논문 ; 김현숙, 2002, 앞의 논문 ; 박성현, 2010, 앞의 논문 ; 서지영, 2012, 앞의 논문.

34) 林起煥, 2000, 앞의 논문, p.420.

35) 李鎔鉉, 2020, 앞의 논문, pp.32~34.

36) 위 논문, pp.36~37.

B-2에는 寐錦이 다시 등장한다. ‘忌’는 寐錦의 이름으로 보아,³⁷⁾ 訥祗麻立干的 ‘祗’와 연결시키기도 한다.³⁸⁾ 하지만 B-1에 ‘新羅寐錦’이 처음 등장하고, B-6과 C-1 등에 반복적으로 ‘寐錦’이 나오는데, 중간인 이 부분에서만 이름이 표기되었다고 보기는 어색하다.³⁹⁾ <광개토왕릉비>에도 ‘新羅寐錦’의 이름은 따로 표시하지 않았음이 참조된다.⁴⁰⁾ ‘忌’는 주어 ‘寐錦’에 붙는 서술어로 판단하는 것이 적당하다고 생각된다.⁴¹⁾ 그 의미 중 ‘공경하다’를 택하여 ‘공손히 응했다’는 의미로 해석한 경우도 있으나,⁴²⁾ 해당 글자는 꺼려서 기피한다는 의미가 기본으로서 응했다는 의미로 사용되었다고 보기는 어렵다. 따라서 매금이 ‘기피하여’ 오지 않았다고 해석하는 것이 자연스럽다.⁴³⁾ 高麗大王이 祖先의 뜻에 따라 함께 ‘守天’할 의도 하에 동쪽으로 왔음에도 新羅寐錦은 바로 합류하지 않았던 것이다.

대신 太子의 존재가 나타난다. B-2와 B-3의 ‘太子’ 다음에 나오는 ‘共’은 太子의 이름으로서,⁴⁴⁾ 좌측면에 등장하는 ‘古鄒加 共’과 동일인으로 파악하기도 하나,⁴⁵⁾ 같은 사람이 太子에서 古鄒加의 다른 직위로 표기되었을지 의문이 제기되어 있다. 나아가 어린 시절에는 太子라고 불리다가 宗族의 長이 되면서 古鄒加의 호칭을 갖게 되었다는 주장의 경우, 왕조 국가의 차기 왕위계승자임을 보여주는 ‘太子’라는 칭호보다 ‘古鄒加’의 호칭이 더 높았던 것이 되므로 받아들이기 어렵다. 이를 ‘함께’의 의미로 해석한 견해를 따른다.⁴⁶⁾ 太子가 前部 大使者 多弓 桓奴 및 주부 귀덕 등과 함께 어느 장소에 도착한 것으로 이해된다. ‘跪營’이 곧 그 장소의 명칭였다고 보는 경우가 많은데, 軍營 혹은 行營에 따로 이름을 붙였을지는 의문이다. <광개토왕릉비>의 영락 6년(396)조의 ‘跪王’이 ‘왕에게 무릎꿇었다’는 의미로 해석됨을 감안할 때, 이 또한 ‘營에 와서 무릎꿇었다’고 해석해야 할 것이다.⁴⁷⁾

B-2의 마지막 글자는 2019년 공동 판독안에서 ‘[大]’로 판독하였다. B-3의 太子에 붙여 ‘大太子’로 볼 경우, 앞에서는 그냥 ‘太子’로 나온 것과 상충한다. 이를 ‘夭太子’로 판독한 경우도 있지만,⁴⁸⁾ ‘어린’의 의미가 있다고 하더라도 보통 ‘夭折’로 해석되는 글자를 굳이 太子의 수식

37) 申澄植, 1987, 앞의 논문, p.408 ; 金昌鎬, 2000, 「中原高句麗碑의 建立 年代」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究), p.10 ; 朴眞奭, 2000, 앞의 논문, pp.317~3218 ; 林起煥, 2000, 앞의 논문, p.420 ; 시노하라 히로카타(篠原啓方), 2000, 앞의 논문, p.10 ; 張彰恩, 2005, 앞의 논문, p.278 ; 전덕재, 2019, 앞의 논문 ; 여호규, 2020, 앞의 논문 ; 李成制, 2020, 앞의 논문.

38) 金昌鎬, 1987, 앞의 논문, pp.140~141.

하지만 <포항 냉수리 신라비>의 ‘乃智王’은 『三國遺事』王歷에 보이는 訥祗麻立干的 異稱 ‘乃只’와 동일하게 파악하는 것이 일반적으로, ‘乃智王’이라는 표기를 볼 때 ‘乃’가 이름의 주요 요소로 여겨진다. ‘智’와 ‘忌’의 同音 여부도 검토가 필요하다.

39) 이용현, 2020, 앞의 논문, pp.27~30.

40) 위의 논문, p.29.

41) 李丙燾, 1979, 앞의 논문 ; 邊太燮, 1979, 앞의 논문 ; 南豐鉉, 2000, 앞의 논문 ; 박성현, 2010, 앞의 논문 ; 이용현, 2020, 앞의 논문.

42) 李丙燾, 1979, 앞의 논문, p.23.

43) 邊太燮, 1979, 앞의 논문, p.45 ; 박성현, 2010, 앞의 논문, p.219 ; 이용현, 2020, 앞의 논문, pp.29~30.

44) 李丙燾, 1979, 앞의 논문 ; 邊太燮, 1979, 앞의 논문 ; 申澄植, 1979, 앞의 논문 ; 南豐鉉, 2000, 앞의 논문 ; 林起煥, 2000, 앞의 논문 ; 시노하라 히로카타(篠原啓方), 2000, 앞의 논문 ; 張彰恩, 2005, 앞의 논문 ; 박성현, 2010, 앞의 논문 ; 전덕재, 2019, 앞의 논문 ; 여호규, 2020, 앞의 논문 ; 임기환, 2020, 앞의 논문, p.153 ; 李成制, 2020, 앞의 논문, p.182.

45) 金英夏·韓相俊, 1983, 앞의 논문, p.41. 이후 널리 받아들여지고 있다.

46) 이용현, 2020, 앞의 논문.

단, 좌측면 6행의 ‘[古][鄒][加]’에 이어 나오는 ‘共’ 혹은 ‘共軍’은 인명일 가능성이 남아 있다고 본다.

47) 시노하라 히로카타(篠原啓方), 2000, 앞의 논문 ; 전덕재, 2010, 앞의 논문, p.144 ; 李成制, 2020, 앞의 논문, p.182.

48) 이용현, 2020, 앞의 논문.

에 사용하였다고 보기는 어렵다. 그렇다면 이 글자는 太子와 연결시킬 것이 아니라 앞 문장의 마지막 부분에 붙여서 해석해야 할 것이다. ‘矣’나 ‘之’ 등 종결사로 보는 견해가 여전히 존재한다.⁴⁹⁾ ‘天’일 가능성도 배제할 수 없다고 본다. ‘天’ 판독이 인정될 경우, 앞에서 등장하는 ‘守天’과 동일한 의미의 압축적 표현일 수 있겠다.

B-3에서는 太子가 ‘壁上’을 향해 말하고 바라보는 등의 행동을 하고, 이에 ‘九(?)霍(?)雛’를 사여받는다. ‘九(?)霍(?)雛’의 정체는 알 수 없지만, 東夷寐錦의 衣服建立處에서 먹게 하는 敎가 이어지므로 음식물일 가능성이 상정된다. ‘伊(?)者(?)’는 해당 식사의 사여를 주관하게 한 책임자로 보인다.

B-5는 東夷 寐錦에게 내려진 敎로서 ‘돌아올’ 것을 명령하고 있다. 이에 대해서 신라 매금이 와서 복속 의례를 하고 신라로 돌아갔다가 다시 돌아오게 되었다고 파악하기도 하나, 왕이 그 영역을 벗어나는 것이 흔한 일이 아님을 감안할 때 두 차례나 왔다갔다 보기는 어색하다. 고구려 입장에서 고구려 왕에게 오는 것을 ‘돌아오다’로 표현했다고 이해해야 할 것이다.⁵⁰⁾

B-6에서 ‘寐錦土內諸衆[人]’에게 무언가를 ‘賜’하였는데, 준 것이 무엇인지 불확실하다. 반대로 다음에 나오는 ‘[大]王國土大位諸位上下衣服’는 흔히 ‘[大]王國土大位諸位上下’에게 의복을 사여한 것으로 해석해 왔지만 서술어가 없다. 그렇다면 둘을 결합하여 ‘寐錦土內諸衆[人]’에게 ‘[大]王國土大位諸位上下’의 ‘衣服’을 사여하도록 敎하였다고 해석하는 것이 적당하다고 판단할 수 있다. 衣服의 사여가 복속 의례의 성격을 가진다고 할 때, ‘大王國土’內的 ‘大位諸位上下’는 이미 고려대왕의 신하로서 그에 걸맞는 복식을 착용하고 있었을 것으로 추정된다.

5월에 해당하는 B의 내용은 여기서 끝나고 C에서는 12월의 상황이 이어진다. 이후 高麗大王은 귀환한 듯하다. 12월까지 新羅寐錦을 기다리며 軍營에서 장기체류했을 것으로는 여겨지지 않기 때문이다. 太子의 역할도 여기서 끝난 듯, C에는 등장하지 않는다. 前部 大使者 多亏桓奴·주부 귀덕 등이 敎를 받아 新羅寐錦을 맞이하게 된 것으로 보인다.

12월에는 東夷寐錦 上下가 于伐城에 도착한다. 于伐城까지는 아직 신라 영역 內였다고 볼 수 있겠다. C-2의 전부 대사자 등은 C-1 마지막 부분의 ‘敎’를 받는 대상으로 보기도 하지만, ‘敎’의 대상이 언급될 경우에는 ‘敎’ 바로 다음에 위치하는 것이 일반적이다. 따라서 ‘敎來’는 ‘오라고 敎하다’ 혹은 ‘敎하여 오게 하다’의 의미로 완결되며, 前部 大使者 多亏桓奴 등은 새로운 문장의 주어로 파악할 수 있다. 오게 한 대상은 바로 우벌성에 도착한 東夷寐錦 上下라고 판단된다. 마침내 寐錦이 자신의 영역을 벗어나 해당 營에 도착하게 된 것이다. 뒤에는 前部 大使者 多亏桓奴 등과 新羅土內幢主 하부 발위사자 보노 등의 ‘募人’과 ‘功’ 및 숫자들이 이어진다. 지금까지 해석한 내용을 정리하면 다음과 같다.

A(상단부 횡방향). 永樂(?) 7年 歲在丁酉

B-1. 5월에 高麗大王은 祖王이 新羅寐錦과 대대로 형제처럼 위아래가 서로 알고 守天하기를 원하였음을 (받들어) 동쪽으로 왔다.

B-2. 寐錦이 기피하니, 太子가 前部 大使者 多亏桓奴, 主簿 貴德과 함께 ... 도착하여 營에 무릎꿇고 (守)天하였다.

B-3. 太子가 함께 말하고 壁(?)上을 향하여 함께 보자, 곧 九(?)霍(?)雛를 하사하여 東夷寐錦의 衣服 建立處에서 먹게 하니, 伊(?)者가 그것을 내려주었다.

B-4. 따라 온 여러 ... 奴客人 ... 諸位에 敎하여 위아래의 의복을 내려주게 하였다.

49) 전덕재, 2019, 앞의 논문에서는 ‘[矣]’로, 이성재, 2020, 앞의 논문에서는 ‘[之]’로 판독하였다.

50) 시노하라

- B-5. 東夷寐錦에 돌아올 것을 敎하였다.
 B-6. 또 敎하여 寐錦土內 諸衆人 ... 에게 大王國土 大位·諸位上下의 衣服을 내려주
 며 敎를 받아 營에 무릎꿇게 하였다.
 C-1. 12월 2□일 □寅에 東夷寐錦 上下가 于伐城에 도착하니 오도록 敎하였다.
 C-2. 前部 大使者 多于桓奴, 主簿 貴德 300명을 募人하였다.
 C-3. 新羅土內幢主 下部 拔位使者 補奴 ... 盖盧가 그 募人을 함께하였다.
 C-4. 新羅土內衆人 □□□ ……

IV. ‘정황’적 검토와 太子의 문제

그간 <충주 고구려비>의 연대와 내용 파악에 있어서 그러한 사건이 벌어질 수 있는 정황적 맥락이 중요하게 작용되어 왔다. 그러나 ‘정황’은 사료에 대한 해석을 통해 구성된 것이므로, 적절히 이루어진 판독이라면 정황보다 우선시되어야 한다. 새로운 판독은 기존의 정황 판단을 수정할 수 있게 하는 바탕이 된다. 새롭게 읽어낸 비면 상단의 연대가 ‘永樂 7年’이 분명하다면, 이후의 내용은 해당 연대를 기준으로 재해석되어야 할 것이다. 단, 앞서 살핀 바와 같이 비면 상단의 두 번째 글자는 ‘樂’일 가능성이 인정되더라도 그 자체로 확정적이라고 말할 수는 없다. 결국 영락 7년(397)과 비문 내용의 결합이 가능한지 ‘정황’을 살필 필요성은 여전히 남게 된다.

397년의 시점을 불가능하게 만드는 ‘정황’이 비문 內에 있을까? 年月에 이어지는 비문 내용의 시작 부분에 ‘高麗大王’이 나오는데, 高句麗가 國號를 高麗로 改稱한 시점을 463년에서 479년 사이로 보고 이를 <충주 고구려비>의 건립 시기를 판단할 근거로 활용한 연구가 있었다.⁵¹⁾ 하지만 『魏書』帝紀에서는 398년 시점부터 ‘高麗’가 지속적으로 확인되므로,⁵²⁾ 그와 가까운 397년의 ‘高麗’ 표기는 문제가 되지 않는다. 신라를 ‘東夷’로 간주하는 인식은 ‘領護東夷中郎將’ 등의 爵號를 받는 435년 이후에나 가능할 것이라는 지적도 있었다.⁵³⁾ 하지만 이는 爵號를 수여받은 시점일 뿐, ‘東夷’ 인식이 고구려에 들어온 시점으로 볼 수 없다. ‘南蠻’과 관련된 爵號를 수여받은 바 없었던 百濟의 경우에도 ‘南蠻’ 인식을 확인할 수 있음이 참고된다.

한편 B-1에 보이는 “世世爲願如兄如弟”의 관념에 주목하여, <광개토왕릉비>에 나타난 ‘屬民’의 인식으로부터 관계의 변화가 나타났음을 보여준다는 견해도 나왔다.⁵⁴⁾ 그렇다면 <광개토왕릉비>에 묘사된 상황과 <충주 고구려비>의 내용 시점 사이에 ‘朝貢을 바치는 屬民’과 ‘형제 관계’의 차이가 나타날 만큼의 시간차를 상정해야 하는 것이 된다. 이러한 관계의 변화에는 고구려가 屬民으로 취급하던 신라를 형제로 대우하게 만든 수세적 상황이 상정된다. 하지만 이후의 비문 내용에서 고구려측이 신라를 특별히 우대한다거나, 고구려가 ‘수세’에 놓여 있다고 느껴질 만한 양상은 확인되지 않는다. 寐錦을 포함한 신라인들에게 의복을 사여하는 ‘복속의례’와 같은 상황이 이어지며, 新羅寐錦은 ‘東夷’로 표현되고 있다. 이 비에 묘사된 양국의 관계를 ‘屬民’에서 ‘兄弟’로의 격상으로 보아도 좋을까?

51) 朴眞奭, 2000, 앞의 논문, pp.325~331.

52) 『魏書』卷2, 太祖紀2 天興元年(398) 春正月, “辛酉, 車駕發自中山, 至于望都堯山. 徙山東六州民吏及徒何·高麗雜夷三十六萬, 百工伎巧十萬餘口, 以充京師.”

53) 李基白, 1979, 앞의 논문, pp.37~38 ; 張彰恩, 2006, 「中原高句麗碑의 연구동향과 주요 쟁점」, 『歷史學報』第189輯, p.310.

54) 鄭雲龍, 1989, 앞의 논문, p.6 ; 박성현, 2010, 앞의 논문, pp.218~219.

그와 관련하여 ‘如兄如弟’의 언급은 복속의례로 간주되며 ‘東夷’ 인식이 확인되는 B-2 이후의 상황보다 앞서 ‘祖先’을 주어로 하는 부분에 등장함이 주목된다. 新羅麻錦과 兄弟 같은 관계를 대대로 원했던 것은 과거의 祖先王(公)들이었던 것이다. 신라와의 관계 구축은 이러한 조상들의 바람을 이어받아 진행하였지만, 현 大王에 의해 한 걸음 더 나아가 복속에 가까운 관계로 정립되었다는 해석이 가능하다.⁵⁵⁾ 祖先王의 뜻을 먼저 서술하고, 자신의 진전된 조치를 언급하는 서술 방식은 <광개토왕릉비>의 수묘인 관련 부분에서도 확인된다.

그런데 비문 전면의 내용을 397년 시점으로 볼 경우, B에 등장하는 ‘太子’의 존재가 문제시될 수 있다. 太子는 前部 大使者 多弓桓奴 등 고구려인들과 함께 움직이고 있어, 보통 고구려의 太子로 파악해 왔다. 하지만 長壽王이 太子로 冊立되는 것은 광개토왕 18년(409)의 일로서, 397년 시점에는 고구려에 太子가 존재하지 않는다. 太子 冊立 이전, 王子였던 장수왕이 太子로 표기되었을 가능성을 상정한다고 해도, 너무 어려서 <충주 고구려비>에 묘사된 활동의 주체로 인정하기 어렵다.⁵⁶⁾

단, 고구려 太子의 부재 문제는 내용 연대를 507년으로 파악하는 견해를 제외하면,⁵⁷⁾ 449~450년이나 481년으로 연대를 파악했던 기존의 유력 견해들에게도 똑같이 적용되는 것이다. 장수왕대에는 太孫의 존재만 확인되고, 太子 冊立이 보이지 않기 때문이다.⁵⁸⁾ 결국 장수왕의 아들 助多가 사료에 나오지는 않지만 太子로 冊立되었다고 보거나, 王子임에도 太子로 표기되었다고 해석하거나, 太孫이 太子로 표기되었다고 보는 등 사료에 직접적으로 나타나지 않는 정황을 추가적으로 상정해야 했다.

사료상 太子였음이 확인되지는 않지만 그와 유사한 존재였을 것으로 보이는 인물을 찾다면, 397년 시점에는 불가능할까? 비문에 나오는 太子의 경우 맥락 상 고구려의 太子나 신라의 太子로 모두 해석될 수 있음은 지적된 바 있다.⁵⁹⁾ 그럼에도 결국에는 고구려 太子로 간주하게 된 데는 신라 왕을 ‘麻錦’으로 격하시켜 표현하면서 그 계승예정자만 ‘太子’로 높여서 표현했다고는 보기 어렵다는 점이 작용하였다. 그러나 ‘麻錦’은 <울진 봉평리 신라비>의 牟卽智麻錦王에서 확인되듯 신라에서 자체적으로 사용하던 호칭이다. <충주 고구려비>의 맥락 속에서 ‘大王’ 혹은 ‘太王’으로 표기된 고구려 왕에 대비되어 ‘東夷’의 칭호로 사용되면서 상대적으로 낮은 격을 보이게 되었지만, 호칭 자체는 일부러 격하시킨 것이라기보다 신라에서 사용하던 것을 받아들여 적었다고 보아야 할 것이다.⁶⁰⁾ 따라서 비문의 太子가 신라의 왕위계승예정자를 가리킨다는 해석도 충분히 가능하다.⁶¹⁾

그런데 397년 시점에는 신라에서도 문헌기록상 太子 冊立이 확인되지 않는다.⁶²⁾ 다만 차기 왕위계승 후보자 중 하나로서, 고구려인과 함께 움직일 만한 인물은 찾아진다. 바로 392년에

55) 국가간 ‘兄弟’ 관계의 구축이 ‘君臣’ 관계에 선행할 수 있음은 李道學, 2000, 앞의 논문, p.275에서 지적된 바 있다.

56) 장수왕은 491년에 98세로 사망하므로, 397년에는 4~5세의 어린 나이이다.

57) 박성현, 2010, 앞의 논문.

文咨王 7년(497) 정월에 王子 興安의 太子 冊立이 기록되어 있다(『三國史記』 卷19, 高句麗本紀7 文咨王 7年, “立王子興安爲太子”).

58) 木村誠, 2000, 앞의 논문.

59) 任昌淳, 1979, 앞의 논문; 木村誠, 2000, 앞의 논문.

60) <광개토왕릉비>에서 백제 왕을 ‘殘主’로 표현한 것과 대비된다.

61) <광개토왕릉비>에는 유류왕을 ‘고명세자’로 언급하고 있어, 태자와 세자의 격 구분이 엄격하게 인식되지 않았을 수 있다. 고려의 경우 耽羅國에서 來朝한 ‘太子’를 그대로 언급하였음이 확인된다(“冬十二月 耽羅國太子末老來朝 賜星主王子爵”(『高麗史』 卷2, 世家2 太祖 21年(938) 12月). 담라국 ‘太子’에게 수여된 爵號는 ‘王子’였다.

62) 『三國遺事』 卷1, 紀異1 第十八代實聖王에는 訥祗가 ‘前王太子’로 나오지만, 그 시점은 이미 실성왕 즉위 이후로서 奈勿王代에 실제로 太子로 冊立되었다고 보기는 어렵다.

質子로서 고구려에 보내진 實聖이 그에 해당한다.⁶³⁾ 그는 고구려의 신라 구원전 이듬해인 401년 7월 신라에 돌아와, 402년 2월에 奈勿王의 뒤를 이어 왕위에 오른다. 그의 즉위는 ‘國人的 추대’에 의한 것으로 기록되었지만,⁶⁴⁾ 고구려의 의도가 개입하였다고 보는 것이 일반적이다. 그는 王姪로서 質子가 되었다고 하는데, 당시 왕이었던 奈勿과 마찬가지로 前王 味鄒尼師今의 사위로서 차기 왕위 계승 후보군에 포함되는 존재였다.⁶⁵⁾ 특히 고구려가 그의 차기 왕위 계승을 의도하고 있었다면, ‘太子’라고 불러줄 만한 당위가 충분하다고 생각된다.

<충주 고구려비>에서 太子는 寐錦이 高麗大王과의 만남을 기피하자 바로 등장한다. 新羅寐錦을 대신하여 營으로 소환되는데, 이 때 고구려인들과 함께 움직였던 것도 質子인 신라 왕자의 정황과 배치되지 않는다. 그의 역할은 新羅寐錦을 대신하여 고구려 왕이 기획한 의례에 참여하고, 新羅寐錦이 高麗大王의 소환에 응하도록 중재하는 것이었다고 생각된다. 이 때 기획된 신라 매금과의 論事가 복속 의례와 더불어 군사적 공조 관계를 맺는 것이었다면, 質子로서 實聖의 중요한 역할은 자연스러운 모습이라고 하겠다. 현재 판독이 가능한 부분 중에는 太子가 5월조에서만 확인되므로, 高麗大王과 의식을 함께하고 新羅寐錦을 소환하는 역할을 다한 뒤 함께 돌아갔다고 볼 수 있다.

新羅寐錦 上下는 12월이 되어서야 于伐城에 도착한다. 于伐城은 지금의 경북 영주 순흥 지역에 비정되는 伊伐支縣으로 추정된 견해가 유력하다.⁶⁶⁾ 당시 신라와 고구려 사이가 죽령로를 통해서 연결되었다고 볼 때, 죽령로 가운데 신라 영역의 거의 끝에 해당한다고 하겠다. 거기서 다시 ‘來’하라는 ‘敎’를 받고 결국 新羅寐錦은 신라 영역을 벗어나 충주 지역의 營에 이르렀던 것으로 보인다. 신라 왕이 자신의 영토를 벗어나 고구려의 營에 찾아가는 일이 흔하게 일어났다고는 보기 어렵다. <광개토왕릉비>의 영락 10년(400)조 말미에는 ‘昔新羅寐錦未有身來論事’라고 하여 이전에 그와 같은 일이 없었음을 밝혔다. 광개토왕 대에 처음으로 신라매금이 직접 와서 조공하였다는 것이다.

<충주 고구려비>에 묘사된 상황은 바로 新羅寐錦이 ‘身來’하여 ‘論事’하는 모습이다. <충주 고구려비> 이전이나 이후에 그와 같은 드문 일이 또 있었다고 가정하는 것보다, <광개토왕릉비>의 언급과 <충주 고구려비>의 내용이 동일한 사건을 가리키고 있다고 해석하는 편이 간단하다. <광개토왕릉비>에서 영락 10년(400)조 마지막 부분에 기록한 것은 뒤에서 살필 것처럼 <광개토왕릉비>가 맥락에 따라 여러 해에 있었던 일들을 특정 연도에 일괄 서술하는 방식을 택하였기 때문일 것이다. <광개토왕릉비>가 설정한 이야기 구조 상 해당 위치에 배치하는 것이 적당했거나, 군사 원조의 원인과 결과에 대한 기술로 추가적으로 언급된 것으로 해석할 수 있다.

V. ‘접경시대’로서의 충주 지역

『三國史記』나 『日本書紀』 등 문헌 기록에 따르면 5세기 중반 이후 고구려와 신라의 관계는 적대적인 것으로 변화하여 무력 충돌이 이어지기 때문에, 고려대왕이 신라매금을 불러 의복을 하사하는 일과 ‘新羅土內幢主’로서 下部 소속에 拔位使者의 官等を 가진 고구려인이 등장하는

63) 『三國史記』卷3, 新羅本紀3 奈勿尼師今 37年(392) 春正月, “高句麗遣使 王以高句麗強盛 送伊浪大西知子實聖爲質”

『三國史記』卷18, 高句麗本紀6 故國壤王 9年(392) 春, “遣使新羅修好 新羅王遣姪實聖爲質”

64) 『三國史記』卷3, 新羅本紀3 實聖尼師今 卽位條, “奈勿薨 其子幼少 國人立實聖繼位”

65) 이재환, 2017, 「新羅 眞骨의 ‘家系 分枝化’에 대한 재검토 - 사위의 왕위계승권을 중심으로 -」, 『大丘史學』第127輯, p.19.

66) 손영종, 1985, 「중원고구려비에 대하여」, 『역사과학』85-2, 과학백과사전출판사, p.30.

상황은 5세기 중반 이전으로 보는 것이 자연스럽다. 이후로 파악하는 해석의 경우 사료에 보이는 일관된 적대 관계 속에서 보이지 않는 관계 개선을 상정해야 한다는 난점이 있다.

한편 신라 영토 내에 고구려인 幢主가 존재하게 된 배경으로는 영락 10년(400)이 주목되었다. <광개토왕릉비>에 따르면, 영락 9년(399) 新羅寐錦이 사신을 보내 “倭人이 國境에 가득하여 奴客을 民으로 삼으려 하고 있다”며 도움을 요청하자, 광개토왕은 이듬해 步騎 5萬을 보내 신라를 구원하였다. 이때 男居城으로부터 新羅城에 이르렀으며, 도망치는 倭를 쫓아 任那加羅 從拔城까지 점령한다. 고구려군이 신라의 구원을 표방하며 한반도 남쪽 깊숙이 들어와 활동하였던 것이다. 이 과정을 통해 신라 영역 내에 고구려군 주둔이 시작되었다고 보는 것이 일반적이었다.

그런데 영락 7년(397)은 그보다도 3년이나 앞서는 시점이다. 397년 5월에 광개토왕이 <충주 고구려비>의 건립지 근처로 ‘東來’하고, 12월에는 신라 영역 내에 고구려인 幢主가 존재하는 것이 가능했을까? 광개토왕의 신라 원군 파병이 399년에 갑자기 기획되어 400년에 전격적으로 진행되었다고 가정한다면 이러한 정황 파악이 어렵겠지만, <광개토왕릉비>의 기록 방식은 다른 가능성을 보여준다.

<광개토왕릉비>에서 특정 시점에 벌어졌던 사건을 해당 연도에 그대로 기술한 것이 아니라, 여러 해에 걸쳐서 진행된 사건들을 모아서 특정 연도에 한꺼번에 기록하였음은 이미 지적된 바 있다.⁶⁷⁾ 關彌城은 『三國史記』에 따르면 광개토왕 元年(391) 10월에 고구려가 점령하였다고 하는데, <광개토왕릉비문>에는 영락 6년(396)에 공취하였다는 58城 700村 중 關彌城으로 등장한다. 여러 시기의 백제 공격 사실이 영락 6년조에 일괄 기재된 것이다.⁶⁸⁾

<광개토왕릉비> 辛卯年(391)條에는 百濟와 더불어 新羅도 倭에 넘어간 것처럼 서술되어 있으나, 그에 대응하는 훈적으로 여겨지는 영락 6년(396)조에는 신라 지역에 관련한 활동이 기록되어 있지 않다. 마치 영락 9년(399)에 신라 왕의 구원 요청을 받고, 영락 10년(400)에 군대를 보내 구원해준 것이 전부인 것처럼 보이지만, 倭의 신라 공격은 399년 이전부터 문헌 기록에 나타난다. 『三國史記』에 따르면 奈勿尼師今 38년(393), 倭人이 신라의 수도 金城을 5일간 포위했다고 한다. 당시에는 신라 자체적으로 방어가 가능하였던 것으로 언급되었으나, 倭의 침략이 지속되던 상황임은 인정된다. 영락 6년조와 마찬가지로 영락 9년 및 영락 10년의 신라 구원 출병 관련 기록도 이전부터 진행된 일련의 사건들이 일괄 기록되었을 가능성이 크다고 하겠다.⁶⁹⁾

앞서 언급한 바와 같이 신라는 392년 고구려와 접촉한 직후 실성을 인질로 파견하였다. 단순히 고구려의 강함을 인식한 것을 넘어, 倭 혹은 倭·百濟·加耶 연합군과의 군사적 긴장 관계 속에서 고구려의 도움을 필요로 하였을 수 있다. <충주 고구려비>에 묘사된 영락 7년(397)의 상황은 그러한 흐름의 중간에 위치하여, 영락 10년의 대규모 군사 파견을 가능케 한 계기가 되었다고 하겠다.

<충주 고구려비> 전면의 시점보다 1년 앞선 영락 6년(396), 광개토왕은 백제를 親征하였다. 백제 王城을 포위하여 백제 왕의 항복과 영원히 奴客이 되겠다는 맹세를 받고, 58城 700村을 획득하여 돌아갔다. 400년에 한반도 남부 지역으로 군대를 보낼 수 있었던 루트는 기본적으로 이 때 확보하였다고 보아야 할 것이다. 영락 6년조에 보이는 58城 700村을 한강 이북에만 비

67) 武田幸男, 1978, 「廣開土王碑文辛卯年條の再吟味」, 『古代史論叢 上』; 武田幸男, 1979, 「高句麗廣開土王紀の對外關係記事」, 『三上次男博士頌壽記念東洋史考古學論叢』.

68) 李道學, 1988, 「永樂 6年 廣開土王의 南征과 國原城」, 『孫寶基博士停年紀念韓國史學論叢』, 지식산업사(2006, 『고구려 광개토왕릉 비문 연구 - 광개토왕릉비문을 통한 고구려사』, 서경에 재수록).

69) <광개토왕릉비>에서는 영락 9년(399)에 百殘이 맹세를 어기고 倭와 화통하였다고 하였는데, 『三國史記』 百濟本紀에는 太子 腆支를 質子로 보내고 倭와 結好한 것은 397년의 일로 되어 있다.

정한 경우도 있었으나,⁷⁰⁾ 적어도 북한강 상류 지역은 포함될 것이며 남한강 상류 지역까지 이르렀을 가능성 또한 크다.⁷¹⁾ <충주 고구려비>에 보이는 古牟婁城이 58城에 포함되어 있다는 점은 주목되는 바이다.

영락 10년(400)에 광개토왕이 파견한 步騎 5만이 남하한 루트는 竹嶺路로 파악하는 것이 일반적이다. 동해안로도 함께 이용되었을 수 있으나,⁷²⁾ 주력군의 이동은 역시 죽령로로 파악하는 것이 자연스럽다.⁷³⁾ 그렇다면 고구려는 400년 이전에 적어도 원주·단양·제천에 이르는 지역을 대규모 원정에 사용할 수 있을 정도로 확보하고 있었다고 보아야 한다. 원주·단양·제천까지 도달하였다면 충주에 이르는 것 또한 어렵지 않다.

그러나 이때 고구려가 남한강 유역에서 충주까지는 도달하지 못했다고 보는 견해도 있다. 한성에서 최단거리로 충주 지역까지 올 때 경유하게 되는 이천 설봉산성과 설성산성에서 백제 토기가 다수 출토되었음이 그 근거 중 하나로 제기되었다.⁷⁴⁾ 그러나 설봉산성과 설성산성의 경우 충주·원주·양평 방면으로부터의 침입을 견제하는 입지임이 지적되어 있다.⁷⁵⁾ 고구려가 영서에서 죽령로의 루트를 확보하였음을 인정한다면, 이천 지역에 백제 城이 유지되었다고 해서 충주에 이를 수 없었다고 볼 수는 없다.

한편 원주 법천리고분에서 5세기 전반으로 편년되는 백제 중앙양식의 토기가 출토됨을 근거로 해당 지역이 백제에 의해 장악되어 있었다고 보고, 5세기 중반 이전까지는 고구려가 남한강 수로의 주요 요지인 원주 법천리지역을 넘어 충주 지역까지 진출하지 못했을 것으로 파악한 견해도 나왔다.⁷⁶⁾ 그런데 해당 견해에서는 <충주 고구려비>의 연대를 449년으로 보면서, 5세기 전·중반에 조영된 것으로 판단하고 있는 법천리 1호와 3호 횡혈식석실분의 편년에 재검토를 요청하고, 백제 횡혈식석실분이 유지되고 백제 중앙양식 토기가 사용되었다더라도 정치적으로는 고구려의 통제를 받았을 가능성도 제시하고 있다.⁷⁷⁾ 같은 논리라면 법천리고분의 존재를 통해 광개토왕대의 충주 도달을 부정하는 것도 불가능해진다. 물론 충주에 이르기 위해 반드시 법천리 지역을 통과해야 하는 것 또한 아니다.

아울러 <충주 고구려비>와 가까운 장미산성에서 고구려 유물은 발견되지 않고 4~5세기 백제 토기가 다수 출토되어, 4세기 후반에서 5세기 전반 사이 백제에 의해 축조된 것으로 보임이 지적되었다.⁷⁸⁾ 그런데 인근의 탐평리 유적에서는 백제 주거지 상부에 고구려 구들시설이 조성되었음이 확인되며, 5세기 중엽의 고구려 유물들이 출토되었다고 한다.⁷⁹⁾ 아울러 충주 두정리고분군과 단월동고분군에서는 5세기 중반~후반으로 편년되는 고구려 토기가 출토되었다.⁸⁰⁾

사실 고구려 城이 확인되지 않는 문제는 충주 지역에 국한된 것이 아니다. 고구려가 확보하였다고 인정받고 있는 영서 지역이나 제천·단양 등 죽령로의 주요 지역들에서도 고구려 성의

70) 李丙燾, 1976, 『韓國古代史研究』, 博英社, p.382.

71) 李道學, 1988, 앞의 논문 ; 徐榮一, 2000, 「中原高句麗碑에 나타난 高句麗 城과 關防體系 -于伐城과 古牟婁城을 중심으로-」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究) ; 梁起錫, 2002, 「高句麗의 忠州地域進出과 經營」, 『中原文化論叢』6輯.

72) 김현숙, 2002, 앞의 논문, p.90.

73) 徐榮一, 2000, 앞의 논문, pp.496~497.

74) 박성현, 2010, 앞의 논문, p.213.

75) 徐榮一, 2003, 「漢城 百濟의 南漢江水路 開拓과 經營」, 『文化史學』20號, pp.36~37.

76) 전덕재, 2019, 앞의 논문, pp.150~151.

77) 위의 논문, p.152.

78) 박성현, 2010, 앞의 논문, pp.212~213 ; 전덕재, 2019, 앞의 논문, pp.149~150.

79) 국립중앙문화재연구소, 2017, 『충주 탐평리유적(중원경추정지) 발굴조사보고서』.

80) 김정인, 2011, 「충주지역 고구려계 고분과 그 성격 -두정리, 단월동 고분군을 중심으로」, 『중원문화재연구』5 ; 최종택, 2016, 「호서지역 고구려유적의 조사현황과 역사적 성격」, 『백제연구』63.

흔적은 거의 찾지 못하고 있다. 때문에 고구려의 유물·유적을 통해 이 지역으로의 ‘진출’ 시점을 추정하는 것이 아니라, 백제 유물·유적이 나타나는가에 따라서 역으로 고구려의 ‘진출’ 가능성을 판단하는 경우가 일반적이다.

하지만 백제 계통 유적이 발견된다고 해서 특정 시기 해당 지역이 백제에 의해 ‘장악’되었다고 볼 수 있을지는 의문이다.⁸¹⁾ 원주 법천리에서 발견된 동진제 양형청자와 청동초두는 백제 중앙에서 사여한 위세품으로 보고 있는데, 이는 오히려 상당히 독립적인 세력임을 보여준다고 해석되기도 한다.⁸²⁾ 이들이 백제와 밀접한 관계를 맺으며 남한강 수로 이용에 있어 ‘파트너 역할’을 했다고 하지만 직접적인 영역 지배가 관철되었다고까지 보지는 않는다.

이는 고구려의 경우도 마찬가지였을 것으로 생각된다. 396년을 계기로 하여 죽령로를 중심으로 대군의 파견이 가능할 만한 영향력을 확보하였음은 인정하더라도, 영역화가 완료되어 직접 지배가 이루어졌던 것으로는 보이지 않는다. 교통로 상의 일부 거점은 적극적인 확보가 이루어졌을 수 있겠지만, 대부분은 기존 세력이 온존된 상태에서 어느 정도의 영향력만 행사되었을 가능성이 크다. 명확히 그어진 국경선을 기준으로 고구려, 백제, 신라 영역을 나누기보다, 영역 구분이 확실하지 않으면서 동시에 어느 정도의 독립성도 유지되는 중간지대의 존재가 상정된다.

기존에도 ‘중간지대’의 설정이 필요함이 지적된 바 있다.⁸³⁾ ‘국경선’이 아닌 ‘接境’이라는 용어 사용의 필요성 또한 이미 제기되었다.⁸⁴⁾ 한강 이남 지역을 고구려·백제 간 ‘완충지대’ 혹은 ‘접경지대’로 간주한 것이다. <충주 고구려비>가 세워질 당시의 충주 지역 또한 그러한 ‘접경지대’였다고 볼 수 있다. 이 지역은 원래 濊 또는 韓의 땅이었다. 그들은 백제와 고구려, 그리고 뒤에는 신라와의 관계 속에서 시기와 상황에 따라 그 영향력 하에 들어가면서도 완전히 영역화까지는 이르지 않는 상태를 일정 기간 유지하였다고 하겠다.

한편 397년은 396년 백제 왕성 공격에 성공하여 백제 왕의 항복과 복종 맹세를 받은 직후이다. 해당 시점에는 일시적으로 한강을 통한 최단 거리 이동으로 충주에 이르는 것 또한 가능했을 수 있다. 특히 396년 백제 공격은 광개토왕이 직접 움직인 親征으로 나타난다. 광개토왕이 그에 이어서 남한강 상류 지역까지 내려와 해당 지역의 세력들과 접촉하고, 신라매금과의 관계 구축을 시도했을 가능성은 충분하다고 하겠다.

기존에는 충주에서 고려대왕과 신라매금의 만남이 고구려에 의한 충주 지역의 완전한 장악 이후에야 가능했을 것으로 전제해 왔다. 그러나 <충주 고구려비>에 보이는 회합의 장소는 城이 아니라 營이었다. 영락 6년(396)의 백제 왕성 공격 때도 고구려가 한성을 점령하여 영역화한 것은 아니므로, 백제왕이 ‘跪王’하여 복속을 맹세한 곳은 고구려 영역 內가 아니라 광개토왕의 軍營이었다고 보아야 한다.

<충주 고구려비>는 고구려 왕에 의해 건립된 碑임에도 ‘高麗大王’이라고 하여 ‘高麗’라는 自國名을 명시하고 있는 점이 인상적이다. <지안 고구려비>나 <광개토왕릉비>에는 自國의 國號가 전혀 나타나지 않는다. 자국민들을 대상으로 한 碑에서는 굳이 ‘高麗’의 大王이라고 표기할 필요가 없었던 것이다. 그렇다면 <충주 고구려비>는 자국민이 아닌 이들 또한 碑文을 읽을 대상으로 감안하고 있었다고 볼 수 있다. 이는 ‘접경지대’에 세워진 碑로서의 면모를 보여주는 것으로 해석된다. 고구려인들뿐 아니라 신라인, 나아가 이 지역에 원래 거주하고 있는 濊 혹은 韓人들도 碑文의 讀者로 예상되었던 것이다.

81) 전덕재, 2019, 앞의 논문, p.152에서도 이를 지적한 바 있다.

82) 徐榮一, 2003, 앞의 논문.

83) 박성현, 2011, 「5~6세기 고구려 신라의 경계와 그 양상」, 『역사와 현실』82.

84) 박현숙, 2010, 「5~6세기 삼국의 접경에 대한 역사지리적 접근」, 『한국고대사연구』58.

이와 관련하여 전면 본문 5행의 여덟 번째 글자를 ‘[夷]’로 판독한 견해가 주목된다.⁸⁵⁾ 이를 받아들인다면 B-4는 “隨□諸[夷]□奴客人□教諸位 賜上下[衣]服”로 판독하고, “따라서 온 ... 諸夷 ... 奴客人 ... 諸位에 敎하여 上下의 衣服을 내려주었다.”라고 해석할 수 있다. ‘東夷’로 표현된 新羅寐錦과 그 신하들 외에 ‘諸夷’로 불리는 존재들이 그 자리에 함께하며 의복도 같이 하사받았던 것이 된다. 이들은 신라나 백제처럼 ‘奴客’으로 지칭되기도 하였다. ‘東夷’로 지칭된 신라와는 구분하여 ‘諸夷’로 표현된 이들의 실체는 충주 지역을 비롯한 ‘접경지대’에 존재하던 기존 濊 혹은 韓의 유력자들로 추정해 볼 수 있다.

VI. 맺음말

지금까지 살펴본 바와 같이, 비문 전면 상단의 ‘영락 7년’이라는 연도를 인정하더라도 비문 내부의 내용과 다른 자료를 통해 구성한 시대적 ‘정황’ 사이에 양립 불가능한 모순이 발생하는 것은 아니다. 그렇다면 해당 부분의 새로운 판독에 기반한 해석 또한 다른 다양한 해석들과 더불어 존재 가능한 하나의 해석으로 인정해 줄 만하다고 생각한다. 물론 근본적인 판독부터 동의하지 못하는 경우도 많을 것이다. 그러나 단순히 무시하고 기존의 판독에 따라 해석을 진행하기보다는, 부정하는 입장에서의 검토 또한 제대로 이루어져야 <충주 고구려비>의 이해가 더 깊어질 수 있으리라 생각한다. 향후 본격적인 논의가 활발히 진행되기를 기대해 본다.

85) 여호규, 2020, 앞의 논문, p.103

참고문헌

- 고구려연구회 편, 2000, 『중원고구려비 연구』, 학연문화사
- 이도학, 2006, 『고구려 광개토왕릉 비문 연구 - 광개토왕릉비문을 통한 고구려사』, 서경
- 李丙燾, 1976, 『韓國古代史研究』, 博英社
- 고광의, 2020, 「충주 고구려비의 판독문 재검토 -題額과 干支를 중심으로-」, 『한국고대사연구』98.
- 金英夏·韓相俊, 1983, 「中原高句麗碑의 建碑 年代」, 『教育研究誌』25
- 金貞培, 1979, 「中原高句麗碑의 몇 가지 문제점」, 『史學志』13
- 김정배, 1988, 「고구려와 신라의 영역문제」, 『한국사연구』61·62
- 金昌鎬, 1987, 「中原高句麗碑의 再檢討」, 『韓國學報』47
- 金昌鎬, 2000, 「中原高句麗碑의 建立 年代」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究)
- 김현숙, 2002, 「4~6세기 소백산맥 이동지역의 영역향방」, 『한국고대사연구』26
- 南豐鉉, 2000, 「中原高句麗碑의 解讀과 史讀의 性格」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究)
- 박성현, 2011, 「5~6세기 고구려 신라의 경계와 그 양상」, 『역사와 현실』82
- 朴眞爽, 2000, 「中原高句麗碑 建立年代 考証」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究)
- 박찬흥, 2013, 「중원고구려비의 건립 목적과 신라의 위상」, 『한국사학보』51
- 박현숙, 2010, 「5~6세기 삼국의 접경에 대한 역사지리적 접근」, 『한국고대사연구』58
- 邊太燮, 1979, 「中原高句麗碑의 內容과 年代에 대한 검토」, 『史學志』13
- 서지영, 2012, 「5세기 羅·麗 관계변화와 <中原高句麗碑>의 建立」, 『한국고대사연구』68
- 徐永大, 1992, 「中原高句麗碑」, 『譯註 韓國古代金石文 제1권』, 韓國古代社會研究所 編, 駕洛國史蹟開發研究院
- 서영일, 1991, 「5~6세기의 고구려 동남경 고찰」, 『사학지』24
- 徐榮一, 2000, 「中原高句麗碑에 나타난 高句麗 城과 關防體系 -于伐城과 古牟婁城을 중심으로-」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究)
- 徐榮一, 2003, 「漢城 百濟의 南漢江水路 開拓과 經營」, 『文化史學』20號
- 손영종, 1985, 「중원고구려비에 대하여」, 『역사과학』85-2, 과학백과사전출판사
- 孫煥一, 2008, 「石碑의 標題樣式과 書體 考察 I - 통일신라시대와 고려시대를 중심으로 -」, 『新羅史學報』13
- 申澄植, 1979, 「中原高句麗碑에 대한 考察」, 『史學志』13
- 梁起錫, 2002, 「高句麗의 忠州地域 進出과 經營」, 『中原文化論叢』6輯
- 여호규, 2020, 「충주고구려비의 단락구성과 건립시기」, 『한국고대사연구』98
- 李基白, 1979, 「中原高句麗碑의 몇 가지 문제」, 『史學志』13
- 李道學, 1988, 「永樂 6年 廣開土王의 南征과 國原城」, 『孫寶基博士停年紀念韓國史學論叢』, 지식산업사.
- 이도학, 1988, 「고구려의 낙동강유역 진출과 신라·가야 경영」, 『국학연구』2
- 李道學, 2000, 「中原高句麗碑의 建立 目的」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究)
- 李丙燾, 1979, 「中原高句麗碑에 대하여」, 『史學志』13
- 李成制, 2020, 「<忠州高句麗碑>의 건립 목적과 배경」, 『한국고대사연구』98
- 李鎔鉉, 2000, 「中原高句麗碑와 新羅의 碑와의 比較」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究)
- 李鎔鉉, 2020, 「忠州 高句麗碑 ‘ㄹ’·‘共’의 재해석」, 『韓國史學報』제80호

- 李昊榮, 1979, 「中原高句麗碑 題額의 新讀」, 『史學志』13
- 林起煥, 2000, 「中原高句麗碑를 통해 본 高句麗와 新羅의 關係」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究)
- 임기환, 2020, 「충주고구려비의 高麗 大王과 東夷 寐錦」, 『한국고대사연구』98
- 任昌淳, 1979, 「中原高句麗古碑小考」, 『史學志』13
- 전덕재, 2019, 「충주고구려비를 통해 본 5세기 중반 고구려와 신라의 關係」, 『高句麗渤海研究』第65輯
- 張彰恩, 2005, 「中原高句麗碑의 판독과 해석」, 『新羅史學報』5
- 張彰恩, 2006, 「中原高句麗碑의 研究동향과 주요 쟁점」, 『歷史學報』第189輯
- 장창은, 2012, 「4~5세기 고구려의 남방진출과 대신라 關係」, 『고구려발해연구』 44
- 鄭雲龍, 1989, 「5世紀 高句麗 勢力圈의 南限」, 『史叢』35
- 정운용, 1994, 「5~6세기 신라·고구려 關係의 추이 -유적·유물의 해석과 관련하여-」, 『신라의 대외관계사연구 15』, 신라문화선양회
- 최장열, 2004, 「중원고구려비, 선돌에서 한반도 유일의 고구려비로」, 『고대로부터의 통신』, 푸른역사
- 최종택, 2016, 「호서지역 고구려유적의 조사현황과 역사적 성격」, 『백제연구』63
- 耿鐵華, 2000, 「冉牟墓誌와 中原高句麗碑」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究)
- 李殿福, 2000, 「中原郡의 高麗碑를 통해 본 高句麗 國名의 變遷」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究)
- 木村誠, 2000, 「中原高句麗碑의 立碑年에 관해서」, 『高句麗研究』10(中原高句麗碑研究)
- 木下礼仁, 1981, 「中原高句麗碑—その建立年次を中心として—」, 『村上四男博士和歌山大学退官記念朝鮮史論文集』, 開明書店
- 武田幸男, 1978, 「廣開土王碑文辛卯年條の再吟味」, 『古代史論叢 上』
- 武田幸男, 1979, 「高句麗廣開土王紀の對外關係記事」, 『三上次男博士頌壽記念東洋史考古學論叢』
- 武田幸男, 1980, 「序說 五~六世紀東アジア史の一視點」, 『東アジア世界における日本古代史講座 4』, 学生社
- 田中俊明, 1981, 「高句麗の金石文」, 『朝鮮史研究論文集』18
- 시노하라 히로카타(篠原啓方), 2000, 「「中原高句麗碑」의 釋讀과 內容의 意義」, 『史叢』51

【摘要】

2019年，让学界研究学者们意想不到的，《忠州高句丽碑》碑文释文（判读案）的公开发表，令人震惊。碑文前面上段可见“永乐七年岁在丁酉”的纪年。在与本文分离的前面上段部分未刻有横标题，而是刻有纪年（年度），这是很难找到同类事例的独特书写方式。因此，很多学者都会忽视此释读情况而进行论议。这些文字非常清晰，在形态和篆刻方式上与本文并无异。其次，文字判读困难，剩下的部分可以确定。在考虑到广开土王年号“永乐”的存在和“丁酉”干支时，推定为永乐七年的可能性很高。如是，碑文前面的5月与12月便是397年的内容。

虽然新的释读要优先于对以往情况的掌握，但由于无法确定“乐”字的准确性，就有必要考察该年度与碑文内容是否相符合的问题。从与有关《广开土王陵碑》新罗的“属民”认识有所差异的这一点来看，针对“愿与新罗寐锦‘如兄如弟’”的碑文的这一认识，是认为在两者之间具有相当的时差和关系变化的意见。但是，还可以得出的解释是，愿“如兄如弟”的主体是现高丽大王的祖先王，高丽大王继承此愿，更进一步地在碑文的下一个部分中构建了服属仪礼和展示东夷认识的关系。

碑文中可见太子登场，但问题是，在文献中未见有关当时高句丽册立太子的记录。有关文献中未见太子的问题，将碑前面内容的时间点推定为长寿王代的以往学界的有力研究成果也适用这一点，结果就是还要追加考虑未直接见于史料的情况。虽然在397年未见有关太子的记录，但在寻找类似人物时，392年被作为质子送往高句丽的新罗实圣引起了学者的注意。401年，新罗实圣归国后，在高句丽的支援下登上新罗王位。站在高句丽的立场上，将新罗实圣称为“太子”的情况也是有可能的。5月，与高句丽人一同移动，代替新罗寐锦跪营的情况，会让人联想起身为质子的实圣。新罗寐锦直至12月才到达忠州地域的营，这与《广开土王陵碑》永乐十年条中所见新罗寐锦的身来论事相符。

以往学界认为，新罗土内高句丽人成为幢主的情况，是在永樂十年新罗救援战以后才变为可能。但据永乐六年条可知，《广开土王陵碑》采用的是将多年间发生的事情在特定的年度集中记录下来。即，综括性地记录了永乐九年、十年条，以及辛卯年条以来的新罗关系。广开土王已经在396年确保了将在400年大规模派兵时可能使用的竹岭路，使得进军忠州地域变为可能。特别是在亲征汉江下流的百济王城成功以后，广开土王进军忠州便不再是问题。

以往，学界将高句丽的忠州地域领域化视为前提，《忠州高句丽碑》中召唤新罗寐锦的场所是“营”。学界认为，当时包括忠州在内的几个地域，是在高句丽、百济、新罗之间起到缓冲作用的“接境地带”，已有的藏，或是韩势力仍是完好无损的状态。在碑文中还释读出“诸夷”一词，应该指的是参与至高句丽与新罗间的接触中的“接境地带”的已存势力。

综上所述，在判断碑文年代时，397年这一时间点可以充分地成为一个备选答案。今后，在包括这一可能性的前提下，希望有关学者们能更加活跃地进行有关《忠州高句丽碑》的讨论。

接境としての忠州地域と新判読案に基づいた 忠州高句麗碑の内容検討

李在暉

<要約文>

2019年、「忠州高句麗碑」について、これまでに予想もしなかったの判読案が発表され、多くの研究者を驚かせた。碑文の表面上段から年代と読み取れる「永樂七年歳在丁酉」という文字を判読したのである。標題ではない年代が本文と離れて、表面上段部に横向きに書かれているのだが、これは他には類例を見ない、独特で異常な書写方法である。この判読案については、いまだにこれを無視して論議を続ける人が多い。しかし、この箇所文字があることは明確であり、形態や刻書方法からして、本文と大きな違いを感じられない。2番目の文字の場合、判読が難しいが、残りの部分は間違いないと思われる。広開土王の年号「永樂」の存在と「丁酉」という干支から考えて、永樂7年に推定することは充分可能である。すると碑文の表面の5月と12月は397年の内容になる。

新しい判読案は既存の状況を把握することより優先されるべきだが、「樂」の字自体が確定的であるとは言えないため、当該年号と碑文の内容が結びつくかどうかについて調べる必要性は依然として残る。新羅寐錦と「如兄如弟」を望むという碑文の認識が「広開土王陵碑」の新羅に対する「属民」意識と差異が見られるという点で、その間にかんりの時期差と関係の変化を想定する見解がある。しかし、「如兄如弟」を願った主体は現高麗大王の祖先の王であり、高麗大王はこれを引き継いだ上でさらに一歩進み、碑文の次の部分に見えるような服従儀礼と東夷意識の関係を構築したという解釈も可能である。

碑文には太子が登場するが、当時高句麗の太子の冊立が文献では確認できないため、問題になりそうだ。ただし、文献に見えない太子の問題は、碑文表面の時期を長壽王と見なした既存の有力な説にも同じく適用されるため、結局、史料には直接的に記載されない状況を新たに想定しなければならない。397年において太子という記録はなかったが、類似する人物を調べてみると、392年に人質として高句麗に送られた新羅の實聖が注目される。彼は401年に帰国後、高句麗の支援のもとで新羅の王位につく。そこで、高句麗側からは「太子」と呼ばれたのではないかと類推される。5月に高句麗人と共に移動し、新羅寐錦の代わりに**跪營**する姿は人質としての實聖を連想させる。新羅寐錦は12月になってようやく忠州地域の**營に到着するが**、これはまさに「広開土王陵碑」永樂10年条にみえる新羅寐錦の身来論事に該当する。

既存の研究においては、新羅境内に高句麗人の幢主が存在することについて、永樂10年の新羅救援戦以降が可能であると思われていた。しかし、永樂6年条で確認できるように、「広開土王陵碑」は何年間にわたって起きた事件を特定の年代にまとめて記録する方法で書かれている。永樂9年及び10年条、それに辛卯年条以来の新羅関係事件が一括して記録されたと思われる。広開土王は396年にはすでに400年の大規模派兵を可能とする竹嶺路を確保していたので、忠州地域への進出も可能であった。特に親征により、漢江下流の百濟王城攻略に成功した直後であり、広開土王の忠州への移動は問題がなかったのであろう。

既存の研究において、高句麗の忠州地域の領域化を前提として見てきたが、「忠州高句麗碑」をみると新羅寐錦を召喚した場所は「營」となっている。当時、忠州を含む地域は、高句麗、百濟、

新羅の間で緩衝作用をする「接境地帯」として、既存の滅、または韓の勢力の温存状態が存在したと思われる。碑文には「諸夷」という文字も見えたが、この人たちは高句麗と新羅の接触にかかわった「接境地帯」の既存有力者の可能性がある。

このように、碑文の年代判断において、397年は充分に一つの選択肢となりうる。今後、この選択肢を含め、「忠州高句麗碑」についての論議がさらに活発化することを期待する。

「접경으로서의 충주 지역과 신판독안에 기반한 충주고구려비 내용 검토」에 대한 토론문

강진원(서원대학교)

저자의 글은 최근 새롭게 판독된 안에 기초하여, 충주 고구려비가 전하는 실상을 ‘접경’이라는 문제와 연관하여 다가가고 있다. 즉 충주 고구려비가 광개토왕 7년(397)의 일을 반영하였으며, 고구려와 신라가 만난 충주 일대는 확고한 누군가의 영역이 아니었다는 논의이다.

학계에 도발적인 문제 제기로 주의를 환기하기 마다하지 않는 저자의 글인 만큼, 되짚을 부분도 적지 않다. 안타까운 점은 토론자 본인이 저자의 주장에 상당 부분 동의하고 있다는 사실이다. 다시 말해 딱히 큰 이견을 표할 바가 많지 않다. 저자가 ‘그럴 수 있지 않을까’라고 창문을 열었듯이, 토론자 또한 ‘그럴 수 있겠다’라고 열린 창문을 바라보는 형국이다. 다만 책무를 다하기 위하여 몇 가지 궁금증을 적어 둔다.

1. 신판독안에 근거하여 논의를 전개하고 있다는 점을 언급하였으나, 논란이 된다고나 중요하다고 여겨지는 글자에 대해서는 사진이나 탁본과 같은 사례가 함께 제시되면 어떨까 싶다.
2. 비문의 태자를 실성에 비정하였는데(9~10쪽), 그렇다면 당시 고구려-신라의 관계를 어떻게 바라보아야 할까. 이 점에 대해서는 구체적인 서술이 뒤따른다면 더욱 탄탄한 글이 되지 않을까 한다. 이를테면 4세기 중엽 이후 양국의 관계를 생각해 본다면 하는 방안이 있을 것이다.
3. 현재 지안 고구려비의 건립 시기를 광개토왕 때로 여기는 견해가 다수이다. 이러한 상황에서 저자의 논의를 수긍한다면, 광개토왕은 지안 고구려비와 충주 고구려비를 세웠다고 할 수도 있다. 그런데 두 석비는 형태가 다르다. 따라서 그 원인에 대한 언급이 각주를 통해 서라도 이루어진다면 어떨까 한다.

2019년 판독회 당시 토론자 역시 짧은 시간이나마 참석하였던 경험이 있다. 평소 그다지 관심을 둔 주제가 아니라 이른바 제약에 대한 별다른 생각을 정리하지 못하고 토론에 임한 점은 아쉬움이 남는다. 추후 조금 더 다듬어진 모습으로 충주 고구려비에 대해 되새겨 볼 날이 오기를 고대한다.

발표3

국립중앙박물관 소장

투루판 출토

唐文書가 부착된

시신 깔개(尸席)의 복원

국립중앙박물관 소장 투루판 출토 唐文書가 부착된 시신 깔개(尸席)의 복원

권영우(국립중앙박물관)

목 차

I. 머리말

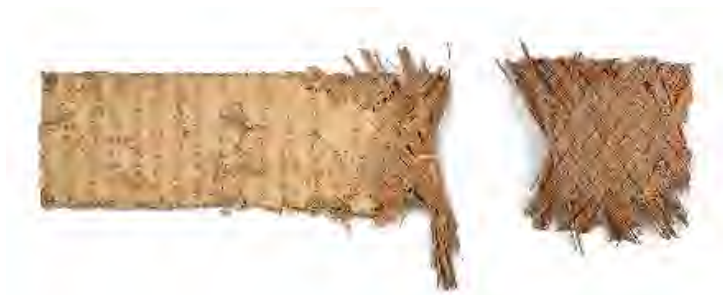
II. 시신 깔개 문서의 분산 경위
와 연구사

III. 문서의 분리조사와 원문서의
복원

IV. 시신 깔개의 복원

V. 맺음말

I. 머리말



도1. 국립중앙박물관 소장 시신 깔개와 배접문서 (a면, 문서 분리 전), 투루판 아스타나 230호묘 출토, 당 703년 매장, 좌 16.0×48.5cm, 우 20.0×23.5cm

원 요시카와 고이치로[吉川小一郎, 1885~1978]가 투루판 아스타나[阿斯塔那] 230호묘에서 수습한 것으로 알려져 있다.

주목할 것은 깔개 앞뒷면에 배접된 당 서주도독부(西州都督府)에서 작성한 두 종류의 관문서편이다. 그중 ‘당의봉3년탁지주초·의봉4년금부지부(唐儀鳳三年度支奏抄·同四年金部旨符)’(이

국립중앙박물관에는 투루판[吐魯番] 출토 당(唐) 문서가 부착된 시신 깔개[尸席, 본관3978]가 소장되어 있다(도1).¹⁾ 시신 깔개는 관 대신 시신[미이라]을 눕히기 위한 장례용구[葬具]로, 국씨고창국(麴氏高昌國)시기부터 당 서주(西州)시기에 걸쳐 투루판 지역 분묘에서 보편적으로 사용되었다.²⁾ 이 유물은 1912년 3월 일본 오타니탐험대[大谷探險隊] 대

1) 이 유물은 ‘竹製網代’로 등록되어 있다. 이는 1916년 朝鮮總督府博物館 입수 시의 유물명이다. 여기서 망대란 ‘얇고 가늘게 자른 대나무 등 식물줄기로 엇갈리게 짠 물건’을 의미하는 ‘網代(あじろ)’에서 비롯된 것으로 생각된다.

2) 일본학계에서는 대체로 이 유물을 ‘방동사니과 다년초 식물’을 뜻하는 포르투갈어 ‘암페로(Ampero)’에서 비롯한 ‘암페라(アンペラ)’로 칭한다. 아마도 발굴 당사자인 요시카와가 그의 탐험일기 『지나기행(支那紀行)』에서 이것을 암페라로 부르면서 굳어진 용례라고 생각된다. 중국학계에서는 ‘갈대로 만든 앉자리’라는 뜻의 ‘위석(苇席)’이라는 명칭을 주로 사용한다. 본고에서는 재료와 제작 방식보다 그 특수한 용도에 중점을 두어 ‘시신을 눕히는 깔개’라는 의미의 ‘시신 깔개(尸席)’로 부르코자 한다.

하 ‘탁지주초’) 문서의 경우, 같은 문서에 속하는 문서편이 일본 오타니문서[大谷文書]와 중국 투루판출토문서[吐魯番出土文書]에도 존재한다. 삼국의 문서는 원래 하나의 문서로 아스타나 230호묘 내 시신갈개에 붙어 있었으나 오타니 탐험대가 유물을 수습하는 과정에서 탈락되어 미처 수습하지 못한 일부가 현장에 남겨졌고(新疆博物館 소장), 일본으로 가져간 문서편과 시신갈개는 탐험대의 귀국 직후 오타니 고즈이[大谷光瑞, 1876~1948]의 망명과 니라쿠소[二樂莊]의 매각으로 일본(龍谷大學 소장)과 한국(國立中央博物館 소장)에 분산되어 버린 것이다.

일찍이 중국과 일본에 분장된 문서편들은 자국 연구자들에 의해 학계에 소개되었다. 반세기 전에 걸쳐 양자의 관련성은 물론 안권(案卷) 전반의 접합복원과 내용에 관한 상당한 연구 성과가 축적되었다. 그 결과 ‘탁지주초’는 당 상서성이 전국에 하달한 679년(儀鳳4)도 국가예산 편성 및 집행 지침으로 당 전기(前期) 국가재정사의 사료 부족을 메워주는 귀중한 자료로서 자리매김하였다. 반면 국립중앙박물관 소장 시신갈개와 문서는 1995년에야 처음으로 소개되었고,³⁾ 한국에도 문서가 부착된 시신갈개가 소장되어 있음을 인지하게 되었다. 특히 국립중앙박물관 소장 문서편은 중국 측 문서편과 접촉될 가능성이 높은 것으로 지적되었다.

그러나 국립중앙박물관 소장 문서는 여러 장이 겹쳐져 시신갈개를 감싸고 있어 육안으로 확인할 가능한 내용이 일부에 불과했다. 안쪽에 추가로 존재하는 문서편과 접힌 부분의 글자는 확인할 수 없었고, 노출된 부분이 문서의 뒷면이어서 판독에 제약이 있었다. 그 상태는 유물의 원형을 유지하고 있다는 점에서 의의가 있겠으나, 문서의 중요성과 연구의 진전을 고려하면 문서의 분리조사가 필요한 상황이었다. 문서 분리 과정에서 그 구조를 이해하고 분리 역순으로 추론하면, 안권 상의 순서와 시신갈개의 원형을 복원할 수 있다. 무엇보다 중국과 일본 측은 탈락된 문서편 만이 전하며 양자는 같은 안권임에도 불구하고 접촉되지 않는 상태였다.

따라서 국립중앙박물관은 이 시신갈개가 삼국에 분장된 문서편의 관계를 밝히는 데 핵심적인 역할을 할 수 있을 것이라는 기대 하에 2020년 문서의 분리 조사를 실시하였다.⁴⁾ 본 발표에서는 이를 바탕으로 안권과 시신갈개의 복원성과를 소개하고자 한다. 먼저 시신갈개와 배접 문서의 분산 경위와 본래 맥락을 되돌리기 위한 연구사를 정리한다. 다음으로 분리 조사에서 수습한 ‘탁지주초’ 등 2종 4장의 문서가 같은 묘 출토 중국 측 문서와 접촉됨을 제시한다. 더불어 신발견 문서의 내용 분석을 통해 그 성격과 작성 연대를 규명할 것이다. 다음 단계로 국립중앙박물관 소장 시신갈개의 제작 방식을 복원하는 한편, 일본 측 문서가 배접된 또 다른 시신갈개가 존재했음을 주장하고 기존 복원안에 대한 수정을 제언하고자 한다.

II. 시신갈개 문서의 분산 경위와 연구사

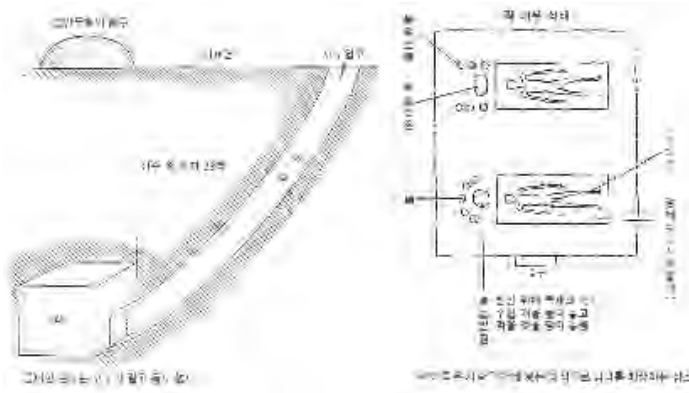
1. 분산 경위

아스타나 고묘군 동남쪽 구역에는 국씨고창국 말기부터 성당(盛唐)대에 걸쳐 최고 호족이었던 장씨 묘역[張瑩]이 위치하며, 이곳에 장예신(張禮臣, 655~702) 부부의 합장묘인 230호묘가 있다. 출토 묘지(墓誌)에 따르면, 장예신은 702년(長安2)에 사망하여 이듬해인 703년에 매장되었다. 출토 기년문서의 상한이 ‘탁지주초’의 679년이기 때문에 시신갈개는 먼저 사망한 장예신의 장의용구일 것으로 생각된다.

공식적으로 이 무덤에 처음으로 진입한 사람은 오타니탐험대 대원 요시카와 고이치로로 알

3) 민병훈·안병찬, 「國立中央博物館 투루판出土文書 管見」, 『美術資料』56(1995), pp. 156-180.

4) 문서의 분리와 보존처리 및 보존과학적 조사는 국립중앙박물관 보존과학부에서 진행하였다.



도2. 「지나기행」 수록 ‘분묘 및 관중의 상태’ 드로잉(한글 번역 필자)

려져 있다. 그의 탐험일기 「지나기행(支那紀行)」에 근거하면, 그는 앞서 파견된 다치바나 즈이초[橘瑞超, 1890~1968]와 함께 1912년 3월 하순에 230호묘를 비롯한 아스타나[三堡]의 장영 일대를 발굴한 것으로 생각된다.⁵⁾ 고분 발굴 마지막 날인 3월 31일 일지 뒤에는 ‘분묘(墳墓) 및 관중(槨中)의 상태’라는 제목 하에 그동안 조사한 무덤 구조와 상태를 삽도와 함께 개설하고 있다(도2). 여기서 ‘재활용 문서가 붙은 시신깎개’를 특기하고 있다.

(상략)…미이라의 대부분은 중국 특유의 암페라[시신깎개] 위에 재사용 종이를 붙이고 그 위에 놓인다. 목관은 귀족이나 부호에 한정되었던 것으로 보인다. 암페라 위에 붙인 재사용 종이는 동시대 여러 사건이 기록된 것이 다수로, 이 폐지의 기사로부터 여러 가지 뜻밖의 수확이 있었다.…(중략)…참고로 이것을 가져왔다.…(하략)⁶⁾

그는 만년의 회고담에서 아스타나 고묘를 발굴하는 과정에서 시신깎개에 붙어 있던 문서를 비롯한 부장품을 닥치는 대로 거두어 왔다고 증언했다.⁷⁾ 이때 230호묘 내에 문서를 남겨둔 채 일부만을 수습하여 가져간 것이다(1차 분산).

한편 오타니가 문주(門主)로 있던 니시혼간사[西本願寺]파 교단은 러일전쟁의 원조와 탐험비용의 막대한 지출로 재정이 악화되었고 급기야 1914년 4월 오타니는 교단 승려의 배임횡령으로 인한 수감 사건에 책임을 지고 문주직에서 사임했다. 당시 탐험 중이었던 요시카와는 귀국을 지시받았고 탐험은 돌연 종료되었다. 시신깎개를 포함한 수집품들은 1914년 1월 우루무치[烏魯木齊]를 떠나 같은 해 7월 10일 고베[神戸]의 오타니 별장인 나라쿠소에 반입되었다.

오타니 고즈이는 1914년 11월 27일에 중국 뤄순[旅順]으로 망명길에 오른다. 이때 서역 유물의 일부를 선별하여 가져갔는데, 그중 니시혼간사로 반송된 수집품이 1948년 오타니의 사망 후 벳푸[別府]의 별장에서 유품으로 발견되었다(2차 분산). 수집품은 곧바로 류코쿠대학으로 이관되었으며, 그중 시신깎개 배접문서 일부가 포함되어 있었다.

문서가 부착된 시신깎개는 나라쿠소에 남아 있었다. 오타니의 사임 직후 니시혼간사는 나라쿠소의 유지 관리비 지불을 중단했고,⁸⁾ 오타니는 1916년 1월 정상(政商) 구하라 후사노스케[久原房之助, 1869~1965]에게 나라쿠소와 그곳의 서역 유물 일체를 매각했다.⁹⁾ 같은 해 4월

5) 탐험일지에서 아스타나 230묘의 발굴을 암시하는 기술은 다음과 같다. “三堡에서 문자가 적힌 종이편을 소량 가지고 나왔다.”(1912.3.26.), “삼보에서 거울 1면, 붓 1필, 토기 수 개, 당대의 辭令書 수장, 絹地唐畫의 단편 등이 나왔다. 기분이 자못 고양되었다.”(1912.3.27.), “15명을 보내 삼보를 발굴하고 약간의 물건을 획득했다.”(1912.3.28.) 吉川小一郎, 「支那紀行」, 『新西域記』下卷, 上原芳太郎編(東京:有光社, 1937), p. 606. 여기서 ‘당대 辭令書’는 501호묘 출토 장예신의 부 張懷寂의 임명장이 확실하며, ‘絹地唐畫 단편’은 230호묘 출토 <仕女舞樂圖>의 단편으로 추정된다.

6) 吉川小一郎, 「支那紀行」, 『新西域記』下卷, 上原芳太郎編(東京:有光社, 1937), pp. 606-607.

7) 粕淵宏昭, 「續・大谷探検隊秘話隊員 吉川小一郎さんに聞く」, 『月刊シルクロード』第6巻 第5號(1980); 민병훈·안병찬, 앞의 논문(1995), p. 163 각주10에서 재인용.

8) 臺信祐爾, 『大谷光瑞と西域美術』(東京:至文堂, 2002), p. 95.

9) 芦屋市立美術博物館編, 『(モダニズム再考) 二樂莊と大谷探検隊 1』(芦屋: 芦屋市立美術博物館,

말 구하라는 동향(同鄉) 출신인 초대 조선총독 데라우치 마사타케[寺内正毅, 1852~1919]에게 이 유물 전체를 기증하게 된다(3차 분산).¹⁰⁾ 시신갈개는 조선총독부박물관에 입수된 후 일제강점기 동안 서역 유물의 수장 겸 전시 장소인 경복궁(景福宮) 수정전(修政殿)에서 일반에 공개되었다. 해방 이후에는 수장고에 격납되어 있었으나 2020년 배접문서의 분리 조사를 계기로 올해 6월 14일부터 국립중앙박물관 중앙아시아실 ‘투루판 지역 한문자료’ 전시에서 특별 공개 중이다.

2. 연구사

이상으로 시신갈개와 배접문서의 분산 과정을 소개했다. 지금부터는 분산 문서를 관련짓기 위한 연구사를 간략히 서술하고자 한다. 그 시작은 앞서 언급한 1948년에 오타니의 유품 중 탐험대의 서역 수집품이 발견된 후 서역문화연구회(西域文化研究會)가 결성된 1953년으로 거슬러 올라간다. 1959년 오가사와라 센슈[小笠原宣秀] 선생은 이 탐험대의 아스타나-카라호자 무덤 수습 문서를 ‘미이라 부대문서(ミイラ附帶文書)’로 통칭하고, 하위 범주 중 ‘암페라(アンペラ) 흔적이 있는 문서’ 62점을 당 의봉3(678)·4년(679)의 관문서 단편으로 소개했다.¹¹⁾ 나이트 겐키치[内藤乾吉] 선생도 이것들을 의봉3년 10월경 황태자의 령(令)으로, 상서성(尙書省)에서 하달한 ‘의봉4년 모든 주의 용조와 절조 잡채 등을 처분하는 사조[儀鳳四年諸州庸調及折租雜絁色數等處分事條]’를 서주도독부에서 접수하여 처리한 문서 단편으로 정의했다.¹²⁾

한편 1972년 신장박물관은 아스타나 230호묘 발굴 도중 내부에서 오타니 탐험대가 미수습한 시신갈개 배접문서편 8점을 발견했다.¹³⁾ 『투루판출토문서』의 출간 전인 1983년에 쉬푸첸(許福謙) 선생은 위의 문서를 해제하여 소개했다. 하지만 이때까지는 같은 안권의 일부가 오타니문서 중에 존재함을 알지 못하여 작성 연대를 670년~679년으로 추정했고, 문서의 성격을 당대 법제 문서 중 탁지식(度支式)의 잔권으로 추측했다.¹⁴⁾ 이를 이어받아 이케다 온(池田溫) 선생은 이 문서가 금부(金部)의 소관 사항도 포함하기 때문에 탁지식으로 단정하기보다는 재정 관련 조목을 수록한 영지(令旨)로 볼 것을 주장했다. 나아가 이 230호묘 출토문서와 ‘암페라 흔적이 있는 문서’가 일련의 안권일 가능성을 제기했다.¹⁵⁾

위와 같은 성과를 바탕으로 오쓰 도루[大津透]는 중·일 소장 문서에 대한 본격적인 복원 연

1999), p. 175.

10) 위의 책, p. 170.

11) 小笠原宣秀, 「龍谷大學所藏代谷探檢隊將來吐魯番出土古文書素描」, 『西域文化研究: 卷2 敦煌吐魯番社會經濟資料』, 西域文化研究會 編(京都: 法藏館, 1959), pp. 387-419.

‘암페라 흔적이 있는 문서’는 이후 24점이 추가되어 현재 총 86점에 달한다. 같은 번호로 복수의 단편이 붙어 있는 것을 고려하면, 실제로는 92점에 이른다. 小田義久, 「大谷文書概觀—その來源を中心に—」, 『大谷文書集成』2(京都: 法藏館, 1990), p. 2.

86점의 문서 번호는 다음과 같다. 大谷1262, 1263, 1264, 1265, 1266, 1267, 1268~1302(1288호는 관계 없음), 1424~1444, 1473, 1480, 1488, 1698, 2397~2400, 2597, 2602, 2603, 3165, 3884, 4018~4021, 4330, 4352~4358

12) 内藤乾吉, 「西域發見唐代官文書の研究」, 『西域文化研究: 卷3 敦煌吐魯番社會經濟資料』, 西域文化研究會 編(京都: 法藏館, 1960), pp. 87-88.

13) 아스타나 230호묘의 발굴 조사 보고는 다음을 참조. 新疆維吾爾自治區博物館, 西北大學歷史系考古專業, 「1973年吐魯番阿斯塔那古墓群發掘簡報」, 『文物』1975-7, pp. 8-26; 新疆文物考古研究所, 「阿斯塔那古墓群第十次發掘簡報」, 『新疆文物』2000-3-4, pp. 84-167.
8점의 문서 번호는 다음과 같다. 72TAM230:46/1, 72TAM230:46/2, 72TAM230:84/1~6

14) 許福謙, 「吐魯番出土의兩分唐代法制文書略釋」, 『敦煌吐魯番文獻研究論集』第2輯, 北京大學中國中古史研究中心 編(北京: 中華書局, 1983), pp. 543-580.

15) 池田溫, 「最近における唐代法制資料の發見紹介」, 『中國律令制の展開とその國家・社會との關係—周邊諸地域の場合を含めて—』, 唐代史研究會 編(東京: 刀水書房, 1984), pp. 62-74.

구에 착수하였다. 그는 본 문서가 『당육전(唐六典)』 등에 나오는 ‘지탁국용(支度國用)’의 보고 및 시행부임을 확인하고 문서의 제목을 ‘의봉3년탁지주초·의봉4년금부지부’로 가칭했다.¹⁶⁾ 당 의봉3년(678)에 상서성 탁지에서 전국 부·주(府州)의 내년 용·조(庸調) 등 수입 지출에 관한 국가예산을 황태자에게 주초(奏抄)를 올려 재가를 받은 뒤, 의봉4년(679)에 금부는 이에 대한 시행 지시[旨符]를 전국에 하달했고, 이를 접수한 서주도독부에서 속하 5개 현에 반포하기 위해 작성한 사본 가운데 1부가 바로 이 문서인 것이다. 또한 그는 에노모토 준이치[榎本淳一] 선생과 함께 일본 측 문서편들을 접합한 뒤 안권 전반과 시신갈개의 복원 결과를 발표했다. 복원안에 따르면 안권을 28×103cm 크기의 여러 장으로 재단해 2장씩 겹쳐 1열을 만든 뒤, 4열 이상을 위아래로 이어 갈개 표면에 붙였던 것으로 보았다.¹⁷⁾

그런데 인접한 아스타나 227호묘 출토품 중에서도 같은 문서의 일부가 존재함이 천귀찬[陳國燦] 선생에 의해 확인되었다.¹⁸⁾ 이는 오타니 탐험대가 230호묘의 수습 문서를 지닌 채 227호묘로 진입하면서 혼입된 결과로 추측된다. 이를 이어받아 오쓰 도루 선생은 조목을 추가하고 보완하였다.¹⁹⁾ 이로써 중·일 소장 시신갈개 배접문서에 대한 연구는 일단락되는 듯했다.

1995년에 국립중앙박물관 소장 시신갈개와 배접문서가 소개되었다. 민병훈(閔丙勳) 선생은 종이 뒷면에 비친 문서를 해석한 뒤 이 문서가 바로 중·일 측 문서와 함께 ‘탁지주초’ 안권의 일부에 해당함을 지적했다. 나아가 걸장 문서 속에 1장의 문서가 추가로 존재하고, 내용으로 볼 때 이 문서편은 중국 측 잔편과 밀접한 관련이 있을 것으로 추정했다. 또한 안병찬(安秉燦) 선생은 지질(紙質)과 문서 뒷면에 붙은 적견(赤絹) 조각을 분석했다.²⁰⁾ 오쓰 도루 선생은 이 논문을 확인하고 여태까지의 판독문을 교감하는 한편,²¹⁾ 삼국의 문서편을 종합하여 안권 전체의 복원안을 작성했다.²²⁾ 그리고 내용과 형태 상 한국 측 문서편 2점은 중국 측 문서편 2점과 접속될 가능성이 높을 것으로 주장했다.

Ⅲ. 문서의 분리조사와 원문서의 복원

문서의 분리 전 시신갈개의 a면에는 전면에 ‘탁지주초’ 문서가 덮여 있었고, 반대쪽 b면에는 크기가 다른 종이 수장이 복잡하게 붙어 있었다. 부착 구조의 파악을 위해 상대적으로 훼손 정도가 덜한 모습을 보여주는 일제강점기 유리건판사진(도3)과, 문서의 확인을 위해 적외선 사진을 보조 자료로 이용했다.

16) 大津透, 「唐律令國家の豫算について—儀鳳三年度支奏抄·四年金部旨符試釋」, 『史學雜誌』95-12(1986), pp. 1831-1880.

17) 大津透·榎本淳一, 「大谷探檢隊吐魯番將來アンペラ文書群の復原: 儀鳳三年度支奏抄·四年金部旨符」, 『東洋史苑』28(1987), pp. 47-78.

18) 陳國燦, 「略論日本大谷文書與吐魯番新出墓葬文書之關聯」, 『敦煌吐魯番學研究論文集』, 中國敦煌吐魯番學會 編(上海: 漢語大詞典出版社, 1990), pp. 268-287.

5점의 문서 번호는 다음과 같다. 72TAM227:30/1~5

19) 大津透, 「唐儀鳳三年度支奏抄·四年金部旨符補考: 唐朝の軍事と財政」, 『東洋史研究』49-2(1990), pp. 225-248; 大津透, 「大谷·吐魯番文書復原二題」, 『東アジア古文書の史的研究』, 唐代史研究會 編(東京: 刀水書房, 1990), pp. 90-104.

20) 민병훈·안병찬, 앞의 논문(1995), pp. 156-180.

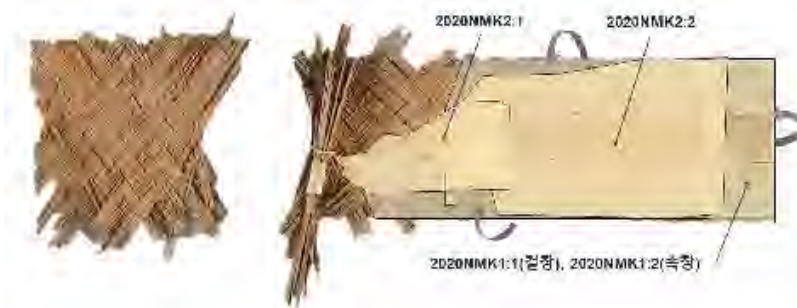
21) 大津透, 「韓國國立中央博物館所藏アンペラ文書についての覚え書き」, 『東京大學日本史學研究室紀要』4(2000), pp. 239-244.

22) 大津透, 「唐律令國家の豫算について—儀鳳三年度支奏抄·四年金部旨符試釋」, 『日唐律令制の財政構造』(東京: 岩波書店, 2006), pp. 27-112.



도3. 일제강점기 촬영 시신깡개의 유리건판사진 (좌: 건판030231, 우: 건판030231)

먼저 a면의 ‘탁지주초’는 뒷면[b면]까지 이어져 상·하·우측 가장자리를 따라 접혀 있는 상태였다(도4). b면에 접힌 ‘탁지주초’ 일부는 펼쳐져 문서면이 노출되었는데, 예상했듯이 2장이 포개져 있음이 확인되었다. b면 ‘탁지주초’의 접힌 면 위에는 2장으로 추정되는 문서편이 목서가 가로로 뉘어진, 즉 90°로 틀어진 상태로 그 일부가 서로 겹쳐 붙어 있었다.

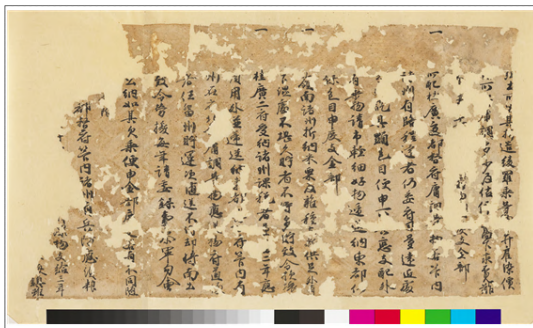


도4. 문서 분리 전 국립중앙박물관 소장 시신깡개 구조 (b면)

분리 결과 시신깡개 배접문서는 2종 4장으로 이루어져 있었다. ‘탁지주초’는 겹장 외에 그동안 존재만 확인되었던 속장이 새롭게 드러났다. 그리고 b면의 문서편 2장은 ‘탁지주초’와는 별개의 새로운 문서였다. 이들 문서

종류 및 배접 순서를 고려하여 붙인 문서번호는 다음과 같다. ‘탁지주초’ 2장은 2020NMK1:1(겹장), 2020NMK1:2(속장)이고, 신발견문서 2장은 2020NMK2:1(겹장), 2020NMK2:2(속장)이다.²³⁾

1. 2020NMK1:1, 2020NMK1:2 - 당의봉3년탁지주초·의봉4년금부지부(唐儀鳳三年度支奏抄·儀鳳四年金部旨符)



도5. 국립중앙박물관 소장 ‘의봉3년탁지주초·의봉4년금부지부’(좌: 2020NMK1:1, 우: 2020NMK1:2)

23) 문서의 편호는 ‘문서정리년도+소장처+문서종류+조각번호’의 기준을 따랐다.

‘탁지주초’ 2점(도5)은 포개져 있었기 때문에 크기와 형태가 거의 동일하다. 겹장인 2020NMK1:1의 크기는 28.5×52.4cm이고, 속장인 2020NMK1:2는 28.5×53cm이다. 문서의 우측 끝은 매끄럽게 처리되어 인위적인 절단면으로 보인다. 좌측 끝 모양은 문서가 겹쳐 있는 상태에서 이어졌을 종이가 외력으로 뜯겨나간 흔적으로 판단된다. 현재 종이의 상하단은 원 문서의 끝부분이다. 깔개의 직조흔이 두 장의 문서면에 남아있으나 돛자리와 직접 맞닿아 있던 속장에 보다 선명하다. 겹장 문서 배면의 우측 상단, 즉 시신깔개 a면 우측 상단 모서리에는 기(綺)라고 하는 자색 직물편이 붙어 있다.²⁴⁾

문서편의 행수는 각각 20, 18행이고 글자 수는 행을 완전히 채워 쓴 경우 15~17자이다. 해서체(楷書體)에 가까운 글씨는 종이의 윗단에서 약 4.5cm를 띄우고 써 내려갔다. 조목(條目)이 시작되는 행 위에는 간격을 두고 “一”자를 써서 구분했다. 두 장 모두 온전한 조목은 3개이고 그 외 양끝의 잔존 행은 좌우에 이어졌을 조문의 일부이다. 두 문서편에는 종이를 이어 붙인 이음매[繼目]가 하나씩 있다.²⁵⁾ 문서 뒷면의 연접선에는 “儉”자의 봉배서(縫背署)가 있는데, 이는 서주도독부 호조판창조(戶曹判倉曹) 참군사(參軍事)인 원회검(元懷儉)이 문서의 접합을 확인한 뒤 서명한 것이다.

예상했던 대로 ‘탁지주초’ 문서편 2장은 중국 측 같은 묘 출토문서 2장(72TAM230:46/2, 72TAM230:46/1)과 완벽히 접속됨을 확인할 수 있었다. 중국 측 두 문서편은 가로 약 38~40cm, 세로 약 28.5cm로²⁶⁾ 크기가 같을 뿐 아니라 종이의 형태까지도 비슷하다. 이 역시 2장이 겹쳐진 채로 깔개에 붙어 있던 것이 확실하다. 직조흔이 상대적으로 얇은 72TAM230:46/2는 겹장으로, 짙은 72TAM230:46/1은 속장에 해당한다. 국립중앙박물관 소장 문서 2장과 중국 측 투루판 출토문서 2장은 아래와 같이 접속된다(도6).



도6. 한·중 소장 ‘탁지주초’의 문서 단편의 접속 (빨간 점선: 재단선, 파란 점선: 연접부)

④72TAM230:46/1(속장)←③2020NMK1:2(속장)←②72TAM230:46/2(겹장)←①2020NMK1:1(겹장)

그 결과 총 10개의 조목을 복원할 수 있었고, 불완전했던 조목의 경우 투루판 출토문서와 접합하여 기존 해석을 보완할 수 있었다. 여기에는 기존의 조문들과 마찬가지로 여타 사료에서 확인할 수 없는 내용이 적지 않다.

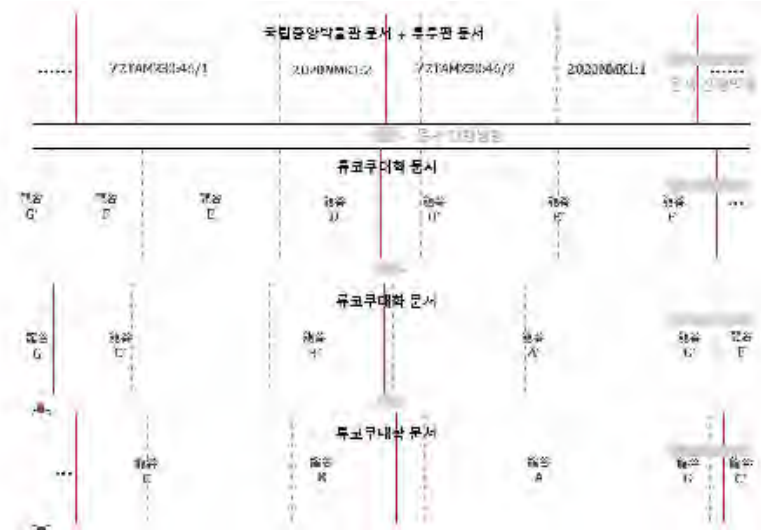
또한 문서 4편을 배열한 결과 재활용 시 안전에서 재단한 종이의 크기 단위와 연접된 기본종이 크기를 알 수 있다. 먼저 2020NMK1:1+72TAM230:46/2의 좌우 끝단은 절단면으로 되어 있기 때문에, 둘을 합친 92cm가 재단한 종이 길이 단위로 볼 수 있다. 안전에서 그 좌

24) 선행연구에서는 平織의 붉은 비단(赤絹)으로 보고되었다. 민병훈·안병찬, 앞의 논문(1995), pp. 178-179. 그러나 이번 과학적 조사에서 자색 직물편의 종류는 바닥조직은 평직이고 무늬조직은綾織인 자색 綺로 판명되었다. 무늬는 명확하지 않으나 마름모 문양 등 선을 사용한 기하학적 무늬로 추정된다.

25) 2020NMK1:1은 제15·16행 사이, 2020NMK1:2는 제11·12행 사이에 있다.

26) 國家文物國古文獻研究室, 新疆維吾爾自治區博物館, 武漢大學歷史系 編, 『吐魯番出土文書』(北京: 文物出版社, 1996), pp. 65-67. 이하 투루판출토문서 각편의 크기는 도판 상의 스케일로 환산한 상대적인 수치임을 밝혀둔다.

측에 이어지는 2020NMK1:2와 72TAM230:46/1을 합친 길이도 93cm로 거의 비슷하기 때문에 72TAM230:46/1도 절단면으로 판단된다. 또한 배열된 4장에 있는 4개의 연접선 간의 길이가 약 40cm로 일정하기 때문에 안권을 구성하는 기본종이 규격은 약 28.5×40cm가 된다. 이를 당척(唐尺)으로 환산하면 당시 기본종이의 규격인 가로 1척 5촌, 세로 1척에 약간 못 미친다.



도7. '탁지주초' 안권의 복원안과 한·중·일 문서 단편의 구성

선행 연구에 따르면, 일본 측 '탁지주초'에 해당하는 86점의 '암페라 흔적이 있는 문서편'은 접합 결과 재단 종이 6장으로 구성되어 있으며, 중국 측 문서 뒤에 오는 것이 밝혀졌다.²⁷⁾ 일본 측 문서 내용은 A'로 명명한 문서편의 제20행을 기점으로 앞부분은 탁지주초의 본문, 뒷부분은 서주도독부의 문서 접수·처리 과정에 관한 것이다. 그리고 현존 문서 중 마지막 부분인 C편 뒤에는 안권의 끝부분으로 문서의 표제가 적혀있었을 것으로 추정된다. 일본 측 문서편들은 사이에 일부 결락이 있으나 내용상 대체로 이어지는 것으로 보고 있다. 이상 한·중·일 소장 문서편의 복원 결과를 종합하여 가상의 '탁지주초' 안권에 배열하면 아래와 같이 나타낼 수 있다(도7).

그렇다면 '탁지주초' 문서편들은 안권에 어떤 순서로 장정(裝幀)되어 있었을까? 문서 내용으로 보면 재단 종이 2장으로 이루어진 한국과 중국 측 문서편은 현존 문서편 중 가장 앞에 위치한다. 본래 그 앞에 얼마만큼의 문서가 더 있었을지는 알기 어려우나, 이 문서가 당 전역에 걸친 예산 지시 사항임을 고려하면 원래는 상당한 길이의 안권이었을 것이다.

27) 중국 측 72TAM230:46/1과 일본 측 F'편은 서로 접속되지 않는다.

2. 2020NMK2:1, 2020NMK2:2 - 당상원연간서주창조사안권위고창현신송도주
위사용설가전사(唐上元年間西州倉曹司案卷
爲高昌縣申送逃走衛士庸縹價錢事)



도8. ‘도주위사 관련 문서’ 한·중
문서 단편의 접속 (빨간선: 재단
선, 파란선: 연결부)



도9. ‘도주위사 관련 문서’
2020NMK2:2 (빨간선: 재단선)



도10. ‘도주위사 관련 문서’
72TAM230:63 (파란선: 연
접부)

신발견문서편 2장은 같은 아스타나 230호묘 출토문서 가운데 중국 문서정리조에서 ‘당서주
고창현사장재첩위도주위사송용설가전사(唐西州高昌縣史張才牒爲逃走衛士送庸縹價錢事)’로 명
명한 2점[72TAM230:62, 72TAM230:63] 및 ‘문서잔편(文書殘片)’ 3점[72TAM230:80/4·9·1
0]²⁸⁾과 같은 문서의 일부임을 확인했다. 위의 중국 측 문서편은 선행 연구에서 시신갈개 관련
문서로는 논의되지 않았다. 문서면에 직조흔이 있음에도 불구하고 ‘탁지주초’와는 전혀 다른
문서이고, 그동안 대응하는 문서편을 찾을 수 없었기 때문일 것이다.

먼저 2020NMK2:1은 시신갈개 b면의 두 문서편 중 맨 위에 덮여 있던 것으로, 중국 측 투
루판출토문서 4점[72TAM230:62, 72TAM230:80/4·9·10]과 접속된다(도8). 복원된 문서편의
크기는 약 29×11cm가 되며, 상하단은 문서의 끝부분이고 좌단은 재단 면으로 판단된다. 문서
면의 중앙부에 있는 직조흔은 이 부분이 갈개와 직접 맞닿아 있었음을 나타낸다.
2020NMK2:2(도9)는 위쪽 일부가 2020NMK2:1에 덮인 채로 갈개 b면 우측에 가로로 붙어 있
던 편으로, 2020NMK2:1보다 먼저 붙었을 것이다. 크기는 약 29×16cm이다. 상하단은 문서의
끝단에 해당하며 당시 기본종이 규격과도 일치한다. 좌우단은 갈개의 폭에 맞춰 재단한 면이
다. 문서면의 가운데에는 폭 4cm의 자리흔적이 띠 형태로 길게 나 있다. 72TAM230:63(도
10)도 문서 가운데에 띠 형태의 자리흔이 확인되어 현재 문서가 없이 노출된 갈개 b면의 좌
측 부분에 붙어 있던 문서로 추정된다. 크기는 28×11.3cm이다.

위의 접속되는 문서편 외에 다른 단편들의 접속 여부는 판단하기 어렵다. 그러나 현존 문서

28) 國家文物國古文獻研究室, 新疆維吾爾自治區博物館, 武漢大學歷史系 編, 앞의 책, pp. 85, 88.

편의 내용과 형식을 분석하면 문서의 대략적인 내용과 잔편의 순서를 파악할 수 있다. 앞서 언급한 중국 측 문서명은 이 문서가 고창현에서 서주도독부로 발송된 첩문(牒文)임을 시사한다. 그러나 한·중 소장 문서편 전체를 검토해 보면 이 문서 자체는 서주도독부 창조사에서 처리한 문건으로 여기에 고창현의 보고 내용이 포함된 것으로 판단된다. 즉, 이 문서는 상원연간(上元年間, 674~676년)에 서주도독부 창조사가 고창현이 납부한 도주(逃走) 위사(衛士)의 용설가전(庸緹價錢, 용으로 내는 면포 가격에 상응하는 은전)을 확인하는 과정에서 작성한 것이다. 따라서 본 문서 제목을 ‘당상원연간서주창조사안권위고창현신송도주위사용설가전사(唐上元年間西州倉曹司案卷爲高昌縣申送逃走衛士庸緹價錢事, 이하 ‘도주위사 관련 문서’)’로 수정하고자 한다. 잔편의 순서를 문서 내용 및 처리 절차에 따라 배열하면 다음과 같다(표1).

	← 결락		← 결락	
2020NMK2:1 +72TAM 230:62 +72TAM230:80/4·9·10		2020NMK2:2		72TAM230:63
判官인 서주도독부 倉曹參軍 ‘元利’의 사안에 대한 심의 후 1차 판정		主典인 서주도독부 창조사 史 ‘張才’가 앞의 보고를 정리한 錄案		도주 위사의 용설가전 납부 내역에 대한 고창현의 보고

표1. 안건의 처리 절차에 따른 ‘도주위사 관련 문서’ 잔편의 순서

그런데 이 문서의 작성 연대에 관해 72TAM230:62의 제4행과 봉배서에 등장하는 서주도독부 창조참군 ‘원리(元利)’에 주목할 필요가 있다.²⁹⁾ 투루판 바다무[巴達木] 207호묘에서 출토된 ‘당상원3년(676)서주법조첩공조위창조참군장원리거년부범사唐上元三年西州法曹牒功曹爲倉曹參軍張元利去年負犯事’(2004TBM207:1-12) 문서는 그의 창조참군 재위 기간에 관한 결정적인 단서를 제공한다. 문서에 따르면 그의 이름은 ‘장원리(張元利)’이며 상원2년(675) 7월 29일에 창조참군으로 재직 중이었으나 상원3년(676) 3월 초에는 직위를 내려놓은 것으로 판단된다.³⁰⁾ 만약 섭관(攝官) 또는 본관(本官)으로서 그 이전부터 재임 가능성을 열어둔다면, 장원리가 창조참군으로 활동했던 기간은 674년 무렵부터 676년 3월 초까지로 추정할 수 있으며, ‘도주위사 관련 문서’ 역시 이 무렵에 작성된 것으로 추론할 수 있다.³¹⁾

여하튼 분명한 점은 국립중앙박물관 소장 시신갈개를 제작할 때 670년대 중후반 서주도독

29) 李方, 『唐西州官吏編年考證』(北京: 中國人民大學出版社, 2010), p. 99.

30) 榮新江, 李肖, 孟憲實 主編, 『新獲吐魯番出土文獻』上(北京: 中華書局, 2008), pp. 72-73 참조.

31) 그동안 투루판출토문서 ‘도주위사 잔권’ (72TAM230:62, 63)의 작성 연대는 721년(開元9) 전후로 추정되었다. 陳國燦, 『吐魯番出土唐代文獻編年』(臺北: 新文豐出版公司, 2002), p. 230. 이번 조사를 계기로 이 문서의 작성 추정 연대는 674~676년경으로 수정되어야 할 것이다.

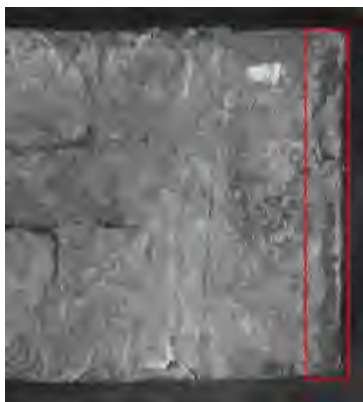
부의 창조사에서 생산한 2종류의 문서를 사용한 것이다. 중국 측 2종 5점 투루판출토문서도 본래 국립중앙박물관 소장 시신궤개에 붙어 있던 것으로 결론 내렸다. 이들 공문서는 사건 종결 후 일정 기간 보존되었다가 폐기되어 민간에 불하되었고, 702년(長安2) 사망한 장예신을 위한 장구(葬具) 재료로 탈바꿈했다.

IV. 시신궤개의 복원

1. 국립중앙박물관 소장 시신궤개의 복원

중국 측 투루판문서 잔편과의 접속으로 국립중앙박물관 소장 시신궤개의 원형에 한 발 더 다가갈 수 있게 되었다. 그렇다면 이들 문서는 어떻게 자리를 감싸고 있었던 것일까?

우선 문서가 붙은 조각[16.0×48.5cm]과 돛자리가 그대로 드러난 조각[20.0×23.5cm]의 관계를 이해할 필요가 있다(도1). 이 두 조각은 원래 하나로 이어져 있었던 것으로 생각된다. 작은 조각의 살 사이에는 간간이 미세한 종이 편이 박혀있어 당초에는 문서가 붙어 있었음을 짐작할 수 있다. 두 조각의 살들은 길이[23.0~24.5cm]가 대체로 비슷하다. 작은 조각은 짜임이 느슨하여 본래보다 폭이 늘어나 있는데, 살이 풀린 우단을 제외한 상·하·좌단은 매끈하게 절단



도11. 시신궤개 테두리에 부착된 자색 직물편 (좌: b면, 우: a면)

되어 있어 궤개의 끝부분임을 알 수 있다. 큰 조각의 좌단에는 약 21개의 풀린 살들이 종이끈으로 묶여있다. 작은 조각의 형태를 조정하고 풀린 살들을 4~6개씩 다발로 배열해 두 조각 사이에서 가상으로 채웠을 때 시신궤개 원형의 크기는 약 16×78cm가 된다.

‘탁지주초’를 분리하는 과정에서 펼친 문서의 가로 길이는 궤개보다 오른쪽으로 7cm 더 길었다. 즉, 자리의 우측 끝단 밖으로 나온 부분을 접어 올려 감쌌던 것이다. 마찬가지로 좌측 끝단도 같은 방식으로 접었다고 가정하면 궤개 원형의 길이는 ‘탁지주초’의 재단 종이 길이

92cm보다 14cm정도 짧은 78cm가 된다. 이는 두 돛자리를 가상으로 이은 추정치와 일치한다.

그리고 시신궤개 양면의 가장자리 부분을 따라 종이 위에는 자색 직물편[綺]이 붙어 있었다(도11). 선행 연구에서는 시신이 착용한 옷에서 떨어져 나온 편이 부착된 것으로 추정하였으나,³²⁾ 궤개 양면의 테두리를 따라 붙어 있는 형태는 이 직물이



도12. 국립중앙박물관 소장 시신궤개의 복원안과 제작과정

32) 민병훈·안병찬, 앞의 논문(1995), p. 157.

시신갈개의 마감재로 사용되었음을 시사한다.

지금까지의 이해를 바탕으로 시신갈개 원형의 제작과정을 다음과 같이 복원할 수 있다(도 12).

1단계: ‘탁지주초’ 안권을 92cm의 단위로 재단한 종이 2장(2020NMK1:1+72TAM230:46/2, 2020NMK1:2+72TAM230:46/1)을 아래위로 포갠다. 그리고 돛자리를 종이의 한가운데에 놓는다.

2단계: 자리 바깥으로 나온 ‘탁지주초’ 종이를 상하(가로)·좌우(세로) 순으로 접어 올린다.

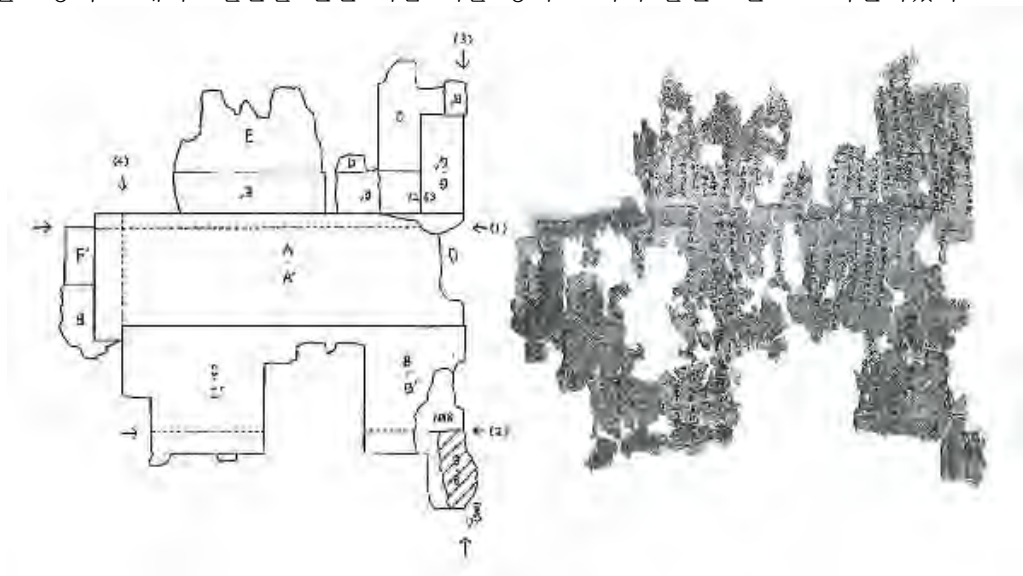
3단계: 접힌 종이면 위에 ‘도주위사 관련 문서’ 안권에서 재단한 종이 2장(2020NMK2:2, 72TAM230:63)을 갈개 좌우측에 덮고, 그 가운데 돛자리가 노출된 부분에는 ‘도주위사 관련 문서’ 재단 종이 1장(2020NMK2:1+72TAM230:62+72TAM230:80/4·9·10)을 부착한다. 빈틈없이 부착된 문서들은 돛자리 전체를 감싸는 형태가 된다.

4단계: 시신갈개 앞뒤 테두리에 자색 직물을 둘러 마감한다.

2. 류코쿠대학 소장 시신갈개문서군 복원안의 재고

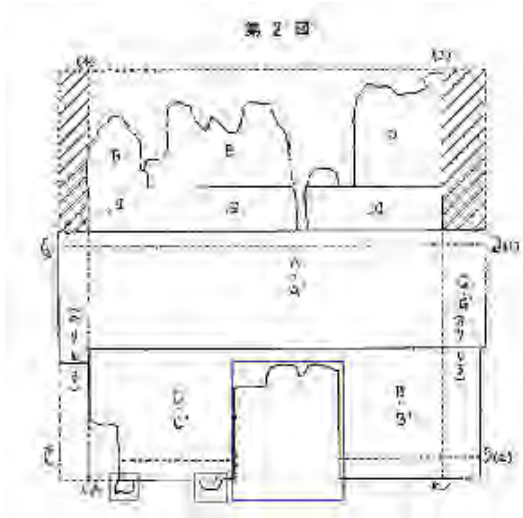
그런데 앞서 언급했듯이 류코쿠대학에는 86점의 자리 흔적이 있는 ‘탁지주초’ 문서편이 소장되어 있다. 국립중앙박물관 소장 시신갈개는 중국 측 문서편과 함께 하나의 완전체를 이룬다. 그렇다면 일본 측 소장 문서는 또 다른 시신갈개에 감싸져 있었던 것이 유력하다. 지금부터는 국립중앙박물관 소장 시신갈개의 복원 사례를 단서로 삼아 일본 측 시신갈개 문서군의 복원에 관한 선행 연구를 재검토해 보고자 한다.

오쓰 도루와 에노모토 준이치 선생의 복원에 따르면, 일본 측 86점의 문서편들을 하나씩 맞춰 일정 단위로 묶은 뒤 내용이 연결되는 단위부터 알파벳 순으로 기호를 붙여나간 것으로 생각된다.³³⁾ 접속 결과 전체 문서는 ‘탁지주초’ 안권에서 28.5×103.0cm 규격으로 재단한 종이 6장을 2장씩 포개서 3열분을 만든 다음 이를 상하로 이어 붙인 1면으로 복원되었다.³⁴⁾



도13. 류코쿠대학 소장 ‘탁지주초’ 문서편의 접속 개념도(제1)와 복원사진(오쓰 도루 작성 및 촬영)

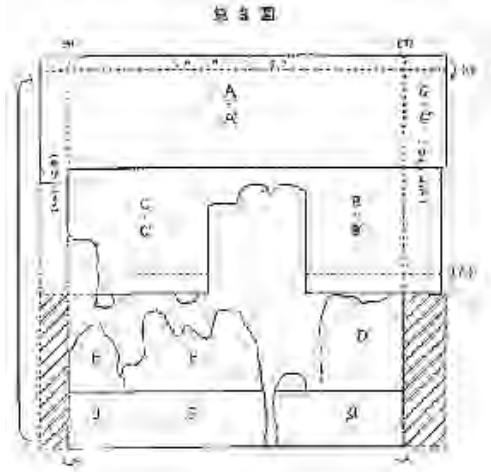
33) 大津透, 앞의 논문(1986), p. 1833.



도14. 류코쿠대학 소장 '택지주초' 문서편의 중간 복원 단계(제2도) (오쓰 도루 작성, 사각 구획 필자 표시)

결과로 추측했다. 이에 입각하여 편들의 위치를 재배열하여 중간 복원 단계의 제2도의 개념도(도14)를 제시했다.

펼쳐진 문서의 크기는 약 91×103cm이나 제2도와 같이 점선을 따라 접어 붙이면 문서는 약 48×90cm 크기의 종이봉투 형태가 된다.³⁶⁾ 오쓰와 에노모토 선생은 이러한 형태를 오타니 탐험대가 발굴 시 벗겨낸 문서를 운반하기 편리하게 종이봉투의 형태로 재가공한 것으로 해석했다. 특히 문서의 가운데[파란색 구획]에 훼손이 심한 것은 봉투 속에 모종의 발굴품을 넣은 채로 이송 중에 파손·결실되었기 때문일 것으로 막연히 추측했다.³⁷⁾ 또한 B·C열 하단에 있는 2개의 작은 편[붉은색 구획]을 D·E·F열의 상단에서 떨어져 나온 것으로 보고, 본래는 B·C열의 아래에 D·E·F열이 붙어 있었던 것으로 추측했다. 반면 현재 D·E·F열과 G·A열 간의 접합부야말로 오타니 탐험대가 재가공 시 인위적으로 붙인 부분일 것으로 주장했다.³⁸⁾ 결과적으로 3열의 문서는 펼쳐진 상태로 시신갈개 한 면에 부착되었던 것으로 추정 하였고, 문서의 최종 복원안을 제3도의 개념도로 제시했다(도15).



도15. 류코쿠대학 소장 '택지주초' 문서편의 중간 복원 단계(제3도) (오쓰 도루 작성)

그러나 국립중앙박물관 시신갈개의 복원 사례를 참조하여 위의 복원안을 재검토하면, 일본 측 문서가 붙어 있었을 시신갈개의 원형은 오히려 제2도에서 48×90cm 크기의 돗자리 전체를 봉투 형태로 접어 감싼 모습으로 생각된다. 오쓰와 에노

34) 大津透·榎本淳一, 앞의 논문(1987), p. 67.

35) 위의 논문, p. 67.

36) 선행 연구에서 문서의 세부 실측치는 제시되지 않았다. 따라서 발표에서 제시하는 세부 치수는 전체 접합 문서 및 재단 종이 1열의 크기를 오쓰 선생의 개념도와 복원사진에 적용해 계산한 추정치임을 밝혀둔다.

37) 위의 논문, pp. 68-70.

38) 위의 논문, p. 68.

모토 선생은 시신갈개라고 한다면 피장자의 신장에 필적하는 크기였을 것으로 상정하고, 갈개 원형의 전체 크기는 현재 복원 문서 크기[94×103cm]보다 세로가 더 길었을 것으로 보았다. 그래서 현존 3열의 위아래에 몇 열이 추가로 존재했을 수 있으며, 1972년에 수습된 투루판출토문서 2편(72TAM230:46/1·2)도 거기에 붙어 있었을 가능성이 있다고 보았다.³⁹⁾

그러나 국립중앙박물관 소장 시신갈개 원형은 16×78cm에 불과하며, 그 투루판출토문서 2편은 국립중앙박물관 소장 시신갈개에 배접된 것이 판명되었다. 무엇보다 돛자리를 점선 위치에 맞춰 올려놓고 바깥으로 나온 종이 끝단을 봉투 형태로 접어서 부착했다면 그 조립 방식은 국립중앙박물관 소장 시신갈개와 상당히 유사하다고 할 수 있다. 즉 겹면에 자색 비단 자국이 있는 접힌 선은 시신갈개의 윤곽선이자 완성된 형태를 알려주는 중요한 증거가 된다. 기존 복원안에 대한 논증을 종합하면 류코쿠대학 소장 문서편에 해당하는 시신갈개의 원형과 그 제작 방식은 다음과 같이 재구성할 수 있다(도16).

- 1단계: 약 48×90cm 크기의 돛자리를 만든다. 배접 종이들은 돛자리의 가로보다 약 13cm의 여유를 두고 ‘탁지주초’ 안권에서 약 28.5×103cm 규격으로 잘라내었다. 재단 종이는 돛자리의 세로(48cm), 즉 종이를 봉투 형태로 접었을 때의 크기를 감안하여 6장을 준비했다.
- 2단계: 문서상의 순서대로 F'·E'·D'열의 위에는 D·E·F열을 붙이고, 아래에는 G'·A'와 B'·C'열을 이어붙여 94×103cm 크기의 1장으로 만들었다. 여기서 세로 길이는 재단 시 미리 정할 수 없기 때문에 문서의 겹침 정도를 조절하여 맞췄다. 따라서 F'·E'·D'열과 D·E·F열은 완전히 겹치지 않고 10cm정도 어긋나게 붙인 것으로 생각된다. 다음으로 G·A열, B·C열을 각각 G'·A'열, B'·C'열 위에 덮어 보강했다.
- 3단계: 돛자리를 종이 G·A열, B·C열의 가운데에 올려놓고, 좌우 바깥으로 나온 종이를 ①선에서, 하단 바깥의 종이를 ②선에서 접어 올렸다. 상단 바깥의 종이를 ③선에서 뚜껍을 덮듯이 접고 접힌 부분에는 풀칠하여 붙였다.
- 4단계: 앞뒷면 테두리를 따라 자색 직물을 둘러 마감했다.



아스타나 230호묘 두 시신갈개의 제작 방식은 이처럼 매우 유사하다. 차이점이라면 국립중앙박물관 소장 시신갈개는 종이가 모자란 부분에 또 다른 종류의 문서를 재단해 붙인 반면, 이 시신갈개는 1종류의 문서만으로 전체를 감싸서 부착한 방식으로 되어 있는 점이다.

도16. 류코쿠대학 소장 문서편이 부착된 시신갈개의 복원안과 제작과정

39) 위의 논문, p. 70.

V. 맺음말

이상으로 국립중앙박물관 소장 시신갈개 배접문서의 분리 조사를 통해 한·중·일 소장 문서 단편들의 관계를 재정리하여 원문서의 잔영과 시신갈개의 원형을 재현하였다. 분리된 문서는 ‘탁지주초’ 2장과 ‘도주위사 관련 문서’ 2장으로 이루어져 있었다. ‘탁지주초’의 경우 투루판출토문서 72TAM230:46/1·2와 접속되었다. ‘도주위사 관련 문서’는 같은 묘 출토 72TAM230:62·63 및 72TAM230:80/4·9·10과 하나의 문서이며, 그중 2020NMK2:1과 72TAM230:62, 72TAM230:80/4·9·10는 접속되었다. 따라서 중국 측 투루판출토문서 2종 7점은 본래 국립중앙박물관 소장 시신갈개에 부착되어 있던 문서로 결론 내렸다.

또한 679년에 작성된 ‘탁지주초’와는 달리, 기년이 없는 ‘도주위사 관련 문서’의 작성 시기를 새롭게 고증했다. 문서에 등장하는 판관 ‘원리’를 서주도독부의 창조참군 ‘장원리’로 보고, 문서는 그의 재임 시기인 674~676년경에 작성된 것으로 추정했다. 즉, 위의 두 문서는 서주도독부의 창조사에서 670년대 중후반에 작성한 것으로 702년에 사망한 장예신의 시신갈개로 재활용되었던 것이다.

이어서 문서 단편의 접합과 배접 구조의 이해를 바탕으로 국립중앙박물관 소장 시신갈개의 제작과정을 서술했다. 여기에 더해 선행 연구에서 제시한 일본 측 86점의 문서편의 복원안을 재검토했다. 그 결과 일본 측 문서는 국립중앙박물관 소장 시신갈개가 아닌 현존하지 않는 또 다른 갈개에 부착되어 있었던 것으로 결론내렸다. 두 시신갈개는 크기는 다르나 제작 방식과 순서는 대동소이하며, 문서를 일정한 크기로 재단해 겹친 다음 돛자리에 봉투 형식으로 감싸서 고정하고, 마지막으로 전체에 자색 기를 돌려 마감했던 것으로 추정하였다.

하지만 본 발표에서 해결하지 못한 근본적인 의문점도 여전히 남아 있다. 돛자리의 시신갈개는 당시 투루판 지역에서 보편적인 장의용구였음에도 불구하고, 발표자가 아는 한 현재 전하는 시신갈개 중 이처럼 크기가 작고 문서와 직물이 부착된 예는 거의 알려져 있지 않다.⁴⁰⁾ 또한 무덤 내에는 본 발표에서 상정한 2개 외에 시신갈개가 추가로 존재했었던 것인지, 크기가 다른 시신갈개들이 어떠한 구조로 배치되어 있었던 것인지는 여전히 규명하기 곤란한 부분이다.⁴¹⁾

과연 1912년의 오타니탐험대가 진입하기 이전에 아스타나 230호묘는 온전한 상태였을까? 230호묘 출토품 가운데 돛자리로 현존하는 것은 국립중앙박물관 소장 시신갈개 뿐이고, 삼국의 문서편들은 매우 심각하게 파편화되어 있다. 또한 갈개에 붙은 직물조각은 거의 흔적에 불과하며 뜯겨나간 직물의 행방은 알 수 없다. 1910년에는 230호묘 바로 옆에 위치한 장희적(張懷寂)묘[현 501호묘]가 현지 주민들에 의해 발굴되었고, 이 소식을 들은 투루판청[吐魯番廳] 왕병장(王秉章)은 현지 주민들에게 해당 묘역을 도굴을 금지한 바 있다.⁴²⁾ 이러한 정황들

40) 다만 가장 유사한 사례로 아스타나 506호묘(張無價墓) 출토 紙棺을 들 수 있다. 이 특별한 葬具는 관 바닥이 없는 상태로 발견되었다. 그러나 보고서에서는 발굴 현장과 유물에 근거해 지관과 같은 크기로 갈대자리에 문서를 붙인 시신갈개를 관바닥으로 삼아 시신을 눕힌 다음 그 위에 관을 뚜껑처럼 씌웠을 것으로 추정했다. 新疆維吾爾自治區博物館, 西北大學歷史系考古專業, 앞의 논문, pp. 12-13.

41) 1972년 발굴 당시 아스타나 230호묘는 이미 도굴 피해를 심하게 입어 시신의 성별과 葬法은 알 수 없는 상태였다고 한다. 위의 논문, pp. 8-26; 李徵, 「新疆阿斯塔那三座唐墓出土珍貴絹畫及文書等文物」, 『文物』1975-10, pp. 89-90.
그러면서도 매장 방식은 바닥을 파내어 널방 뒷벽과 이어지게 만든 土臺의 屍床 위에 갈대자리(葦席)를 깔고 그 위에 시신을 눕혔을 것으로 기술하고 있다. 新疆文物考古研究所, 앞의 논문, pp. 104-105.

42) 王樹枏, 『新疆訪古錄』下(上海: 聚珍倣宋印書局, 간행년도 미상), 14-16葉. 원문은 <https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&chapter=596681> 참조.

은 시신깔개와 230호묘의 본래 맥락을 둘러싼 여러 가능성의 여지를 남기고 있다.

국립중앙박물관 소장 시신깔개의 배접문서는 중국과 일본 측 문서 단편과의 관계 속에서 당대 전기 국가재정 전반의 구체적 실상과 부병제 하 도주 위사의 처리 사안에 관한 행정절차를 엿볼 수 있는 1차 사료로서의 가치가 매우 크다. 그러나 무엇보다 국립중앙박물관 소장 시신깔개는 종래 ‘탁지주초’ 단편의 접합과 문서 내용 연구에 천착했던 연구에서 벗어나, 원문서를 2차 가공한 상장용품인 시신깔개의 제작 관습에 접근하기 위한 구심점의 역할을 할 수 있는 유일무이한 현존 자료로서 그 가치가 있다고 할 것이다.

國立中央博物館藏附有吐魯番出土唐文書的尸席復原

權泳佑

據悉，附有國立中央博物館藏唐文書的尸席（本館3978）於1912年3月左右在日本大谷探險隊第三次探險時出土於吐魯番阿斯塔納230號墓。此外，日本大谷文書和中國吐魯番出土土文書中還收藏了被裱糊的文書片與同一文書的部分內容。韓中日三國收藏的文件片原本屬於同一文件的文本被粘貼在尸席上，但在探險隊整理遺物的過程中因脫落未被收集，遺留在現場的部分於1972年被中國方面發掘出土，運回日本的文件片和尸席則因探險隊回國後大谷光瑞的亡命和二樂莊的買賣而分別分流落至日本和韓國。

1995年，國立中央博物館正式向學界介紹了收藏的尸席與裱糊文書。但1950年代開始，中國和日本就公開了有關本國收藏的部分裱糊文書中的《唐儀鳳三年度支奏抄·同四年金部旨符》（以下簡稱“度支奏抄”）內容，兩國學者便開展了活躍的深度研究，碩果累累。結果，唐朝中央政府下達的679年度全國預算執行文件《度支奏抄》成為填補唐前期國家財政史料不足的珍貴出土文件。

2020年，國立中央博物館期待能通過尸席裱糊文書解釋分藏於三國的文件之間關係的方面發揮核心作用，決定對文書進行分別調查。本發表將介紹作為調查結果的尸席與裱糊文書的復原成果。

首先，以分離的文件片為基礎，重新整理分別收藏於韓中日三國的文件片關係，試圖復原尸席和原文書的原貌。分離的文件片由2種4張組成。在整理過程中，《度支奏抄》的內裡被揭開後新發現了《唐上元年間西州倉曹司案卷為高昌縣申送逃走衛士庸牒價錢事》（以下簡稱“逃走衛士文書”），這是此前並未被提及的尸席文書。經確認，分離的《度支奏抄》(2020NMK1:1·2)可與吐魯番出土文書72TAM230:46/1·2相連接。

在確認新條文的同時，通過文書的接合，可以彌補不完整的現有條文內容。分離的《逃走衛士文書》(2020NMK1:2·2)與230號墓出土的72TAM230:62·63及72TAM230:80/4·9·10為同一文書，其中2020NMK2:1和72TAM230:62、72TAM230:80/4·9·10可以接合。因此得出結論，中國方面的吐魯番出土文書2種7件原是附於（韓）國立中央博物館收藏的尸席上的文件。

另外，還重新考證了無紀年的《逃走衛士文書》的編制時期。經確認，文書上的判官，即，西州都督府的倉曹參軍“元利”與2004TMM207:1-12上的“張元利”是同一人，“逃跑衛士文書”是上述文書中提及的倉曹參軍在任期間（674~676年3月）編制的。因此，兩分尸席裱糊文書是670年代中後期由西州督府倉曹史編寫的，702年張禮臣去世時，被用作為殯葬用具。

接着，以文書片的接合和排接結構的理解為基礎，重新復原了國立中央博物館收藏的尸席製作過程。並且，還重新討論了先行研究中提出的日本方面的86件文書片的復原意見。結果得出結論，日本方面的文書片不是附在國立中央博物館收藏的尸席上的裱糊文書，而是附於另一尸席上的文書。據推測，兩張尸席的製作過程大同小異，疊放裁剪的大小統一的文書片，然後將鋪在上面的席子折成紙袋的形式，進行包裹後固定，最後一道工序是在最外層圍上紫旗以作收尾。

被裱糊於國立中央博物館收藏的尸席上的文書在三國收藏的文書片間的關係中，是能夠了解唐代前期整體國家財政具體情況，以及府兵制下逃跑衛士的處理和相關行政程序的第一手史料，具有很大的價值。但最重要的是，國立中央博物館收藏的尸席是在以往研究“度支奏抄”的接合與內容研究中，拓寬了已經進行的深度研究的研究視野。國立中央博物館收藏的尸席也是了解將原文

書二次加工為尸席的製作習慣的核心作用時的獨一無二的現有資料，學術價值非凡。

国立中央博物館所蔵吐魯番出土の唐文書に付着した アンペラ文書の復原

權泳佑

国立中央博物館所蔵の唐代の文書が付着した、ミイラの敷物として使われたアンペラ（本館3978）は、1912年3月頃、日本の大谷探検隊の3次探検の際に、吐魯番アスターナ230墓で収集したものとされている。ここに貼られた紙文書と同じ文書が、日本の大谷文書と中国吐魯番出土文書にも含まれている。韓・中・日所蔵の文書の破片は、本来は一つの文書であり、ともにアンペラに付着していたが、探検隊が遺物を収集する際に見落とし、現場に残された一部が1972年に中国側によって発見され、日本に搬出された文書の破片とアンペラは探検隊の帰国後、大谷光瑞の亡命と二楽荘の売却により、それぞれ日本と韓国に分散してしまったのである。

国立中央博物館所蔵のアンペラとその付着文書は、1995年に学界に正式に紹介された。しかし、付着文書のうち、中国と日本に所蔵されていた「唐儀鳳三年度支奏抄・同四年金部旨符」（以下、「度支奏抄」と略す）は1950年代から紹介され、半世紀の間、日中の研究者により多くの研究成果が蓄積された。その結果、唐の中央政府により出された679年度の全国予算執行文書となる「度支奏抄」は、唐代初期における国家財政史の史料不足を補う貴重な資料として位置づけられている。

2020年、国立中央博物館所蔵のアンペラ文書が三国に分散している文書の破片の関係を解明する上で重要な役割を果たすという期待のもと、文書を分離して調査することを決めた。本発表では、今回の調査結果、即ちアンペラ文書の復元結果を紹介する。

まず、分離した文書の破片に基づき、韓・中・日所蔵の文書の関係を再整理し、もとの文書とミイラの敷物として使われたアンペラの前形の復元を試みた。分離された文書の破片は2種、4枚から成っていた。「度支奏抄」の場合、その構成が明らかになり、新たに発見された「唐上元年間西州倉曹司案卷爲高昌縣申送逃走衛士庸糶價錢事」（以下、「逃走衛士文書」と略す）は、これまでにアンペラ文書として取り上げられてこなかった。分離された「度支奏抄」（2020NMK1:1・2）は吐魯番出土文書72TAM230:461・2と接続するのを確認した。新しい条文を確認すると同時に、文書の接続により不完全であった既存の条文の内容を補完することができた。分離された「逃走衛士文書」（2020NMK1:2・2）は、同じ230号墓で出土した72TAM230:62・63及び72TAM230:80/4・9・10と同じ文書であり、そのうち2020NMK2:1と72TAM230:62、72TAM230:80/4・9・10は接続する。したがって、中国側の吐魯番出土文書2種7点は、本来国立中央博物館所蔵のアンペラに付着していたと結論づけられる。

それに、紀年のない「逃走衛士文書」の作成時期についても新たに考察した。文書上の判官、即ち西州都督府の倉曹參軍「元利」が2004TBM207:1-12にみえる「張元利」と同一人物であることを確認し、「逃走衛士文書」は上記文書に書かれた彼の倉曹參軍の在任期間(674~676年3月)中に作成されたものと考えた。したがって、両アンペラ文書は、670年代の中後期において、西州都督府の倉曹司が作成したもので、702年に死亡した張礼臣の葬儀用具として再利用された。

なお、文書の破片の接続をもとに、国立中央博物館所蔵のアンペラの製作過程を再構成し、先行研究で提示された日本側の86点の文書破片の復元案についても再検討した。その結果、日

本側の文書の破片は国立中央博物館所蔵のアンペラではなく、別のアンペラに付着していたと結論付けた。この二つのアンペラの製作過程は大体同じである。一定の大きさに裁断した文書の破片を重ねて置き、その上に載せた蓆を紙袋のように畳んでから、それを包んで固定しており、全体に紫色の絹を巻いて仕上げたものと推定される。

国立中央博物館所蔵のアンペラ文書は、唐代初期の国家財政全般の具体的な実情と、賦兵制下における逃走衛士の処理と行政手続きを知ることのできる非常に価値の高い一次資料である。その中でも、国立中央博物館所蔵のアンペラ文書は、「度支奏抄」の接続関係と内容の研究に集中していた従来の研究から視野をさらに広げ、元の文書を転用し、ミイラの蓆として二次加工することにおける習慣に接近するための中心的役割を果たす唯一の現存資料となり、その価値は高いといえよう。

「국립중앙박물관 소장 투르판 출토 唐文書가 부착된 시신갈개(尸席)의 복원」에 대한 토론문

박근철(한성대학교)

국립중앙박물관(이하 국박) 소장의 투르판 출토 ‘시신갈개’는 국내에 존재하는 서역자료 가운데 하나로, 문서자료가 부착된 특기할 만한 사례로 주목되었다. 다만 보존된 시신갈개의 원형을 유지한 채 진행된 종래 연구는 분석의 근본적인 한계를 극복하기 어려웠다. 최근 국립중앙박물관 연구진이 시신갈개와 문서자료를 완전히 분리하여 정리함으로써 시신갈개와 부착된 문서의 관계 뿐 아니라 문서 자체의 전모를 파악하는데 주요한 단서가 마련되었다. 그 성과로서 발표자는 국박 시신갈개에서 분리한 문서들을 종래 일본, 중국에서 정리된 같은 案卷에 속하는 문서들과 비교, 검토하여 상호 관련성을 확인하고, 국박에만 남아있는 원형의 시신갈개를 통해 한, 중, 일 삼국에 흩어져있는 문서가 喪葬用具로 활용되는 과정에 대하여 새로운 해석을 시도하였다. 唐代 재정사에 대한 신자료의 발굴과 투르판지역 시신갈개 제작과정에서 문서의 재활용 방법에 대한 새로운 접근 등 종래 관련 분야의 연구에 유익한 성과를 제공하고 있다. 해당 유물의 발굴상황이나 문서의 수습과정에 대한 정보가 극히 영성한 상태에서 자료에 대한 면밀한 검토와 비교적 정합적 추론이 전제되었기 때문에 발표자의 견해에 대체로 동의한다. 다만 발표문에서 다루지 못한 몇가지 사항에 대한 설명을 청하고 의문점에 대한 의견을 제시하면서 토론자의 소임을 대신하고자 한다.

1. 우선 이번 발표 주제가 ‘시신갈개의 복원’에 중점이 두어졌기 때문에 부착된 ‘투르판 출토 唐文書’에 대해서는 본격적인 분석이 이루어지지 않은 듯하다. 다만 국박 소장 시신갈개에서 분리한 문서와 중국 투르판 아스타나 230호 무덤에서 수습되어 신강박물관에 소장 중인 문서간의 직접적인 접속관계를 상정할 수 있다면 “기존의 조문들과 마찬가지로 여타 사료에서 확인할 수 없는 내용이 적지 않은”, “불완전했던 조목의 경우 투르판 출토문서와 접합하여 기존 해석을 보완할 수 있는” 내용에 대하여 일정한 보충 설명이 필요할 것이다. 시신갈개 b면의 ‘서주 창조사 안권’의 내용과 마찬가지로 a면 ‘탁지주초’의 경우도 조문의 대략적인 내용이 좀더 설명되었으면 한다.

2. 시신갈개에 배접된 문서들의 접속관계에 대해서 시신갈개 a면의 ‘탁지주초’ 경우는 (도6)처럼 배치도를 재현했는데 b면의 경우는 (도4)에서 국박 소장 시신갈개에서 분리된 문서편만 그 배접 상태를 재현하였다. 시신갈개 b면의 문서가 (도8), (도9), (도10)처럼 3개의 문서편으로 재현이 가능하다면 (도4)에서 이들이 b면에 배접되었던 배치도도 제시가 가능할 것으로 판단된다. 이에 대한 보충 설명을 바란다.

3. 발표문에서는 일단 판단을 유보했지만, 시신갈개 a면에서 국박 문서와 중국측 문서가 찢겨져 접속된 부분의 모양(도6), b면 배접문서의 찢겨진 상태(특히 도8 문서), 국박 소장 시신갈개가 2조각으로 분리되어 한쪽(큰 조각)에만 부착된 문서가 확인되고, 절단된 두 조각 사이

에 공백이 있는 형태(도1) 등을 종합적으로 고려하여 원래 아스타나 230호묘의 시신갈개와 부착되었던 문서가 파손, 보존, 수습되는 과정도 어느 정도 유추 가능하지 않을까 추정되는데 발표자의 설명을 바란다.

4. ‘류코쿠대학 소장 시신갈개 문서군의 복원안의 재고’와 관련하여 : 발표문에서 류코쿠대학 소장 문서편에 해당하는 시신갈개의 원형과 그 제작 방식은 4단계로 재구성하였다. 그런데 2, 3단계와 관련하여 (도14, 15)에서도 확인되듯이 G-A(G'-A')와 B-C(B'-C')의 가로 길이는 서로 같지만 D-E-F(D'-E'-F') 보다는 길다. 즉 “문서상의 순서대로 F'·E'·D'열의 위에는 D·E·F열을 붙이고, 아래에는 G'·A'와 B'·C'열을 이어붙여 94×103cm 크기의 1장으로 만들었다.”는 추정은 그 형태나 문서의 배접 순서를 감안하면 다소 어색하다. 오히려 G-A, G'-A'와 B-C, B'-C'를 가로 길이가 같도록 재단하여 두겹이 된 문서편 2개를 만들고 이를 위, 아래로 이어 붙인 후 그 가운데에 시신갈개를 올려 놓았을 것이다. 그리고 시신갈개의 크기보다 상·하·좌·우측에서 바깥으로 나온 G-A(G'-A')와 B-C(B'-C') 문서편의 상, 하, 좌, 우측을 뒤쪽(b면)으로 접었을 것이다. 마지막으로 D-E-F와 D'-E'-F'를 시신갈개 b면의 가로길이에 맞춰 재단한 후 b면에 우선 D'-E'-F'를 G-A(G'-A')의 b면으로 접힌 부분 위에 붙이고, 나머지 D-E-F를 B-C(B'-C')의 b면으로 접힌 부분에 맞추어 붙였을 것이다. “F'·E'·D'열과 D·E·F열은 완전히 겹치지 않고 10cm정도 어긋나게 붙인 것”은 국박 시신갈개의 b면의 경우처럼 a면 배접문서의 접힌 부분 가운데에 이루어진 시신갈개의 노출된 부분을 가리기 위하여 D'-E'-F'를 먼저 붙이고, 그래도 가려지지 않은 시신갈개의 노출 부분을 가리기 위하여 D-E-F를 붙였기 때문이라고 할 수 있다. D'-E'-F'와 D-E-F의 위, 아래가 반대로 된 상태로 배접되었던 것도 이런 사정을 반영한 것이라 하겠다. 발표자가 류코쿠대학 소장 문서편과 시신갈개의 관계를 재현하면서 두겹의 문서편 3개를 한꺼번에 접합하여 1장을 만든 후 사용했을 것으로 판단한 것은, 오쓰 도루가 이들을 종이봉투 제작에 활용했을 것을 가정하여 추정한 형태에 근거했기 때문으로 생각된다. (도13)의 F'와 F가 A'-A의 접은 면 위에 부착된 것, A'-A의 우측에 해당하는 G'-G / B'-B가 접힌 후 그 위에 D'와 D가 부착된 것 등을 고려하면 D-E-F(D'-E'-F')가 G-A(G'-A')와 B-C(B'-C')와는 별도로 재단되어 가장 마지막에 배접되었을 가능성이 좀더 정합적이지 않을지 고려해 보기 바란다. 또한 録文이 제시된 복원 문서가 (b면) [D'-E'-F']→[D-E-F] / (a면) [G'-A']→[B'-C']→[G-A]→[B-C]의 순서를 이루는 것도 a면과 b면 각각의 문서가 배접의 순서에 따라 재단된 사정을 반영하기 때문이라 판단된다.

5. 이와도 관련하여 한, 중, 일 문서 단편의 구성을 제시한 (도7)에서 안권의 卷軸 위치는 가장 위쪽 문서인 2020NMK1:1의 우측으로 수정되어야 할 것이다. 물론 시신갈개의 배접문서로 재활용을 준비할 때 案卷을 장정한 卷軸이 원형대로 남아있었다는 가정이 전제되어야 하겠지만, 가장 마지막에 작성된 문서 단편인 C가 제시된 안권의 가장 마지막에 위치하고 그 뒤로는 이후에 작성된 문건들이 접합되었을 것이다. 이런 추론이 가능하다면 일본측 시신갈개가 국박 소장 시신갈개 보다 먼저 제작되었을 개연성도 추정해 볼 수 있다.

6. 시신갈개(尸席)에 대하여 : 발표자도 언급했듯이 돛자리의 시신갈개가 당시 투르판지역에서 보편적인 장의용구였음에도 시신갈개에 부착된 종이의 실례, 더욱이 돛자리 흔적이 찍힌 문서의 실례는 앞서 언급한 자료들 외에는 거의 알려져 있지 않다. 그런데 국박에 소장된 唐文書가 부착된 유물은, 용도에 맞춰 적당한 크기로 돛자리를 절단하여 사용한 점이 주목된다. 당시의 시신갈개용 돛자리는 대개 시신을 안치할 만한 크기로 만들며 테두리 부분의 풀림을

막기 위해 별도의 마감 처리를 하였다(洋海 무덤 葦席의 실례). 이에 비하여 국박 소장 유물은 어떤 목적에서인지 돛자리를 작은 크기로 재단하여 앞뒷면을 두겹의 종으로 감쌌다. 만일 시신을 안치할 돛자리라면 시신이 자리하는 돛자리 한면(중앙부)에 종이를 붙였을 가능성이 크다. 그런데 국박 소장 시신깔개는 적당한 크기로 재단한 돛자리의 앞뒤를 종으로 배접하되 돛자리의 테두리 부분을 두겹의 종으로 감싸고 뒷면의 돛자리 노출 부분은 종이를 덧대어 마감하였다. 이는 배접한 종이를 통해 재단된 돛자리의 테두리가 풀리지 않도록 잡아주는 한편 돛자리의 양면을 종으로 감쌀 필요가 있었기 때문일 것이다. 국박 소장 돛자리 단편의 배접 종이 표면에 남은 식물 흔적을 고려한다면 시신깔개의 양면을 감싼 배접 종이는 아마도 직물을 부착하는데 기능했을 것으로 추정된다. 물론 직물을 앞뒷면으로 둘러싸고 시신을 안치하기엔 크기가 작은 돛자리로 만든 葬具의 용도를 현재로서는 쉽게 단정하기 어렵다. 이와 관련하여 발표자는 2020년 작성된 보고서에서 국박 소장품을 ‘두침’, 일본의 관련품을 ‘족좌’로 추정하기도 했는데, ‘두침’으로는 높이가 적당치 않고, ‘족좌’로는 크기가 너무 크다. 이 역시 ‘시신깔개’의 범주에서 그 용도를 추정한 내용이다. 그렇다면 국박 소장의 직물로 감싼 돛자리를 시신을 안치하는 ‘시신깔개(尸席)’로 한정하여 이해한 것이 어찌면 喪葬用具로서 이 유물의 실제 용도를 파악하는데 장애가 될 수 있는 것은 아닐지 재고해 볼 필요가 있을 것이다.

발표4

東アジア世界における

ベトナム木簡の研究序説(1)

: 越境する「封緘木簡」・「木夾」・「夾板」

동아시아 세계에 있어서

베트남 목간의 연구서설(1)

: 월경하는 封緘木簡·木夾·夾板

東アジア世界におけるベトナム木簡の研究序説(1)

：越境する「封緘木簡」・「木夾」・「夾板」

Pham Le Huy(ベトナム국가대학)

はじめに

東アジアの木簡研究では従来無作為でありながらも、ベトナムのことが除外されてきた。その裏には現代の国際政治社会でベトナムが東アジアではなく、東南アジアの一國として認定されていることがある。もう一つの原因は、ベトナムで中國の楼蘭晋簡、日本の平城宮木簡、韓國の慶尚南道の成安山城木簡のような、まとまった木簡群が発見されていないからである。

ところが、ベトナムの近隣にある中國の廣州では2000年代を通じてかつてベトナム北部・北中部地域を支配した南越國の木簡群が発見された。それをみると、ベトナムでのまとまった木簡の発見は二十年後にしても四十年後にしても、もはや時間の問題に過ぎないと思われる。韓國・中國・日本で木簡研究の経緯や経験を参考にすると、木簡が発見されるまで今のうちに文献史料にみられる事例および個別の出土例を整理した上で、考古學者をはじめ、関係者の注意を喚起しておくべきである。

そうした立場に立脚した筆者は、これから「木夾」「木牌」の史料を紹介し、ベトナムにおける木簡研究序説を自分なりに整理しておきたい。またベトナムの事例を提示することにより、東アジアの木簡に関する理解を深めることができればと期待する。

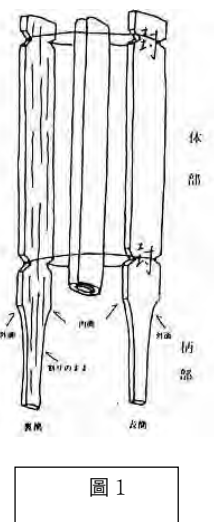
1. 「封緘木簡」に当たる「木夾」および「封緘木簡」の研究課題

従来の木簡研究の分類をみると、「封緘木簡」という特殊なカテゴリがある。筆者はベトナム関係の史料を通覧するうちにベトナムで封緘木簡に当たる「木夾」「夾板」という木簡が8世紀から18世紀まで利用され続けたことが判明した。

「木夾」を紹介するに先だって、まず封緘木簡に関する先行研究とその課題を筆者なりに整理しておきたい。所見では「封緘用木簡」の存在に初めて言及したのは平川南氏の「地方の木簡」(平川南1993)であるが、日本の各地方で発見した事例を網羅的に検討した上で「封緘木簡」という研究用語を定着させ、またその特徴と機能を論じたのは、佐藤信氏の「封緘木簡考」(佐藤真1995・1997)である。

日本で発見された封緘木簡の特徴として佐藤氏は圖1に示すように(1)一つの素材を整形し、それを二枚に割って割面を調整せずに割りのまま二枚一組のセットで使われたこと、(2)體部には紐をかけるために左右から切り開きを施すことが多いこと、(3)上にくる木簡(表簡)の外側に「封」や充所・差出などの墨書きがあることを指摘した(圖1)。

また封緘木簡の機能に関して佐藤氏は(1)紙を納めた文書函、(2)何らかの物品、(3)行



政文書そのものを直接挟んで封緘するという三つの用途を想定した。

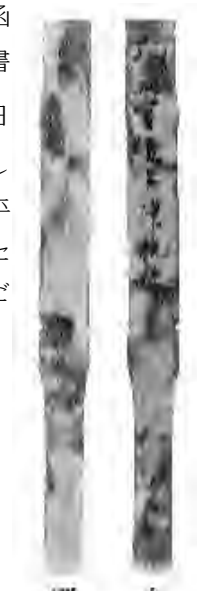
第一の用途に関して佐藤氏はまず文献史料として敕符などの文書を納めた函を糸で緘して松脂で封じた上、「賜某國」、「飛駅」、「月日時刻」などの文字を書き、さらに函を包む革囊^{かわぶくろ}の一端に付す短箒（木簡）に「賜某國飛駅函」、「年月日時刻」、函の左側にも「副官符若干通」と注記するという『儀式』の記述を参考にし、一部の封緘木簡も同じような用途で使われたと推定した¹⁾。下記の木簡は平城京長屋王邸で発見され、同遺跡で出土した文書函の法量（長さ三一～三六センチ・幅四～八センチ）に適合するため、第一の用途の封緘木簡に類する木簡だと考えられている（木簡資料1）。

【木簡資料1】（奈良文化財研究所『木簡庫』より転載）

遺跡名：平城京左京三條二坊一・二・七・八坪長屋王邸

遺構番号： SD4750 寸法(mm)：300 x 27 x 3

本文：「封」北宮進上○津税使



木簡資料1

第二の用途、いわゆる「何らかの小型・薄手の物品等を封緘する」木簡は小型の○三一型式として分類されており、それに類する実例は下記の木簡である（木簡資料2）。

【木簡資料2】（奈良文化財研究所『木簡庫』より転載）

遺跡名：平城京左京二條二坊五坪二條大路濠状遺構（北）

遺構番号： SD5300 寸法(mm)：(91)x 22 x 4

本文：



木簡資料2

1) 「於函上頭、記賜某國字、押緘之處書封字、其緘下右注飛駅字、左注月日・時刻、令内記一人、於革囊短箒、記賜某國飛駅函字及年月日時刻、又函左注副官符若干通字、〈官符副在函外、同納囊中〉（『儀式』飛駅）。

第三の用途に当たる〇四系型式の木簡は木簡の幅などの規模が紙文書に相当しており、表に「封」以外に充所・差出を記載しても物品名を記さないことなどから、紙の文書を直接挟んで封緘する機能をもったと推定されている。それに類する木簡の実例は下記のようなものである（木簡資料3）。

【木簡資料3】（奈良文化財研究所『木簡庫』より転載）

遺跡名：平城京左京二條二坊五坪二條大路濠状遺構(北)

遺構番号：SD5300

本文：・封・印

なお、封緘木簡と関係ある後世の事例として佐藤氏は「長方形の材の両端に切り関きをもつ形態の木簡状薄板二枚で、折りたたんだ紙の文書を直接挟んで綴じ、一方の板に表書を書く事例がある」と言及したが、具體例を取り上げなかった。

その後、吉川聡氏は興福寺所蔵典籍文書を調査する際に第89函65号文書である寛文10年（1670）10月10日付の「興福寺別當補任口宣案」に着目し、【圖2】に示すように二枚の木の板の間に、文書が挟んであり、（a）二枚の板を紙捻で結んであり、（b）紙捻をはずすと、板の間から懸紙に包んだ文書が現れるという特徴を指摘し、これは佐藤氏が言及した封緘木簡の後世事例だと位置づけた（圖4）（吉川聡2008）。



木簡資料3

【圖2】興福寺所蔵寛文10年（1670）10月10日付興福寺別當補任口宣案

（出典：吉川聡〈2008〉より転載）



図51 挟み板に挟まれた口宣案

以上、筆者なりに封緘木簡に関する先行研究を用途を中心に概説してきたが、次の課題が残されている。

第一に紙文書そのものを挟んで、封緘するという封緘木簡の第三用途はこれまであくまでもモノの観察から導かれた想定であり、それを裏付ける文献史料が提示されていない。

第二に東アジアの視点に即してみると、日本で発見された封緘木簡に類似したのは中国の漢代の「檢」だとされてきた(平川南1993、佐藤信1995・1997)が、佐藤氏が認めたように「檢」の場合は文書木簡の上にもう一枚同大の木簡(「檢」)を重ね、紐でしばり充所を上書するという若干の違いがあるのである。また「檢」が利用された漢代と、日本で発見された封緘木簡の主な年代である8世紀との間で時代の差があまりにも大きいという問題もある。

第三に封緘木簡の後世事例として吉川聡氏は興福寺の文書を紹介するとともに「ただ一例では到底、中世以降における封緘木簡の系譜を追求することはできず、今後の課題とせざるをえない」と認めた。

上記の課題を念頭におきながら、本稿ではベトナムを東アジア世界の一員として、文書そのものを挟んだという点で封緘木簡に当たる「木夾」という木簡の使用例を紹介した上でその後世事例として木夾の系譜をひいた「夾板」も加えて検討し、封緘木簡の理解を深めていきたい。

1. 安南都護府と南詔國の「木夾」

周知のようにベトナムの北部・北部地域は602年に隋朝に侵略され、唐朝が618年に成立すると、唐の版圖に収められ、679年以降「安南都護府」という行政機構の所管となった。本稿で問題にした「木夾」は9世紀半ばの安南都護府の攻防戦を起点にした雲南の南詔と唐朝の外交文書のやりとりに登場したものである。

南詔は8世紀半ばから雲南地域に勃興したチベット・ビルマ語族の王國である。8世紀後半から南詔は雲南に発源する紅河に沿って南方に影響力を伸ばすと、やがて紅河デルタを拠点にした唐の安南都護府と衝突することになった。咸通4年(863)南詔は安南都護府の府治を陥落させ、その長官蔡襲を殺害し、十萬人前後の唐人を捕虜した。ところが、唐軍は渤海出身である名将高駢が安南都護に任命されてから徐々に優勢を取り戻し、咸通7年(865)にようやく安南都護府の奪還に成功した。安南での失敗を経た南詔は咸通10年(868)以降、四川方面で引き続き唐軍と戦闘を繰り返した。

そうした状況のなかで咸通12年(870)4月、唐の宰相路巖は劍南西川節度使に左遷され²⁾、南詔との交渉に当たったのである。北宋の宣和2年(1120年)に宋徽宗の命で編纂された書法書『宣和書譜』には當時の交渉を示す次の記述がみられる。

【史料1】『宣和書譜』卷18、章孝規

章孝規、不知何許人、嘗為路魯瞻、書雲南木夾。詳考其始末、則魯瞻者、唐邊臣方面之官。雲南者、蠻夷之地、古有大雲南、小雲南是也。木夾、則彼方所謂木契。蠻夷之俗、古禮未廢、故其往復移文、猶馳木夾。魯瞻之書、當是復雲南之移文。

『宣和書譜』によると、雲南地域にはもともと「木夾」を用いる古俗があり、南詔は「木夾」を使って劍南西川節度使路魯瞻(路巖)に「移文」を送ったのである。「雲南木夾」に対して路巖は當時の書道名人・章孝規に返事を書かせたという。

ここで「木夾」というモノの利用は本来雲南地域にあった古俗で、南詔によって唐との外交に適用されたことがまず確認できよう。次に高駢と南詔との文書のやりとりに関する一連の史料から「木夾」の正體をさらに迫ってみよう。

2) 「四月、以左僕射、門下侍郎、同平章事 路巖檢校司徒、兼成都尹、劍南西川節度等使」(『舊唐書』卷19上、懿宗、咸通12年(870)4月條)。

乾符元年(874)4月に高駢は劍南西川節度副大使・知節度事に任命され³⁾、同年中節度使に昇格され、南詔との交渉の担当者となった。もともと安南都護府の陥落の戦いで南詔に捕虜された唐人のうちに嶺南經略判官杜驤とその妻李瑤二人がおり、李瑤は唐朝宗室の疎族出身である。そのため、高駢は和議を進める条件として二人の返還を南詔に提案した。この交渉は『資治通鑑』に次のように記述された。

【史料2】『資治通鑑』卷252、乾符3年(876)3月條

南詔遣使者詣高駢求和、而盜邊不息。駢斬其使者、蠻之陷交趾也。(事見二百五十卷懿宗咸通六年)、虜安南經畧判官杜驤妻李瑤。瑤宗室之疎屬也。蠻遣瑤還、遞木夾以遺駢。(遞牒、以木夾之、故云木夾。范成大桂海虞衡志曰、紹興元年安南與廣西帥司及邕通信問、用兩漆板夾繫文書、刻字其上、謂之木夾。按宋白續通典、諸道州府巡院傳遞敕書、皆有木夾、是中國亦用木夾也。遺唯季翻)稱督爽牒西川節度使、辭極驕慢、駢送瑤京師。

上記の史料によると、乾符3年(876)3月に南詔は高駢に「木夾」を送付して李瑤を返還したのである。『資治通鑑』の注釈を行った元代の胡三省は「遞牒、以木夾之、故云木夾」とあるように「木夾」とは「木」で夾んだ「遞牒^{ていちよう}」のことだとした。胡三省はまた「木夾」とは「^{ふた}兩つ漆板にして文書を^{はさ}夾み^{つな}ぎて、字を其の上に刻む」という宋代の范成大著『桂海虞衡志』も引用し、「木夾」をより詳細に解説した。

それでは、二つの漆板からなった「木夾」はどのように「^{つな}繫」がれたのだろうか。南宋代成立の『成都文類』(卷48)に記録された高駢の部下・胡曾の「代高駢回雲南牒」を読むと、「前件木夾、萬里離南、一朝至北、開緘捧読」とあるように、「木夾」の二枚の漆板が本来「緘」すなわち紐で結ばれ、読む際に「開緘」すなわち紐を解くという作法が読み取れるのである。

こうした南詔の「木夾」を受け取った高駢は「牒」で返事したが、その返事は『成都文類』に次のように書き残された。

【史料3】『成都文類』卷47

詔國前後俘獲約十萬人、今獨送杜驤妻、言是沒落。杜驤守職、本在安南。城陷驅行、故非沒落。星霜半代、桎梏幾年。李氏偷生、空令返國。杜驤早歿、不得還鄉。今則訓練蕃兵、指揮漢將。鐵衣十萬、甲馬五千。邕交合從、黔蜀齊進。昔時漢相、有七擒七縱之功。今日唐臣、蘊百戰百勝之術。勳名須立、國史永書。且杜驤官銜、李瑤門地、不是親近、但王室疏宗、天枝遠派而已。李氏並詔國木夾、並差人押領進送朝廷。是故牒。

高駢の牒によると、杜驤と妻李瑤二人の返還に関する高駢の提案に対して、南詔は杜驤がすでに「沒落」したのを理由に李瑤だけを送ったのである。それに対して高駢は依然として「官銜」(官職)を帯びた杜驤の返還にこだわり、納得しなかったものの、「李氏並詔國木夾、並差人押領進送朝廷」とあるように宗族である「李氏」(李瑤)と「(南)詔國の木夾」を朝廷に送り、また

3) 「以天平軍節度使、檢校尚書右僕射、兼鄆州刺史高駢 檢校司空、兼成都尹、充劍南西川節度副大使、知節度事」(『舊唐書』卷19下、僖宗、乾符元年(874)條)。

その対応を南詔に通知したのである。

上記の史料より高駢への「木夾」以外に南詔から唐の朝廷宛てのもう一つの「木夾」が送られたことが窺える。同じような文書のやりとりは、三年後の出来事にもみられる。

【史料4】『資治通鑑』卷253、乾符6年（879）2月丙寅條

驃信待雲虔甚厚、雲虔留善闡十七日而還、驃信以木夾二授雲虔、（其一上中書門下、上時掌翻）、其一牒嶺南西道、然猶未肯奉表稱貢。

高駢に次いで南詔との交渉に当たったのは嶺南西道節度使辛讜であった。朝廷は南詔に使者を再三派遣したが、使者が道中で相次いで死亡したため、辛讜は乾符6年（879）その部下である巡官徐雲虔を南詔に派遣した。同年2月善闡城（今は雲南の昆明）に到着した徐雲虔は南詔に対して唐朝に服属して、臣下として朝貢使を派遣するように力説した。ところが、南詔は以前使者を派遣し、唐の皇帝と兄弟又は舅甥という関係を結んだため、臣下の立場で「表」を上申し、朝貢すべきではないとのスタンスを崩さなかった。交渉が難航したなかで南詔驃信王は使者徐雲虔を厚遇した上で徐雲虔に二通の「木夾」を託した。「其一上中書門下、其一牒嶺南西道」とあるように一通は唐朝の中書門下宛ての「上」であり、もう一通は嶺南西道（辛讜）宛ての「牒」であった。

上記の事例から「木夾」は當時直接交渉を担当した節度使と朝廷に同時に送られたことがわかる。同時に複数のところに送られたため、高駢の事例には「牒西川節度使」、辛讜の事例には「其一上中書門下、其一牒嶺南西道」とあるように「木夾」の漆板の上に宛所を刻む工夫がなされたと考えられる。

以上、安南都護府関係の史料を検討することにより、唐代に南詔國は唐王朝に外交文書を送る際に二つの漆板で文書を夾んで、紐で結び、また板の上に宛所を刻むという「木夾」を活用したことを明らかにした。これらの史料は、佐藤真氏が想定した封緘木簡の第三の用途を裏付ける史料として位置づけることができよう。

「木夾」の使い方をさらに詳細に検討すると、「木夾」がまず「移」「牒」「通牒」など律令制で規定された上下関係のない機關と機關との間で取り交わされる文書形式に用いられたことがわかる。直接上下関係がない南詔と劍南西川節度使路巖、西川節度使高駢、また嶺南西道節度使辛讜との間で「移」や「牒」が用いられたのは当たり前のことだが、南詔は唐の朝廷とのやりとりに際しても「木夾」を利用したことが注目すべきであろう。「但不肯奉表稱貢」とあるように南詔は終始唐の臣下ではないスタンスを主張して、自分の外交文書を「表」ではなく唐の「中書門下」を宛所に「上」にしたのである。

通常「表函」に入れる「表」に違い、南詔による唐朝の「中書門下」宛ての「上」は「木夾」で封じられた。言い換えれば、「木夾」は「表函」よりワンランク下の封じ方であるという位置づけが読み取れる。その認識は『資治通鑑』の次の記事からも再確認できる。

【史料5】『資治通鑑』卷261、昭宗、乾寧4年（894）是歲條

是歲、南詔驃信舜化有上皇帝書函、及督爽牒中書木夾、年號中興。朝廷欲以詔書報之。王建上言、「南詔小夷、不足辱詔書、臣在西南、彼必不敢犯塞。」從之。

この記事によると、乾寧4年（894）、南詔驃信王は唐昭宗および唐朝の中書省に文書を送付した。前者の文書は「上皇帝書函」とあるように依然として「表」ではなく「上（書）」の形が採用さ

れたのだが、皇帝を宛所にしたため表に準えて「函」に納められた。それに対して後者の文書は「督爽牒中書木夾」とあるように「中書（省）」を宛所にした「牒」で「木夾」で封じられた⁴⁾。

それでは、なぜ「木夾」で封じなければならなかったのだろうか。紹介した事例から窺えるように西川節度使高駘や嶺南西道節度使辛讜はいずれも強硬な姿勢で交渉に臨んだため、南詔は節度使たちと別に唐の朝廷との直接的な交渉ルートを模索しなければならなかった。ところが、朝廷に文書を送ると、どうしても節度使たちを経由に逋送せざるをえなかった。このように節度使は、文書を受け取る側の一つでありながら、別の文書を逋送させる担当者でもある。逋送の担者に情報が漏洩し、また妨害されないように南詔は朝廷に文書を送る際に木で夾んで文書を封じるという「木夾」を採用したと考えられる。この点は後述するように後世の「木夾」や「夾板」にもよくみられる。

11～14世紀の「木夾」

「木夾」は11世紀から14世紀にかけて、雲南の諸勢力のみならず、ベトナム李朝や中國の宋朝にも活用された。

まず雲南地域では南詔國の滅亡後も937年に立國し、1253年まで存続した大理では「木夾」は引き続き外交文書に利用された。やや後世の史料であるものの、明代成立の『滇略』には下記の記述がみられる。

【史料6】『滇略』卷4、俗畧

唐西南夷多用木夾。徐雲虔使南詔、南詔待之甚厚、授以木夾遣還。宋宣和間、高泰運貽木夾書於邊將以求貢。其製用兩漆板、夾文書而刻字其上、以為信。五嶺邕管之間皆然、今夷人交易尚用木刻、多在神前呪誓、故不敢叛也。

上記の史料によると、北宋の宣和間（1119－1125年）大理國の第二中國公である高泰運は「木夾の書を邊將に貽り、以って貢を求め」、「其の製、兩漆板を用いて、文書を夾みて其の上に字を刻み、以って信となす」とあるように文書を漆板で夾んで、その上に字を刻んで宋朝の邊境の將軍に送って、朝貢を求めた。

ベトナム地域では紅河デルタを拠点に1009年に立國し、1225年まで存続したベトナム李朝（大越國）も「木夾」を活用して中國の邊境役所と外交文書を取り交わした。史料2にみられるように、胡三省は『資治通鑑』に宋の紹興元年（1131）、安南（李朝大越國）は廣西帥司及び邕州（南寧）と通信する際に「兩つ漆板にして文書を夾み繋ぎて、字を其の上に刻む」という「木夾」を利用したとの『桂海虞衡志』の逸文を紹介した。『桂海虞衡志』の撰者である范成大（1126－1193年）はもともと廣西經略使を歴任して、直接李朝との外交關係を司った人物であるため、上記の記述は非常に信憑性が高い史料だと言えよう。

それでは李朝の「木夾」にはどんな様式の文書が挟まれたのだろうか。まず南宋の周去非（1135

4) 當時の東アジアでは、外國の外交文書が「函」に入れて送付されると、邊境の役人は函を開封して、確認することができた。たとえば『類聚三代格』（卷18）の天長5年1月2日付格をみると、「右蕃客來朝之日、所着宰吏、先開封函、細勘其由。若違故実、隨即還却」とあるように天長3年までは蕃客が日本に文書の函をもたせると、地方の役人はそれを開封して確認することを許されたという。なお、承和3年（836）の日本太政官宛ての執事省牒にもみられるように、新羅執事省宛ての太政官牒も函に入れられたことが確認できた。その点からみると、南詔の「木夾」が非常に特殊なものであることがわかる。

- 1189年) 著『嶺外代答』(卷5)に「其邊永安州移牒于欽、謂之小綱、其國遣使來欽、因以博易、謂之大綱」とあるように李朝の邊州である永安州は宋朝の欽州に「移牒」で連絡していたことがわかる。

同じ『嶺外代答』に「其文移至邊、有判「安南都護府」者。亦外職也」とあるように、李朝の朝廷も「安南都護府」の名義で中國の邊境役所に「移」で文書を送付した。11世紀後半になると、1075～1077年の戦争で象徴されたように宋越關係が悪化したなかで李朝は「安南都護府」ではなく、「南越國」として「移」の形で文書を送付するようになった。その一端を示すのは次の史料である。

【史料7】『文獻通考』卷330所引『桂海虞衡志』

凡與廣西帥司及邕州通訊問，用二黑漆板夾繫文書，刻字於板上，謂之木夾文書。稱安南都護府，天祚不列銜而列其將佐數人，皆僭官稱。有云金紫光祿大夫、守中書侍郎、同判都護府者，其意似以都護府如州郡簽廳也。帥司邊州報其文書，亦用木夾。桂林掌故、有元祐熙寧間所藏舊案交人行移、與今正同。印文曰、「南越國印」。近年乃更用「中書門下」之印。中國之治略、荒遠邊吏、又憚生事例置不問、由來非一日矣。

上記の史料によると、12世紀には桂林の役所には熙寧(1068-1077年)・元祐(1086-1094年)年間の外交文書の舊案が残っていたため、范成大はそれを調査したところ、11世紀後半の「交人行移」すなわち李朝の「移」には「南越國印」が押印されたことが判明した。また「近年」すなわち范成大が『桂海虞衡志』を撰した12世紀後半になると、李朝の「移」に「中書門下」の印が押印してあったのである。「南越國」と「中書門下」はいずれも宋朝に冊封されなかったもので宋朝から見ると僭称ではあるが、國境問題が緊張したなかで中國の邊境役人は李朝と軍事衝突が生じないようにそれを看過して朝廷に報告しなかった。

他に『嶺外代答』(卷2)に「其國入貢、自昔由邕或欽入境。蓋先遣使議定、移文經略司、轉以上聞」ともみられるように李朝は朝貢使を派遣するたびに、事前に使者を邕州か欽州に派遣して議定した上で、「移文」をもって經略司に正式に連絡し、また宋の朝廷に報告してもらったのである。

以上の史料から11世紀から13世紀にかけて李朝の朝廷および永安州などの邊州は、廣西、邕州、欽州などの宋朝の邊境役所に対して、「移」という文書様式で外交文書を作成し、黒漆の板でそれを夾んで紐で結び、「木夾」の形で連絡していたことがわかる。

こうしたやり方は李朝を次いだ陳朝(1225-1400年)に繼承されたようである(史料8)。

【史料8】『大越史記全書』本紀卷5、壬寅天應政平11年・宋淳祐2年(1242)條

夏四月，命親衛將軍陳閏擎將兵，鎮守北邊，攻略憑祥路地方。初，自元太宗崩後，關再往往不通，如有使命，惟正副二員，從人二輩而已。進貢方物，其數若干，緘封送至界首，本處土官守管領遞送使人至京，但上具本東奏貢物、無全至者。至是，命將守禦攻略，始得與宋通好。

史料8によると、陳朝は南宋に朝貢する際に「進貢方物，其數若干，緘封送至界首」とあるように朝貢の品目と數量を文書に記した上で「封緘」した上でモノと文書両方を南宋の邊州の土官にその逡送を頼らざるをえなかった。ところが、使者が都に到着した際には実物と文書の品目が一致しないこともあり、すなわち邊境の土官たちに一部を取られた実態が発生していた。そのため、陳朝は南宋の憑祥路に侵入・占領し、朝貢路を確保したのである。明瞭な記述ではないもの

の、「緘封」の表現から李朝の傳統をひいて「緘封」の木夾が利用されたことが推測できるだろう。

以上の史料からベトナム李・陳朝は11世紀から14世紀末にかけて中國の宋朝、またそれを次いだ元朝の邊境役所に対して「移」を挟んだ「木夾」を送付していたことが確認できよう。

また注目すべきなのは中國側の邊州もその作法にならって「木夾」で李陳朝側に返事していたのである。史料7に「帥司邊州、報其文書、亦用木夾」とあるから、廣西帥司や宋朝の邊州は、李朝が送付した文書に「木夾」を用いて返事の文書を出したことがわかる。その実態は次の『桂海虞衡志』の逸文からも再確認できる。

【史料9】『文獻通考』卷330所引『桂海虞衡志』

乾道八年春、上言願朝賀聖主登極、詔廣西經略司、「貢使來者、免至廷方物受什一」。
其秋復有詔下經略司、買馴象十以備郊祀鹵簿。經略李德遠浩用木夾事移交趾買之。蠻
報不願賣願以備貢。

乾道8年(1172)の秋、南宋の朝廷は南郊祭祀(「郊祀」)の開催を計画した。「郊祀」には交趾(大越)の馴象の行列が北宋の時代から重要視されたため、宋孝宗は廣南經略司に詔を下して交趾の馴象の購入を命じた。詔をうけた廣南經略司李德遠は「木夾」を利用して、李朝に「移」を送り、購入を打診したという。

木夾の文化はこうして本來雲南地域の古俗として発祥し、唐代を通じて南詔によって唐の朝廷および節度使への外交文書に応用され、帝國の邊境地域に浸透し、中國の邊境役所にも利用されはじめた。

また中國の内地でも「木夾」と同じようなものが様々な場面で活用された。たとえば『續資治通鑑長編』(卷5)によると、開寶5年(972)、宋朝は諸州には役人の關員または朝廷に解文を送付する場合、「以木夾重封題號」とあるように「木をもって夾んで、重ねて封じて、号を題す」⁵⁾ことを命じた。

さらに史料2に見られるように『資治通鑑』を注釈する際、胡三省は「按宋白續通典、諸道州府巡院傳遞敕書、皆有木夾、是中國亦用木夾也」とあるように宋白(936年-1012年)著『續通典』の逸文を引用して、宋朝で諸道州府巡院は敕書を傳遞する際に「木夾」を利用したとの事例を指摘し、これは中國の「木夾」と位置づけた。

14世紀以降の「木夾」-「夾板公文」

上記に言及したようにすでに10世紀から宋朝は、諸州からの關員に關する解文をはじめ、一部の解文に限って、「以木夾重封題號」とあるように「木をもって夾んで重ねて封じる」ことを求めている。「重封」という表現からこれらの解文はおそらく函に納められ、一端封じられた上でまた木で挟まれて再度封じられたという作法が窺える。

そうした二重の封は、おそくとも明代初期(14世紀後半)になると、下から上に上がる表文の傳達に応用され、「夾板」として制度化された。『明會典』(史料9)に記録された洪武14年(1381)の禮制では「表用黃紙箋、用紅紙為函、外用夾板夾護」とあるように黃紙箋^{せん}の表文は紅紙による函に納められ上で函の外でまた「夾板」で挟まれることが規定されていた。いうまでもなくこのような「重封」は、吉川聡氏が取り上げた「興福寺別當補任の口宣案」と同様である。

5) 「諸州員關並仰申關解條樣以木夾重封題號。逐季入遞送格式、其百司技術官關解、亦準此」(『續資治通鑑長編』卷5、開寶5年(972)條)。

【史料10】『明會典』卷74、禮部33、表箋

洪武禮制

一凡表箋、止作散文、不許循習四六舊體。務要言詞典雅、不犯應合迴避凶惡字樣。仍用硃筆圈點句讀。表用黃紙箋、用紅紙為函、外用夾板夾護、拜進并依見行儀式。

その一方、中越國境では11世紀から14世紀にかけて中越両側は「木夾」で連絡し合ったという。これは前述した通りであるが、その傳統が17世紀まで「夾板公文」として繼承されたことは次の史料から窺える。

【史料11】『奥西詩載』卷30、誅陸佑韋達禮

達禮從其計、因假稱內附、誣交南耆目逆篡、冀絕貢道、以圖舉事。督府聞之、大駭、以其事聞責鄭松、令擒達禮、周佑、責黃應雷令擒陸佑等。調江州等州官兵、壓思明境上以待。鄭松得檄、即遣其子鄭壯、統兵衆疾馳入祿州、擒達禮。達禮聞之、先期逸去、止獲佑保等、以夾板公文、從便道、獻官兵、既入思明境。至風門嶺、應雷亦獲黃尚、出獻陸佑、阻兵抗、命遂逐應雷而奪其印、率衆與官兵拒戰。

明代の萬曆29年(1601)に安南祿州土司である韋達禮は廣州の思明州頭目周佑と手を結んで明朝の思陵州に侵入し、その土官韋紹曾をせめて、印信を奪い取り、また安南の貢道を絶とうとした。明の右軍都督府(督府)は、安南の鄭主鄭松に韋達禮を捕らえるように、また廣州知府黃應雷に達禮の与党である周佑、陸佑を捕らえるように命じた。鄭松の命令を受けたその子鄭壯に安南軍を率いて、祿州に入り、韋達禮を捕ろうとしたが、韋達禮は事前にそれを察して、「以夾板公文、從便道、獻官兵、既入思明境」とあるように「夾板公文」を明側に送付して降伏したのである。

この事件から1600年代前後にベトナム(大越國)の邊境の土官は、李陳朝期の邊州と同様、「夾板公文」を用いて中國側の邊境役所と連絡したことが判明した。

また李陳兩王朝が朝貢使を派遣する際に「木夾」を宋元の邊境役所に送付し、朝貢の準備を進めたのは前述した通りであるが、同じことはベトナム黎朝の清朝への朝貢にもみられる。その制度はまず『廣西通志』に康熙14年(1675)例として次のように記録された。

【史料12】『廣西通志』卷96、諸蠻安南附紀

朝貢方物(康熙十四年例)

欵貢之年、分巡道預詳督撫、檄傳該國王、取入關限期。國王乃遣使并通事領齎夾板公文、投遞本道。屆期、使臣將貢物運至坡壘驛、龍憑關守備探實、具報本道、即移駐太平府料理、委驗貢官帶銀匠馳往將貢物、細驗秤明、造冊呈道、發示啟關、而新太參將先領官兵、至關上擺列及把守各隘口本道於啟關三日前由太平府、率南太兩府官同至思明土府駐劄、次日、至受降城、又次日至幕府營、由幕府營至關十里、是夜四更、後發號鼓三通、各土司兵馬齊集、先行護衛(後略)

當史料によると、朝貢の年度になると、廣西分巡道は黎朝の國王に連絡し、關に入る「限期」(期日)を決めた。黎朝の國王は、事前に使と通事(通譯)を「夾板公文」をもって國境に行か

せ、廣西にそれを「投遞」すなわち引き渡して、上の機関に逋送してもらった。期日になると、使臣は貢上物を坡壘驛にもって行き、龍憑關の守備官に審査してもらった。

上記の康熙14年(1675)の例は18世紀後半まで実施された実態はベトナムに現存する黎貴惇著『北使通錄』の記録から窺える。黎貴惇(1726-1784年)はベトナム黎朝中興期の代表的な學者で、1760年から1762年にかけて朝貢使として清に派遣された。當遣使で黎貴惇は北京で朝鮮使臣と詩文を交わしたこともあり、韓半島と縁が深い人物でもあった。『北使通錄』の卷一には、朝貢準備が着手された戊寅年(1758年)10月から黎貴惇が入清した己卯年(1759年)12月までの出来事および黎朝と清朝との間で取り交わされた外交文書が記録された。

本稿ではまず景興20年(1759)7月3日の文書に着目したい。

【史料13】『北使通錄』(28b-29a)

五府府僚等官

計

一、奉傳諒山處督鎮官香嶺侯枚世準、督同阮宗理等、係茲期有公文式套、投遞兩廣總督與左江道官、言附奏告哀事、請與貢部並進、等因、應如見送到、即刻付與守隘、謹將夾板公文作急交與內地龍憑守隘益接領、馳遞、以濟公務、慎毋牽緩、茲奉傳、景興二十年七月初三日、

上記の文書は五府府僚という黎朝の中央機関は、國境にある諒山處の督鎮官枚世準などの役人を宛所にした「傳」の文書である。

當時、黎朝は「歳貢」にあわせて庚辰年(1760年)に朝貢使(「貢部」)を派遣するために己卯年(1759年)2月24日付の文書をもって清の左江道に連絡し、一応その合意を得たのである⁶⁾。ところが、同年閏6月8日に上皇黎懿宗が崩御したという事態が発生した。朝貢使と告哀使を別々に派遣するのがきわめて不便であったため、黎朝は同じ使節にまとめようとしたが、外交の手続き上では清の朝廷から許可を受ける必要があった。そのため、黎朝は清の「兩廣總督」および「左江道(官)」に「式套の公文」をそれぞれ送付し、清の朝廷に報告するように依頼したのである。史料13は五府府僚が、國境にある諒山處督鎮官に「夾板公文」の形になった「式套の公文」を清の「龍憑守隘」(龍憑隘の守備官)に引き渡すように指示したものである。

「夾板公文」である「式套の公文」とは、『北使通錄』(26b~28a)に記録された乾隆24年(1759)閏6月27日付の(1)「安南國王」による「兵部尚書總督兩廣部堂」(兩廣總督)宛ての「咨」と(2)「安南國王」による「廣西左江兵備道管轄南太鎮泗四府府漢土州縣苟司等處地方」(左江道官)宛ての「咨」のことである⁷⁾。このように安南國王(黎顯宗)は兩廣總督と左江道官に対して「咨」という文書様式をもって、「夾板公文」の形で連絡したという実態がまず確認できる。

安南國王の「夾板公文」を受け取った兩廣總督は清の朝廷に奏上したが、告哀使の件に關してなかなか許可が降りてこなかった。そのため、兩廣總督は同年8月8日付の文書をもって左江道官に連絡して、安南に進捗を伝えるように命じた。兩廣總督の命令を9月5日に受け取った左江道官は9月17日付の文書で黎朝に通知したのである⁸⁾。

このように清朝内部の手続きが非常に遅れたなかで使者の出発予定の期日が迫ってきた。焦っていた黎朝は清の朝廷の返事を待たずに康熙14年例のように通事たちを國境に派遣し、關係

6) 『北使通錄』(18a-19b)。

7) これらの「咨」は『北使通錄』(26a-28b)に記録されている。

8) 『北使通錄』(68a-69b)。

の手續きを済ませようとした。

史料15と史料16によると、通事たちは9月上旬に「夾板公文」と「官物」を預かって、都を出て京北處を経由に國境の諒山處に到着することになった。通事たちを逕送するために、五府府僚は沿道の各鎮に「傳」を下し、兵士を動員して通事を護送するように命じた。史料15は8月29日付の諒山處への「傳」で、史料14は9月3日付の京北處への「傳」である。

【史料15】『北使通錄』(41b)

五府府僚等官

計、

一、奉傳諒山處督鎮官香嶺侯枚世準、督同官阮宗瑄等、係茲期前路通事奉將夾板公文、并官物往關上、以九月上旬起程等因、應量差兵整備器械等項、并督押驛夫依期就本處界首夾京北地頭、照據京北鎮兵交付領取、送就關上、其所差當防守慎密、以濟公務、有公法在、茲奉傳、
景興二十年八月二十九日、

【史料16】『北使通錄』(42b-43a)

五府府僚等官

計、

一、奉傳京北處鎮守官造基侯范吳休、督同官謝廷煥等、係茲期奉差前路通事奉將夾板公文、并官物往關上、以本月上旬起程、等因、應星速量差屬員一名、并兵二千人、整備器械等項、迅就愛慕河津護送、就諒山界首、交付伊處接逕到關、奉行公務、其所差當防守慎密、免庶疎虞、茲奉傳、
景興二十年九月初三日

史料17によると、通事阮國珩、阮廷【王輦】二名と探兒阮勢錫、阮廷斯、郭登瑤三名からなった「前路通事」たちは、「奉表、奉本稿共陸冊」「公文式拾壹套」「侯命官柬文壹套」という公文を國境に携行した。通事たちは國境で清側の龍憑守隘にそれらの公文を引き渡した後、そのまま國境で待機し、清側から修正された原稿が戻ってきたら、それを受け取った後、黎朝に報告するという任務を与えられた。

【史料17】『北使通錄』(43a-43b)

五府府僚等官

計、

一、奉傳前路通事阮國珩、阮廷【王輦】、探兒阮勢錫、阮廷斯、郭登瑤等、係茲期應領奉表、奉本稿共陸冊、并公文式拾壹套、與侯命官柬文壹套、往就關上、同守隘快岩伯韋福洪、琨忠侯阮廷璿等、通報與龍憑守隘開關、接領公文、投遞納內地官列位、待得有正稿激回、即接領通納、以濟公務、若奉行不虔、有公法在、茲奉傳、
景興二十年九月初三日

「奉表、奉本稿共陸冊」とは、乾隆24年(1759) 9月3日付の「歲貢」に關する四冊の表文と「告哀」に關する二冊、あわせて六冊からなった表文の原稿である。「公文式拾壹套」とは、清朝の二

十一の役所への公文である。

二十一の役所は『北使通録』(51b~53a) に列記されており、下記の表にまとめられる。

番号	宛所	文書様式	
1	兵部尚書兼都察院右都御史総督廣東廣西等處地方軍務兼理糧餉李	咨	
2	兵部侍郎兼都察院右副都御史巡撫廣西等處地方提督軍務郭	咨	
3	提督廣西全省水陸軍務統轄各路漢土官兵加三級史	咨	
4	鎮守廣西左江地方統轄漢土守禦官兵総鎮都督府加三級段	咨	
5	欽命廣西等處承宣布政使司加三級葉	咨	
6	欽命廣西等處提刑按察使司加三級申	咨	
7	欽命分巡左江兵備道加三級張	咨	
8	叶鎮廣西新太等處地方兼轄漢土官兵副總兵官歐陽	咨	
9	廣西太平府正堂紀錄十二次查	咨	
10	廣西龍憑守營都閫府加一級馬	咨	
11	署理廣西太平糧捕分府加三級李	咨	
12	廣西寧明州正堂加三級王	移	
13	廣西崇善縣正堂加一級李	移	
14	廣西南寧府正堂加三級管	移	
15	廣西宣化府正堂加一級陳	移	
16	廣西馮蘊營都閫府加一級張	移	
17	廣西龍憑總部陳	移	
18	憑祥府正堂李	移	
19	上龍司正堂趙	移	
20	太平府下石州正堂閉	移	
21	廣西新寧州正堂	移	

以上の表から黎朝皇帝(黎顯宗) は「咨」と「移」という文書様式で清朝の邊疆役所に連絡したことが確認できたが、これらの文書は「夾板公文」の形で送付したことが次の史料から窺える。

【史料18】『北使通録』(80b~)

是月初六日、左江道官送來咨文、及總督公文、內言繳回歲貢表稿四道、其告哀表二道、存候部覆、別行知照、

天朝署理廣西巡左江兵備道管轄南太鎮泗四府府漢土州縣苟司等處地方加三級紀錄五次鍾

為投報公文事、

乾隆二十四年十一月初十日、

奉 兵部尚書總督兩廣部堂李、憲牌內開乾隆二十四年十月十四日、據該道呈稱、「乾隆二十四年九月二十九日、據崇善縣申、準龍憑營都閫府勇移送安南國王夾板公文、傳繳至道、當將公文折閱、內府開安南國王嗣黎為咨文事、

(後略)

十一月六日に兩廣總督の公文と左江道官の咨文は黎朝に到着したが、上記の史料は兩廣總督

の公文の内容を記したものである。それを読むと、黎朝の公文は龍憑營都閩府→崇善縣→左江道→總督兩廣という順番で上がったことがわかる。

龍憑營都閩府、崇善縣、左江道、總督兩廣が表のNo.10、No.13、No.7、No.1に当たっていることが注目すべきである。要するに黎朝はこれらの機關に文書を送って、状況を説明するとともに上の機關に文書を逡送してもらったという段取りが確認できる。具体的に黎朝の「前路通事」たちから21通の文書を受け取った龍憑營都閩府はNo.10の文書を開いて読んだ上で他の文書を崇善縣に逡送した。それを受け取った崇善縣は自分宛てのNo.13の文書を読んで、左江道に他の文書を逡送した。左江道はまた自分宛てのNo.17の文書を受け取って、兩廣總督關係の文書を逡送した。いわゆる「逡送」「傳逡」というやり方である。また「準龍憑營都閩府勇移送安南國王夾板公文」とある表現から二十一の「咨」や「移」はすべて「夾板公文」の形で送付されたと窺える。

要するに龍憑官や崇善縣や左江道はそれぞれ文書の受け取り側の一つでありながら、上司の役所に文書を逡送する責任者でもある。複数の文書が同時に逡送されると、途中の逡送者に内容が漏れないように「夾板」が「公文」を封じる方法として採用された。

一方、もともと黎朝は「歳貢表稿四道」と「告哀表二道」からなった六冊の表文に目を向けると、史料18に「是月初六日、左江道官送來咨文、及總督公文、内言繳回歳貢表稿四道、其告哀表二道、存候部覆、別行知照」とあるように「歳貢」の件がすでに朝廷に裁可されたため、兩廣總督は「歳貢表稿四道」を確認した上で原稿を黎朝に戻した。それに対して「告哀」が朝廷に裁可されていなかったため、兩廣總督はそれを保留して、裁可されてから追って連絡すると黎朝に通知したのである。

こうして清朝の皇帝に奉る表文の原稿は、「夾板公文」にされず、清朝の邊境役所にチェックされ、問題があったら、修正されるものである。こうしたやり方は、日本古代國家の外交文書の扱い方を連想させた。

【史料】『類聚三代格』卷18、夷俘并外蕃人事

一応写取進上啓牒事

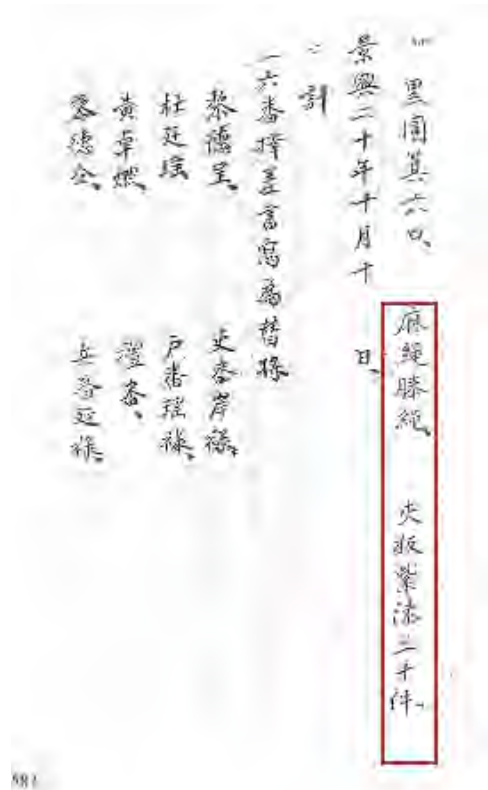
右蕃客來朝之日、所着宰吏先開封函、細勘其由。若違故実、隨即還却、不勞言上、而承前之例、待朝使到、乃開啓函、理不可然、宜國司開見写取進之、以前中納言兼左近衛大將從三位行民部卿清原真人夏野宣、如右、

天長五年正月二日

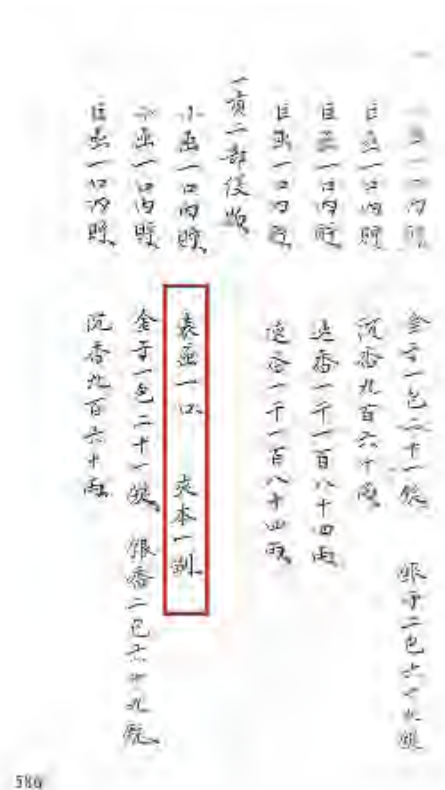
上記の史料によると、新羅も含めた外国使節（蕃客）は日本列島に到着すると、到着地の官吏は、文書の函を開封し、内容をチェックした上でもし内容に問題があったら、それをただちに返却する権限を与えられた。これは、天皇の面子を守るために失禮な文言が入った文書が天皇の目に上がるのを防ぐための事前防止の装置であった。

兩廣總督と黎朝との間で表文の最終版が合意されると、『明會典』(史料10)の洪武禮制と同様、黎朝は表を「夾板」で挟んで「表函」を入れ、朝貢使に北京まで携行させたのである。『北使通錄』(65a~65b)には貢物として「表函一口」と「夾板一副」が列記されたが、この「夾板一副」は表を挟むための夾板だと考えられる。一方、『北使通錄』(67b)に使者の荷物として「夾板紫漆三十件」との項目もみられており、これらの「紫漆夾板」は、使者が中國の内地に入った後、中國の各機關と文書を取り合わせるために準備されたと推定できる。なお、「麻繩」「藤繩」もみられ、「夾板」を結ぶ紐として利用された可能性が高い。

『北使通錄』(67b)



『北使通錄』(65b)



終わりに

本稿ではベトナム關係の史料を検討することにより、すでに9世紀半ばから雲南地域の南詔國と唐帝國の邊境役所との文書のやりとりでは漆板をもって「移」「牒」「通牒」などの文書を夾んで紐で結び、板の上に宛所を記すという「木夾」が活用されたことが確認できた。「木夾」のこうした作法は、日本で発見された封緘木簡の第三用途に類似しており、「木夾」に關する文献史料は、從來推定された封緘木簡の第三用途を裏付ける強力な文献史料として位置づけることが可能であろう。

宋代の史料によると、「木夾」はもともと雲南地域にあった「古俗」で、唐代に外交文書に適用されたという。その起源を追求するのは今後の課題にしたいのだが、敢えて仮説を取り上げると、雲南地域の「木夾」や日本の「封緘木簡」の作法は西アジアから傳わってきた、いわゆる「梵夾」という折本の仏典から影響を受けた可能性があると思われる。

「木夾」の利用は10世紀以降、雲南地域で南詔を次いだ大理に繼承された。またベトナム地域では安南都護府の傳統をひいた李朝も、朝貢もふくめて、宋朝の邊境役所に連絡するたびに「木夾」で「移」を封じた上で文書を送付したのである。宋側の廣西帥司や邕州の宋朝の邊境役所もそれに倣って「木夾」を用いて李朝に返答を出した。宋代の中國内地では地方の役人の關員を「解」で報告する際や諸道州府巡院が敕書を「傳遞」する際にも「木夾」と同じ作法の封じ方が導入されのは史料で確認できるが、史料の限界により詳細に究明するのは今後の課題である。

李朝の「木夾」はそのまま陳朝と元朝との文書のやりとりに繼承されたとし、15世紀成立の黎朝になると、明の洪武14年（1381）の禮制、さらに清朝の康熙14年（1675）の例などに「夾板公文」として制度化された。その実態は18世紀後半の『北使通錄』の記録より詳細に確認できるのである。

前近代の情報傳達では「傳遞」や「通牒」などの言葉にみられるように複数の文書は下から上へ、または上から下へ同時に遞送されることがある。その際、路次の役所は文書を受け取る側の一つでありながら、次のところへ残りの文書を遞送する責任者でもある。遞送の途中で遞送者に情報が漏れないように「木夾」や「夾板」が文書の封じ方として活用されたのである。

ところが、天皇や皇帝への外交文書である「表」には「木夾」や「夾板」があまり利用されなかった。それは國家の頂点にある天皇や皇帝の面子に深く関わっており、天皇や皇帝の目に失禮な文書が上がないように表文が逆に関係者のチェックに供するために公開されることになった。

以上、一國史を乗り越えてベトナムの史料を活用して、「木夾」「夾板」を検討することにより、前近代の情報傳達における文書の封じ方、越境する文書における木簡の活用に関する理解をより深めることができた。ベトナムには他に「木牌」という木簡も存在していたが、枚数の関係で別の機会で紹介したい。

参考文献

- 平川南「地方の木簡」（川崎市民ミュージアム編『古代東國と木簡』（雄山閣、1993年）
 佐藤真「封緘木簡考」（『木簡研究』第17号、木簡學會、1995年）（後に加筆された上で『日本古代の宮都と木簡』吉川弘文館、1997年に収録された）
 吉川聡「文書の挟み板」（『奈良文化財研究所紀要』44-45、2008

동아시아 세계에 있어서 베트남 목간의 연구서설(1)

: 월경하는 封緘木簡·木夾·夾板

Pham Le Huy(베트남국가대학)

머리말

동아시아 목간 연구에서는 그동안 의도적이지는 않았지만 베트남에 대한 연구가 제외되어 왔다. 그 이면에는 현대 국제정치 사회에서 베트남이 동아시아가 아니라 동남아시아의 한 나라로 인정되고 있다는 사실이 있다. 또 하나의 원인은 베트남에서 중국의 누란(樓蘭) 진간(晉簡), 일본의 헤이조쿄(平城宮) 목간, 한국 경상남도의 성산산성 목간 같은 한대 모인 목간군이 발견되지 않았기 때문이다.

그런데 베트남 인근에 있는 중국 광저우(廣州)에서는 일찍이 베트남 북부, 북중부지역을 지배한 남월국의 목간군이 2000년대에 발견되었다. 이를 보면 베트남에서 다량의 목간이 발견되는 일이 20년 뒤가 되든 40년 뒤가 되든 이제는 시간 문제에 지나지 않는다고 여겨진다. 한국, 중국, 일본에서의 목간 연구의 경위와 경험을 참고하자면, 목간이 발견될 때까지 그 사이에 문헌 사료에 보이는 사례 및 개별 출토 사례를 정리한 다음 고고학자를 비롯하여 관계자들의 주의를 환기해두어야 할 것이다.

그런 입장에 있는 필자는 이제부터 ‘목협’, ‘목패’에 관한 사료를 소개하고, 베트남의 목간 연구서설을 나름대로 정리해 두고자 한다. 또한 베트남의 사례를 제시함으로써 동아시아 목간에 관한 이해를 심화시킬 수 있기를 기대한다.

1. ‘봉함목간’에 해당하는 ‘목협’과 ‘봉함목간’의 연구 과제

지금까지의 목간 연구의 분류를 보면 ‘봉함목간’이라는 특수한 카테고리¹⁾가 있다. 필자는 베트남 관계 사료를 통람(通覽)하면서 베트남에서 봉함목간에 해당하는 ‘목협(木夾)’, ‘협판(夾板)’이라는 목간이 8세기부터 18세기까지 사용되어 왔음을 알 수 있었다.

‘목협’을 소개하기에 앞서 먼저 봉함목간에 관한 선행연구와 그 과제를 필자 나름대로 정리해 두고자 한다. 필자가 보건대 ‘봉함용 목간’의 존재에 대하여 처음으로 언급한 것은 히라카와 미나미(平川南)의 「지방의 목간」[平川南1993]이지만, 일본의 각 지방에서 발견된 사례를 망라하여 검토한 다음 ‘봉함목간’이라는 연구용어를 정착시키고, 그 특징과 기능을 논한 것은 사토 마코토(佐藤信)의 「봉함목간고」[佐藤信1995·1997]이다.

사토는 일본에서 발견되는 봉함목간의 특징으로, 그림 1에서 제시하듯이, (1) 하나의 소재의 형태를 다듬고 그것을 두 장으로 잘라 자른 면을 조정하지 않고 두 장을 한 세트로 사용한 점, (2) 몸체 부분에는 끈을 걸기 위해 홈을 파는 경우가 많은 점, (3) 위에 오는 목간(표간)의 바깥쪽에 ‘봉(封)’이라는 글자나 받는 곳, 보내는 곳 등을 먹으로 쓰는 점을 지적하고

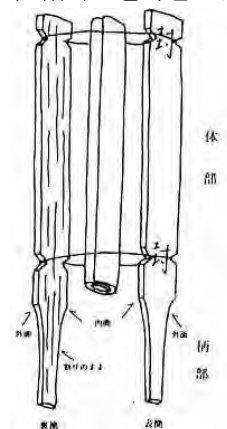


그림 1

또한, 봉함목간의 기능에 대해서 사토는 (1) 종이를 넣는 문서함, (2) 어떠한 물건, (3) 행정문서 자체를 직접 끼워서 봉함하는 세 가지 용도를 상정하였다.

첫 번째 용도에 대하여 사토는 우선 문헌 자료로서, 칙부(勅符) 등의 문서를 담은 상자를 실로 묶고 송지(松脂)로 봉한 다음, ‘모 국에 하사하다[賜某國]’, ‘비역(飛驒)’, ‘월 일 시각’ 등의 문자를 쓰고, 또 상자를 싸는 가죽 주머니의 한쪽 끝에 다는 단적(목간)에 ‘모 국에 하사하는 비역 상자[賜某國飛驒函]’, ‘연 월 일 시각’, 상자 왼쪽에도 ‘관부 약간 통을 첨부한다[副官符若干通]’고 주기(注記)한다는 『의식(儀式)』의 기술을 참고하여, 일부 봉함목간과 같은 용도로 사용되었다고 추정하였다¹⁾. 다음 목간은 헤이조쿄(平城京) 나가야왕(長屋王) 저택에서 발견되었고, 같은 유적에서 출토된 문서 상자의 치수(길이 31~36cm, 폭 4~8cm)에 들어맞기 때문에, 첫 번째 용도의 봉함목간과 비슷한 목간으로 추정되고 있다. (목간자료 1)

【목간자료 1】(나라문화재연구소 『목간고』에서 전재)

유적명: 헤이조쿄 좌경 3조 2방 1, 2, 7, 8평 나가야왕 저택

유구번호: SD4750

치수(mm): 300 x 27 x 3

본문: 「封」北宮進上○津稅使



목간자료 1

두 번째 용도, 이른바 ‘무언가 작고 얇은 물품 등을 봉함하는’ 목간은 소형 031 형식으로 분류되고 있으며, 그와 비슷한 실제 사례는 다음 목간이다. (목간자료 2)

【목간자료 2】(나라문화재연구소 『목간고』에서 전재)

유적명: 헤이조쿄 좌경 2조 2방 5평 2조대로 호상 유구(북쪽)

유구번호: SD5300

치수(mm): (91) x 22 x 4

본문 :



목간자료 2

1) ‘於函上頭，記賜某國字，押緘之處書封字，其緘下右注飛驒字，左注月日・時刻，令內記一人，於革囊短籍，記賜某國飛驒函字及年月日時刻，又函左注副官符若干通字<官符副在函外，同納囊中>’(『儀式』飛驒)

세 번째 용도에 해당하는 04계 형식의 목간은 목간의 폭 등 규모가 종이 문서에 대응되며, 표에 ‘봉’ 이외에 받는 곳과 보내는 곳을 기재하나 물품명을 적지 않는다는 점에서 종이 문서를 직접 끼워서 봉합하는 기능을 가진 것으로 추정된다. 이와 유사한 목간의 실제 사례는 다음과 같다. (목간자료 3)

【목간자료 3】 (나라문화재연구소 『목간고』에서 전재)

유적명: 헤이조쿄 좌경 2조 2방 5평 2조대로 호상 유구(북쪽)

유구번호: SD5300

본문: ·封·印



목간자료 3

덧붙이자면 봉함목간과 관계가 있는 후세의 사례로서 사토는 ‘직사각형 목재의 양 끝에 홈을 판 형태의 목간 모양 얇은 목판 두 장에 접은 종이 문서를 직접 끼워서 철하고 한쪽 판자에 겉면의 주소 등을 쓰는 사례가 있다’고 언급하였지만 구체적인 사례를 들지 않았다.

이후 요시카와 사토시(吉川聰)는 고후쿠지(興福寺) 소장 전적문서를 조사할 당시 제89함 65호 문서인 간분(寛文) 10년(1670) 10월 10일자 ‘고후쿠지 벳토(別當) 보임 구선안(口宣案)’에 주목하여, 그림 2에서 보이듯이 두 장의 목판 사이에 문서가 끼워져 있어, (a) 두 장의 판자를 끈 종이 끈으로 묶고, (b) 종이 끈을 풀면 판자 사이로부터 가케가미(懸紙, 문서를 싸는 종이)로 싸인 문서가 나타난다는 특징을 지적하고, 이는 사토가 언급한 봉함목간의 후대 사례라고 보았다. (그림 2) [吉川聰2008]

【그림 2】 고후쿠지 소장 간분 10년(1670) 10월 10일자 고후쿠지 벳토 보임 구선안 (출처: 吉川聰<2008>에서 전재)



図51 挟み板に挿まれた口宣案

이상, 필자 나름대로 봉함목간에 관한 선행연구를 용도를 중심으로 개괄하였는데, 다음 과제가 남아 있다.

첫째, 종이 문서 자체를 끼워서 봉합하는 봉함목간의 세 번째 용도는 지금까지 어디까지나 물건의 관찰을 통하여 상정된 것이며, 그것을 뒷받침할 문헌 사료는 제시되지 않았다.

둘째, 동아시아의 시점에 입각해 보면, 일본에서 발견된 봉함목간과 유사한 것은 중국 한대의 '검(檢)'이라고 여겨져 왔지만[平川南1993; 佐藤信1995·1997], 사토가 인정한 것처럼 '검'의 경우 문서 목간 위에 같은 크기의 목간(검)을 한 장 더 겹쳐, 끈으로 묶고 받는 곳을 위에 적는다는 점에서 약간의 차이가 있다. 또한 '검'이 이용되던 한나라 때와 일본에서 발견된 봉함목간의 주요 연대인 8세기와의 사이에 시대 차이가 너무 많이 나는 것도 문제이다.

셋째, 봉함목간의 후대 사례로서 요시카와 사토시는 고후쿠지 문서를 소개하면서 '다만 한 가지 사례로는 도저히 중세 이후 봉함목간의 계보를 추적할 수 없으며, 앞으로의 과제로 삼지 않을 수 없다'는 것을 인정하였다.

이러한 과제를 염두에 두면서 본고에서는 베트남을 동아시아 세계의 일원으로서, 문서 자체를 끼운다는 점에서 봉함목간에 해당하는 '목협'이라는 목간의 사용 예를 소개한 다음, 그 후대 사례로서 목협의 계보를 잇는 '협판'도 추가로 검토하여 봉함목간에 대한 이해를 심화하고자 한다.

1. 안남도호부와 남조국의 '목협'

잘 알려져 있듯이, 베트남의 북부 지역은 602년에 수나라에게 침략당하고, 당나라가 618년에 성립된 뒤에는 당나라의 판도 안으로 들어갔으며, 679년 이후 '안남도호부'라는 행정기구의 소관이 되었다. 본고에서 다루는 '목협'은 9세기 중엽 안남도호부의 공방전을 기점으로 한 운남의 남조와 당나라 사이에 오고간 외교문서 속에서 등장한 것이다.

남조는 8세기 중엽부터 운남 지역에서 발흥한 티벳-버마 어족 왕국이다. 8세기 후반부터 남조는 운남에서 발원한 홍강을 따라 남쪽으로 영향력을 키워나갔고, 마침내 홍강 삼각주를 기점으로 한 당의 안남도호부와 충돌하게 되었다. 함통(咸通) 4년(863), 남조는 안남도호부의 부치(府治)를 함락시키고 장관 채습(蔡襲)을 살해하였으며 10만 명 안팎의 당나라 사람들을 포로로 삼았다. 그런데 당군은 발해 출신의 명장 고변(高駢)이 안남도호에 임명되면서 점차 세력을 되찾았고, 함통 7년(865)에는 마침내 안남도호부 탈환에 성공하였다. 안남에서의 실패를 겪은 남조는 함통 10년(868) 이후 사천 방면에서 계속해서 당군과 전투를 벌였다.

이러한 상황 속에서 함통 12년(870) 4월, 당의 재상 노암(路巖)은 검남서천절도사(劍南西川節度使)로 좌천되어²⁾ 남조와의 교섭을 맡았다. 북송 선화(宣和) 2년(1120)에 송나라 휘종의 명으로 편찬된 서법서(書法書) 『선화서보(宣和書譜)』에는 당시 교섭의 모습을 보여주는 다음과 같은 기술이 보인다.

【사료 1】『宣和書譜』卷18, 章孝規

章孝規, 不知何許人, 嘗為路魯瞻, 書雲南木夾. 詳考其始末, 則魯瞻者, 唐邊臣方面之官. 雲南者, 蠻夷之地, 古有大雲南, 小雲南是也. 木夾, 則彼方所謂木契. 蠻夷之俗, 古禮未廢, 故其往復移文, 猶馳木夾. 魯瞻之書, 當是復雲南之移文.

『선화서보』에 따르면 운남 지역에서는 원래 '목협'을 사용하는 옛 풍속이 있어, 남조는 '목협'을 사용해 검남서천절도사 노암(魯瞻, =노암)에게 '이문(移文)'을 보냈다는 것이다. '운남목협'에 대하여 노암은 당시 서예의 명인이었던 장효규(章孝規)에게 답장을 쓰게 하였다고 한다.

2) '四月, 以左僕射, 門下侍郎, 同平章事 路巖檢校司徒, 兼成都尹, 劍南西川節度等使.' (『舊唐書』卷19上, 懿宗, 咸通12年(870)4月條)

여기서 ‘목협’이라는 것을 사용하는 행위가 원래 운남 지역에 있었던 옛 풍속이었고, 남조에 의해 당나라와의 외교에 적용되었던 것을 우선 확인할 수 있을 것이다. 다음으로 고변과 남조와의 문서 교환에 관한 일련의 사료를 통해서 ‘목협’의 정체를 밝혀보기로 하자.

건부(乾符) 원년(874) 4월에 고변은 검남서천절도사대사, 지절도사에 임명되었고³⁾, 같은 해에 중절도사로 승격되어 남조와의 교섭 담당자가 되었다. 원래 안남도호부 함락전에서 남조에 게 포로가 된 당나라 사람들 중에 영남경략판관 두양(杜驤)과 그 아내 이요(李瑤) 두 사람이 있었고, 이요는 당나라 종실의 먼 친족 출신이었다. 그렇기 때문에 고변은 화의를 진행하는 조건으로 두 사람의 반환을 남조에 제안하였다. 이 교섭은 『자치통감』에 다음과 같이 기술되었다.

【사료 2】『資治通鑑』卷252, 乾符3年(876) 3月條

南詔遣使者詣高駢求和，而盜邊不息。駢斬其使者，蠻之陷交趾也。〈事見二百五十卷懿宗咸通六年〉，虜安南經畧判官杜驤妻李瑤。瑤宗室之疎屬也。蠻遣瑤還，遞牒以木夾之，故云木夾。范成大桂海虞衡志曰，紹興元年安南與廣西帥司及邕通信間，用兩漆板夾繫文書，刻字其上，謂之木夾。按宋白續通典，諸道州府巡院傳遞敕書，皆有木夾，是中國亦用木夾也。遺唯季翻>稱督爽牒西川節度使，辭極驕慢，駢送瑤京師。

위의 사료에 따르면, 건부 3년(876) 3월, 남조는 고변에게 ‘목협’을 송부하여 이요를 돌려보냈다. 『자치통감』의 주석을 단 원나라 때 사람 호삼성(胡三省)은 ‘遞牒，以木夾之，故云木夾’이라고 하였듯이 ‘목협(木夾)’이란 나무[木]에 끼운[夾] 첩첩(遞牒)이라고 보았다. 또한 호삼성은 ‘목협’이란 ‘두 개의 옷칠한 판자 사이에 문서를 끼워서 연결하고 글자를 그 위에 새긴다’는 송대 범성대(范成大)가 지은 『계해우형지(桂海虞衡志)』의 문장도 인용하여 ‘목협’에 대해 더욱 상세히 해설하였다.

그렇다면 두 개의 옷칠한 나무판으로 된 ‘목협’은 어떻게 연결[繫]되었던 것일까? 남송대에 성립한 『성도문류(成都文類)』 권48에 기록된 고변의 부하 호증(胡曾)의 「대고변회운남첩(代高駢回雲南牒)」을 보면, ‘前件木夾，萬里離南，一朝至北，開緘捧讀’이라고 되어 있듯이 ‘목협’의 옷칠한 목판 두 장이 원래 ‘함(緘)’, 즉 끈으로 묶여 있어, 읽을 때 ‘개함(開緘)’, 즉 끈을 푸는 방식이었음을 파악할 수 있다.

이러한 남조의 ‘목협’을 받아든 고변은 ‘첩’으로 답서를 보냈는데, 그 답서는 『성도문류』에 다음과 같이 남겨져 있다.

【사료 3】『成都文類』卷47

詔國前後俘獲約十萬人，今獨送杜驤妻，言是沒落。杜驤守職，本在安南。城陷驅行，故非沒落。星霜半代，桎梏幾年。李氏偷生，空令返國。杜驤早歿，不得還鄉。今則訓練蕃兵，指揮漢將。鐵衣十萬，甲馬五千。邕交合從，黔蜀齊進。昔時漢相，有七擒七縱之功。今日唐臣，蘊百戰百勝之術。勳名須立，國史永書。且杜驤官銜，李瑤門地，不是親近，但王室疏宗，天枝遠派而已。李氏並詔國木夾，並差人押領進送朝廷。是故牒。

고변의 첩에 따르면, 두양과 아내 이요 두 사람의 반환에 관한 고변의 제안에 대하여, 남조는 두양이 이미 ‘몰락(沒落)’했음을 이유로 이요만을 보냈다. 이에 대하여 고변은 여전히 ‘관

3) ‘以天平軍節度使，檢校尚書右僕射，兼鄆州刺史高駢 檢校司空，兼成都尹，充劍南西川節度副大使，知節度事.’ (『舊唐書』卷19下，僖宗，乾符元年(874)條)

함(官衙, 관직)’을 가진 두양의 반환에 집착하여 납득하지 않았지만, ‘李氏並詔國木夾, 並差人押領進送朝廷’이라고 한 것처럼 종족인 ‘이씨(이요)’와 ‘(남)조국의 목협’을 조정에 보내고, 또 그 대응을 남조에게 통지하였던 것이다.

위의 사료를 통해 고변에게 보내진 ‘목협’ 이외에 남조에서 당나라 조정 앞으로 또 하나의 ‘목협’이 보내진 것을 알 수 있다. 이와 같은 문서 교환은 3년 뒤에도 이루어지고 있다.

【사료 4】『資治通鑑』卷253, 乾符6年(879) 2月丙寅條

驃信待雲虔甚厚, 雲虔留善闡十七日而還, 驃信以木夾二授雲虔, <其一上中書門下, 上時掌翻>, 其一牒嶺南西道, 然猶未肯奉表稱貢.

고변의 뒤를 이어 남조와의 교섭을 담당한 사람은 영남서도절도사 신당(辛儻)이었다. 조정은 남조에 사자를 두어 차례 파견하였지만 사자가 도중에 연이어 사망하였기 때문에 신당은 건부 6년(879)에 그 부하인 순관(巡官) 서운건(徐雲虔)을 남조로 파견하였다. 같은해 2월, 선천성(善闡城, 지금의 윈난성 쿤밍)에 도착한 서운건은 남조에게 당나라에 복속하고 신하로서 조공사를 파견할 것을 역설하였다. 그런데 남조는 이전에 사자를 파견하여 당나라 황제와 형제 또는 구생(舅甥)의 관계를 맺었기 때문에 신하된 입장에서 ‘표(表)’를 상신하거나 조공을 해서는 안 된다는 입장을 굽히지 않았다. 교섭이 난항을 겪는 가운데 남조의 표신왕(驃信王)은 사자 서운건을 후하게 대우한 뒤 서운건에게 두 통의 ‘목협’을 부탁하였다. ‘其一上中書門下, 其一牒嶺南西道’라고 한 것처럼, 한 통은 당나라 중서문하 앞으로 보낸 ‘상(上)’이며, 다른 한 통은 영남서도(신당) 앞으로 보낸 ‘첩’이었다.

이상의 사례로 보아 ‘목협’은 당시 직접 교섭을 담당했던 절도사와 조정에게 동시에 보내지는 것임을 알 수 있다. 동시에 여러 곳으로 보내지기 때문에 고변의 사례에서는 ‘첩서천절도사(牒西川節度使)’, 신당의 사례에서는 ‘其一上中書門下, 其一牒嶺南西道’라고 하듯이 ‘목협’의 윗칠한 나무판 위에 받는 곳을 새기는 방식을 궁리한 것으로 추정된다.

이상으로 안남도호부 관련 사료를 검토함으로써, 당나라 시대에 남조국은 당 왕조에게 외교문서를 보낼 때 두 개의 윗칠한 목판 사이에 문서를 끼우고 끈으로 묶은 다음, 목판 위에 받는 곳을 새기는 ‘목협’을 활용하였음이 밝혀졌다. 이러한 자료들은 사토 마코토가 상정한 봉함목간의 세 번째 용도를 뒷받침하는 자료라고 규정할 수 있을 것이다.

‘목협’의 사용법을 보다 상세하게 검토해 보면, ‘목협’은 일단 ‘이(移)’, ‘첩’, ‘체첩’ 같은 율령제에서 규정된 상하관계가 없는 기관과 기관 사이에 주고받는 문서형식에서 사용되었음을 알 수 있다. 직접적 상하관계가 없는 남조와 검남서천절도사 노암, 서천절도사 고변, 영남서도절도사 신당과의 사이에서 ‘이’와 ‘첩’이 사용되는 것은 당연한 일이지만, 남조는 당나라 조정과의 문서 교환에서도 ‘목협’을 이용하고 있는 점에 주목할 필요가 있다. ‘但不肯奉表稱貢’이라고 하였듯이 남조는 처음부터 끝까지 당나라의 신하가 아니라는 스탠스를 주장하며, 자신의 외교문서를 ‘표’가 아닌 당나라 ‘중서문하’ 앞으로 보낸 ‘상’으로 한 것이다.

통상적으로 ‘표함’에 들어가는 ‘표’와 달리, 남조가 당나라 ‘중서문하’ 앞으로 보낸 ‘상’은 ‘목협’으로 봉해졌다. 바꿔 말하자면 ‘목협’은 ‘표함’보다 봉하는 방식으로는 한 단계 아래라고 이해할 수 있다. 그러한 인식은 『자치통감』의 다음 기사에서도 다시 확인할 수 있다.

【사료 5】『資治通鑑』卷261, 昭宗, 乾寧4年(894) 是歲條

是歲, 南詔驃信舜化有上皇帝書函, 及督爽牒中書木夾, 年號中興. 朝廷欲以詔書報之.

王建上言,「南詔小夷,不足辱詔書,臣在西南,彼必不敢犯塞。」從之。

이 기사에 따르면, 건녕(乾寧) 4년(894), 남조 표신왕은 당나라 소종(昭宗) 및 당조 중서성에 문서를 송부하였다. 소종에게 보내는 문서는 ‘上皇帝書函’이라고 하여 여전히 ‘표’가 아닌 ‘상(서)’의 형식이 채용되었지만, 황제를 받는 이로 하였기 때문에 표에 준하여 ‘함’에 넣었다. 그에 반해 중서성에 보내는 문서는 ‘督爽牒中書木夾’이라고 하여 ‘중서(성)’을 받는 곳으로 한 ‘첩’이었으며 ‘목협’으로 봉해졌다⁴⁾.

그렇다면 왜 ‘목협’으로 봉해야 했던 것일까? 소개한 사례를 통해 알 수 있듯이 서천절도사 고변과 영남서도절도사 신당은 둘 다 강경한 자세로 교섭에 임하였기 때문에 남조는 절도사들과는 별도로 당나라 조정과의 직접적인 교섭 루트를 모색해야 했다. 그런데 조정에 문서를 보내려면 아무래도 절도사들을 경유하여 체송(遞送)하지 않으면 안 되었다. 이처럼 절도사는 문서를 받는 쪽의 일원이면서 다른 문서를 체송시키는 담당자이기도 했다. 체송 담당자에게 정보가 누설되거나 방해받지 않으려고 남조는 조정에 문서를 보낼 때 나무에 끼워서 문서를 봉하는 ‘목협’을 채용했다고 여겨진다. 이 점은 후술하듯이 후세의 ‘목협’이나 ‘협판’에서도 많이 보인다.

11~14세기의 ‘목협’

‘목협’은 11세기부터 14세기에 걸쳐 운남의 여러 세력뿐만 아니라 베트남의 리(李) 왕조와 중국의 송나라에서도 활용되었다.

먼저 운남 지역에서는, 남조국이 멸망한 뒤인 937년에 수립되어 1253년까지 존속한 대리(大理)에서 ‘목협’은 계속 외교문서에 사용되었다. 다소 후대의 사료이기는 하지만, 명나라 대에 성립한 『진략(滇略)』에는 다음과 같은 기록이 보인다.

【사료 6】『滇略』卷4, 俗畧

唐西南夷多用木夾。徐雲虔使南詔,南詔待之甚厚,授以木夾遣還。宋宣和間,高泰運貽木夾書於邊將以求貢。其製用兩漆板,夾文書而刻字其上,以爲信。五嶺邕管之間皆然,今夷人交易尙用木刻,多在神前呪誓,故不敢叛也。

위의 사료에 따르면, 북송 선화(宣和) 연간(1119~1125), 대리국의 제2대 중국공(中國公)인 고태운(高泰運)은 ‘목협의 서(書)를 변장(邊將)에게 주어 공물을 요구하고’, ‘그 만듦새는 두 개의 옷칠한 목판을 사용하여 문서를 끼워 그 위에 글자를 새김으로써 신(信)으로 삼는다’고 하였듯이 문서를 옷칠한 판자 사이에 끼우고 그 위에 글자를 새겨 송나라 변경의 장군에게 보내 조공을 요구했다.

베트남 지역에서는 홍강 삼각주를 거점으로 하여 1009년에 건국되고, 1225년까지 존속한

4) 당시 동아시아에서는 외국의 외교문서가 ‘함’에 넣어져 송부되면, 변경의 관리는 함을 개봉하여 확인할 수 있었다. 예를 들면, 『유취삼대격(類聚三代格)』 권18의 덴초(天長) 5년(828) 1월 2일자 격(格)을 보면, ‘右蕃客來朝之日,所着宰吏,先開封函,細勘其由。若違故實,隨卽還却’이라 하여 덴초 3년까지는 번객(蕃客)이 일본으로 문서함을 가지고 오면 지방 관리는 그것을 개봉하여 확인하는 것이 허락되었다고 한다. 또한 조와(承和) 3년(836) 일본 태정관 앞으로 보내진 집사성첩(執事省牒)에도 보이는 것처럼, 신라 집사성 앞으로 보내진 태정관첩도 상자에 넣어진 것을 확인할 수 있다. 그런 점으로 보아 남조의 ‘목협’은 매우 특수한 사례임을 알 수 있다.

베트남 리 왕조(대월국)도 ‘목협’을 활용하여 중국의 변경 관청과 외교문서를 주고받았다. 사료 2에 보이듯이 호삼성은 『자치통감』에서 송나라 소흥(紹興) 원년(1131), 안남(리 왕조 대월국)은 광서수사(廣西帥司) 및 옹주(邕州, 난닝)와 서신을 주고받을 때 ‘두 개의 옷칠한 판자에 문서를 끼우고 묶어서 글자를 그 위에 새기’는 ‘목협’을 이용했다고 하는 『계해우형지』의 일문(逸文)을 소개하였다. 『계해우형지』의 찬자(撰者)인 범성대(1126~1193)는 원래 광서경략사(廣西經略使)를 역임하였고 직접 리 왕조와의 외교관계를 관장했던 인물이기 때문에 위의 기록은 매우 신빙성이 높은 사료라고 할 수 있다.

그러면 리 왕조의 ‘목협’에는 어떠한 양식의 문서가 끼워져 있었을까? 먼저 남송의 주거비(周去非, 1135~1189)가 지은 『영외대답(嶺外代答)』 권5에 ‘其邊永安州移牒于欽, 謂之小綱, 其國遣使來欽, 因以博易, 謂之大綱’이라 한 것으로 보아 리 왕조의 변주(邊州)인 영안주(永安州)는 송나라 흠주(欽州)에게 ‘이첩’으로 연락하고 있는 것을 알 수 있다.

『영외대답』에 ‘其文移至邊, 有判「安南都護府」者, 亦外職也’라고 적혀 있듯이, 리 왕조의 조정도 ‘안남도호부’ 명의로 중국의 변경 관청에 ‘이’로 문서를 송부했다. 11세기 후반이 되면 1075~1077년 전쟁으로 상징되듯이 송-월 관계가 악화되는 가운데 리 왕조는 ‘안남도호부’가 아닌 ‘남월국(南越國)’으로서 ‘이’의 형태로 문서를 송부하게 되었다. 그러한 상황의 일면을 보여주는 것이 다음 사료이다.

【사료 7】『文獻通考』卷330 所引『桂海虞衡志』

凡與廣西帥司及邕州通訊問, 用二黑漆板夾繫文書, 刻字於板上, 謂之木夾文書. 稱安南都護府, 天祚不列銜而列其將佐數人, 皆僭官稱. 有云金紫光祿大夫, 守中書侍郎, 同判都護府者, 其意似以都護府如州郡簽廳也. 帥司邊州報其文書, 亦用木夾. 桂林掌故, 有元祐熙寧間所藏舊案交人行移, 與今正同. 印文曰, 「南越國印」. 近年乃更用「中書門下」之印. 中國之治略, 荒遠邊吏, 又憚生事例置不問, 由來非一日矣.

위의 사료를 보면, 12세기에는 계림(桂林)의 관청에는 희령(熙寧, 1068~1077), 원우(元祐, 1086~1094) 연간의 외교문서 구안(舊案)이 남아있었으므로, 범성대가 그것을 조사한 바 11세기 후반의 ‘交人行移’, 즉 리 왕조의 ‘이’에는 ‘남월국인(南越國印)’ 도장이 찍혀 있었음이 판명되었다. 또한, ‘근년’, 즉 범성대가 『계해우형지』를 저술한 12세기 후반이 되면, 리 왕조의 ‘이’에 ‘중서문하’ 도장이 찍혀 있었다는 것이다. ‘남월국’과 ‘중서문하’는 둘 다 송나라에게 책봉되지 않은 것으로 송나라 입장에서 봤을 때는 참칭이지만, 국경 문제의 긴장이 고조되는 가운데 중국의 변경 관리는 리 왕조와의 군사 충돌을 피하기 위해 그것을 간과하고 조정에 보고하지 않았다.

이 밖에 『영외대답』 권2에 ‘其國入貢, 自昔由邕或欽入境. 蓋先遣使議定, 移文經略司, 轉以上聞’이라고 되어 있듯이, 리 왕조는 조공사(朝貢使)를 파견할 때마다 사전에 사자를 옹주나 흠주에 파견하여 의정(議定)한 다음에 ‘이문’으로 경략사에게 정식으로 연락하고, 또 송나라 조정에 보고하게 하였던 것이다.

이상의 사료들을 통해 11세기부터 13세기에 걸쳐 리 왕조 조정 및 영안주 등의 변주는 광서(廣西), 옹주, 흠주 등 송나라의 변경 관청에 대하여 ‘이’라는 문서 양식으로 외교문서를 작성하고, 흑칠 판자에 그것을 끼워서 끈으로 묶고 ‘목협’의 형태로 연락했음을 알 수 있다.

이러한 방식은 리 왕조의 뒤를 이은 쨌(陳) 왕조(1225~1400)가 계승한 것으로 보인다. (사료 8)

【사료 8】『大越史記全書』本紀卷5, 壬寅天應政平11年・宋淳祐2年(1242)條
夏四月, 命親衛將軍陳閏擎將兵, 鎮守北邊, 攻略憑祥路地方. 初, 自元太宗崩後, 關再
往往不通, 如有使命, 惟正副二員, 從人二輩而已. 進貢方物, 其數若干, 緘封送至界首,
本處土官守管領遞送使人至京, 但上具本東奏貢物, 無全至者. 至是, 命將守禦攻略, 始
得與宋通好.

사료 8에 따르면, 쩌 왕조는 남송에 조공할 때 ‘進貢方物, 其數若干, 緘封送至界首’라고
하여 조공 품목과 수량을 문서에 기록한 다음 ‘함봉(緘封)’하여, 물건과 문서 양쪽을 남송 변
주의 토관(土官)에게 채송해 달라고 부탁해야 했다. 그런데 사자가 수도에 도착했을 때는 실물
과 문서 품목이 일치하지 않는 경우도 있어, 변경의 토관들에게 일부를 탈취당하는 실태가 발
생하고 있었다. 그 때문에 쩌 왕조는 남송의 빙상로(憑祥路)에 침입하여 이곳을 점령하고 조공
로를 확보하였다. 명료한 기술이 아니기는 하나, ‘함봉’이라는 표현으로 보아 리 왕조의 전통
을 이어받아 ‘함봉’ 목협이 이용되었으리라 추측할 수 있을 것이다.

이상의 사료들로 보아 베트남의 리, 쩌 왕조는 11세기부터 14세기 말까지 중국의 송나라,
그리고 그 뒤를 이은 원나라의 변경 관청에 대하여 ‘이’를 끼운 ‘목협’을 송부하고 있었음이
확인 가능하다.

또 주목해야 할 것은 중국 측의 변주도 그 방식을 본떠 ‘목협’으로 리, 쩌 왕조 측에게 답장
을 보냈다는 점이다. 사료 7에 ‘帥司邊州, 報其文書, 亦用木夾’이라고 하므로, 광서수사와 송
나라의 변주는 리 왕조가 보낸 문서에 ‘목협’을 사용하여 답신 문서를 보낸 것을 알 수 있다.
그 실태는 다음과 같은 『계해우형지』의 일문에서도 거듭 확인할 수 있다.

【사료 9】『文獻通考』卷330 所引『桂海虞衡志』
乾道八年春, 上言願朝賀聖主登極, 詔廣西經略司, 「貢使來者, 免至廷方物受什一」. 其
秋復有詔下經略司, 買馴象十以備郊祀鹵簿. 經略李德遠浩用木夾事移交趾買之. 蠻報不
願賣願以備貢.

건도(乾道) 8년(1172) 가을, 남송 조정은 남교제사(南郊祭祀), 즉 ‘교사(郊祀)’의 개최를 계
획하였다. ‘교사’에서는 교지(交趾, 대월)의 길들인 코끼리 행렬이 북송 시대부터 중요시되었기
때문에, 송 효종은 광남경략사에게 조(詔)를 내려 교지의 길들인 코끼리를 구입할 것을 명하였
다. 조를 받은 광남경략사 이덕원(李德遠)은 ‘목협’을 이용하여 리 왕조에게 ‘이’를 보내 구입
을 타진했다고 한다.

목협 문화는 이렇게 해서 원래 운남 지역의 옛 풍속에서 비롯되어, 당나라 시대 전반에 걸
쳐 남조에 의해 당나라 조정 및 절도사에게 보내진 외교문서에 응용되었고, 제국의 변경 지
역에 침투하여 중국의 변경 관청에서도 이용되기 시작했다.

또한 중국 내지(內地)에서도 ‘목협’과 같은 것이 다양한 장면에서 활용되었다. 예를 들면
『속자치통감장편』 권5에 의하면, 개보(開寶) 5년(972), 송나라는 여러 주에서의 관리의 결원이
발생했거나 조정에 해문(解文)을 보내는 경우 ‘以木夾重封題號’라고 하듯이 ‘나무에 끼워서 겹
쳐 봉하고 제호를 달’ 것을 명하였다⁵⁾.

나아가 사료 2에 보이는 것처럼 『자치통감』에 주석을 달 때 호삼성은 ‘按宋白續通典, 諸道

5) ‘諸州員闕並仰申闕解條樣以木夾重封題號. 逐季入遞送格式, 其百司技術官闕解, 亦準此’(『續資治通鑑
長編』卷5, 開寶5年(972)條)

州府巡院傳遞敕書，皆有木夾，是中國亦用木夾也’이라고 하여 송백(宋白, 936~1012)이 지은 『속통전』의 일문을 인용하며 송나라에서 여러 도, 주, 부, 순원(巡院)이 칙서를 전달할 때 ‘목협’을 이용하였던 사례를 지적하여 이를 중국의 ‘목협’으로 보았다.

14세기 이후의 ‘목협’ - ‘협판공문’

앞서 언급하였듯이 이미 10세기부터 송나라는 여러 주에서 발생한 결원에 대한 해문을 비롯하여, 일부 해문을 제외하고는 ‘以木夾重封題號’라 하듯이 ‘나무에 끼워서 겹쳐 봉할’ 것을 요구하였다. 겹쳐서 봉한다는 ‘중봉(重封)’이라는 표현으로 보아 이 해문들은 아마도 상자에 넣어져 일단 봉해진 다음에 또 나무에 끼워서 다시 봉해졌던 것으로 보인다.

그러한 이중 봉함은 늦어도 명나라 초기(14세기 후반)이 되면 아래에서 위로 올리는 표문의 전달에 응용되었고, ‘협판’으로 제도화되었다. 『명회전(明會典)』(사료 9)에 기록된 홍무 14년(1381) 예제(禮制)에는 ‘表用黃紙箋，用紅紙爲函，外用夾板夾護’라고 하여 황지전(黃紙箋) 표문은 홍지(紅紙)로 만든 상자에 넣은 다음 상자 바깥을 또 ‘협판(夾板)’ 사이에 끼우는 규정이 있었다. 이러한 ‘중봉’은 요시카와 사토시가 제시한 「고후쿠지 벳토 보임 구선안」과 마찬가지로 지이다.

【사료 10】『明會典』卷74，禮部33，表箋

洪武禮制

一凡表箋，止作散文，不許循習四六舊體。務要言詞典雅，不犯應合迴避凶惡字樣。仍用硃筆圈點句讀。表用黃紙箋，用紅紙爲函，外用夾板夾護，拜進并依見行儀式。

한편, 중-월 국경에서는 11세기부터 14세기까지 중국과 베트남 양쪽이 ‘목협’으로 연락을 주고받았음은 앞서 서술한 대로인데, 그 전통은 17세기까지 ‘협판공문(夾板公文)’으로 계승되었음을 다음 사료를 통해 알 수 있다.

【사료 11】『奧西詩載』卷30，誅陸佑韋達禮

達禮從其計，因假稱內附，誣交南者目逆篡，冀絕貢道，以圖舉事。督府聞之，大駭，以其事聞責鄭松，令擒達禮，周佑，責黃應雷令擒陸佑等。調江州等州官兵，壓思明境上以待。鄭松得檄，即遣其子鄭壯，統兵衆疾馳入祿州，擒達禮。達禮聞之，先期逸去，止獲佑保等，以夾板公文，從便道，獻官兵，既入思明境。至風門嶺，應雷亦獲黃尙，出獻陸佑，阻兵抗，命遂逐應雷而奪其印，率衆與官兵拒戰。

명대 만력(萬曆) 29년(1601)에 안남 녹주토사(祿州土司)인 위달례(韋達禮)는 광주의 사명주 두목(思明州頭目) 주우(周佑)와 손을 잡고 명나라의 사릉주(思陵州)에 침입하여, 그곳의 토관(土官) 위소증(韋紹曾)을 공격해 인신(印信)을 빼앗고, 또한 안남의 공도(貢道)를 끊으려고 하였다. 명나라의 우군도독부(독부)는 안남의 찰주(鄭主) 찰동(鄭松)에게 위달례를 체포하게 하고, 또 광주지부(廣州知府) 황응뢰(黃應雷)에게 달례의 여당인 주우, 육우(陸佑)를 붙잡도록 명하였다. 찰동의 명령을 받은 그의 아들 찰짱(鄭壯)은 안남군을 이끌고 녹주에 들어가 위달례를 잡으려 하였지만, 위달례는 사전에 이를 알아채고 ‘以夾板公文，從便道，獻官兵，既入思明境’, 즉 ‘협판공문’을 명나라 측에 보내고 항복하였다.

이 사건을 통해 1600년대 전후에 베트남(대월국)의 변경 토관은 리 왕조와 쩐 왕조 시기의 변주와 마찬가지로 ‘협판공문’을 사용해 중국측의 변경 관청과 연락하였음이 판명되었다.

또한 리, 쩐 두 왕조가 조공사를 파견할 때 ‘목협’을 송, 원의 변경 관청에 송부하고, 조공 준비를 진행한 것은 앞서 서술한 대로인데, 같은 상황이 베트남 레 왕조의 청나라에 대한 조공에서도 확인된다. 그 제도는 먼저 『광서통지(廣西通志)』에 강희 14년(1675)의 사례로서 다음과 같이 기록되었다.

【사료 12】『廣西通志』卷96, 諸蠻安南附紀

朝貢方物<康熙十四年例>

欸貢之年, 分巡道預詳督撫, 檄傳該國王, 取入關限期. 國王乃遣使并通事領齎夾板公文, 投遞本道. 屆期, 使臣將貢物運至坡壘驛, 龍憑關守備探實, 具報本道, 即移駐太平府料理, 委驗貢官帶銀匠馳往將貢物, 細驗稱明, 造冊呈道, 發示啟關, 而新太參將先領官兵, 至關上擺列及把守各隘口本道於啟關三日由太平府, 率南太兩府官同至思明土府駐劄, 次日, 至受降城, 又次日至幕府營, 由幕府營至關十里, 是夜四更, 後發號鼓三通, 各土司兵馬齊集, 先行護衛 (후략)

해당 사료에 따르면, 조공할 연도가 되면 광서 분순도(分巡道)는 레 왕조 국왕에게 연락하여 관문에 들어오는 ‘限期’, 즉 기일을 정하였다. 레 왕조의 국왕은 사전에 사신과 통사(통역)에게 ‘협판공문’을 들려서 국경으로 가게 했고, 광서에 이를 ‘投遞’, 즉 넘겨주어 상부 기관에 체송하게 하였다. 기일이 되자 사신은 공상물(貢上物)을 파루역(坡壘驛)에 가지고 가서 용빙관(龍憑關)의 수비관에게 심사를 받았다.

강희 14년(1675)의 사례가 18세기 후반까지 실시되었던 실태는 베트남에 현존하는 레 꾸이 돈(黎貴惇)이 지은 『북사통록(北使通錄)』의 기록에서 살펴볼 수 있다. 레 꾸이 돈(1726~1784)은 베트남 레 왕조 중흥기의 대표적 학자로, 1760년부터 1762년까지 조공사로서 청나라에 파견되었다. 사절로 파견된 레 꾸이 돈은 북경에서 조선 사신과 시문을 주고받기도 하였고, 한 반도와 인연이 깊은 인물이기도 했다. 『북사통록』 권1에는 조공 준비에 착수했던 무인년(1758) 10월부터 레 꾸이 돈이 청나라로 들어간 기묘년(1759) 12월까지의 일들과 레 왕조와 청나라 사이에서 오간 외교문서가 기록되었다.

본고에서는 우선 까인흥(景興) 20년(1759) 7월 3일 문서에 주목하고자 한다.

【사료 13】『北使通錄』 28b-29a

五府府僚等官

計,

一, 奉傳諒山處督鎮官香嶺侯枚世準, 督同阮宗理等, 係茲期有公文式套, 投遞兩廣總督與左江道官, 言附奏告哀事, 請與貢部並進, 等因, 應如見送到, 即刻付與守隘, 謹將夾板公文作急交與內地龍憑守隘益接領, 馳遞, 以濟公務, 慎毋牽緩, 茲奉傳.

景興二十年七月初三日

위의 문서는 오부부료(五府府僚)라는 레 왕조의 중앙 기관이 국경에 있는 양산처(諒山處)의 독진관(督鎮官) 매세준(枚世準) 등의 관리들을 받는 이로 한 ‘전(傳)’ 문서이다.

당시 레 왕조는 ‘세공(歲貢)’에 맞추어 경진년(1760)에 조공사, 즉 공부(貢部)를 파견하기 위해 기묘년(1759) 2월 24일자 문서로 청의 좌강도(左江道)에 연락하였고, 일단 합의를 보았

다6). 그런데 같은해 윤6월 8일에 상황(上皇) 레 이 동(黎懿宗)이 붕어하는 사태가 발생했다. 조공사와 고애사(告哀使)를 따로따로 파견하는 것이 매우 불편했기 때문에 레 왕조는 하나의 사절로 통합하려고 하였으나, 외교 절차 상 청나라 조정으로부터 허가를 얻어야 할 필요가 있었다. 그렇기 때문에 레 왕조는 청의 '양광총독' 및 '좌강도(관)'에게 '공문 2투(套)'를 각각 송부하였고, 청 조정에 보고하도록 의뢰하였다. 사료 13은 오부부료가 국경에 있는 양산처 독진관에게 '협판공문'의 형태로 된 '공문 2투'를 청의 '용빙수애(龍憑守隘, 용빙 요새의 수비관)'에게 건네도록 지시한 것이다.

'협판공문'인 '공문 2투'란 『북사통록』 26b~28a에 기록된 건륭 24년(1759) 윤6월 27일자(1) '안남국왕'이 '병부상서총독양광부당(兵部尙書總督兩廣部堂)'에게 보낸 '자(咨)'와 (2) '안남국왕'이 '광서좌강병비도관할남태진사사부부한토주현동사등처지방(廣西左江兵備道管轄南太鎮泗四府漢土州縣苟司等處地方)', 즉 좌강도관 앞으로 보낸 '자'를 말한다⁷⁾. 이처럼 안남국왕 레 히엔 동(黎顯宗)은 양광총독과 좌강도관에게 '자'라는 문서양식을 가지고 '협판공문'의 형태로 연락하였던 실태가 우선 확인 가능하다.

안남국왕의 '협판공문'을 받은 양광총독은 청나라 조정에 상주하였는데, 고애사 건에 관해서는 좀처럼 허가가 내려오지 않았다. 그래서 양광총독은 같은해 8월 8일자 문서로 좌강도관에게 연락하여 안남에게 진척 상황을 전달할 것을 명하였다. 양광총독의 명령을 9월 5일에 받은 좌강도관은 9월 17일자 문서로 레 왕조에게 통지하였다⁸⁾.

이처럼 청나라 내부의 절차가 매우 늦어지는 가운데 사자의 출발 예정 기일이 닥쳐 왔다. 초조해 하던 레 왕조는 청나라 조정의 답장을 기다리지 않고 강희 14년의 예를 따라 통사들을 국경에 파견하여 관련 절차를 마치려고 하였다.

사료 15와 사료 16에 따르면, 통사들은 9월 초순에 '협판공문'과 '관물(官物)'을 받아서 수도를 떠나 경북처(京北處)를 경유하여 국경인 양산처에 도착하게 되었다. 통사들을 체송하기 위해 오부부료는 길목에 있는 각 진(鎭)에 '전'을 내려, 병사를 동원하여 통사를 호송하도록 명하였다. 사료 15는 8월 29일자 양산처로 보내진 '전'이며, 사료 16은 9월 3일자 경북처로 보내진 '전'이다.

【사료 15】『北使通錄』 41b

五府府僚等官

計,

一, 奉傳諒山處督鎮官香嶺侯枚世準, 督同官阮宗理等, 係茲期前路通事奉將夾板公文, 并官物往關上, 以九月上旬起程等因, 應量差兵整備器械等項, 并督押驛夫依期就本處界首夾京北地頭, 照據京北鎮兵交付領取, 送就關上, 其所差當防守慎密, 以濟公務, 有公法在, 茲奉傳.

景興二十年八月二十九日

【사료 16】『北使通錄』 42b-43a

五府府僚等官

計,

6) 『北使通錄』 18a-19b.

7) 이 '자(咨)'들은 『北使通錄』 26a-28b 에 기록되어 있다.

8) 『北使通錄』 68a-69b.

一, 奉傳京北處鎮守官造基侯范吳俅, 督同官謝廷煥等, 係茲期奉差前路通事奉將夾板公文, 并官物往關上, 以本月上旬起程, 等因, 應星速量差屬員一名, 并兵二千人, 整備器械等項, 迅就愛慕河津護送, 就諒山界首, 交付伊處接遞到關, 奉行公務, 其所差當防守慎密, 免庶疎虞, 茲奉傳.

景興二十年九月初三日

사료 17에 따르면, 통사 응우옌 구옥 하인(阮國珩), 응우옌 딘(阮廷) 두 사람과 탐아(探兒) 응우옌 테 락(阮勢錫), 응우옌 딘 뜨(阮廷斯), 껍 당 다오(郭登瑤) 세 명으로 구성된 '전로통사(前路通事)'들은 '奉表, 奉本稿共陸冊', '公文式拾壹套', '侯命官柬文壹套'라는 공문을 국경으로 지참하고 갔다. 통사들은 국경에서 청나라 측의 용빙수애에게 그 공문들을 건네준 뒤 그대로 국경에서 대기하였고 청나라 측에서 수정된 원고가 돌아오면 이를 받은 다음 레 왕조에게 보고하는 임무를 부여받았다.

【사료 17】『北使通錄』 43a-43b

五府府僚等官

計,

一, 奉傳前路通事阮國珩, 阮廷【王輦】, 探兒阮勢錫, 阮廷斯, 郭登瑤等, 係茲期應領奉表, 奉本稿共陸冊, 并公文式拾壹套, 與侯命官柬文壹套, 往就關上, 同守隘快岩伯韋福洪, 堤忠侯阮廷璿等, 通報與龍憑守隘開關, 接領公文, 投遞納內地官列位, 待得有正稿激回, 即接領遞納, 以濟公務, 若奉行不虔, 有公法在, 茲奉傳.

景興二十年九月初三日

'奉表, 奉本稿共陸冊'이란 건륭 24년(1759) 9월 3일자 '세공'에 관한 표문 4책과 '고애'에 관한 2책, 총 6책으로 구성된 표문의 원고이다. '公文式拾壹套'란 청나라 21개 관청에 보내는 공문이다.

21개 관청은 『북사통록』 51b~53a에 열거되어 있으며, 아래 표와 같이 정리된다.

번호	받는 곳	문서양식	
1	兵部尚書兼都察院右都御史總督廣東廣西等處地方軍務兼理糧餉李	咨	
2	兵部侍郎兼都察院右副都御史巡撫廣西等處地方提督軍務郭	咨	
3	提督廣西全省水陸軍務統轄各路漢土官兵加三級史	咨	
4	鎮守廣西左江地方統轄漢土守禦官兵總鎮都督府加三級段	咨	
5	欽命廣西等處承宣布政使司加三級葉	咨	
6	欽命廣西等處提刑按察使司加三級申	咨	
7	欽命分巡左江兵備道加三級張	咨	
8	叶鎮廣西新太等處地方兼轄漢土官兵副總兵官歐陽	咨	
9	廣西太平府正堂紀錄十二次查	咨	
10	廣西龍憑守營都閫府加一級馬	咨	
11	署理廣西太平糧捕分府加三級李	咨	
12	廣西寧明州正堂加三級王	移	
13	廣西崇善縣正堂加一級李	移	
14	廣西南寧府正堂加三級管	移	
15	廣西宣化府正堂加一級陳	移	
16	廣西雋縣營都閫府加一級張	移	
17	廣西龍憑總部陳	移	
18	憑祥府正堂李	移	

19	上龍司正堂趙	移	
20	太平府下石州正堂閉	移	
21	廣西新寧州正堂	移	

위의 표로 보아 레 왕조 황제(레 히엔 톱)는 ‘자’와 ‘이’라는 문서 양식으로 청조의 변경 관청에 연락하였음이 확인 가능한데, 이 문서들은 ‘협판공문’의 형태로 송부되었음을 다음 사료를 통해 알 수 있다.

【자료 18】『北使通錄』 80b-

是月初六日，左江道官送來咨文，及總督公文，內言繳回歲貢表稿四道，其告哀表二道，存候部覆，別行知照，

天朝署理廣西巡左江兵備道管轄南太鎮泗四府府漢土州縣苟司等處地方加三級紀錄五次鍾

爲投報公文事。

乾隆二十四年十一月初十日

奉 兵部尚書總督兩廣部堂李，憲牌內開乾隆二十四年十月十四日，據該道呈稱、「乾隆二十四年九月二十九日，據崇善縣申，準龍憑營都閩府勇移送安南國王夾板公文，傳繳至道，當將公文折閱，內府開安南國王嗣黎爲咨文事。

(후략)

11월 6일에 양광총독의 공문과 좌강도관의 자문이 레 왕조에 도착했는데, 위의 사료는 양광총독 공문의 내용을 적은 것이다. 이를 살펴보면 레 왕조의 공문은 용빙영도곤부(龍憑營都閩府)→송선현(崇善縣)→좌강도→총독양광이라는 순서로 올라간 것을 알 수 있다.

용빙영도곤부, 송선현, 좌강도, 총독양광이 표의 10번, 13번, 7번, 1번에 해당하는 점은 주목할 만하다. 요컨대 레 왕조는 이 기관들에게 문서를 보내고, 상황을 설명함과 더불어 상부기관으로 하여금 문서를 보내주게 하는 절차가 확인 가능하다. 구체적으로 레 왕조의 ‘전로통사’들로부터 21통의 문서를 받은 용빙영도곤부는 10번 문서를 열어서 읽은 다음 다른 문서를 송선현에게 체송하였다. 이를 받은 송선현은 자신의 앞으로 온 13번 문서를 읽고, 좌강도에 다른 문서를 체송하였다. 좌강도도 역시 자신 앞으로 온 17번 문서를 수령하고, 양광총독 관련 문서를 체송하였다. 이른바 ‘체송’, ‘전체(傳遞)’라는 방식이다. 또한 ‘準龍憑營都閩府勇移送安南國王夾板公文’이라는 표현으로부터 21개의 ‘자’와 ‘이’는 모두 ‘협판공문’의 형태로 송부되었음을 엿볼 수 있다.

요컨대 용빙관과 송선현, 좌강도는 각각 문서를 받는 쪽에 속하면서, 상사 관청에 문서를 체송하는 책임자이기도 했다. 복수의 문서가 동시에 체송되면 도중에 체송하는 사람이 내용을 빠뜨리지 않도록 ‘협판’이 ‘공문’을 봉하는 방법으로 채택되었다.

한편, 레 왕조의 ‘歲貢表稿四道’와 ‘告哀表二道’로 구성된 표문 6책으로 눈길을 돌리면, 자료 18에 ‘是月初六日，左江道官送來咨文，及總督公文，內言繳回歲貢表稿四道，其告哀表二道，存候部覆，別行知照’라고 하여 ‘세공’ 건이 이미 조정으로부터 재가를 받았기 때문에 양광총독은 ‘歲貢表稿四道’를 확인한 다음 원고를 레 왕조에게 돌려주었다. 그에 반해 ‘고애’가 조정의 재가를 얻지 못하였기 때문에 양광총독은 이를 보류하고 재가되고 나서 나중에 연락하겠다고 레 왕조에 통지하였다.

이렇게 해서 청나라 황제에게 바친 표문의 원고는 ‘협판공문’이 되지 않고 청나라 변경 관

청에서 체크를 받아, 문제가 생기면 수정되는 것이었다. 이러한 방식은 일본 고대국가의 외교 문서 취급 방식을 연상케 한다.

【사료】『類聚三代格』卷18, 夷俘并外蕃人事

一應寫取進上啓牒事

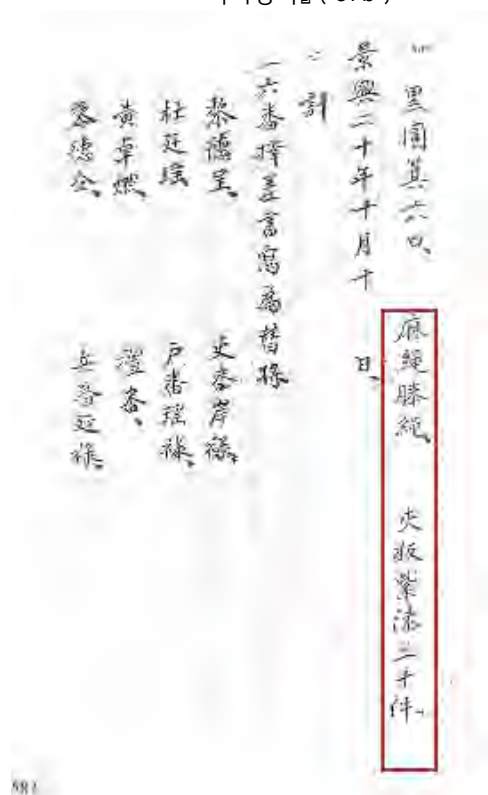
右蕃客來朝之日, 所着宰吏先開封函, 細勘其由. 若違故實, 隨即還却, 不勞言上, 而承前之例, 待朝使到, 乃開啓函, 理不可然, 宜國司開見寫取進之, 以前中納言兼左近衛大將從三位行民部卿清原真人夏野宣, 如右.

天長五年正月二日

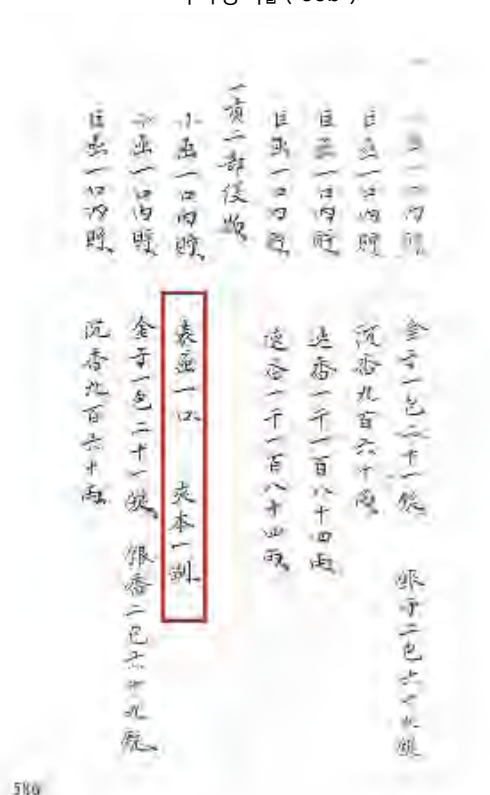
위의 사료에 따르면, 신라를 포함한 외국 사절(번객)이 일본열도에 도착하면 도착지의 관리는 문서함을 개봉하고 내용을 체크한 다음 만약 내용에 문제가 있다면 이를 바로 돌려보낼 권한을 부여받았다. 이는 천황의 체면을 지키기 위해 실례가 되는 문구가 들어간 문서를 천황에게 보이지 않기 위한 사전 방지 장치였다.

양광총독과 레 왕조 간에 표문의 최종판이 합의되자, 『명회전』(사료 10)의 홍무 예제와 마찬가지로 레 왕조는 표를 ‘협판’으로 끼우고 ‘표함(表函)’을 넣어 조공사에게 북경까지 들고 가게 했다. 『복사통록』 65a~65b에는 공물로서 ‘表函一口’와 ‘夾板一副’이 열거되었는데, 이 ‘夾板一副’은 표를 끼우기 위한 협판으로 추정된다. 한편, 『복사통록』 67b에 사자의 짐으로 ‘夾板紫漆三十件’이라는 항목도 보이며, 이 ‘紫漆夾板’은 사자가 중국 내지에 들어간 뒤 중국의 각 기관과 문서를 주고받기 위해 준비된 것으로 추정 가능하다. 또한, ‘삼끈[麻繩]’, ‘등나무 끈[藤繩]’도 보여서 ‘협판’을 묶는 끈으로 사용되었을 가능성이 높다.

『복사통록』(67b)



『복사통록』(65b)



맺음말

본고는 베트남 관련 사료를 검토함으로써, 이미 9세기 중엽부터 운남 지역의 남조국과 당 제국의 변경 관청과의 문서 교환에서는 옷칠한 판자를 가지고 ‘이’, ‘첩’, ‘체첩’ 등의 문서를 끼워 끈으로 묶고, 목판 위에 받는 곳을 기재하는 ‘목협’이 활용되었음을 확인할 수 있었다. ‘목협’의 이러한 사용 방식은 일본에서 발견된 봉함목간의 세 번째 용도와 유사하며, ‘목협’에 관한 문헌사료는 그동안 추정되기만 했던 봉함목간의 세 번째 용도를 뒷받침하는 강력한 문헌 사료로 볼 수 있을 것이다.

송나라 때 사료에 따르면 ‘목협’은 원래 운남 지역에 있었던 ‘옛 풍속’으로, 당나라 때에 외교문서에 적용되었다고 한다. 그 기원을 추구하는 것은 앞으로의 과제로 삼고 싶지만, 감히 가설을 세워보자면, 운남 지역의 ‘목협’이나 일본의 ‘봉함목간’을 쓰는 방식은 서아시아로부터 전해져 온, 이른바 ‘범협(梵夾)’이라는 접이책 불전(佛典)의 영향을 받았을 가능성이 있다고 여겨진다.

‘목협’의 이용은 10세기 이후 운남 지역에서 남조를 이은 대리에 계승되었다. 또한 베트남 지역에서는 안남도호부의 전통을 이은 리 왕조도 조공을 포함하여 송나라 변경 관청에 연락할 때마다 ‘목협’으로 ‘이’를 봉한 다음 문서를 송부하였다. 송나라 측의 광서수사나 옹주의 송나라 변경 관청도 이를 모방하여 ‘목협’을 사용해 리 왕조에 답장을 보냈다. 송대의 중국 내지에서는 지방 관리의 결원을 ‘해’로 보고할 때나 여러 도, 주, 부, 순원이 칙서를 ‘전체’할 때에도 ‘목협’과 같은 방식의 봉함이 도입되었던 것을 사료에서 확인할 수 있는데, 사료의 한계 때문에 상세히 규명하는 일은 앞으로 과제이다.

리 왕조의 ‘목협’은 그대로 쩌 왕조와 원나라 사이의 문서 교환으로 계승된 것으로 보이며, 15세기에 성립된 레 왕조가 되면 명나라 홍무 14년(1381)의 예제, 나아가 청나라 강희 14년(1675)의 사례 등에서 ‘협판공문’으로 제도화하였다. 그 실태는 18세기 후반의 『북사통록』 기록에서 자세히 확인할 수 있다.

전근대의 정보 전달에서는 ‘전체’나 ‘체첩’ 같은 단어에서 드러나듯이 복수의 문서가 아래에 서위로, 또는 위에서 아래로 동시에 체송되는 경우가 있다. 그 때, 도중에 있는 관청은 문서를 받는 쪽이면서 다음 장소로 남은 문서를 체송하는 책임자이기도 하다. 체송하는 도중에 체송자에게 정보가 유출되지 않도록 ‘목협’과 ‘협판’이 문서를 봉함하는 방식으로 활용되었던 것이다.

그런데 천황이나 황제에게 보내지는 외교문서인 ‘표’에는 ‘목협’이나 ‘협판’은 별로 사용되지 않았다. 이는 국가의 정점에 있는 천황이나 황제의 체면과 깊이 연관되어 있으며, 천황이나 황제의 눈에 실례가 되는 문서가 올라가지 않도록 표문이 거꾸로 관계자의 체크를 받기 위해 공개되기에 이르렀다.

이상으로 일국사의 경계를 넘어서 베트남 사료를 활용하여 ‘목협’, ‘협판’을 검토함으로써 전근대 정보 전달에서의 문서 봉함 방법, 경계를 넘나드는 문서에서의 목간 활용에 관한 이해를 보다 심화할 수 있었다. 베트남은 이밖에도 ‘목패(木牌)’라는 목간도 존재하였는데, 지면 관계 상 다른 기회에 소개하고자 한다.

참고문헌

- 平川南「地方の木簡」(川崎市民ミュージアム編『古代東國と木簡』(雄山閣、1993年))
佐藤真「封緘木簡考」(『木簡研究』第17号、木簡學會、1995年)(後に加筆された上で『日本古代の宮都と木簡』吉川弘文館、1997年に収録された)
吉川聡「文書の挟み板」(『奈良文化財研究所紀要』44-45、200

(번역: 김현경)

「東アジア世界におけるベトナム木簡の研究序説(1)」에 대한 토론문

김창석(강원대학교)

팜 레 후이 교수는 木夾, 夾板을 중심으로 베트남의 木簡文化를 개관했다. 이들 목간은 중국 漢代의 檢, 일본 奈良時代 封緘木簡과 機能이 통하는 것이라고 한다. 木夾(木契)은 雲南地域에서 古來로 使用되었는데, 이 지역에서 成立된 南詔는 9世紀 後半 唐과 交渉할 때 목첩을 사용했다. 11~14세기에는 베트남 李朝(大越國, 安南), 陳朝가 宋 및 南宋의 邊州와 교섭할 때, 그리고 중국 宋의 地方官이 回信用으로 이를 사용했다. 송나라에서는 國內用 文書를 遞送할 때도 목첩이 사용되었으며, 明·清代는 安南 지역의 黎朝가 交渉用으로 二重으로 封하는 夾板을 사용했다고 한다.

이 發表를 통해서 같은 漢字文化圈에 속해있으면서도 그간 잘 알려지지 않았던 베트남의 목간 자료와 研究狀況을 接할 수 있었다. 特히 木簡 遺物과 같은 實物資料가 남아 있지 않기 때문에 同時期 或은 後代의 文獻에서 목간 관련 史料를 抽出해내는 方式이 次善策이 될 것이다. 팜 레 후이 教授는 이러한 方法을 통해서 오히려 木夾의 用途, 活用方式, 周邊 政治體로 傳達되는 過程을 復原하는 成果를 거두고 있어서 印象的이었다.

이 論文이 베트남 木簡 研究의 序章을 여는 데 크게 寄與하리라 믿으며, 몇 가지 궁금한 점과 異見을 말씀드리고자 한다.

1. 베트남의 木簡 調査現況이 궁금하다. 考古學 發掘調査를 통해 木簡遺物이 出土된 例가 없는지, 만약 그렇다면 理由가 무엇이라고 보는지, 向後 出土의 展望은 어떠한지 알고 싶다.

2. 資料上으로 雲南地域의 木夾 使用이 가장 오래된 것이라고 보이는데, 이것이 周邊地域으로 擴散되었다는 것인가? 唐으로 傳해졌다면 漢代 以來 檢의 方式에 어떤 影響을 주었는지, 검과 목첩이 竝行해 갔는지 궁금하다.

또 베트남에서 11세기 이래 사용되었다고 確認된 木夾은 自體 發展해온 것인지, 아니면 雲南의 南詔로부터 傳來된 것인지, 전래되었다면 雲南과 어떤 差異가 있었을까?

3. 879年 南詔側이 唐의 中書門下省에 上書할 때 목첩을 쓴 이유가 節度使가 이를 遞送하면서 文書의 內容을 보지 못하게 하기 위해서 라고 했다. 그러나 當時 嶺南書(西?)道節度使에게 보낸 문서도 목첩을 사용했다. 따라서 목첩은 南詔 쪽에서 對外로 문서가 나갈 때 사용하던 保安裝置로 보아야지, 이를 879년의 特殊한 事情을 考慮하여 說明하는 것은 說得力이 弱해 보인다.

4. 現傳 史料에서 목첩은 주로 對外交渉用으로 사용된 예가 확인되는 듯하다. 事例를 傳하는 文獻이 中國側 資料여서 나타난 現狀이라고 推測된다. 그렇다면 베트남의 國內用, 一般行政用 문서 역시 목첩이 사용되었을 가능성이 있다고 보이는데, 이에 관한 발표자의 생각을 듣고

싶다.

5. 皇帝에게 올리는 表文은 函에 넣어서 이를 接受한 官府가 미리 文書形式이 適合한지 檢討할 수 있도록 했다. 이에 비해 木夾文書는 事前 開封이 不可能했고, 표문보다 낮은 等級의 교섭 문서라는 점을 強調했다. 興味로운 指摘이다. 新羅-日本의 교섭 사례를 들었는데, 일본은 執拗하게 신라 使節에게 表文의 持參을 要求했고, 신라는 거의 이를 拒否하고 口頭外交를 固執했다. 베트남의 李朝, 陳朝가 宋, 南宋, 元에 표문을 올린 경우 函과 木夾 가운데 어떤 형식을 이용했는지, 혹시 구두외교를 벌인 적은 없었는지 궁금하다.

여하튼, 外交文書의 包裝, 保管, 傳達의 形式과 節次조차 當事國間의 外交關係는 勿論 相互認識, 外交儀禮와 密接히 聯關되어 있다는 事實이 重要하다.

6. 이와 관련하여, 개봉이 가능한 函(表函)의 才質, 形態와 構造가 궁금하다. 그리고 베트남 黎朝에서 사용된 夾板公文은 종지로 만든 함에 문서를 넣고 다시 疊판으로 봉한다고 했는데 어떤 방식인지 이해하기 어렵다.

7. 於函上頭、記賜某國字、押緘之處書封字、其緘下右注飛驒字、左注月日・時刻、令內記一人、於革囊短籍、記賜某國飛驒函字及年月日時刻、又函左注副官符若干通字、〈官符副在函外、同納囊中〉(『儀式』飛驒)

위의 자료를 보면, 정확한 해석이 어렵지만, 마치 函이 封해져있거나, 封緘木簡과 同一視되고 있는 것처럼 여겨진다.

그리고 ‘移文’을 移라는 官文書로 이해했는데, 문서를 ‘보내다, 傳達하다’는 뜻의 動詞로 봐야하지 않을까? 12세기 高麗의 문헌인 『三國史記』에 移文, 移書, 貽書의 用例가 있다.

8. 운남지역의 목협, 일본 봉함목간의 起源으로서 西亞細亞로부터 전래된 梵夾을 想定했는데, 이에 관한 補充 설명을 부탁드립니다.

